本田増次郎自叙伝「ある日本人コスモポリタンの物語」

（“The Story of a Japanese Cosmopolite” As told by himself ）の紹介

長谷川　勝政

凡例：〔　　〕は訳者の注書き

はじめに

本稿は、ヒューマニズムと平和主義の理想を胸に抱きながら、世界を舞台にして、明治、大正という時代を駆け抜けた英文学者・ジャーナリスト本田増次郎の自叙伝を和訳紹介するものである。本田増次郎は、世に言う著名人ではない。したがって、残された研究資料も少なく、数年前は、その経歴を知ることすら困難であった。ちなみに、事典と名の付くもので、本田増次郎の名が見いだせるのは、『日本キリスト教歴史大事典』が、ほとんど唯一であると言っていい。

ほんだますじろう　本田増次郎
1866.1.15（慶應 1.11.29）－1925.11.25
英文学者、教育家。岡山県出身。1883（明治 16）年、嘉納治五郎の講道館に入門。84 年〔講道館『嘉納治五郎』によれば、明治 15（1882）年 3、4 月ごろ〕嘉納らが設立した英学校弘文館で英文学を学ぶ。90 年頃からキリスト教に帰依し、9 月ひそかに受洗し、日本聖公会信徒となる。卓抜な語学力を買われ、嘉納校長の招きにより熊本第五高等中学校教員、のち東京高等師範学校教授を歴任。この間、イギリス教会宣教会宣教師らの懇請により大阪の高等英学校（桃山学院）副校長や立教女学校（立教女学院）校長も務める。The American Humane Society の運動に共鳴し、自らも人道教育会の設立を試み（補注 1）、運動の一環として『黒馬物語』の翻訳（1903）を行う。日露戦争中は〔正確にはポーツマス講和会議直前〕官命により留学〔当初は留学でなく、途中から留学の任命がなされる。ただし留学も名目で実際は外務省の仕事〕。ポーツマス講和会議を機にジャーナリストとしても活躍し〔当初は米英で巡回講演者として活躍。英国より帰米後ジャーナリストとなる〕、ニューヨークの *The Oriental Review* の主幹として英米有力紙に日本の立場を論じた。12 年〔正しくは 11 年 6 月 28 日〕コネティカット州トリニティ大学から名誉文学博士号を受ける。またパリ講和会議に西園寺全権の随員として出席〔随員として出席した事実は確認出来ていない。表向きは国際新聞協会委員の資格で新聞記者の動向調査に赴いたとされるが、実際は日英同盟更改問題を中心とする欧米の情勢把握が主な目的だったと思われる〕。帰国後は多忙な執筆活動の間を縫って教会役員などを務めた。正倉院美術の英文目録作成中に東京で死亡。娘はなは作家山本有三の妻。［文献］『英語青年』54:9(1926.2)（石井陽三）
（日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988 年）

他には、彼が関係した諸機関、すなわち、講道館、リデル・ライト両女史記念館〔熊本〕、桃山学院大学、立教女学院、津田塾大学、早稲田大学などに、記録が断片的に残っているだけであった。

しかし、岡山商科大学教授の中村浩路(ひろじ)氏が、『英語青年』の記事や同誌の「片々録」を主なデータ・ベースとして、詳細な履歴を『岡山商大論叢』に「≪資料≫今よみがえる英語と人生の達人：本田増次郎」と題して、6回に亘り発表された（2000年5月第36巻第1号、同年10月第36巻第2号、2001年2月第36巻第3号、同年5月第37巻第1号、同年10月第37巻第2号、2002年2月第37巻第3号）ことによって、本田増次郎が書き残した記事などのリストも明らかとなり、本田増次郎の実像が時系列を以て描き出されてきた。

そして調査していく中で、マーク・トウェインの研究家として知られる勝浦吉雄氏が、トウェインの日本への紹介者として本田増次郎について調査**(補注2)**していること、また、山本有三の義理の息子に当たる永野賢(まさる)氏が、『山本有三正伝 上巻』の中で、有三の義父に当たる本田増次郎について、本田の郷里岡山県にまで足を延ばし現地調査を実施し、その結果を詳述**（補注3）**していることを知った。

とはいえ、上記の事典の記述からも知られるように、教育者であり、英文学者であり、ジャーナリストであり、さらにはクリスチャンでもあるといったような、本田のこの複雑なイメージを、一体どう整理したらいいのか。そもそも、数年で次から次へとめまぐるしく、その住む場所や携わる仕事を変えていった彼の生き方を支配していた思想や、その精神とは一体、如何なるものであったのか。そこまで捉えようとすると、そこには自ずと限界があった。

確かに、英文学者としてまた英文雑誌編集者として、彼が書き残した夥しい数の記事が残されてはいる。しかし、そこから汲み取れるのは、あくまで、英学や、外交や、政治や、諸文化に関する彼の所論であって、そこから、彼の生き方そのものを説明してくれる思想や精神の中身について、たとえある程度は憶測出来たとしても、その真の姿を知ることは難しい。かかる意味で、この自叙伝を吟味することによって、この思想的、精神的空白を埋めるという、今まで困難だった作業が飛躍的に進むと確信する。蓋しこの自叙伝は、文字通り本人によって、しかも明らかに「自分がなぜ、かかる生き方をしたのか」を説明する意図をもって書かれているからである。

この“The Story of a Japanese Cosmopolite”（ある日本人コスモポリタンの物語）の発見はまさに偶然の出来事だった。本田増次郎が参画していた英字週刊誌 *The Herald of Asia*（ヘラルド・オブ・エイシア）を調査していたときのことである。筆名が“As told by himself”（本人が書いた）となった、不思議な連載記事**（資料1）**がたまたま目に留まったのだ。“himself”（彼自身）、すなわち“a Japanese Cosmopolite ”（ある日本人コスモポリタン）とは一体誰なのだろうか。読み進むと、“Human Bullets”Translated（『肉弾』の英訳）と表題の付された一文が出てきた。これは決定的だった。

というのは、『肉弾』は日露戦争の激戦地となった旅順攻防戦に従軍した桜井忠温(ただよし)中尉が帰還後書いたもので、本田がこの翻訳を手がけ、明治40（1907）年10月、ホートン・ミフリン社（Houghton, Mifflin Company）から*“Human Bullets” A Soldier’s Story of Port Arthur*（『肉弾』旅順に於けるある日本兵の物語）として出版した経緯があったからだ。

本田はペンネームを使って記事を書く場合も多く、雷砧(らいちん)、二峰(じほう)、好奇多問之助、斬天生が知られていた。こうなると、英文の場合も、“a Japanese Cosmopolite”というペンネームを使っていたことになる。

訳文の中に登場する、事項、人名、地名などの注書きについては、本文中に〔　〕書きで入れ込む目的から、極力簡潔を心がけた。人名については、職業、主要事績などに限定して述べるにとどめ、通常は当然書き込まれるべき生没なども省略した。そして〔　〕書きで表示仕切れないものについては、別途、本文外に補注を加えることにした。この自叙伝は、およそ 100 年前の社会や世界情勢が前提となって書かれている。単なる英文の和文化のみでは、理解不可能な部分も多い。訳注が頻繁に出てくることから読みにくい面もあるとは思うが、かかる主旨からであり、この点はご容赦願いたい。

大正 8（1919）年 9 月 11 日、本田増次郎は、第 1 次世界大戦後の国際的政治体制を決定づけたパリ講和会議の帰り、ある出版社のニューヨーク支社を訪ねる。当時は、パリなど欧州から帰国する場合も、大西洋を経由し、その後アメリカ大陸を鉄道で横断、太平洋航路で日本に戻るというコースが、しばしばとられた。

「『肉弾』の英訳“Human Bullets”を出版した Houghton, Mifflin の支社へ行つて（本社は Boston にある)、ハウトン翁に会つて“The Story of a Japanese Cosmopolite”の切抜原稿を示したら、Literary Department〔文芸部〕へ廻して意見は徴するが世の中が物騒だから今は出版の時期ではないかも知らぬと云つた」
（本田増次郎「紐育より」『英語青年』第 45 巻第 7 号 大正 10（1921）年 7 月 1 日）

ここに言うハウトン翁とは、ヘンリー・ホートンのことである。エマソン、ソロー、ロングフェローなどの出版で名をなした出版社で、前述したように、本田増次郎はこの訪問の 12 年前、桜井忠温の『肉弾』を同社から *Human Bullets* として英訳出版した経緯があった。そこで、*The Herald of Asia* に数年前連載した自叙伝“The Story of a Japanese Cosmopolite”の原稿を持ち込んだわけである。しかし、第 1 次世界大戦後の世界情勢は、日露戦争直後の *Human Bullets* 出版の頃とは大きく異なっていた。
それは、ポーツマスにおける日露講和を達成した日本が、極東において、日英同盟の相手国である英国は無論のこと、嘗ての敵であるロシアとも連携を図り、次第にその地歩を固めつつあったからである。この日本の動きは欧米列強の警戒心を刺激して止まなかった。とくに、満州に於ける鉄道問題では、日本と米国の利害が真っ向からぶつかり合い、日米関係は、従来の蜜月の時代から冷却の時代へと、踵を返してしまった。加えて、日本人移民排斥運動も年を追う毎にエスカレートしていた。
ポーツマス講和会議の立て役者、親日家のセオドア・ローズヴェルト大統領も既にこの世にはなく（その年の 1 月 6 日、熱病の後遺症で死去)、ホートンが言うように「世の中が物騒」なかかる情勢下、一日本人ジャーナリストの自叙伝が、世間から果たして評価され得るのか、不確かと言わざるをえなかっただろう。出版社トップの判断は的を射ていた。こうして大正 14（1925）年 11 月 25 日、本田増次郎が亡くなるその日まで、この自叙伝が、1 冊の本として日の目を見ることはなかった。

“The Story of a Japanese Cosmopolite”は、既述したように、本田増次郎自らが参画していた英字週刊誌“The Herald of Asia”に連載したものである。第 1 回が大正 5（1916）年 3 月 25 日、まさに同誌の創刊号より始まり、最終回が翌年の 2 月 24 日で終わる、およそ 1 年間、46 回に及ぶ力作である。
Cosmopolite という語は訳者も、耳にしたことのない言葉であった。調べて、Cosmopolitan という言葉のいわば先祖に当たる単語だということが解った。Cosmopolite に an が加わっ

て Cosmopolitan が出来たということだ。歴史的に見れば、Cosmopolite は Cosmopolitan より 200 年ばかり昔に誕生している。その出自からいっても、両者はほとんど同じ意味だと考えていい。

本田増次郎と同時代人である英文学者齋藤秀三郎の訳語に従えば Cosmopolite は「世界の市民」、本田増次郎が、封建時代の名残が色濃く残る岡山の片田舎から東京へ出、如何に考え、如何に行動し、そしてついには「世界の市民」になったのか、それがこの自叙伝のテーマである。

それでは、19 世紀終わりの日本、すなわち、幕末の動乱をようやく切り抜け、新しい日本に踏み出したばかりの国、その一角、岡山県久米北条郡上打穴里（現在の久米郡美咲町打穴里）**（補注 4）**に、目を転じることにしたい。以下語るのは本田増次郎本人である。

（補注 1）人道教育会創設の試み

本田増次郎「人道教育会」日本児童研究会編輯『児童研究』第 6 巻第 2 号 明治 36（1903）年 2 月で、本田増次郎は米国の人道教育会の運動の現況を報告し、日本にもかかる会を発足させることが急務であることを訴えている。そして最後に編集者が「因に云ふ、山縣悌三郎本田増次郎の二氏先づ首唱者となり、同志を糾合して人道教育会を組織するの計画遠からず発表せらるべしとなり」と結んでいることから、人道教育会創設運動を本田たちが行っていたことが知られる。

（補注 2）勝浦吉雄氏の本田増次郎研究

勝浦吉雄氏の「本田増次郎とマーク・トウェイン（上）」および「本田増次郎とマーク・トウェイン（下）」は、日本英学史学会月例研究会での発表（前者が昭和 46（1971）年 1 月、後者が昭和 49（1974）年 12 月の発表）を論文におとしたものであるが、存命中であった本田の教え子たちや、本田の長女山本華子へのインタビューまで行った労作であり、今となっては聞き取りの出来ない貴重な記録を含んでいる。氏の研究の中心的視点はあくまでマーク・トウェインにあるのだが、いずれにしても第 2 次世界大戦後の本田増次郎研究の口火は氏によって切られたといっていい。本田を採り上げたものとしては、他に「語学の逸材 本田増次郎」（名著普及会『名著サプリメント』第 1 巻第 3 号通巻 3 号 昭和 63（1988）年 3 月 1 日）がある。

（補注 3）永野賢氏の本田増次郎研究

永野賢『山本有三正伝 上巻』未来社 昭和 62（1987）年 第 2 部愛 第 4 章妻はなの生い立ち 第 2 節実父本田増次郎の閲歴

永野賢氏は山本有三、華子の長女朋子の夫であり、自らも「はしがき」で「新事実や新資料の発掘収集のためには、私の立場は大変好都合であった」と述べているように、本田増次郎についても、身内でなければ知り得ない事実にまで肉薄している。本田の内縁の妻ふでに関する記述、内野倉明の出自と本田との関係などは、今となっては掌握し難い貴重な記録となっている。

（補注 4）岡山県久米郡の様子

現在も本田の郷里の自然環境は、下記の『久米郡誌』に描かれた情景から大きく乖離してはいない。なお、打穴の名は校歌にいう砧を打つから来ているという。本田が使用した「雷砧」という筆名は、ここからとったものと思われる。

久米郡教育会編纂『久米郡誌』久米郡教育会　大正 12（1923）年
第一編　第一章位置、地勢　第一節位置、地勢
　本郡は岡山県の略中央部に位し、東は吉井川を隔てゝ勝田郡に、東南は赤磐郡に、西南は旭川を隔てゝ御津郡に、北は苫田郡西は真庭郡に接して居る。東、吉岡村東端から西、西川村西端に至る東西六里二十四町、南、福渡町南端から北大井東村北端に至る南北六里三十二町、面積二十五方里四一、稍菱形をなしてゐる。概ね山地で中央部高く南北に向つて漸次低く、山脈が各所に起伏して居る。東西に二大川があつて細流を集め、平野は僅に北部及び南部にある。山地は地味良好ならず、平野部は稍肥沃である。
　左に各町村に就て地勢の概略を述べる。
打穴村
本村の地形南北に長く東西に狭い。東は筒宮山脈、南西に二上山脈併互し、多く其嶺を以つて村界を限られ、傾斜東方急にして西方緩、東部に偏したる山帯状をなし稍平坦で南方高く北方に低下してゐる。一丘を超えたる以北稍開けて三保村に連る。打穴川は源を大垪和村に発し、三保村に入つて倭文川に合してゐる。村の東北、川に沿ひて低地がある。

第二編　第二十章習俗　第二節風俗　一一、歌謡　イ、校歌
打穴尋常高等小学校

1、朝な夕なにうち仰ぐ　　彼の二山の秀つ峯に
　　春は棚びく横霞　　秋は尾上に澄む月や
2、遠つみ親が手末の　　貢に織りしほそ布を
　　谷のはざまの夕月夜　　砧に打ちし我里よ
3、秀でし山のたゝすまい　　清き小川のせゝらぎや
　　そか清浄の気をうけて　我等が心すみ渡る
4、すめる心によこしまの　　思ひ起さず人の道
　　すぐにふみゆけ我友よ　すぐにふみゆけ我友よ
5、すめる心に怠りの　　思ひ起さず日々の業
　　勉め励めよ我友よ　　勉め励めよ我友よ

本当に私は日本人なのか？

　日本人がコスモポリタン〔国際人〕になる！そんなことが、これまでにあったろうか。日出ずる国の臣民が情熱的愛国心もなしに生きることになれば、その人物はもはや日本人とは言えなくなるのではないか。
　長期間に亘り、米国や欧州に滞在しているうちに、いつの間にかそんな考えが私を支配するようになっていた。大日本平和協会の代表である大隈伯爵〔大隈重信：政治家、教育者。2 回に亘り内閣を組織。東京専門学校（早稲田大学）の創立者〕、この尊敬に値する首相を長い間眺めてきた者としては、彼が類希な責任感の強い、経験豊かな人物であり、心から流血を嫌っておられることも充分承知はしているのだが、現代的な意味での平和主義者と本当にいえるのかどうか、といった疑問すら湧いてきたのだ。いずれにせよ、私が本当の意味で、国際的関心と諸外国に対する共感を抱いている人物かどうかは、この物語を

最後まで読んで頂ければ自ずとお解り頂けると思う。
私は母国を 8 年近くも離れて生活し、外国の土、空気、水で育った食物を食べて生きてきた。もし、昔の生理学者が言ったように、人間の体のあるゆる組織や部分が 7 年間で新しくなるのだとすれば、老人が子供ではないように、私はもはや日本人ではないのだ。肉体的に外国人になってしまったのだとすれば、精神的な意味での私の日本人としての存在意義は如何にして確立したらいいのか？
こういった哲学的な問題はさておき、私は日清戦争後まもない頃、東京で 3 年間に亘って清国人留学生の教育にたずさわった〔明治 29（1896）年 8 月～明治 32（1899）年 9 月、時の外相兼文相西園寺公望より嘉納治五郎に要請があり、本田に白羽の矢が立った〕**(補注)**。清国政府は本当に度量が広いとしばしば思うのだが、嘗て、いにしえの中国を手本にして、価値あるものならほとんど全てのものを物真似した、まさにその国に対し、近代的な科学や方法を学ばせようと、若者を送ってよこしたのである。これは清国人学生たちにとって、たいそう難儀なことだった。ありとあらゆる物質的不便や不具合があるのは勿論だが、ごく最近まで敵だった国民の中で生活するのである。日本人があれほどの敵意を向けていた清国、その敗者たる学生に一般の日本国民が共感を抱くというのは無理な話だった。清国人学生たちは、大きなものから小さなものまで、あらゆるトラブルを、ちょうど両親の所に持ち込むかのように私の所へ持ち込んで来た。時には私に泣きつく者もあった。偉大な儒者孔子の国で生まれた彼らを、どうして尊敬しないでいられるだろうか。儒教の理論と古典文学には、私より遙かに通暁しているのだ！彼らと私とは、政治的にはあくまで外国人同士だが、気持ちの上では真の兄弟のように強く結びついているのだ！かかる国民にどうして同情しないでいられるだろうか！この経験のお陰で、私は日本に最も近い、人口数億を擁する隣国中国の盟友となったのである。
皆さんは私がばかげた感傷的な人間だと思われるかも知れない。だが、少し待って頂きたい。そもそも人種や国民を、冷静沈着の度合いで測ったとき、日本人は総じて感傷的な部類に入るだろう。しかし、国境を越えて世界的に広がる人種や国民に対する人間的共感は、最も高貴な美徳と言っていいのではないだろうか？真の信念を持った国際主義者を生み出す妨げになるものは何かと言えば、それは個人的、国家的、そして人種的利己主義に他ならない。日本人の私が中国文明に賞賛を惜しまないように、ドイツ人がラテン文化〔フランスを中心とするラテン系民族の文化〕に対し、同様な態度で接したなら、それだけで今の大戦〔第 1 次世界大戦〕は起こらなかったはずである。もし、中国と日本がこの半世紀を、互いの相違点や対立点に拘泥することなく、思想や感情の面で共通な部分に目を向けていたなら、互いの必要性を認め合うことによって、こうなる遙か以前に現実の姿は変わっていたはずである。平和運動、仲裁法廷、それに国際平和維持軍も、それが肌の色や国籍をお子人する「人間同士の友好」に基づかない限り、いずれも実効性は持てないだろう。
こうした私なりの持論で身を固めるなら、自らの経験と印象、鍛錬と信念、希望と落胆、成功と失敗、そして短所と長所について単刀直入に語ることに、もはや躊躇はない。すなわち、それは過去 50 年に亘って現在の自分を形成してくれた全ての事柄について語るということだ。そしてこの期間は、興味を惹くことに、日本に於ける封建時代の終焉、幕藩出身の官僚寡頭指導体制によって支えられた天皇制の復興、そして元老が陰で操る立憲君主制の時代、さらには政党政治の揺籃期にも当るのである。
私が子供の頃には、田舎には近代的な学校などはなかった。私は国家信仰と地方の迷信の中で育った。最初の教育を受けた村の学校では、当時正式な訓練を受けた教師が少なかったため、12 歳で生徒のまま先生〔当時これを助教と呼んだ。免許をとると、助教諭〕もした。最初に教壇に立った時には、1 ヶ月 25 銭、英国の単位で言えば半シリング相当の給

金がもらえた。この後 2 年間医学生をやったが、18 歳の時には東京で英語を学ぶことになった。当時の日本では、ダーウィン〔進化論を唱えたチャールズ・ロバート・ダーウィン〕、スペンサー〔進化を中心に据えた社会哲学を展開したハーバート・スペンサー〕、ミル〔功利主義思想に社会主義的思想を加えたジョン・スチュアート・ミル〕、そしてベンサム〔功利主義の提唱者ジェレミー・ベンサム〕が流行った頃で、宗教における不可知論〔感覚的経験を超えた究極的真理や神などの実在は、知ることが出来ないとする考え方〕、哲学における唯物論、倫理学における功利主義、政治学における自由主義が当時の若者の心を捕らえて離さなかった。しかしながら、この新しい教えは私の内なる日本人としての感情を、やがて厭世と悲観の深みに落し込んだ。そして、精神の存在を希求すると同時に、国境を越えた兄弟愛に信を置く信仰に身を委ねることによって、私はその深みから救われたのだ。

私は日本に住む英米人の社会と深くかかわり、14 年間に亘り男女の学生たちに英語を教え、及ばずながら私なりに、英語国民の考え方や行動を理解しようと努力を重ねてきた。また一方で、日本人を理解してもらう努力も惜しまなかった積もりである。さらにアメリカ合衆国と大英帝国に長期間滞在したお陰で、アングロサクソン〔英国を中心とした英語を話す国民、つまり英米人〕の文明を身近で観察し、極東の現実や願いを舌とペンで訴えるという機会も得ることが出来た。加えて、ヨーロッパ大陸へ旅行することによって、ゲルマン〔ドイツ系民族〕やラテンの国民と、英語を話す国民との比較をすることも可能となった。また、西洋を模範として日本が導入した諸制度の源泉もたどることが出来た。

英国でも米国でも行く先々で、真心と友情のこもった最大級の歓迎を受けたので、私の気持ちに反するようなことは何もなかった。ただし 2 つだけ例外はあった。1 つはニューヨークの社会主義者の会合で、日本について講演をした時だったが、聴衆の中に数人の過激なロシア人無政府主義者が出席しており、講演が終わってから、当時有名だった幸徳事件〔明治 43（1910）年の大逆事件に連座し、無政府主義者の幸徳秋水が刑死した〕について、日本政府の不公正な点を、私が糊塗して話したと言って攻撃してきた。彼らは怒りで蒼白になり震えていたが、私は彼らの議論をさほど意に介さなかった。ただ、居合わせた若い女性たちに、日本固有の魅力や優しさを信じてはいけないと、彼らの 1 人が非難の矢を向けた時だけは、まるで自分が西半球の婦人たちから受けるべき賞賛を一切合切奪われてしまったような感じすらした。もう 1 つの出来事はサウス・ウェールズのカーディフ近くで起こったものだが、炭坑夫たちの会合で数回に亘って日本の労働事情について講演した時だった。この時は、会合で私を紹介してくれた婦人に対し、1 人の労働者が、私の髪型が左右に分けた髪の先を頭の真ん中で束ね上げた形になっているのに気が付いて、あれは不用になった弁髪の切れ端かねと訊ねたのだ。このように日本人を中国人と見誤ることはよくあることで、無論悪意をもってのことではない。しかし、当時の私は今と較べれば、まだ自意識も強く自惚れ屋だった。

いやはや、こうした気恥ずかしい経験はまだ他にもある！米国人の気前の良さと英国人のもてなしの心は、私には身に余るものだった。新聞の中には、たとえそれが完全なミスや取るに足りないミスであったとしても、ともかく私を男爵にしたり、様々な学問上の肩書きや社会的栄誉まで付け加えてくれたものだ。思い切って言えば、国際間の個人的付き合いでは、日本という国に敬意を表するあまり、一個人の私にまで、友好国や同盟国としての日本人の美徳を与えてくれた上、私個人の人間的、人種的弱点や欠点の方は、大目に見てくれたのだ。このことに気付かないわけにはいかなかった。また、自分が祖国日本に負っているという事実も、改めて思い知らされることになった。また、中国の格言にもあるように、家の貧しさは親への献身を、国家的災難は国家への忠誠心を生じさせるものだ〔「家貧しくして孝子顕る」（宝鑑）、「国乱れて忠臣現る」（史記）〕。外国人の優れた点に照らして、物心共々我が国の至らなさを目の当たりにするにつけ、外国旅行は、私の中に

潜在していた祖国への愛を揺り動かした。そして今度はこの母国愛が、海外の友や、その友人たちの国に対する私の感謝の気持ちを増幅させたのである。逆説的に聞こえるだろうが、私の場合は愛国的情熱が反射することによって、国際人としての意識の焔が赤々と燃え上がったのだ。

私は封建時代の名残が色濃い辺鄙な地方の農家に生まれ、新しい教育によって突然近代主義の世界に飛び込み、ついには人類福祉全体の向上のために尽くすようになった。こんな人物の物語なら、それが自慢話にならない限り、少なくとも寛大なる読者の方々には辛抱していただけるのではないかと、敢えて希望する次第である。

（補注）清国人留学生

本田増次郎「二十年前の回顧」『英語青年』第 39 巻第 2 号 大正 7（1918）年 4 月 15 日

明治二十三年以来日誌二三行を記入せるものを積んで数冊を成せり。就いて案ずるに、今より二十年前の四月は『困学〔苦学〕期後本』と題する一巻の中部に当る。時正に北京政府派遣第一回留学生十余名と神田三崎町に同居し、其の監督教育に従事しつつ、支那が日本文化の淵源たりしこと、支那人に我等の有せざる長所あることをリヤライズし、近代北欧国民の希臘人、伊太利人に対する感想亦斯くあらんと想へり。

封建制下における子供時代の印象

最も古い記憶はと言えば、私が 2 歳から 3 歳にかけての時で、赤ん坊だった妹の葬儀の情景だ。それは妹が百日ばかりの頃で、彼女自身のことは何も覚えていないが、小さなお棺が置かれていたのだけは覚えている。それは一番上等な部屋に臨時にしつらえた台の上に載せられており、彼女はかわいらしい帽子をかぶっていた。見えたのはただそれだけだった。死が何を意味するのか理解出来る歳にはまだなっていなかった。家の中には親戚や近所の人が大勢集まっていて、私にとっては楽しい 1 日だった。

私が大きくなるにつれて、両親〔本田杢蔵、やゑ〕は度々生まれたばかりの娘の赤ん坊を亡くした。そして亡くす度に、あの娘は一番の器量良しだったのにと言って、その末娘のことを寂しがっていたのを思い出す。これはあの有名なことわざ「釣り針から逃がしたばかりのうなぎは、いつも一番良いうなぎ」に最適な例かも知れない。しかし、少年の私が妹を亡くして悲しかったのは、別の理由があったからだ。生き残った 5 人の子供たち〔まさ、竹四郎、房吉、あさ、増次郎〕の中で自分が一番幼いということは、自分より小さい弟や妹の世話をする必要がない一方、兄貴風を吹かして名前を呼び捨てにする特権が持てないということを意味した。確かに、家族の中の年長者から存分に世話をやいてもらえたことは間違いない。しかし、小さな男子にも潜在している父権主義、言い換えれば上位者としての気持ちを向ける相手がいなかったのだ。この上下関係に伴う庇護と服従の関係こそ、おそらく日本の封建制度が持つ最大の美点であり、それは男女を問わず我が国民に対する影響力を、社会においても家庭においても依然として保持している。恐らく、この庇護と服従の関係は、個人の自発性と社会の平等という最新の概念とも、うまく調和出来るだろう。

私が生まれたのは最後の徳川将軍、慶喜（よしのぶ）〔徳川慶喜：第 15 代将軍。在位期間は 1866－67 年。本田の生年は 1866 年〕の 2 年に亘る治世の最初の年だった。生まれて 3 年目にして、天皇制が正式に再興され、次の年の明治 2（1869）年には封建領地が廃止され、行政上の目的から国土は府と県とに区分された。その 2 年後、「侍」の帯刀が禁止され、階級を問わず髷も禁止された。父が髷を落とした日のことは今でも鮮明に覚えている。いつもより丁寧

に結い上げた髷に、母が後ろからハサミを入れる。2 人とも一言も発しない。純白の紙の上に切り取られた髷が置かれる。それを眺めて父は、肉体の一部から神聖な何物かが永遠に失われてしまったという感覚を抱いたのだと思う。どうして西洋の見知らぬ人、つまり「異人」と同じようにしなければならないのか、どうして髪を散切りにしなければいけないのかと。

当時、西洋人たちは、東京の新政府と同じように一般の国民には人気がなかった。村では伊勢の大神宮に詣でたものだが、その時に、たとえば神戸などで白人の実物を見かけることがあった。毎年春になると、この白人に関する情報が故郷にもたらされた。今でも聞いた覚えがあるのは、これらの外国人は背が高く見栄えはいいが、膝を曲げられないので、歩くか、立つかしなければならないのだ。お気の毒にと！日本では農民にとって牛は最良の友であり助手である。だから牛肉を食べる恩知らず者は神の罰を受け「日本風」の座り方、つまり正座が出来ないのだと。また、白人は金持ちだから、2、3 服しただけで、すぐにキセルを捨ててしまっても構わないのだと。このキセルとは明らかに煙草の吸い口のことを指しているのだが。そしてさらに、白人たちはそれでもその豊かさに満足することなく、ついには八百万の神々がおわします神聖なる我が国にまでやって来て、我が国土を分捕り彼らの間で山分けしようとしている。見よ！我が国と外国の境界はあの高い竿とワイヤーでしっかりと区別されているではないか。その話を今に訳せば電信柱と電信線のことを言っているのだが。そして、この貪欲な異邦人の侵入や新技術の持ち込みを許した我が政府は、国民をより幸福にするどころか、以前より高い税金まで課そうとしている。日本の第三階級〔平民（当時は華族、士族、平民に分かれていた)〕が新しい体制と近代教育の恩恵に浴し始めるまでには、それから数 10 年を要したのだ。

封建制度下でも後半になると、平民も短刀を持つことが許されていた。おそらく雄藩が反乱の兆しを見せていた時代に、大衆のご機嫌をとり結ぼうとしたのだろう。私より 10 歳年上である一番上の兄〔竹四郎〕は、例年行われる村の氏神様の祭りに際し、1 日だけだったが親戚の家をよく訪問した。美しい銀細工の施された刀を絹の帯に刺し、艶のある漆黒の髷を結って出かけたものだ。これには大いに反感を覚え屈辱を感じた。私の儀式用の刀は玩具で木製の模造品、抜くことも切ることも出来なかった。しかも頭の真ん中に 1 つ堂々と載るべき物の代わりに、トンボのような形をした 3 つに分かれた稚児髷のようなものが、優雅であるか否かは別として、小さな頭に載っていたのだ。

私の生まれた地方〔美作（みまさか）〕は、海のない山ばかりの狭い地域だった。12 の地域、つまり「郡」〔英田、吉野、勝南、勝北、東北条、東南条、西北条、西西条、久米南条、久米北条、大庭、真島〕に分けられていたが、私が生まれた郡〔久米北条〕は「大名」、つまり地元の封建領主の直轄地ではなく、遠隔〔現在の島根県浜田市〕の領主が治める飛地に過ぎなかった。この領主〔浜田藩（後に鶴田（たづた）藩）主松平武聡（たけあきら）は、反徳川の雄藩〔長州藩〕とよしみを通じていたが、他の藩〔外様の津和野藩〕が追撃を受けなかったにもかかわらず、自らの居城〔浜田城〕のある町から逃れねばならなかった〔親藩であるが故に、第２次長州征伐に対する長州藩の反撃を受けた〕。そして我が村がこの不幸な逃亡者とその家族の住む場所となったのだ。彼らは村に家を建てる間、余剰部屋の多くある農家に間借りをした。近くの村に住んでいた叔父には子供がなく、私の一番上の姉〔まさ〕を養女にとっていた。そんなわけで、そこが 4 人の「侍」一家の隠れ家となった。その後、この一家の一人息子が小学校の同級生になったが、もう 1 人同じ「大名」関係の少年も同級生だった。もっとも 2 人とも年齢は私より上だった。私は頑張って何とか常に一番を維持したが、彼らはこのことを不快に感じていたから、先生が元医者の平民だから私に依怙贔屓しているのだと、

あてこすった。私は身分不相応な名声を享受していたわけだ。無論、今日まで武士階級が知的に優れていると考えたことはない。しかし当時少年の私は、誇りと悔しさが入り交じった感情に捕らえられていた。

こうして、2 世帯から 6 世帯の「侍」一家が我が生まれ故郷に定住した。明治政府から年金を支給されて退職したものの、収入がより少ない侍家族たちは、商売や慣れない事業で有り金をすっかり使い果たしてしまった。中には極貧に追い込まれ、頼み込んで農家の手伝いをする者すらあった。二本差しの高貴な侍が、ほんの 1、2 年前には、無礼をすれば即刻打ち首だと、がさつで無垢な農民を脅していたのに、夏の日差しをもろに浴び、腰をかがめて、泥と水に膝までつかり、田を打ち、草むしりをしたのだ。それは今まで彼らが軽蔑していたその相手から、数銭の日銭と食事をもらうためだった。この有様を想像してみて欲しい。これはもう滑稽さを通り越して、痛ましい限りの光景だった。20 年後のことになるが、この農家に使われる落ちぶれた侍の悲惨な話と似てはいるが、その逆で愉快な方の好例を知ることになった。それはアディソンが書いたもので、前日まで主人が着ていた服をお下がりでもらって着ている召使いを、主人が叱りつけている話だった（補注）。

私が幼い頃のこと、「大名」が住む町〔里公文（さとくもん）：鶴田藩主松平武聡は里公文の大庄屋福山元太郎の邸に住んだ〕から数人の大工と木挽き職人がやって来て、我が家に数週間滞在したことがある。これは郡役所のある町〔桑下村（くわしも）〕に城主の邸宅〔東御殿〕を建てるため、父の山から木を切り出すためだった。父が持っている木の中でも最上の数本、その中には数百年経った物もあり、また地域の目印になっているような木もあったが、それらは無慈悲にも切り倒され、3 マイル〔5 キロ弱〕先の町まで運ばれていった。そして対価としては、ほんの名目的な代金が支払われたに過ぎなかった。日本ではどこでも、建物が完成した時は、高い足場の上から餅を投げて祝うのが習わしである。見物の人混みに紛れて、私を背負って来ていた父は、堂々たる黒門を指さした。その門は事実上徴用されたに等しいあの木で出来ていた。しばらく経って「大名」が東京に住むようになると〔明治 4（1871）年 8 月〕、まさに踏んだり蹴ったりで、その門は売られ、その町の商家を飾ることになった。

我々田舎者たちの常として、またしてもここで恐怖を伴う物語が編み出された。それは郡役所のある町に最初の城を建てる資金を調達するため、各家の釜や鍋を全て供出しなければならなくなるという話だった。「侍」の美徳や封建時代の日本のよさを、声を大にして力説する輩がいるかも知れない。しかし、私も父も平民であることを、悲しむどころかむしろ喜んだのだった。

（補注）召使いを叱る話

本田はショセフ・アディソンが書いたとしているが、これは記憶違いで、正しくはリチャード･スティールが 1711 年 7 月 3 日付で *The Spectator*（スペクテイター)に書いた“Sir Roger’s Servants”（ロジャース卿の召使い）である。

そもそも本田が読んだ本は明治 25（1892）年に初版が出版された *The Sir Roger de Coverley Papers from the Spectator* By Joseph Addison and Richard Steel と思われるが、これは竹馬の友の関係にあるアディソンとスティールが共同で経営していた新聞『スペクテイター』から、2 人の随筆を集めたものである。2 人とも、アルファベットの 1 文字でサインしているだけであり、判別するのはなかなか難しい。ちなみにアディソンは C. L. I. O.を、スティールは R. T.を使い分けたとされており、「ロジャース卿の召使い」が R. とサインされていることからすれば、スティールの作ということになる。

以下は該当個所

扶養家族に対して慈悲心を発揮することによって尊敬を勝ち得ている人物は、家庭内では主人としてというより、むしろ王子様のように生きる。その命令は任務ではなく、好意と見なされ、主人に近づき話をすることが出来るという栄誉は、その命じられたことを実行したことに対する褒美の一種となる。

この私の友人が管理面で優れているケースが別にある。それは彼が使用人に報いる方法だ。彼の持論によれば、自分の不用になった衣服を従者に着させるのは、従者の狭量な心に非常な悪影響があるという。彼らは外見だけに影響され易いので、主人と自分たちは平等だという馬鹿げた感覚を抱いてしまうのだ。ある若い紳士が召使いを叱りつけている情景を、この友人から度々面白おかしく聞かされたが、その召使いが着ているコートは、数ヶ月前迄、その若い紳士自身が誇らしげに大満足で着ていたものだったというのだ。彼の話はさらに愉快になって、あるご婦人のこの種のご褒美の例に及ぶ。その素晴らしいご婦人は、似合う服と似合わない服をメイドに与えることで、褒美と罰を使い分けているのだと。

（*The Sir Roger de Coverley Papers from the Spectator By Joseph Addison and Richard Steel* University Press of the Pacific Honolulu, Hawaii による）（訳：長谷川勝政）

近代の夜明け

縄と測量用の竿を用いた、粗雑な土地測量、邪宗キリシタン禁制をうたった高札の撤去、新制小学校の開設、そして米によって納めていた年貢の金納への切り替え、これらが新生日本の最初の 10 年間に起こった出来事だった。静かな眠りと自己満足の保守主義にどっぷりと浸かっていた人口 70 人弱の、故郷の小さな村も例外ではいられなかった。農民という者は他の階級と比べ、どこでも変革を嫌う。私の父は村人を代表して時折近くの町に出かけたことを、いつも話して聞かせてくれたが、そこには米で年貢を納めるための収税署まで出来ていたという。米で納めるのではなく一定の額の金銭を戸長の家に持って行く方が簡単だが、皆この方法を嫌がっていた。なぜなら、自分たちも、自分たちの祖先もまた、金納などしたことは一度もなかったからだ。

村人たちの疑惑

新しい徴税方法推進の役目を担うのは、戸長以外いなかった。そのため、ほとんどは濡れ衣だったのだが、戸長が疑惑をもたれることになった。それは納税者を犠牲にして国庫を富ませ、また私利を図るため、農地や他の不動産の面積を多めに測ったのではないかという疑惑だった。ある年、日照りとそれに続く不作がこの村全体を襲ったことで、こうした事態は頂点に達した。旧来の体制下であるなら、かかる場合には人々の嘆願は速やかに聞き入れられ、年貢が減らされたり、状況に応じて免除もなされた。しかし、今回は適当な嘆願の手段もない上、戸長は満額で即刻支払うよう要求した。怒った人々は暴徒となって立ち上がった。

ある暗い晩のこと、松明をかざし、竹槍を肩に担いだ男たちが長い隊列を組んでやって来た。着物の袖を行動しやすいよう紐でまくりあげ、頭には鉢巻きを堅く結わえていた。まるで流れ落ちる汗や血が眼に入らないようにするためのようだった。小さな丘の麓にそって、こちらに向かって半ばまで登って来て、我が家のところで彼らは立ち止まった。当時は、細流を挟んだ狭いこの谷に、15 軒〔国宗（くにむね）・本田・菅・友定・津田・時澤など〕が暮らしていたが、それらは日当たりの良い斜面のそこかしこに点在しており、一揆の人々が

襲おうとしていた戸長〔国宗〕の家は、我が家から 5 分ぐらい登ったところにあった。竹法螺を吹いている者もおり、中の数人が、戦える年齢に達している者がいたら出てくるように、また新しい松明と握り飯を供出するようにと、大声で呼びかけて来た。一番上の兄は別の暴徒の群れに加わっており、父は父で食料を別の暴徒たちの拠点に届けに出かけていた〔暴徒の首謀者に事前に挨拶しないと、その村が暴徒に襲われる恐れがあった。この挨拶に行くことを当時「随行する」と言った〕。われわれ幼い者たちは母と家に残っていたが、恐怖で声も出ず、ただただ歯をがたつかせるばかりだった。ところが気丈な母は、戸長たちとその財産以外危害を加えられることはないと信じており、要求された物を手渡しに農道を降りて行った。10 分ほど後、書類などの燃える臭いがして来た。そして翌日見に行ってみると、戸長の家の住人は危うく難を逃れたとのことであったが、建物は竹で突かれ蜂巣状態だった〔これは明治 6（1873）年 5 月 26 日から 6 月 2 日にかけて、美作（みまさか）一円で起きた血税騒動と呼ばれる大規模な一揆である〕。

この蜂起は数日で鎮圧された。父は、家から槍持ちを 1 人出したというかどで、2「円」25 銭の罰金を課された。しかし、実際に人や資産に危害を加えた者は投獄されたり、手厳しく罰せられた。一揆に関して聞いた話としては、暴徒たちは空の肥担桶が天日干しにしてあるのを見て、政府軍が銃を持って待機しているのだと勘違いして、命からがら逃げ出したとか、また、ある勇敢な農民は高い丘の上で見張りについていたが、草むらを 1 匹の蛇が勢いよく這い出して、恐ろしい音を立てたのを、遠くからライフル銃で狙われているのだと勘違いし、臆病風を吹かせて熱を出し、一揆が終わるまで床に臥せっていたという話も聞いた。

徴兵制の施行

徴兵制が施行〔明治 6（1873）年 1 月 10 日〕されてから数年後、我が村から初めての出征兵士が、最も近い駐屯地に向けて涙ながらに赴いた。村人たちは駐屯地での不思議な生活について噂した。不幸な新兵は牛の肉団子を食べ、人間の血に染まった罪深き毛布〔緋毛布（ひげっとう）〕を被って眠らなければならないのだと。そのため、ある信心深い若者はそこから逃れられるようにと、昼夜を分かたず神々や仏たちに祈りを捧げたという。そして、ある晩遅く奇跡が起こった。駐屯地の高い塀の内側で若者が祈り続けている間に、彼の目の前で生え始めた竹の子は次第に大きくなり、強い竹に成長していった。そして、新兵はすぐさまこの竹をよじ登り、垂れ下がった天辺を伝って駐屯地の外に降り立ったというのだ。こんな人々を惑わすような噂が流れはしたが、結局 3 年後、我が村の英雄のご帰還は心から歓迎された。皆が皆、彼の軍人らしい歩き方、軍服、剣、ブーツ、帽子を絶賛したものだ。日清戦争と日露戦争に参加した兵卒の大部分と士官の相当数が、農民、商人、そして職人たちの息子だった。

村に出来た最初の学校

我が村に学校が誕生したのは一大イベントだった〔明治 5（1872）年 10 月、共立校（私立）が創設された。2 年後共立小学校（後の打穴（うたの）尋常高等小学校）に編成替えされる〕。この素晴らしい施設に入学したのは家族の中では私が初めてだった。兄は 2 人とも戸長や避

難して来た「侍」の指導を受けて、既に読み書き算盤を習っていた。なぜなら、いにしえの慣習通り寺の住職に習うには、我が家が檀家として属する寺〔「二上山（ふたかみ）」山頂の両山（りょうさん）寺〕が余りにも遠かったからだ。私は病弱な質だったので、学校が開かれた初年度に入学するのは無理だった。したがって、隣（この場合歩いて 3 分離れていることを意味する）〔戸長の国宗家。「村人たちの疑惑」に於いては「我が家から 5 分ぐらい」と表現〕の少年が、毎週清書した文字を私や家族に見せてくれるのだが、これが羨ましくてしかたがなかった。漢字も仮名も 3 インチ〔約８センチ〕角の大きさで、良く出来たところに丸や点が朱筆されている。戸長の家の祖父は性格の明るい温厚な英国紳士タイプの地主で、小学校のいわば幹事役だった。この孫も好感の持てる性格の良い少年で、学校からの帰りに、しばしば祖父と 2 人で家に立ち寄り、父を介して新しい教育のすばらしさを推奨してくれた。白い文字を何度も書いたり消したりすることの出来る黒い平らな板（黒板とチョークのこと）について話してくれた時の、その描写の仕方まで思い出すことが出来る。

子供時代の努力

学校の名簿に私の名前が初めて載ったのは 8 歳の時だった。私は家で表音文字である 47 文字を殴り書きする以外、何も習っていなかった。最初の先生たちは皆逃げてきた「侍」だった〔『久米郡誌』によれば、旧鶴田藩士の熊谷、武田、近藤の三名が漢学を教授したとある〕。その内の 1、2 名は東京やその近辺で師範学校の教育も受けていた。1 人の背の高い斜視で怖そうな先生が、短い鉄の棒で机を叩きながら悪ガキを懲らしめていたのを覚えている。また老齢の紳士だった先生が、教室の片隅に座って辛抱強く書道の手本を書き、生徒の答案を直している姿を、今でも尊敬の念をもって思い出すことが出来る。最初の頃は自分の石板も蝋石もなかったので、桑の皮を剥いで作った紙に墨と筆を使って、算数で使う線や数字を書かなければならなかった。しばしば墨は滲み、私が書いたものは判読出来なくなった。そのため学校でも家でも悲しそうに泣いたものだ。祖母は私の背中をさすりながら、「可哀想にのー、泣いちゃーいけん。弱え一体に障るだけじゃけー」と、すすり泣く私を慰めてくれた。

学校の 2 年目は師範教育の過程を終えたばかりの平民の先生が来て、村の学校もいくらか組織化され始めた〔明治 7（1874）年 10 月、共立校が共立小学校となったことを指す〕。その先生は我々の村から数マイル離れた村の開業医で儒学者でもあった。生まれ故郷の教育の進歩に生き甲斐を感じているようだった。3 年間に亘りこの先生から入念な教育を受けて、私は生徒のまま先生の補助もする助教になった。当時は年齢に応じてクラス編成をする方式ではなかったから、生徒の中には私より年長の者もいた。その中には弟である自分より 2 年長く学校に通うことを嫌がっていた私の姉〔あさ〕もいたが〔この頃の小学校は下等 4 年上等 4 年の計 8 年が所定の期間だった。本田はこれを 6 年間で卒業している〕、13 歳にして、2、3 のクラスを同時に教えるということには、それなりの満足感があった。私が自由自在に権威を駆使したので、本来なら私のようにひ弱な先生を梃摺らせて喜ぶはずの腕白どもも、私には畏敬の念を抱いていた。最初に導入された学校教育のシステムには時代遅れな点もあった。たとえば習字の手ほどきする場合、生徒の長椅子に上り、生徒の背中にかぶさるように立ち、前屈みになりながら、自分の手を生徒たちの手に添えて、手本や半紙の上をなぞってやらねばならなかった。こういった場合、暑い時期には女生徒たちの油ぎった髪の匂いが鼻をついたが、これはどうも私好みの匂いとはいえなかった。また教師と保護者の指示で、水泳と図画（絵を描くこと）は共に禁止されていた。水泳は命にかかわるし健康に害があるからと言う理由で、また図画はいたずらで壁などを汚しては

いけないからだった。それらが出来なかったことを、私は死ぬまで残念に思うだろう。

2 年間の医学修行

私も 15 歳になって地方検定官による助教諭の免許試験にも受かった。私はもう助教ではないので、月給も段階的に上がって 2「円」85 銭、言い換えれば 6 シリングに数ペンス満たない額にまでなった。当時は師範学校を卒業した者の最低賃金が 3「円」だった。その地方ではただ 1 人の 1 級の助教諭だったので誇らしくもあり、そのことを以前の先生に報告しないではいられなかった。その先生は私に特に目を掛けてくれた人で、今は青雲の志を抱いて大阪に出ていた。「そんな昇進なんか、普通の輩が喜ぶことだ。「君」はもっと高い目標を持って、後世に名を残すよう努力すべきだ!」というのがその先生の答えだった。しかし、中等教育の組織はまだ出来ておらず、財産のない者が行ける学校は村の小学校だけだった。そこで両親と兄たちは、授業料が地方税で賄われる県〔岡山県〕の師範学校に私を行かせることにした。しかし、一番上の兄と共に、徒歩や川船や人力車を使って行った 25 マイル〔40 キロ〕の岡山への長旅は全て無駄に終わった。入学試験には年齢制限があり、私は余りにも若すぎたのだ。これには本当にがっかりした。

最初の患者

私に残された唯一のコースは開業医に弟子入りし、その後で内務省による内科医の免許試験を受けることだった。母はこの計画に殊に乗り気だった。というのは、母はほぼ毎年かなり重い病気を患い、また私が虚弱体質であることを心配していたからだ。そしてある春の日のこと、遠く離れた吉岡〔吉岡寛齋（かんさい）：倉敷、京都、江戸で学んだ蘭方医〕医院へ出立したのだ。我が村から 10 マイル〔16 キロ〕離れたところ〔岡山県福渡〕に住んでおり、郡では一番手広くやっているという評判だった。父は食費として吉岡先生に年 3 俵の米を提供することを約束してくれ、私は薬を調合し錠剤や粉薬などを準備しながら、暇を見て医業を学ぶことになった。医院には 6 人の少年や若者がおり、その中には先生の助手として既に経験も長く、助手として村の患者の往診を許された者もいた。封建時代ではこれが田舎に開業医を供給する唯一の方法だった。今年、大正 5（1916）年から初めて、医学校卒業生に対しては、医師免許取得のための国家試験が全面的に免除となる。しかし、医者に自分の薬局運営を止めさせることが出来るかというと、これは今すぐには無理だろう。大衆は貧しく、診察料と薬代を別々に負担することは困難であるから、医者の方は薬代に診療費を上乗せして請求せざるを得ない。しかし、少なくとも今回当局が、医院毎に資格を持った信頼の置ける薬剤師を置くように定めたことは、1 つの進歩ではある。35 年前、私はまったく何の訓練もなく薬を扱うようになった。しかも悪いことには、まだ最初の 1 年目で略式の勉強すら終わらないのに患者の家を訪問しなければならなくなったのだ。その日の午後は先生も先輩の助手もみな留守だった。近くの村に住む女性が激しい腹痛に襲われた。急いで行き何とかして楽にしてやらねばならない。私は医学について全てを知り尽くした風を装いながら、薬箱を抱えた供を従えて一目散に道を急いだ。そしてわけ知り顔に頷きながら、消化不良の薬を処方したのだ。しかし次の日、往診から帰ってきた先生が、ほほえみを浮かべながら、あれは寄生虫のようなものにやられていたのだよ、と教えてくれた。

医学より政治を

当時は議会制に基づく政府の創設を求める社会運動が激しい時代だった。私の生まれ故郷は、板垣伯爵〔板垣退助：政治家。自由民権運動の中心人物〕とその急進的自由主義が生まれた土佐からさほど離れていない上、明治 10（1877）年の内戦、すなわち西南の役の本拠地が、新政府のある東京よりも近かった。我が一家のみならず、地方全体が反乱軍の方を贔屓にしていた。小学生だった頃は覗き眼鏡で政府軍が爆弾で吹き飛ばされる絵をみては、飛び上がって喜んだものだ。医院に置いてある東京や地方の新聞には、政治関連の記事が満ちあふれていた。多くの民権運動家がやって来ては、速やかな国会開設を要求する演説をした。その中には若き女性〔岸田俊子：文金高島田に緋ちりめんの着物姿で演壇に立ったという。明治 15（1882）年 5 月に岡山を訪れている〕もいたが、彼女は後に中島男爵〔中島信行〕の夫人となった。男爵は明治 23（1890）年の衆議院で最初の議長をした人物だ。官僚制度がまだ十分に確立していない時代のことで、女性や学生が政治討論や政治運動に参加することも自由だった。しかし、ときによっては投獄されたり、流刑になったりする危険性もあった。私も世論という週刊誌〔明治 13（1880）年 11 月創刊の『東京輿論新誌』（輿論社）か〕を個人的に東京から取り寄せ、思い出せないくらいくだらない内容だったが、時折投稿もした。討論会というものもあったが、地方色の濃いものだった。ときには吉岡先生が座長となり、我々医学生や村の青年たちが、くじ引きをして急進派と保守派に別れ、国政について夜遅くまで議論することもあった。この頃、当時の駅逓頭（えきていとう）〔総務省へ改変前の郵政大臣に相当〕、すなわち現在の前島男爵〔前島密（ひそか）：郵便事業の創設者。東京専門学校第 2 代校長〕率いる政府の視察団がやって来たことがある。男爵は現文部大臣の高田博士〔高田早苗：早稲田大学初代学長。衆議院議員〕の義父に当たる。無論、遠隔地へのかかる政府高官の来訪は珍しいことであった。村人たちは、道を往く高官の顔を敢えて見ようとはしなかった。しかしながら我々未熟者の政治家たちは、年をくった地方官が、まるで自分が「大名」やその家臣の親戚であるかのように、偉大な駅逓頭のことを、敬語を連発しながら話すのを、うんざりしながら聞いていた。

東京への逃亡

医学修行の 2 年目は東京で受けることになった。吉岡先生の生徒の中には、私の同級を含めて東京で学んでいるものが幾人かいた。大志を抱く若者が行くとすれば、日本では東京をおいて他にはないと私には思えた。東京から届く手紙は全て誘惑以外の何物でもなかったが、私も父も旅費さえ出す資力がなかった。それに母は有名な医者にはなってくれるなと、口を酸っぱくするほど繰り返していた。というのは、昔のことで、有名になると嫉妬から毒を盛られることがあったからだ。厳格な階級制の時代では、平民が他に抜きん出てなれる職業としては、聖職と開業医があるだけだったから、優秀な平民はしばしば不倶戴天の同士に貶められたり、当局に嫌疑をかけられたりする危険性があった。こういった障害があったにもかかわらず、私は意を決して人里離れた田舎の生活から抜け出すことにした。私や家族と親しい、ある気前の良い友人が 10「円」を恵んでくれたので、東京へ密かに上京する手だてが得られたのだ。愛しい母に心配を掛けることは大いに悲しかったが、ある夏の日〔明治 15（1882）年 9 月 9 日〕の真夜中に吉岡医院を抜け出した。机の上にはことを詫びる置き手紙を残し、私がいなくなったことが身内に解った場合すぐ家に持ち帰られるように、身の回り品は全て一纏めにしておいた。家族の手が届かなくなる距離に来

るとすぐ、自分の気持ちを切々と訴える手紙を両親に書き送り、神戸からは日本船の三等船室を確保して、ようやく東京にたどり着いた。その時は私の財布には数「銭」しか残っていなかった。父は私を責めるでもなく、落ち着き先の医院が決まるまでの下宿代に当てるようにと、いくらか金を送ってくれた。3 週間後〔明治 15（1882）年 9 月 29 日〕落ち着き先が決まったが、これは当時の帝国海軍軍医総監、男爵高木医師〔高木兼寛（かねひろ）：英国セント・トーマス病院医学校卒。成医講習所（東京慈恵会医科大学）の創設者。当時海軍に蔓延していた脚気を、麦飯の導入により一掃することに成功したことで知られ、「麦飯男爵」の渾名で親しまれた〕の親切な紹介によるものだった。就職した先は松岡〔松岡勇記（ゆうき）：緒方洪庵の適塾出身。福沢諭吉や花房義質（よしもと）などと同門で、長崎でオランダ人医師ポンペに医学を学んだ〕医院、食べさせてもらう代わりに薬を調合しなければならなかったが、1 ヶ月に 1「円」の小遣いももらえた。これほどの良い条件で医者になれるチャンスが他にあっただろうか。

より広い世界を垣間見る

小学校時代のいじめは、大人の悪意が理解出き、それを自分でもやれるくらい悪知恵がついた少年が、私の方には何の落ち度もないのに、毎日毎日しつこく詫び証文を書かせてはいじめるという類のものだった。それは私がまだ年下の頑是無い子供であるため、いじめの張本人はもとより、それに続く悪がきどもから身を守ることが出来ないという、ただそれだけの理由からなされたものだった。家庭では愛情と優しさに馴れ切っていたが、学校で初めて外の世界の残酷さを味わうことになった。吉岡先生の所にいた時は、小遣いも盗まれた。犯人は生徒仲間の 1 人だと思われた。また私には毒だったが、村の若い男女の恋愛沙汰の噂も聞こえてきた。15 ヶ月間そこにいたが、若い友人と共に四国の金比羅宮を訪れたことがあった。内海〔瀬戸内海〕を船で渡ったが、この船はなんと「石のような木炭」〔石炭〕の力で走った。この旅で県庁所在地〔岡山〕を通ったが、この時白い肌で明るい色の髪をした人間に 1 人､2 人出会った｡彼らは町でも高台で見晴らしのいい場所にある、豪華な洋館に住んでいるということだった。後になってのことだが、彼らが米国人宣教師であることを知った。その中の 1 人には数年後ニューイングランドで相見えることになった。吉岡先生も大先生〔吉岡有隣〕もオランダ語で医学を学んでおり、西洋人がいにしえの日本に最初に教えてくれたことといえば、何はさておき、殺戮方法（兵法）と治療法だったと話してくれた。瓶に張られたラベルに書いてある薬の名前を、2 人の紳士がなんなく読めるのが羨ましかった。なんといってもそれらの文字は奇妙奇天烈な文字で、「蟹歩き」、つまり横書きに書かれていたのだ。

中国語の聖書とローマ字

吉岡先生の弟〔吉岡弘毅（こうき）〕は外交官の先駆的人物の 1 人で、朝鮮政府に外国との国交を促していた〔明治 3（1870）年、外務権少丞吉岡弘毅が王政復古の伝達と国交を求める外務卿書翰を携えて渡朝したが、交渉は決裂した〕。当時は韓国の首都に外国人が入ることは禁止されていたので、首都の代わりに釜山が正式交渉を行う場所だった。交渉は長い間隔を置きながら行われたので、日本人代表団は時間的余裕も十分あり暇だった。そこで吉岡氏

は暇つぶしに聖書の中国語訳を読んだ。ところがこの時、この聖書の啓示が吉岡氏の胸を強く打った。その結果、後に彼はキリスト教の牧師になったのだ。このことが、両親〔吉岡有隣夫妻〕がそろって改宗し、さらにまた甥が東京にある長老派のミッション系大学〔築地大学校。後の明治学院大学〕へ入ることにも繋がった。当時はまだ聖書の日本語訳が出版されておらず、大先生は時々中国語の聖書を開いて講釈をしてくれた。しかし、私はそれにさほど心を動かされることはなかった。むしろ休み中に、例の大学生が帰って来た時見せる、インクを使いペンで書く様子の方に感銘を受けたものだ。ところがこのことで、私がヨーロッパ言語や西洋文明を学んでやろうという気持ちになったかというと、そうではなく、ただより大きな可能性を持った新しい環境に飛び込みたいという願望ばかりが刺激されたのだ。東京に向かう途中は神戸で 3 日間、船舶代理店の船宿で待たされた。もともとは 1 泊のはずだったが、代理店が言うには予告した船旅に不具合が生じたということだった。以下は田舎者の常としてよくある、今で思えば私が騙された失敗談だ。神戸に滞在している間のことだったが、午後、神社〔湊川神社〕を参詣することにした。そこは熱烈な愛国者の英雄楠木〔楠木正成（まさしげ）：南北朝時代の武将。足利尊氏の入京を防いだが、湊川で自刃。忠君の鏡とされた〕が祭られている場所だ。歩くのも道を探すのも面倒だったので、15 銭で人力車に乗った。車夫は最初の角を曲がり大きな鳥居の前で車の引棒をおろした。私が代金を払い数分間参詣して門のところに出て来ると、まだ車屋が待っており乗るよう声を掛ける。乗った時間は余りに短いから 15 銭でも高すぎる。したがって先ほど払った料金で往復乗れると車屋は言っているのだろう、そう考えたので特に確認もせず車に乗り込んだ。ところが、最初に出発した元の場所に戻ると、なんとまた 15 銭払うよう要求されたのだ！

井上侯爵の薬

鉄道としては、東京横浜間が当時唯一日本に存在するものだった。したがって当然のことながら東京への到着は新しい経験だった。そしてまた、松岡医院での生活によって、より広い世間的視野も開けてきた。先生は工部大学校〔後の帝国大学工科大学〕の校医をしており、その関係で、卒業後有名になったその道の専門家たちの顔も覚えている。もっとも中には私に感謝していない人物もいるに相違ない。なぜなら薬を調合させて頂く栄誉に浴する以上、私はその人の病名や症状などを知る立場にあったからだ。また松岡先生は、当時外務大臣だった故井上侯爵〔井上馨（かおる）：政治家。第 1 次伊藤内閣の外相として条約改正に尽力。後蔵相、元老〕の主治医もしていた。現在侯爵は大使としてロンドンに赴任しているが、よく自分の薬を取りに来られたものだ。そんなわけで、英国に出立される前のお別れのパーティーで、30 年前私が侯爵にして差し上げたことについて話す機会があった。勿論お互いに顔までは覚えていなかったが、君には大変な苦労を掛けたんだろうねと、ねぎらいの言葉を頂戴した。私はこの丁重な挨拶に、「ずぶの素人が調合した薬で、閣下のお身体になんら差し障りが無かったことを、私は神に感謝しなければなりません。」とお答えしておいた。松岡先生お抱えの人力車夫は、知っている限りの英語の単語や句をこれ見よがしに使って、私をうらやましがらせた。また、大臣の主治医である松岡先生に紹介してもらって、外務省の荷物運びに志願したらどうかなどと勧めてくれた。そうすれば胸の所に金ボタンが 2 列に並んだスマートな制服も着られて、「食客」より余程うまくやっていけるぞと教えてくれた。食客というのは居候の学生に付けられた一般的呼び名だった。友人に会いに官庁へ行く度に、この有り難い忠告を思い出したものだ。

ビンガム、アメリカ合衆国公使

田舎出の進取の気性に富んだ若者が想像していたように、東京では幸運が道に転がっているというわけではない。検定試験に必要とされる医学の領域を全部自分で学ぶには時間も忍耐も限界にきていた。そこで絶望のあげく、花房子爵〔花房義質（よしもと）：岡山藩士花房端連の長男。緒方洪庵の適塾に学び、その後、米国、欧州に洋行。壬午事変に際しては、包囲された公使館から脱出、その後済物浦条約により事変による損害の補償を得るとともに、京城への駐兵などを認めさせた。駐露公使、枢密顧問官〕に適切なるアドバイスを求めることにした。同県の出身者としてはほとんど唯一の頼みの綱だった。紹介状は無し。紙に書いた住所が紹介状代わりだった。子爵は全権公使として韓国に赴任していたのだが、明治 15（1882）年に韓国人によるソウル公使館襲撃事件〔壬午（じんご）事変〕があり、ちょうど日本へ戻って来られたところだった。客間には意味ありげにライフル銃が横たえられていた。子爵は松岡先生と大阪の蘭学塾〔緒方洪庵の適塾〕で同窓だったので、個人的にも松岡先生をよく知っていた。良い先生だからそのまま残るようにと強く勧めてくれた。この政治的混乱の結果として、当時、東京に朝鮮の使節団がやって来たことがある。彼らや日本人通訳の中に病気になった者が出たが、この時薬を手配したのは私だった。さて、ある日の朝、私は大胆にも築地のアメリカ合衆国公使館のビンガム公使〔ジョン・アーマー・ビンガム：米国の外交官。不平等条約の撤廃を主張〕を訪ねた**（補注）**。米国ではごく普通の人でも大統領に登り詰めることが出来ると聞いたからだ。（実は、日本人には市民権は与えられないし、たとえ帰化しても大統領になる資格は得られない、ということを私は知らなかったのだ。）招じ入れられた部屋では暖炉が赤々と燃えており、その前でしばらく待つように言われた。やがて、1 人の日本人を連れて白髪の老人が入って来た。その日本人はこれが公使様、つまり閣下であると告げたので、私は深々と頭を下げた。暖炉のそばに座り、コートの襟にこぼれたミルクのしずくを白いハンカチで払いながら、親切な公使様は私の頼みをその通訳から聞いて、「今のところ君を米国に連れて行ってくれる人物を知らない。しかし、通訳のところに君の住所を残しておいてくれれば、つてが見つかり次第、一番で知らせてあげる」と答えてくれた。その日の午後、松岡先生の家にあの通訳がやって来て、私に対し、社会的、外交的礼儀について説教をしたあげく、おこがましくも何の紹介もなく外国の高官に会い、あんな勝手な頼み事をするとは無礼きわまりないと、あからさまに言い放った。おそらく、こんな子供じみた行為を、私は無我夢中でしたのだろう。しかし、この通訳はお気の毒に、数年後アルコール中毒が原因の精神錯乱で亡くなった！

（補注）ビンガム公使

ビンガム公使の築地にあった家のこと、その人となりについて書き残したもう 1 人の人物がいる。それはクララ・ホイットニー、後に勝海舟の三男梅太郎の妻となった人物である。以下に抜粋したのは、彼女が 10 代の時に記した日記である。

明治 8（1875）年 12 月 16 日（火）

午後、母やアディとアメリカ公使ビンガム氏の家を訪ねた。美しい大きな家で、中にはアメリカで使っているようなすてきなカーペットが敷いてあった。ビンガム夫人は小柄な婦人で、お若くはないが、親切で快活な方だ。私は夫人と、暖かく気持ちのよい、豪華な家具のある家にすっかり魅せられてしまった。そんなに美しい家庭的な客間に比べると、ああ、我が家の客間はなんとみすぼらしく見えることだろう！

明治 11（1878）年 10 月 23 日（水）
　今夜父と母がビンガム公使に用があるというので、私も一緒に築地へ出かけた。公使はとても親切でお父さんのようであり、私のおじいさんにそっくりに思われた。
（以上、クララ・ホイットニー著 一又民子訳『クララの明治日記（上、下)』講談社 1976 より）

柔道と英語を共に

　他にもっとやり甲斐のあることも見つからないまま、引き続き医者になる積もりだったが、当時は高木軍医総監が組織した海軍軍医学校に入学することを考えていた。なぜならそこに入れば授業料は全額政府が支払ってくれたからだ。しかしながら、入学試験には諸学科に加え英語の知識も必要だった。そこで松岡先生に、月謝 1 円を追加で出してもらい午後の毎日数時間を近所の私塾〔三田英語学校〕で英語が学べないか、書面にしたためてお願いしてみた。先生は寛大にも月謝のことも時間のことも共に快諾され**（補注）**、私は数ヶ月間英語の初歩を学び、ウェブスター〔ノア・ウェブスター：アメリカの辞書編集者・著作家。その『英語大辞典』(2 巻）は、その後幾度かの改訂を経て今日でも広く利用されている〕のスペリング・ブックと格闘することになった。ところがこの経験で解ったことは、クラスの他の生徒と歩調を合わせるためには、彼らと同じように全時間を英語の勉学に振り向けねばならないということだった。私に同情的な学友が、間接的ではあったが、貧しい生徒に無償で英語教育を受けさせてくれる素晴らしい師範がいることを知っていた。ただし、同時に師範の所で柔道も学ぶことが条件だった。無論当時の私は半軍事教練的な柔道の稽古が、如何なる結果や成果を生むのかは知らなかった。とにかくこれだけの恩典を享受出来るのなら、条件としては軽いものだと考えたのだ。先ほどの学友の知人が、私のために嘉納師範〔嘉納治五郎：講道館柔道の創始者、教育者。第 5 高等中学校（熊本大学)、高等師範学校（筑波大学）校長を歴任、カイロでの国際オリンピック委員会からの帰路、氷川丸船上で死去〕に話を通してくれ、入門が可能かどうか判断するため、論文を提出するよう返答があった。

（補注）松岡勇記の逸話
以下の逸話により松岡医師が、かなり剛胆な人物であったことが解る。
福沢諭吉『福翁自伝』慶應義塾大学出版会 1999 年（資料提供：長谷川亮氏）
緒方の塾風　裸体の奇談失策
　裸体のことについて奇談がある。ある夏の夕方、わたしども五、六名のうちに飲む酒ができた。すると一人の思いつきに、この酒をあの高い物干の上で飲みたいというに全会一致で、サア屋根づたいに持ち出そうとしたところが、物干の上に下婢（げじょ）が三、四人涼んでいる。これは困った、いまあそこで飲むと、きゃつらが奥に行って何かしゃべるに違いない、じゃまなやつじゃというううちに、長州生に松岡勇記という男がある、至極元気のいい活発な男で、この松岡の言うに、ぼくがみごとにあの女どもを物干から追っ払って見せようと言いながら、真裸体（まっぱだか）で一人ツカツカと物干に出て行き「お松どんお竹どん、暑いじゃないか」とことばを掛けて、そのまま仰向きに大の字なりになって倒れた。この風体を見てはさすがの下婢もそこにいることができぬ。きのどくそうな顔をして皆下りてしまった。すると松岡が物干の上から蘭語で上首尾早く来いという合図に、塾部屋の酒を持ち出して涼

しく愉快に飲んだことがある。

日本人の英雄に関する論文

歴史に名だたる英雄、木曽義仲〔平安時代末期の武将：倶利伽羅峠（くりからとうげ）の戦いなどで平氏討伐に功を上げ、征夷大将軍となるが、頼朝の討伐軍により京を追われ討ち死に。倶利伽羅峠火牛の計（数百頭の牛の角に松明を付け、敵軍に突入させた）が有名〕に関する一文を漢文で書き、弘文館という学校の校長〔嘉納治五郎〕に送った。漢文というのはいわばヨーロッパ人のラテン語に当たるものだ。弘文館の校長が柔道道場の師範を兼ねていた。3 ヶ月の見習い期間を条件に受け入れてもらえた。このことを聞いた松岡医師は、嘉納師範の所へ行くことを親切にも許可してくれた上、持ち前の寛大さを発揮して、駄目だったら戻ってくればいいとまで言ってくれた。そして明治 16（1883）年 10 月 1 日、柔道と英語を共に学ぶ身とはなったが、医学校への入学まで許されたわけではなかった。125 歳まで生きられたら、というのが大隈侯の願いだが（補注）、それなら私にもまだ医者になるチャンスがあるかも知れない！私は見習い期間を無事に終え、続けて英語で、生理学、心理学、社会学、政治経済学、形而上学、政治学などの学問を 7 年間に亘って学んだ。当時はこういった一連の科目が、国家に対し直接的に役立つ人間を育てる上で、不可欠だと考えられていた。また日本語の教科書は無かったので、もっぱら英語の本が用いられていた。肉体的勇気と精神的忍耐力に関して言えば、最初の 1、2 年間に経験した柔道の稽古の方が、おそらく英語習得の場合以上にそれらを必要としただろう。特に寒い季節はこのことが言えた。というのは、我々は規律を厳格に守らねばならなかったので、鍛錬はとりわけ厳しく、火や暖かい下着や靴下の使用は許されなかったからだ。当時はいやでたまらなかったが、こういった訓練のお陰で、子供時代、両親が心配していた若死にからも逃れることが出来た。英語と柔道の両方で生徒のまま先生をつとめるようになる頃には、知らず知らずのうちに、海軍の軍医になるという決意を忘れ始めていた。これは今から思えば、故郷を離れている息子の身の上を心配した父が相談したある占い師が、息子さんは文筆業が向いており、女性の影響を受けた時に最も成功する、と答えたことも少しは影響しているだろう。

（補注）大隈重信の人生 125 歳説

早稲田大学公式ホームページ「大隈重信の人生 125 歳説」
http://www.waseda-shop.com/w125/125mp/waseda125_page01.html　2006.1.10

早稲田大学創立者・大隈重信は、常々「人生 125 歳説」を持説として語っていた。「人間は本来、125 歳までの寿命を有している。適当なる摂生をもってすれば、この天寿をまっとうできる」というものである。その根拠は、「生理学者の説によると凡ての動物は成長期の五倍の生存力をもっているというてある。そこで人間の成熟期はおよそ二十五歳というから、この理屈から推してその五倍、百二十五歳まで生きられる」（大隈重信述「人寿百歳以上」）というものであった。この大隈重信の「人生 125 歳説」は非常な評判となり、当時のジャーナリズムに何度も紹介されている。

森子爵の暗殺

30 年前は日本でいわゆる男女共学など夢想だに出来ない時代だった。嘉納師範の柔道の教え方も、女性らしさの価値を認めるというよりは、我々の中にある優しい要素を抑圧す

る態のものだった。当時の生徒たちは、まだ封建時代の単純さと軍隊的な荒々しさとを持っていたので、柔道を学んだ生徒は自分の腕を、喧嘩速い酔っぱらい相手に試すこともあった。当時の文部大臣であった故森子爵〔森有礼（ありのり）：初代文部大臣。国家主義的教育体制を確立〕を暗殺したのは、嘉納師範の道場〔講道館〕における私の生徒だった。明治 22（1889）年、帝国議会発布の縁起のいいその日〔2 月 11 日〕に、あの有能な政治家の脇腹を刺したのだ。この狂信的若者は自らの信念に殉じた真の愛国者だった。なぜなら、伊勢神宮を冒涜したことで有名な人物〔森は伊勢神宮に参拝した時、拝殿に掛かる布の簾をステッキで払い除けて中を覗いたことで、世間から非難されていた〕が、日本の大憲章とも言うべき憲法を信認する歴史的式典に参加するのを、自分の命に代えて阻止したのだから。この西野〔西野文太郎〕の暴挙に柔道が関係したかどうかはともかく、私は柔道の稽古からは恩恵以外の何ものも受けることはなかった。子供の頃は臆病で、敢えて暗闇を歩いたり墓場を通ったりはしなかったが、若者になってからは幽霊や妖怪を捕まえて勇敢さを示したいと思うようにさえなった。ある晩、東京の通りで、乗っていた「人力」車夫がつまずいて穴に落ちてしまったが、私が思いもよらぬ速さでパッと人力車から跳び降り、ものの見事に穴の端に舞い降りるのを見て、その車夫は大そう驚いていた。新生日本における植物学者の草分けの 1 人にして、ボルチモアのジョンズ・ホプキンズ大学で学んだ故矢田部博士〔矢田部良吉：東京大学初代植物学教授。矢田部はジョンズ・ホプキンズ大学は出ておらず、本田の記憶違い。正しくはコーネル大学〕は、高等師範学校付属中学で英語を教えていたことがある。ある日、矢田部教授が規則を守らない生徒を教室の外に出そうとした時、その悪戯好きの生徒が反抗して矢田部教授を力ずくで倒してしまったのだ。この学識豊かな紳士は、二度とこのクラスを教えようとはしなかった。代わりに私が任命されて教えることになった。ところが、手に負えないはずの腕白坊主たちは皆、私の授業中静かに授業を聞いている。そこで問いただしてみると、「今度の英語の先生は柔道 3 段だ。やつの手の届くところには近づくな！」と噂し合っていたということだ。

知的自殺

最終的には、世間は最初に思ったほど冷酷なものではなかった。家庭以外にも、思いやりがあり、慈悲深く寛大でさえある多くの人物がいた。なかでも嘉納師範は、資金を湯水のように使い、多数の若者の体と心を育てることに腐心していた。唯一の望みはといえば、可能な限り多くの若者を祖国の役に立つ人物に育て上げることだった。感謝しても、しすぎることはなかった。しかし、嘉納師範の指導のもとで学ぶにつれ、私は理屈っぽいわがまま者になった。一方、嘉納師範は実践による成果を最も重視するタイプのプラグマティズム信奉者であり、しかも誰にも負けない強い意志の力を持っていた。ところが私はと言えば、論理構成をする場合も、物事の決断をする場合も、感情が勝ってしまう傾向にあった。そのため、知識の啓発や実益のある活動より、愛すること愛されること、いずれであれ、愛のために生きることの方が大切に思えたのだ。人の行動を究極的に支配する領域が、頭の中にあるのか心の中にあるのかといった、抽象的な問題はさておき、霊的世界が存在もしなければ認知することも出来ないとする考え方には、どうしても耐えられなかったのだ。この世で親切にしてくれた人と、またあの世で会いたいと願っていた。この世で自分に親切にしてくれた人に対し、死後の世界で、尽くしてくれたことへのお礼も言えないのなら、一生懸命働き、厳しい自制を課し、たとえ成功したとしても、それが一体何になろうか。これまで学び培ってきた物質主義と、私の宗教的ないし感情的性質が、真っ向からぶつかり合ったのだ。そして、この内的衝突は知的に自殺した状態、いわば思考停止状態

に他ならなかった。いくら考えてみても、生きる目的が定まらない状態では、焦燥感がつのるばかりで生きる気力さえ湧いてこない。生き甲斐が無い以上、出来るだけ早くこの人生に終止符を打つのが最善策ではないかと、苦悶に苦悶を重ねていたが、両親や友人たちを悲しませてまで自殺する勇気もなかった。そんな窮地に立たされていたので、他人のため、すなわち人類愛のために生きることを理想とする教え〔キリスト教〕に、この際身を委ねてしまおうと考えたのも、ごく自然な成り行きではなかったか。

キリスト教へ改宗

日本人が今、一国民として、知性に懐疑的となり、精神性を重視しない気性になっているかどうかを判断するのは難しい。しかし、宗教を希求する日本人が、世界を覆う不可知論や物質主義の洪水の真っ直中にあって、何に直面しているのか理解するのはさほど難しいことではない。もし、私が自分は何のために生きるのか知りたいという身の上相談を、神道家や仏教家にしたとすれば、彼らは私を再度改宗させ、精神の奥底でそれなりの安堵を与えてくれるに違いない。しかし、当時は、古い教義だったから、我々が現在持っているような新しい教導者もおらず、西洋の宣教師が持ち込んだ新しい宗教は、古い迷信として糾弾された。小さな少年の私は、日本の神々やインドの仏たちに、学校における成績の向上や、度々具合が悪くなる母が早く回復するよう一心に祈ったものだ。そして寺院や神社をしばしば訪れたが、宗派の教義を指導してくれる僧侶や神官は 1 人としていなかった。したがって、当時の宗教観といえば、神道は、井戸、子供、母などを清めてくれる存在であり、仏教は、葬式や法事を行うことでなりたっているという程度のものでしかなかった。ベンサムやハーバート・スペンサーに信服していた私が、こうしたことを想起する時、神道や仏教を魂救済の道標にするなど到底ありえないことだった。その数年後のことになるが、私が世話をした清国人留学生が、キリスト教のことを、英語に堪能になることを願う輩が信じる教え、と定義したが、別に驚くに当たらない。彼が指摘したかったのは、いわゆる「生活の糧目当ての改宗者」が抱く動機の卑しさなのだ。しかし、いずれにせよ私の場合は、英語を学んだ結果として、英語を話す人々が崇拝する神を知ることになったのである。

女性の影響

当時学習院の教頭であった嘉納教授は明治 23（1890）年、1 年間に亘る教育視察〔実際の期間は明治 22（1889）年 9 月 13 日から明治 24（1891）年 1 月 16 日〕のためヨーロッパへの旅に出た。留守中の講道館と少年や青年のための寄宿舎の管理運営は、3 人の上級生〔西郷四郎、岩波静弥、本田増次郎〕に任されたが、その内の 1 人が私だった。嘉納教授の出発直前に私は英語学校である弘文館を卒業していたが、7 年間受けた教育では未だ英語を書く能力も、話す能力も不十分そのものだった。現在でさえ、我が国の外国語教育は改善の余地が大きいと思われるが、初期の英語教育は多くの場合、オランダ語を媒介にして英語を学んだ日本人の学者が教えたもので、そのため発音は「ザ」や「ナイフ」といった単語もドイツ語式やスペリング通りに発音していた。ここでも、中国語の成句を日本語に翻訳する、例の目も当てられないやり方が、ヨーロッパ言語にも適用されたのだ。文法や構文を無視して外国語の本を読むのだから、結局のところ、怪しげな理解が残るだけだった。嘉納教授も英語を上手く話したり書いたりされたが、英語の実践面を教えたり学んだりすることは、先生の目的ではなかったし、当時の流行でもなかった。そこで、先生の留守中、英語の講演やそこでなされる同時通訳を聞きに出かけた。ほとんどが宣教師によるものだ

ったが、私の目的はあくまで口語英語に耳を慣らすことだった。ところが、これでは自分が話す機会は得られない。そこで、嘉納塾の正面にちょうど開設されたばかりだった、女子の米国系ミッションスクール〔番町の静修女学館〕に出かけて行った。そこなら担当の女性教師が、英会話の指導をしてくれるかも知れない。現在はある牧師の夫人となっており、当時は助手だった日本人少女が、最初の面談の時、通訳をしてくれた。この時、外国人が話す一文が全て理解出来たうれしさの余り、米国人の宣教師〔マーサ・アルドリッチ嬢〕がした質問の 1 つに、通訳を待たずに答えるという失態を演じてしまった。これは当然のことながら、この若い通訳を侮辱することになった。平身低頭、謝ってようやく通訳を続けてもらった。通訳がショックを受けたことは、他にもあった。それは米国人宣教師が裸足の若者に個人レッスンをする、それも女学校の中でするという宣教師の発想そのものだった。

不作法者の教育

このニューハンプシャー出身の婦人は、最初の日本人少年の生徒に多大の興味を感じてくれ、私の資金が尽きてきた時は交換授業という形にしてくれた。これは彼女の日本語を習う必要性からというより、私を文明人に仕立て上げたいと考えたからに違いなかった。それはなんとも困難でデリケートな仕事だったろう。家の母や姉妹以外で、女性というものに身近に接した初めての経験だった。また、異性との関係に関する英米人の習慣や考え方は、中国や日本のそれとは月と鼈で、その積もりは毛頭無いのに、先生を泣かせたり、怖がらせたりした。たとえば、紳士は婦人のためにドアを開いてあげなければいけない、と言われた時、女性のために男がそんなことをするのは、男の体面を傷つけることになると反論したり、また別の時には、西洋の握手の習慣が日本のお辞儀より暖かい友情を感じさせると思わないかと聞かれて、即座に、「我が国では、男性が女性の手を握ることは、みだらなこととして非難されるのです」と答えたこともあった。こうした辛いやりとりにもかかわらず、この英語の先生は、私ののっぴきならない心の葛藤に深い同情を寄せてくれ、その結果、私は彼女の中に人間を超越する要素の存在することを感じ始めたのだ。その要素があるからこそ、血縁が無くとも、人種が違っていても、あれほど親切に、あれほどの自己犠牲を払って、外国人や日本人に対処出来るのだと、そう結論するに至ったのである。しかし、彼女は私に対しては、人間としての関心に留め、霊的な問題は東京在住の別の婦人宣教師〔東京伝道女館のペリー嬢〕に委ねた。この婦人はニューヨーク出身のボランティアの人で、教室や個人教授の形で、英語で聖書を講釈してくれた。彼女の魂に平安あれ。8 年前、私はコネティカット州ハートフォードで彼女の葬儀に出席しなければならなかった。古い迷信の世界や新理論の世界から、優しく私を導いて脱皮させるのは大変な仕事だったと思うが、私も同様に、次の新しい信仰のため、これまで身につけてきた知的信念を犠牲にするという、必死の努力をしなければならなかったのだ。その婦人の兄、故ウイリアム・A・ペリー氏は、日露戦争後来日し、明治天皇から勲章をもらったが、これは彼の銀行家としての貢献によるものだ。

詭弁の効用

私の人生における新しい時代の幕開けが、3 番目の米国婦人〔ジュリア・ストアラー嬢〕によって、促進された。彼女は、コネティカット州ニューヘヴンのイェール大学で学んでいた岡部子爵〔岡部長職（ながもと）：和泉岸和田藩第 13 第藩主。外務次官、全権公使などを歴任〕や

他の著名な日本人の世話をした人だ。米国聖公会での補助的仕事を東京で数年間行い、これを最後にアメリカ合衆国に帰るところだった。お別れの土産にちょうどいいから、是非洗礼を受けるようにと私を促した。友人たちは嘉納先生がヨーロッパから戻るまで待つべきだと、懸命に忠告してくれた。留守に乗じて、偉大な恩人が強く嫌っている信仰を受け入れることなど、忘恩の極みだと。一方、米国人の友人たちは、待つということは悪魔に私を取り込んでしまう口実を与えるようなものだ、と口をそろえて言う。帝国議会で最初の会期がはじまり、我が国が立憲国家の仲間入りをしたちょうどその年に、------世間一般で言う詭弁に照らした時、この主張が正しいか否かはさておき、------私は日本聖公会の信徒となった**（補注）**。そして、このニューヘヴンから来た老婦人の日本における最後の聖餐式が、生まれ変わった私の最初の聖餐式となった。当時外務次官だった岡部子爵〔明治 11（1878）年受洗〕がわざわざ来て、私の洗礼を見守ってくれた。これは私のために、子爵の米国人の友人が依頼してくれたのだ。心配されていた危機は明治 24（1891）当初までは起こらなかった。しかし、嘉納先生が帰国すると、即刻嘉納塾を破門された。明治 38（1905）年、太平洋を横断中、ストアラー嬢が亡くなったとの知らせを受けた。数週間後、悲しみに堪えながら、私はニューヘヴンの墓所を訪れた。

（補注）洗礼の記録

日本聖公会『教籍簿第 20 号』（資料提供：桃山学院大学より鵜川馨氏に提供されたもの）

姓　名　　本田増次郎　　年齢　慶応 2 年 1 月 15 日生
本　籍　　岡山県美作国久米北条郡打穴頓大字上打穴里 33 番地　平民
施洗日　　1890 年 9 月 28 日　東京聖三一教会堂ニテ
教師名　　コール氏
堅信礼日　1890 年 10 月 5 日　東京博愛教会ニ於テ
監督名　　ウキリヤムス氏

猫の居ぬまに

この章の冒頭で、評価の確立された教育家にして官立の師範学校校長、近代的「柔道」の創設者である人物が、猫のような性癖を思わせる何物も持っていないことを明確にしておきたい。私の知る限り、嘉納師範がこの足の柔らかい動物に言及したのはただの一度だけで、投げられた猫が床で反射的にバランスをとる様子を見て、昔の柔術家がひらめきを得たという、例のよく知られた物語を講道館で話した時だけだ。しかし、残された寄宿生たち、特に師範海外視察中の講道館を任された 3 人は、「猫の留守は鼠の代」よろしく、傍若無人に振舞った。われわれは長年に亘る監禁生活から開放された囚人のような気持ちになっていた。自分たち自身が先生だというおごりが良心を麻痺させてしまい、任された運営を誤り、任された金銭を誤用してしまったのだ。しかし、私が新しい信念を抱くようになったことにしても、人間的立場から言うと、抑制出来ない自由の表現であり、また善意ではあるが厳格な拘束に対する抗議でもあった。勿論私は罰を受けるに値した。感謝の気持ちを込めて折檻された手にキスをしてやりたい気持ちだ。この自由人として踏み出した最初の一歩は確かに大きな犠牲を伴ったものであった。しかし、狭量な愛国主義から幅広い博愛主義へと、実現可能な現実生活から理想を追い求める生活へと、こうして最初の一歩を踏み出したのだ。

旅順の英雄

日記には、私の新しい人生の初日は、明治 23（1890）年 10 月 23 日と書かれているが、これはその日から個人的な出来事を記録するため日記を書こうと決心したからである。この日記の記述は 1 日数行でしかないが、名前と日にちだけの記録でも、現に私がこの自伝を書き進める上で、記憶を呼び覚ます手助けになる。この日記は現在も続けている。この同じ年、父は 61 歳になった。人生の 2 回目の出発を、両親を東京に呼んで祝うことにした。両親は 1 ヶ月以上滞在したが、この時、日光や善光寺にも行った。故郷へ戻る帰り道では、横須賀や箱根まで同道した。横須賀の海軍ドックや艦船を見学したが、「柔道」時代の生徒仲間が懇切丁寧な案内をしてくれた。それは旅順港口閉鎖作戦の英雄、あの勇敢な士官広瀬武夫〔海軍兵学校卒の軍人。日露戦争の旅順港口閉塞作戦で戦死。戦艦「朝日」水雷長〕だった。彼は嘉納先生の講道館に海軍兵学校から派遣されてきた士官の 1 人だった。八代海軍大将〔八代六郎：海軍軍人。日清、日露両戦争に参加。海軍大学校長、海相、枢密顧問官〕は当時兵学校校長〔有地之充〕の伝令使〔副官〕だったが、彼がお膳立てをしてこの派遣は実現したものであり、「柔道」が帝国海軍の正課の 1 つとなったのも、かかる試みが契機となったわけだ。この後暫くして、広瀬が不思議なお守り袋を身に着けるようになったが、中身は誰にも見せなかった。そのため、親しい友人たちの間では、恥ずかしがり屋の士官のことだから、さては恋人からもらった何か大事なものを隠し持っているにちがいないと、専らの噂だった。彼は人生の全てを軍務に捧げるため、結婚しないことをきっぱりと決意していたのだから、この噂はジョークにしても言い過ぎだった。そのお守りが、厳粛な雰囲気のもと、皆の前で開かれた時、なんのことはない、それは白いありふれた男性用の手袋だった。それは昭憲皇后〔明治天皇の皇后〕が横須賀に新造船の戦艦を見に来られた時のことで、皇后の乗られた短艇が戦艦に接舷する際、それが強風で上下に揺れたため、乗船時に同行士官の手助けを求められたのだった。こうして忠誠心溢れる広瀬士官の手袋は、何物にも代え難い神聖な物となった。

戯れのおんぶ

両親が旅行中に私と最後の晩を過ごしたのは箱根湯本〔箱根塔ノ沢の環翠楼。政治家や文人墨客が訪れた宿として有名〕であった。箱根といえば、両親とも劇や伝説でよく話に聞いていた場所だった。夕食後、親子ともどもいつしか昔を偲ぶ雰囲気となり、四方山話に混じって私の子供時代のことが話題になった。父はふさぎ込んだ調子ではなかったが、3 人が会えるのは今生ではこれが最後かも知れない、という風に話したので、私から申し出て、父をまるで赤ん坊のように背負ってやった。これは幼い頃父が私にしてくれたことに対する恩返しのような気持ちからだった。ベランダで数分そんなことをしてから、今度は父の背中に寄り添ってやったが、母も大いに慰めになったと思う。この 3 人の中で一番早く逝ったのは母だった。それは 10 年後のことだ。信心深い仏教徒で、慈善好きでもあった。放浪して来た物乞いを一晩家に泊めてやったこともある。突然具合が悪くなり亡くなったが、家族の墓地に葬られている。父は 85 歳まで長生きしたので、私の外国滞在が長かったにもかかわらず、帰国後も会って話す機会が持てた。クリスチャンとなった我が子の神を祈ることも度々あったが、この新しい教えを詳しく知っていたわけではない。やはり仏教の儀式に則って埋葬された。父は俳句を数句残している。精神文化の存在を固く信じており、晩年は、日本や世界の事象が余りにも早く、余りにも激しく変化するので、とてもまともには付いて行けないと嘆くのを耳にするにつけ、ひどく身につまされたものだ（補注）。

（補注）本田増次郎の父、本田杢蔵

本田の父杢蔵は、無口、厳格、本好き、物知りで、村でも一目置かれた存在であった。

いつも静かに黙って座っていたが、子供たちが騒ぎ過ぎると雷を落としたという。便所には、杢蔵の作った「急ぐともよく気を付けて用を足せ。心静かに真ん中に足せ」の標語が掲げられ、子どもたちにはちょっと怖い存在であった。
（長谷川満津江談）
　本田増次郎はこの父親から訓育を受けた。授業料の負担（当時の小学校教育は義務制ながら有料であった）や働き手を取られることから小学校の焼き討ち事件まであった時代に本田を小学校にやったのは杢蔵であったわけであり、本田が小学校時代から助教を勤めるなど頭角を顕わすことが出来たのも、この父の影響が大であったと思われる。

病気から得た教訓

　嘉納先生の留守中には、腸チフスに罹って重篤となる経験もした。もともと体が華奢に出来ており、病弱の身だったとはいえ、死が近いと本気で心配したのはこれが初めてだった。したがって、中国の格言「人生には病が必要」の真の意味が心底から理解出来た。健康であれば無神論者が生まれるということでもないだろうが、愛が人に和歌をしたためさせるのと同様に、日本の格言にもある通り〔「怖いときの仏頼み」〕、恐怖は多くの場合神を信じる者を確実に増加させる。この苦難の中にあって、友人たちが親切にし、憐憫の情を示してくれたこともあって、私の利己心は溶解し、感謝のうれし涙にむせぶ友愛の感情に変わっていった**（補注）**。最初に私を診てくれた若い医者は、ドイツの大学を出て帰ったばかりだったが、重大な診断ミスをした。薬を処方してくれたのは良いが、私の体温が致死点の温度まで下がってしまったのだ。これはおそらく、私が 10 代の時、にせ医者をした報いだったのだろう。しかし、その医師にはなんの悪感情も抱いてはいない。現在は小児科の権威であり、宮内省侍医として著名である〔この若い医師は加藤照麿（てるまろ）。明治 21（1888）年 11 月、4 年間のドイツ留学を終え帰国していた〕。当時帝国大学におられた佐々木教授〔佐々木政吉：駿河台にある杏雲堂医院第 2 代院長。ドイツへの留学経験があり、結核療法の権威として知られた〕が私を救ってくれたのだが、ここでは教授が先の若い医師がした治療を、やってはならない悪事例として臨床講義で採り上げておられたと言っておけば十分だろう。ところで、この 6 年後のこと、麻酔を使って外科医の執刀を受けたが、この時初めて医学が持つ普遍的、人道的性質をこの身で実感し、クロロホルムを発見した見知らぬ外国人〔英国人医師ジェームス・シンプソン卿〕を祝福したものだ。さらに後のことになるが、同様な手術を米国の病院で米国人医師と看護婦のもとで経験したが、この教訓は私の脳裏にさらに深く刻み込まれ、その後はこれまで以上に、日本人同胞はもとより、広く人類全体のために生きねばならないと、痛感せずにはいられなかった。

（補注）本田杢蔵宛本田増次郎書簡（解読：加原耕作氏）（資料提供：本田穣氏）
明治 22（1889）年 12 月 28 日、病後の静養先、興津水口屋一碧楼から出状
（前略）

実に小生は二十五之厄年と申し、大病致し、十一月四日発病已来（いらい）十一月一杯之事は全く夢中にて存じ不申（もうさず）、一二月之始頃より物事相分り、病臥する事丁度五十日目に病院より引取申候（もうしそうろう）、乍併（しかしながら）金をあびせる程使ひ介抱人には不足もなく、よしや死去候とも此上に思ひ残す

事は有之間敷候、別て朋友之介抱は此上もなき事にて、人々皆驚入候由に御座候、五人位宛ねずの番にて、昼夜付ききり汗を流し涙を流して介抱致し呉、十一月十一日之夜より十二日之朝にかけて、小子迚も助かる間敷との事にて、一同大心配致し候有様は、親兄弟迚も中々及び申間敷、もしや其夜小子死去致候節は、誰あって此朋友親切之次第を親兄弟に知らせうぞと思ひ居たりと、朋友にあらざる人々申合ひ候由、あとにては承り候
（後略）

教会と国家

故伊藤公爵〔伊藤博文：内閣制度の創設者、初代首相。枢密院議長として明治憲法制定に尽力、初代韓国統監。元老〕は天皇を政教双方の長とする形で、英国国教を日本に導入しようと考えたことがあったという。キリスト教徒のなかには、これを英国で教育を受けた政治家の偉大さだ、と見て取った人もいたが、その彼らでさえ、今となってみれば、もはや国教では無くなった仏教の廃墟の上に、新たな国教を制度化しなかったことで安堵しているに違いない。実際のところ、国家や富ということに関しては、それを洗練し清めるべき立場にある人々の方が、その極端な崇拝に走るものだ。いずれにせよ、西欧化の波は、眼前のあらゆるものを一掃してしまった。なかには、改革を急ぐ余り、日本民族改良のため、西洋人との結婚を奨励する者すら出てきた。彼らに言わせれば、日出づる国の子孫の肉体的、個人的容貌を改良するためだそうだ！長年に亘り懸案となっていた条約改正を促進するため、また友好国が持つ治外法権を取り除くため、さらに関税自主権を取り戻すためと称して、当時の外務省は東京の社交界に、「外交畑」や外国人社会の男女が「ヨーロッパ風」の踊りをするアイデアまで持ち込んだ。山縣〔山縣有朋：倒幕の立て役者。元老〕、伊藤〔伊藤博文〕、大山〔大山巌：西郷隆盛のいとこ。日清戦争時第２軍司令官、日露戦争時満州軍総司令官。元老〕、松方〔松方正義：大蔵卿、大蔵大臣を歴任、日本の財政制度を確立。元老〕、井上〔井上薫〕といった「元老」たちが華やかな衣装を身につけ、舞踏会に登場した様子を想像してみて欲しい。全ては西洋人に日本が対等な条約を結べる相手なのだと見せるだけのためなのだ。今それを見たら悲喜劇そのものだろう。しかし、30 年前は、自尊心を持った対等国として認められない理由が、我々誰一人として十分には理解出来なかった。

保守の反発

とうとう、それまで恐ろしいほど沈黙していた保守主義者たちが、我が国の国体と尊厳を護持しようとして、活発なキャンペーンを一斉に新聞紙上で展開し始めたが、時を同じくして、外国人を真似た男女の交際に関連してスキャンダルも囁かれ始めた。そこで続いて権力を握っている我が国の外交当局は、条約を従来の寛大な取扱いではなく条約文言通りの運用を図ることによって、現行の条約を維持することが不便かつ不公平であることを日本居住の外国人に理解させようとした〔我が国の外交当局は外国人の内地雑居を認めることと、条約改正による治外法権の撤廃とをワンセットで考えていた〕。しかし、かかる政

策も、やがて衝動的な若者からの批判、いや、無辜の外国人に対する攻撃にまで繋がってしまった。したがって、結局良い結果は何も得らないまま、この政策は中断を余儀なくされた。大隈侯前任の外務大臣〔井上馨〕は、1 国で多国を相手に外交戦を行うという誤った戦術をとって失敗したが、大隈侯は条約締結国の各代表と個別に折衝を重ね、より望ましい条件を確保出来るところまで持ち込んでいた。しかし、ここでも保守主義者たちは、外国の臣民や市民が関係した場合に、日本の法廷に外国人判事を任用するという問題が含む危険性を嗅ぎつけた〔新聞『日本』（陸羯南（くがかつなん）主催）が『タイムズ』の記事を転載したため発覚した〕。外務大臣の大隈伯爵が皇居に於いて新条約の裁可を受け、馬車で霞ヶ関の役所の門に入ったちょうどその時〔明治 22（1889）年 10 月 18 日夕刻〕、来島恒喜（くるしまつねき）という名の狂信者が爆裂弾を投げつけた。そして、政府の責任者を殺し、これで国が救えたと安堵してその場で自殺したのだ。しかし、大隈侯は命をなくす代わりに足を 1 本犠牲にすることで、日本外交の難問を、非常手段を用いて一気に処理したという栄誉を担うことになった〔条約改正を強行するか否かで閣内対立を生み、暗礁に乗り上げていた黒田内閣は、このテロで大隈が執務不能となったため瓦解、既に米・独・露と締結していた新条約を無期延期とすることで決着をみた〕。たまたま私は遠くでその激しい音を聞いた。数分後その暴挙の現場を通ると、暗殺者になるはずの死体がむしろで覆われ、憲兵隊に囲まれているのが見えた。15 年ほど後にこの足の不自由な政治家、大隈侯と親しくなるとは、その時は夢想だにしなかった。

サウスダコタのヘーア主教

前置きとしてはこんなもので、実際の仕事をどうするのか、何の見通しもなく、ただよう風来坊といったかたちだった。造園業の一家に下宿し、販売用の庭石や植木を褒めては時を過ごし、他の時間はペリー嬢と共に聖書を学んだ。彼女は、当時の精神状態や体調から、よく断食や祈りに慰めを求めるといった具合だった。周知のごとく新米改宗者の常として、私はある日、何とかして彼女を見習ってやろうと思い立った。家主夫人は大いに不思議がったが、朝食も昼食も抜いてみたのだ。ところが、午後になると空腹に責めさいなまれ、とても耐えられなくなった。どうしても夕食までは待てず、近所の魚の揚げ物屋へ行って、大量にむさぼり食ったのだ。するとすぐに強烈な腹痛が襲ってきた。それ以来私は二度と断食はしなかった。このような数週間に亘る無目的な生活の後、私はアメリカ合衆国のサウスダコタ州から来たヘーア主教（**資料 2**）の秘書兼通訳となった。主教はサウスダコタ州のインディアンへの布教にたずさわった後、米国聖公会の主教本部から、日本の布教環境を視察するよう任命されたのだ。強い個性を持ち行政能力にも長けた人物で、3 ヶ月に亘り、旅を共にし家事を切り盛りした。英米人にかかる人物のいることを知り、また実用英語の腕を磨くことも出来た。その人となりには深い感銘を受けたが、主教の方でも私の仕事を評価してくれたのは有り難かった〔このとき、ヘーア主教の主導で立教女学校（立教女学院）の教育改革がなされた。本田増次郎は会合などの場に通訳として立ち会った〕。翌年再度来日した時、私が都合で一緒に行動出来ないことを知り、東京への公式レターで「なんということだ！」と、絶句していただくことになった。ボストンのユース・コンパニオン〔100 年間続いた米国の子供向け雑誌〕に、贈り物とでも題した話を書いて投稿してみてはどうかと、最初に勧めてくれたのは主教だった。再度フィラデルフィアで会えたが、それは癌で亡くなられる数ヶ月前のことだった。

率直さが最高の外交

西洋の手本への無差別な追随に反対する国民的潮流が激しくなるにつれ、日本人クリスチャンの地位にも影響が出て来るようになった。これを受けて見直しの始まった年（明治24（1891）年）までには、日本人の目から見ても、教会やその組織が観察出来るほど十分に日本人クリスチャンの数も増え、彼らの社会的重要性も増していた。宣教師の仕事がその本来の性質から国際的視野を持ち国民の枠を超えたものであるという事実、また、日本在住の外国人宣教師たちが高尚な動機に基づいて行動しているという事実、それにもかかわらず、彼らとて人間としての欠点がないわけではなかった。たとえば、日本の子供たちが日本のことを何も理解していないにもかかわらず、米国や英国の歴史や地理を教える。また、礼拝のやり方にしても、日本に合わせて変更もせず、西洋のやり方をそのまま踏襲して日本の教会に適用する類の欠点だった。一方、保守的な国粋主義者たちは、日本の教会が外国の資金で支えられ、外国人宣教師によって支配されているとして教会を非難した。早い時期に遠くから持ち込まれた他の宗派の場合は、改宗した日本人信者と外国人宣教師の日本における役割分担がすでに明確にされていた。ヘーア主教は聖公会のために、日本でこういった役割を演ずるよう要請され派遣されたのだ。日本が最終的に国際舞台で対等国と見なされるようになる以前の時代にあって、日本が外国から財政面やその他の支援を受けるに際し、主教はその洞察力と実行力を発揮して、日本人に大幅な権限委譲をした。この主教の断固たる正義と叡智はさて置き、私は大変貴重なレッスンを受けることが出来た。それは、人種や国民が違えばその考えや要求も大きく異なるものだが、人間性は本質的に同じであるから、率直かつ粘り強く意見を交換すれば、取り除けない誤解や軋轢など存在しないという教訓だった。いわゆる東洋の沈黙というものは、政治的抑圧や階級差別が生み出したものであり、個人や国際的な関係において人々が自由かつ対等であれば起こりえないことなのだ。公開で討論をする場合は、米国からの訪問者は遠回しに言うような人たちではないから、それに合わせて大胆にずけずけと通訳しなければならなかった。日本人伝道師の中には、外国人宣教師のやり方や態度を批判する際には、ほとんど対外強硬論者といってもいいほどの人物もいたが、私は教会へは新参者であり、またどちら側に付きたいとも思わなかったので、率直に話すことが出来た。

東京を後に

明治24（1891）年秋、熊本の第5高等中学校で英語教師の1人となった。嘉納師範はヨーロッパから戻ると、学習院から文部省に招聘され、新たに5高校長に任命された。この職を私に推薦してくれたのは外でもない嘉納師範だった。その半年前、師弟関係は途絶えていた。儒教倫理に従えば、師弟の恩義は、君主と臣民の恩義に続き、親子の恩義より上に位置する。さらに私の場合、7年間に亘り精神的な薫陶と物質的援助とをこの恩人から受けていた。したがって、正式に破門されたことは恩師の逆鱗の激しさを物語ると受け止めねばならない。私が破門を覆すに足るようなことは一切していないにもかかわらず、恩師がなぜ和解されたのか、私が驚きあわてたのは当然だ。師の度量の広さがなさしめたということで、大方の説明はつくだろうが、一方でまた、私が生涯を宗教上の大義名分に捧げてしまうのを懸念されたことも一因ではないかと思う。しかし、このことについては一切言及されなかった。熊本に赴任する途上、門司の対岸の小倉で、洪水のために足止めを食い、駅舎近くの小さな宿屋に1泊する羽目になった。2人の商人が隣の部屋に投宿していた。

2 つの部屋の仕切りはご多分に漏れずちゃちな物で、夕食後、2 人の話し声が聞こえてきた。「耶蘇（キリスト教）と賭け事は似たようなものだ。一度癖になったら止められないからな！」九州の人々がキリスト教の隠された力を知っているのには、特別なわけがあった。彼らの先祖たちは、約 300 年前に日本人のイエズス教徒たちが政治的に迫害されるのを目の当たりにしたり、実際に経験したりしたのだ。九州には一番早くキリスト教が伝道され、多くの優れた先駆者たちを輩出したが、もっとも長い間プロテスタントに反対し続けたのも九州だった。

日本人のハンセン病患者

当時、教育担当当局の考え方は、今日とは雲泥の差で、進歩的とはおくびにも言えなかった。したがって、保守的な都会に設立された官立学校にキリスト教徒の教師がいるなど、全く異例のことだった。これは嘉納校長の個人的な影響力がなかったら、看過されることはなかっただろう。反宗教家がその積もりがまったくないのに、信者の後ろ盾をするという妙な状況を考えてみて欲しい。

私が熊本にいた 18 ヶ月の間に、2 つの特筆すべきことが私の身に起こった。1 つは、外国人宣教師から反キリスト教徒の勝手気ままな思想家だと槍玉に挙げられていた同僚のラフカディオ･ハーン〔小泉八雲：東京帝国大学、早稲田大学などで英文学を講じた。特に『怪談』は有名。日本文学の海外への紹介に貢献した〕と個人的に接したことであり、もう 1 つは大英帝国の人々と親しく知り合える機会を作れたことだった。熊本は英国国教会の布教拠点の 1 つだったが、私の通う日本の教会〔紺屋今町の聖十字教会〕や、日本各地から熊本を訪れる英国人のため尽力するイギリス人の国民性には感銘を覚えたものだ。社会から排斥された人々、つまりハンセン病患者に対する崇高な精神はもとより、リデル嬢〔ハンナ・リデル：英国聖公会宣教協会（CMS）所属の婦人宣教師。「救癩の母」といわれる〕の彼らに対する献身的な活動に私が心惹かれたのは、こうした経緯でリデル嬢と知り合ったことによる。リデル嬢によるハンセン病患者救済病院〔回春病院。命名は本田増次郎のアドバイスによる〕の実現可能性について、私が日本側の専門家と事前折衝するという栄誉も与えられた。現在、この病院は、友好関係にある日・英・米三国の同情を一身に集めている。私が熊本にいる間、日本滞在中のダラムの主教ビカステス〔エドワード・ビカステス：英国国教会福音宣布協会（SPG）の司祭。賛美歌集の編者として知られる〕が熊本に見えた。ちなみに、令息〔父と同姓同名〕は初代の英国人日本主教だ。私が明治 42（1909）年、ある会合で日本をテーマにした講演をするため、あの有名な城砦のあるダラムの地を訪れた時、2 人とも既にこの世の人ではなかった。

人嫌いのラフカディオ・ハーン

熊本でのラフカディオ･ハーンは、私にとって同僚教師と言うよりはむしろ師と言った方がよかった。ハーンは私の求めに応じて、教員室（**補注**）で英語の散文や詩の難解な箇所を説明してくれた。ちなみにハーンは、『日本事物誌』の著者である B. H. チェンバレン教授〔バジル・ホール・チェンバレン：イギリス人日本学者。言語学、国語学を日本に導入、一方古事記の英訳などで日本の海外紹介にも尽力〕が嘉納校長に推薦した人物だ。東京でのことだが、チェンバレン教授は、視力の弱い目を休めるため、私に朗読をさせることがあったが、その時には親切にも私の英語の発音を正してくれた。私が個人的に知るハーンは、彼が理想化した日本の描写から想像するほど、魅力的な華やいだ人物ではなかった。片方の盲目の目はひどく突き出ており、もう一方の目は強度の近視だった。そのため一行

一行、端から端まで、ページに額をこすりつけるように、辿らなければならなかった。このため背中が曲がり、変形していた。ハーンは日本人の友人たちから、長い竹の煙管には、タバコを冷やし、軽くする効能があると聞きつけ、家では6本のキセルを脇に置き、1本のキセルで吸うのは1、2服だけで、すぐに次のキセルを使い、それらが一巡するまでふかし続けた。また昼食時には、5高正門前の人足や旅人たちが昼食をとっていた茶屋に毎日足を運び、「酒」を飲んでいた。しかし、後年、ハーンは酒の百害を悟ったと言われている。人種上の生い立ちと過去の体験から、彼は一種の人間嫌いになっていた。日本人の中いると、白人種の中にいるよりは、気に障らないと感じていた。ハーンは病的なほど神経質で猜疑心が強かったので、妻女〔セツ〕が 1 人で家に居る間合いにたまたま訪問した日本人同僚と、取り返しのつかない諍いになることもあった。要するに、文学者は作品を介して敬服するに越したことはない。個人的なお付き合いをするとひどく失望させられるからだ。ハーンもこの一般原則の例外ではなかった。12年後、私とハーンは東京にある大隈侯の大学、早稲田大学で再び同僚となった。ある日の午後、別れの挨拶を交わしたが、その数時間後に、私は突然の死を知らされた〔ハーンが亡くなった日は彼の休講日であり、大学へは行かなかったはずである。別れの挨拶を交わしたのが大学であったとすれば、本田の記憶違い〕。小泉八雲（ハーンの日本名）の霊に捧げられた墓は、帝都東京郊外雑司ヶ谷墓地にある。

（補注）教員室の様子

丹沢栄一「本田増次郎と小泉八雲－「オリエンタル・レヴィユー」誌上での八雲への献辞－」工学院大学共通課程『研究論叢』第40－2号 2003.2

この熊本五高の教員室は広々としていて、個々の机が三方の壁沿いに並べられ、中央に大きなテーブルが据えられ、その上に煙草盆と辞典が数冊置かれていた。ハーンと私〔本田増次郎〕は10分の休憩時間や昼食後の空き時間に隣り合わせに座っていた。

鼻めがね

第 2 回帝国議会は前年の冬に解散したが〔明治 24（1891）年 12 月 25 日〕、開けて明治 26（1893）年〔正しくは明治 25（1892)〕の総選挙は、封建時代の騒擾の様相を呈した〔この時全国で、死者 25 名、負傷者 388 名が出た〕。私は九州の地でこれを目の当たりにした。白い鉢巻きを頭に巻き、後ろで結んだ壮士達が、封建時代の武士さながらに、大きな木刀を手にして敵対政党の投票員たちを殴り倒したのだ。村の中には橋を新たに作らなければならない例もあった。反対政党の党員たちから古い橋の使用を拒まれたためだった。熊本の五高に儒学の老教授がいて、生物学は皇室に不敬であると非難したのも頷ける。生物学は厚顔にも人間を動物の一変種呼ばわりしていると、その教授は言うのだった。この頃のことだったが、あの興味をそそる小冊子『余は如何にして基督教徒となりし乎』の著者、内村鑑三〔宗教家。札幌農学校卒。無教会主義の提唱者〕が宗教上の信念から天皇の御影〔正確には、勅語にある明治天皇の署名〕への奉拝を拒み、その地位〔第一高等中学校嘱託〕を辞したのであった。もし拒否しなければ、偶像崇拝者として、批評家から非難されただろう。だが、現実には彼が拒否したから、キリスト教は日本の国体に相容れないと排撃されたのである。恐らく当事者双方とも知らないだろうが、英国の国会議員は議場内の玉座の前を通る時はいつも、かぶっている帽子を脱がなければならない。私に言わせれば、鼻眼鏡をかける風習は、嘗て多くの保守的な人物の顰蹙をひどく買っていた。ある教育界の有識者たちは個人攻撃さえしたものだ。ところがこの眼鏡のほうが今では一般に広まり、田舎の犬どもも、「異人」、つまり外人臭いものを、なんでもかんでも吠えたてるようなこ

とはしなくなった！この一貫性のなさといったら、急進的な変革と頑迷な保守性を並存させて、人間心理のバランスを保っているだけではないかと思う。

大阪で 3 年

明治 26（1893）年の初め、熊本の 5 高に新しい校長〔中川元〕が赴任した。暫くすると、無論親切心からなのだが、校長が私に学校を辞める気がないか尋ねてきた。日本でも保守的な地方のこととて、私の信仰に反対する者が多く、学校の平穏無事のためにということだった。冬の学期を最後に辞任することを決め、当時文部省の参事官に戻っていた嘉納先生にこのことを報告した。先生は親切にも、信仰を伏せておくことを条件に、文部省に来ないかと勧めてくれた。おそらく、非宗教を標榜する国家教育の原理原則からすれば、官吏は公人として宗教問題から一線を画しておくことが要求されたのだろう。いずれにせよ、私立の学校の方が好ましいと判断したので、大阪にある男子の英語学校〔高等英学校（大阪）：現在の桃山学院大学〕の副校長を引き受けることにした。校長は現在中国福建省の主教である、英国聖公会宣教協会の C. E. プライス司祭だった。ご夫妻とも、私同様学校の敷地内に住んでおり、我々は常に生活を共にした。大阪やその近郊に住む他の英国人たちと頻繁に接したばかりでなく、プライス家の人たちとたえず付き合ったことが、私が国際的感心を抱く上で少なからず役に立った。当時のミッションスクールは実に複雑な問題を抱えていた。官立の学校に倣おうとすると、その「存在理由」、つまりキリスト教や他の特徴が失われてしまう。また、当局の要求通りの組織にしないと、卒業生の高等教育機関への入学資格も得られない。正当な宣教師の要求や希望でさえ、日本の教員や生徒が持つ自然な望みや好みと調整を図ることは、容易なことではなかった。ミッションスクールでのキリスト教的要素と非キリスト教的要素との関係は、学校が改宗した若者の教育のみならず、布教そのものを目指していたが故に、常に見直しや検討を加え、微妙な調整を図ることが必要だった。

国家の威信と国際的慈善

しかし、一番興味が湧いたことと言えば、西洋人との交わりにおいて、日本人の少年たちが示す独特の心理状態だった。生徒たちは（資料 3）英国人の先生から英語の手ほどきを受けた方がいいと考えて学校にやって来るのだが、心の中では外国の資金で運営されている場所で学ぶのは不名誉だと考えている者もあった。そう考える者は、宣教師やその個人的知り合いから援助を受けている生徒を、彼らがまるで知的進歩のために大和魂を売り渡している、と言わんばかりに軽蔑して止まなかった。また一方で、宗教的慈善や宗教が持つ国際的な、すなわち国境を超える性質を十分に理解出来ない生徒の場合は、授業料や食費を支払っていないということを内心では恥じていたから、その保護者に対する感謝の気持ちの裏返しで、自尊心を誇示する傾向があった。またこれは極めて少数派だったが、精神的強さを持ち、宣教師と堂々と親密に交際出来る生徒の場合は、仲間内でほとんど孤立していた。恐らくはこの病的なまでの国民的自意識があったからこそ、日本は現在の国際親交国の位置にまで登ることが出来たのだろう。しかし、奇妙なことに、ニューヨークのカーネギー氏〔アンドリュー・カーネギー：職工から身を起こし合衆国最大のカーネギー鉄鋼会社を築きあげた。引退後、莫大な私財を教育研究機関・平和基金に投じ、カーネギー工科大・カーネギー財団等を設立した〕のような外国の篤志家に、国際的でも人道的で

もないことのために寄付を頼む、卑しい輩も未だに存在する。また、弱小で虐げられた国民の場合は、米国人の寛大さをしばしば乱用する。しかし、日本の場合、他人の私財を当てにするのは封建時代の名残のように思う。当時は、「大名」や臣下といった非生産的で稼ぎもない階級が、全く返す気もないのに富裕な商人から平気で借金をしていたものだ。

希望の宗教

私の頃は、高等英学校は十分な設備も有資格の教師もおらず、現在のように政府の監督下にもなく、官立教育機関のような恩典には預らなかった。出来る限り、我が国の中等学校としてのあるべき水準に近づけることが、私に課せられた使命だった。一方、私自身の進歩はといえば、英米人のキリスト教徒が持つ性質を実地に学ぶことで、一気に速まった。私は聖書を人間の営みの中で教えられたが、それが儒教の政治倫理や仏教の諦観と如何なる点で異なるかも学んだ。たとえば、プライス家では日本人の料理人を雇っていたが、彼はギャンブルで「銭」をすっては、主人一家を放置して逃げ出したものだ。そして結局は戻って来て、その度に、今度はやり直しますと、まじめくさって約束するのだ。こうした積み重ねの行き着く果て、もう東洋人としての忍耐をもってしても我慢ならなかったので、私たちはこの男の英国人雇い主のプライス主教に、この男の改心の言葉を信じるのはもう止めにしてはどうかと話してみたことがある。ところがその答えは、「また騙されるかも知れない。しかし、彼に心から悔い改めるチャンスがあるとすれば、それは彼が拠り所にしているこの家でしかないよ。私が騙されることなど、1 人の人間の魂を救うことと較べたら何でもないさ」と言うのだった。また、日本に最初にやって来た米国聖公会宣教師である、バージニア州出身のご高齢な故ウィリアムズ主教〔チャニング・ムーア・ウィリアムズ：米国聖公会宣教師。英国聖公会のエドワード・ビカステスと協力し日本聖公会を組織、初代主教となる。立教学院、立教女学院などを設立〕も、聖人としての高い資質を持っておられ、深い感銘を受けた人物だ。これ以上ないほど質素な生活振りをされ、使用人も 1 人、彼の給金は物価が徐々に上がっているにもかかわらず何年も据え置かれたままだった。ついにこの使用人は、もう少し気前の良い主人を捜そうと、暇乞いを申し出た。主教は深い溜息をつき、紙幣の束をとってくると、「これは将来君が所帯を持てるよう、数百「円」だが貯めておいたものなんだ。------残念だが、どうしても辞めるんだね」と言いながら、それを渡した。その使用人は涙を浮かべながら許しを請い、引き続き留まることを懇願したものだ。このような「陰徳」、つまり表には出ない慈善や親切な行いは、東洋の道徳律でも褒め称えられるものだ。しかし、キリスト教倫理の場合、人間の持つ「生来の」美徳やその人物の将来の進歩への可能性に、より力点を置いているように思う。

戦う商人

日本の商業の中心地大阪に住んでいる間に、日清戦争が勃発し、そして終わった。友人の 1 人〔尼野（中嶋）源次郎〕に大阪で有名な劇場〔道頓堀にあった浪花五座の 1 つである弁天座〕の経営をやっている者がおり、ある日自分の劇場の案内人たちに、今進行中の戦争をどう思うか尋ねたという。ところが彼らは質問に答える前に、日本が負けたら自分らはどうなるのかと逆に質問し、友人が弁髪の中国人皇帝に仕えねばならなくなるのだと、答えると、事も無げに「そんなん、まったく気にせえへん。芝居で客楽しませて稼げるのなら十分や」と言ってのけたというのだ。この友人はそれを非難し、彼らに愛国心がないのはまるで中国人のようだと思ったと話した。一方私はキリスト教徒の中にいるユダヤ人

が、それとよく似た対照的関係にあると考えた。しかし、数ヶ月後のこと、大阪の人々は政府の売り出した戦争国債を、他のどの都市よりも多く購入したことが明らかになった。今では、大阪人たちは、その商才と成功がたとえユダヤ人的であれ中国人的であれ、倹約家で積極性を持ち勤勉なことで賞賛の的となっている。ところが、戦功にかけては、明治27（1894）年から明治 28（1895）年にかけての軍事作戦〔日清戦争〕に於いて、大阪の師団〔第 4 師団〕の戦果は芳しくなかったので、爾後、小川という名の勇猛果敢な将軍〔小川又次。「今謙信」と渾名された名将〕の指揮下に置かれることになった。そして、この大阪の師団は明治 37（1904）年から明治 38（1905）年の軍事作戦〔日露戦争〕に於いて、東北の師団と九州の師団の中間に位置するほどの戦功を立てたのだ。このことは商人が「侍」や農民と同じように、立派な軍人になることを証明している。中国人やユダヤ人は「いざ、戦争」となっても蜂起するはずがない、と言い立てるのも当を得ていないだろう。

「転がる苔」の 2 つの意味

転がる石には苔が生えない！〔しばしば商売替えなどしては金持ちになれない！〕嘗てこの諺をある日本人牧師が、誤って別の意味に用いたことがある。その牧師が言うには、だから、病気という錆が付かないよう、常に運動を心がけるべきなのだと。このような奇妙な過ちは、外国語の単語や表現を、同じ意味の別の言語に単純に置き換えた時にしばしば起こる。苔むした石は、それが自然に存在する場合でも庭に置かれた場合でも、美の対象物である。というのは、日本人の隠喩の感性からすれば、「苔」という言葉はいわば豊かな経験と確立した名声を意味するからだ。しかし、苔は同時に錆のような物であり、停滞、無為、廃物の意味をも持っている。

新しく政府が組閣され、新しい事業会社が設立され、官僚が新しいポストに任命された時には、信任に値するよう、良い評判を勝ち取るよう、国民の支持を確保するよう、最善の努力がなされるものだ。しかし、数年が経ち、その地位が保証されるに従い熱意が冷めてゆく。これは恐らく日本人の気質固有の弱点、つまり、厳格な義務感よりも感情的誘因を優先することから来る当然の帰結なのだろう。あるいは、これは人類一般に共通の性質なのかも知れない。というのは、政党による政府交代の制度そのものが、マンネリ化を避ける、1 つの対症療法になっているからだ。いずれにせよ、新生日本の第 1 世代は、厳格な階級社会から解放されたばかりで、学ばねばならぬことも、なさねばならぬことも、盛りだくさんだったので、時代遅れにならないようにするには、同じ場所に長く留まってはいられなかった。そして第 2 世代はというと、がむしゃらになって上を目指すのは、ますます困難になってきている。

東京に戻る

20 年前、一般的に日本の教会もそうであったが、特にミッション系の学校は、極端に効率の悪い状況に置かれていた。何世紀にも亘って仏教を厚遇してきた国家の支援はなく、代わりに外国の支援で牧師や教師が養われていた。彼らはもっと有能な希望者に地位を譲ってしかるべきだった。もっとも教師の方は見つけるのが困難だったが、恐らく私自信が「掘り出し物」だったのだろう。英国の友人たちは学校のスタッフやその規則に重大な変更を加えることを認めてくれた。3 年に亘って彼らと付き合ったが、思い通りに出来る資金の範囲内で、学校のために出来ることは全てやらせてもらえた。たとえ高等英学校に居続けたとしても、それ以上の改善を行うことは出来なかったろう。また一方で、教育者としての私の地位は、高等教育を施すキリスト教系の学校が大阪にはなかったので、それ以上

の進展は望めそうにもなかった。さらにまた、ミッションスクールはどこでも、近代的な教育学を専門としない人々によって時代錯誤の考えに基づき運営されていたから、本当の意味で教育の経験が積める場所でもなかった。福音の仕事から見れば副次的な問題に、もっと資金を出すよう日本人の立場から要求するのは、無理な話だったし、そもそも学校運営問題は、全面的に専門家の手に委ねるべきものであった。英国人の校長は、私にとって仕事上の長というよりはむしろ兄貴分のような存在で、私も大いに慕っていたが、それ以上留まりたくはなかった。校長は私の辞職を本当に残念がってくれた。東京での仕事に目処が立っていたわけではなかったが、4 年半の間地方にいたので、ただ単純に日本の知性の中心地東京に戻りたくて居てもたってもいられなかった。故辻男爵〔辻新次：森有礼（初代文部大臣）と共に日本教育制度の草創期に指導的役割を演じた。初代文部次官〕が当時会長だった帝国教育会〔明治 16（1883）年大日本教育会として発足〕で、明治 29（1896）年 4 月、初めて編集のキャリアに手を染めた〔本田増次郎が編集した雑誌は、帝国教育会機関誌『大日本教育雑誌』（11 月からは改題し『教育広報となる。8 月より編集長〕。

僧侶に講演

この後しばらくして、浄土宗所属の仏教徒たちの学校〔浄土宗高等学院。後の大正大学〕で、キリスト教会と西洋文明の歴史について講義をするよう要請を受けた。これは外国人の友人を驚かせた。また悪魔に魅入られたのか！うんざりだというわけである。私はその宗派とは具体的な関係は何もなく、ただ、およそ 800 年前、その開祖〔法然（源空）〕が我が故郷の近く〔久米南条郡〕で生まれたというだけだった。家族は皆真言宗の信者で、私も洗礼を受けるまでは多くの信者と同じく名ばかりとはいえ、この真言宗に属していた。打ち明けてしまえば、実はこの仕事を引き受けたのは、単に一石二鳥を狙ったからだった。稼ぎにもなるし、与えられたテーマを研究することも出来る。姉崎教授〔姉崎正治（あねざきまさはる）：宗教学者、東京帝国大学教授。我が国宗教学の泰斗〕と面識を持つようになったのはここでのことだった。彼はまだ帝国大学の学生だったが、仏教哲学を若い僧侶たちに教えていた。今やインド文化とキリスト教との関係については、専門家として彼の右に出る者はいない。最近ではハーバード大学で 2 年間講座を持たれた〔期間は大正 2（1913）年 9 月から大正 4（1915）年 7 月。講座名「日本の文学と生活」〕。そして今度は、高等師範学校長の嘉納先生から、教育訓練のため高師に設けられた付属中学校で英語を教えるよう招請を受けた。信仰問題については特に条件は付かなかった。数ヶ月の試用を経て、本校の教授陣に加わるよう要請があった。ここでもまた、クリスチャンの友人たちは、無論私のことを心配し、あの保守的な嘉納校長が信仰のことを大目に見るなど、どうせ上辺だけのことだと、警鐘を鳴らした。当時、高等師範学校は地方の師範学校を卒業した先生たちを訓練する唯一の高等教育機関だった。そこで若い先生たちが子供たちへの義務教育の準備をするわけだから、学校教育から宗教的要素を排除するという原則は堅く守られていた。しかし、高等師範学校の内部でさえ、時代は変化していた。その変化の様相と、よって来る原因は、後に明らかになる。

中国留学生の到着

明治 29（1896）年、中国政府が任命した中国人留学生の第 1 陣が日本に到着した。これは前年終了した戦争〔日清戦争〕で覚醒した清国がすばやく動いた例の 1 つだった。同時にヨーロッパやアメリカに送られた若者もいたが、わずか少し前に自分たちの国に恥をか

かせた国に行って勉強するという勇猛果敢な人物を見つけだすことは生やさしいことではなかった。中国出身の留学生 12 人〔正確には当初 13 人〕は、ほとんどが中央か地方の官吏の子息たちで、東京の清国公使館に到着した。外務省と文部省を通じて、嘉納校長が教育訓練の総指揮をとることとなり、嘉納先生の要請で私が直接的な世話をする責務を負うことになった。3 年間、私は彼らと同じ屋根の下に住み、同じ釜の飯を食べ、この物珍しい状況下で、失敗も成功も共に味わった。最初のうち、彼等は日本語が一言も理解できず、私の方は中国語会話がまったく駄目だったから、今ではもはや時代遅れだが当時は流行っていた外国語の教授法、あのグアン・メソッド〔フランス人のグアン（ Francois Gouin ）が幼児の言語を覚える過程に着目し考案した外国語教授法。一定の意味を持った文章を繰り返し記憶に定着させる手法を重視する〕を「筆談」という「文字による会話」と並行して用いたのである。「筆談」は、儒教の古典に精通した中国人と日本人との間で長きに亘り実践されてきた方法だった。中国の漢字が日本に伝えられたのは、千年以上前のことであるが、日本には文字がなかったので、日本の学者たちは先ず漢字を表音のために使った。その後、漢字の一部を用いて、音声記号として字音〔ひらがな〕が工夫されたのだ。しかし、中国では次第にオリジナルの発音や構文が変化してしまった。したがって、現在の中国語と昔の中国語の違いは、ちょうど古代ギリシャ語と現代ギリシャ語の違いのようなものだ。日本ではさらに時代が進むと、標準的な発音が崩れ、形骸化し、中国語の書物は話し言葉ではなく、書き言葉で日本語に訳されるようになった。しかもこの書き言葉は日本語の話し言葉とは似ても似つかぬ独特の書き言葉となった。こうして両国の儒教を学ぶ学生たちは、話し言葉に関する限り、お互い全く通じなかったが、昔ながらの筆談で意志の疎通を図ることが出来たのだ。

東洋の英国人とは一体誰？

外国の友人たちは、褒めてくれる時はいつでも、中国人や日本人のことを、東洋の英国人と呼んでくれる。事実、中国人と日本人の国民的特性は非常に多様なものであるから、そのような言葉の綾的な比較をすれば､関係する 3 者のいずれをも害することにはならず、すべてが丸く収まるだろう。しかし、我々が持つ性質の違いは、時の経過と共に互いに顕著となるものだ。20 年前の中国人の性質を、現在の世代に見いだすことはもはや出来ないし、同様に 19 世紀の英国人や日本人の性質を、20 世紀に於いて各々の同国人に見いだすことも出来ない相談である。地理的な観点から見ても、日英同盟両国は島国であり、近隣の大陸と似たような政治的関係を持っている。しかし、日本の場合は長期に亘って世界から孤立していたので、植民地を拡張する機会を失い、またそのことによって、英国のように海軍国として発展することも阻害されたのだ。我が国の陸軍は、英国の事例とは正反対で、海軍よりも強大になっているが、現在の戦争により、我々同盟国が互いに強大な軍事国となってきたことは間違いない。偉大な過去を重視する保守主義、世界最高度の文明を発達させてきたというプライド、他国の目を気にせず堂々と振る舞うその態度、民主主義、個人主義、並びに地方自治、それらを見れば、確かに日本より中国の方が英国と似ている。しかし、既に変化を遂げた諸条件や、現在の環境変化によって、両国のこれらの性質も急速に修正されつつある。中国では豚肉が好まれるが、これはちょうど英国で牛肉が、日本で魚肉が好まれるのと同じである。これらの日常食品が違うということから、3 国の国民性は、大なり小なり違った状態を永久に保つかも知れない。一方お茶が及ぼす影響については、3 者にとって恐らく同じ状態が続くだろう。いずれにせよ、中国人の生徒を身近に世話をし、個人的に確信したことは、如何にその一時的、表面的様相が異なっていても、人間の本質は 1 つだということだ。

近代科学の紹介

何千年もの間、中国の教育は専ら古典文学を対象としてきた。近代科学の導入は日本よりもさらに遅れ、ようやく近代科学を垣間見たばかりなのだ。中国に風船で攻撃が仕掛けられたらどうするのかと、生徒に尋ねたところ、「中華帝国は常に弓術に秀でています。ですから弓と矢で敵を引きずり降ろすことなど、簡単に違いありません！」と、生徒の中で一番優秀な者が答えたものだ。また、中国と日本との間で 2 度目の戦争〔北清事変（義和団事件)〕が始まるとすぐ、韓国のどこかの戦場〔韓国は距離が中国よりは日本に近い〕から東京にいる息子の所に弾丸や砲弾が飛んできてはいけないからと、すぐ戻ってくるように、愛しい母親から知らせが届いた者もあった〔北清事変が始まった時には、既に本田は清国人留学生の世話を三矢重松に引き継いでいた。したがって、この逸話は間接的に耳にしたものと思われる〕。礼法、音楽、弓術、馬術、書道、そして数学が中国の紳士たちが身につけるべき 6 科目であったが、その内の数学については、総じてその能力が目立って劣っていた。しかし、言語の能力は皆共通していて、3 ヶ月で日常生活に困らない程度の日本語をマスターしてしまった。日本で使用されている象形文字の大部分は、中国語の意味と違うケースもあり、発音は多くの場合全く違っていたが、もともと中国人には馴染みのあるものだった。留学生たちは教科書の機械的暗記や、本や教師に背を向けて 1 人で反復練習することには慣れていた。しかし、彼らが外国語をスピーディーにマスター出来た最大の理由は、人前での間違いを気にしないことだと思われる。ところが、英語を学ぶ日本人生徒の場合は、米国や英国で、日本人は英語が上手だとお世辞は言われるが、中国人の場合とは正反対の事例になっている。実態は、英語をマスターした人たちだけが、英語を話す国に行き、あえて外国人と交わっているだけのことなのだ。日本の若者の大部分は語学の能力を、知的才能の中で最も低位のものとして、むしろ軽蔑している。英米人はヨーロッパ大陸の人よりは話し下手だと考えられているが、精神面の発達についてはさほど違いはないと思う。英語はヨーロッパの言語よりはるかに単純であるから、英語を話す人々の場合、言語をマスターする方面で頭脳的訓練を十分積んでいることにはならないのであり、また地理的にも政治的にも、外国語会話を学ぶ必要はそれほどない。子供や、文明がさほど進んでいない国民の場合は、他の能力が発達しないうちに、外国語を上手に習得出来るかもしれない。

連鎖的な搾取の制度

中国人はある意味では民主的であり、地方政治では自治もあり、産業や商業では個人主義であったが、自分たちが耐えられる限り、公権力には暗黙裏に従った。生徒たちに、起床時刻、就寝時刻、食事の時間といった自分たちの規則を作るよう指示すると、全員一致で、するべきこと、してはならないことを指示して欲しいと言う。彼ら共通の意志をまとめ、遂行することは苦手なようだった。しかし、自分より身分が下の者たちには強く自己主張をするのだ。孔子の教えに従えば、目下の者は目上の者に従うという道義的責任があるので、保護や目をかけてやる見返りに、上の者が下の者を順繰りに搾取するというやり方が発達したようだ。20 年前、日本にいた中国人留学生は、満州政府から 1 ヶ月当たり 50 円の支給を受けることが出来た。もっとも海外への送金であったから、何パーセントもの諸経費が差し引かれていただろう。そしてその半分は公使館の人たちが斡旋料として徴収した。したがって実際に生徒のポケットに入ったのは 25 円に過ぎなかった。とにかく、この話は度々生徒から聞かされたものだ。そして今度は、学生たちは自分たちが取り引きす

る相手に値引きさせた。洗濯屋でさえ数銭の仕事のために5厘（2分の1銭）の手数料を払わされたのだ！最初は異常に感じられるかも知れない。しかし考えてみれば、日本の封建時代に、非生産的な武士階級が返す意志も能力もないのに、商人から借金をしたことと大した違いはない。唯一違うところは、昔の日本の徴税制度が中国のものより幾分整然としていた程度のことである。数年前、中国で新しい体制が出来上がったので、搾取も賄賂も官吏の世界から大方消滅した〔明治45（1912）年1月1日、辛亥革命により中華民国の成立が宣言され、同年 2 月、清朝最後の皇帝溥儀が退位し、名実共に中国は新しい時代を迎えた〕。

いじめも思いやり

国家の威信や国際間に於ける考え方の相違の問題については、これくらいにしておこう。さて、日清戦争で日本が中国を破った直後のことであるが、東京の通りで中国人学生が男に長い髪をひっぱられたり、ここでは繰り返すのも憚られるような悪態をつかれている光景を目の当たりにし、義憤と落胆を禁じ得なかった。現在でさえ、日本は隣国の弱い中国をいじめていると言う向きもある。しかし、不十分な海軍しか持っていなかった当時の日本を露骨に威圧するため、中国の提督〔李鴻章：中国、清末期の政治家。洋務運動を推進し近代化を図った〕が長崎海域に艦隊を差し向けて来たのは、あの不幸な戦争のたかだか7、8 年前のことなのだ〔明治 19（1886）年 8 月、清国は洋務運動の成果を誇示すべく鎮遠、定遠などの軍艦を長崎に派遣した。この時上陸した水兵と日本の巡査が小競り合いを起こし、死傷者が出た〕。李鴻章がドイツの猫ビスマルク〔ドイツの政治家。「飴と鞭」の政策を遂行し、ドイツの統一、軍事力強化に貢献〕の眼前のネズミだったようなもので、いわば東洋の眠れる獅子が目を覚まし、物まね猿------当時中国は日本のことをそう呼んでいた------を脅そうと吼えたてたようなものだ。日本も、ペリー提督〔アメリカの軍人。フィルモア大統領により日本を開国させるべく派遣され、日本に開国を迫る。翌年再来日し日米親和条約を締結〕と「黒船」が鎖国の扉をこじ開けてくれなければ、恐らく自力で元気を盛り返すことは出来なかっただろう。中国は日本よりはるか以前に、大英帝国の圧倒的な武力によって国際親交国の仲間入りを果たしていたが、真の意味での覚醒は新しい武器を持った「小人」の日本人によって恥をかかされるまで訪れなかった。しかし、いじめと見えるものも、自然な改革の 1 つの過程にすぎず、そのため、いじめられた側は、いじめた側よりも精神的には得るものが多く、尽きるところ永続性のある相互依存と相互扶助のみが互いの利益になると、20 年間に亘る外交経験を通して、両国とも漸く確信するに至ったようだ。意図的であるか否かはともかく、過去 300 年間に亘り西洋世界は、国家の効率性や個人の安楽の程度に関して、東洋が同等の水準に達するよう常に圧力を加えてきたのだ。

続いてキリスト教の宿泊所を運営

日本語で中等教育を終了した中国人の学生たちは、故国に帰り通訳となるか、東京の学校に通って、法律、政治、農業などを専門に勉強した。やがて中央政府や地方政府で重要な地位を占める者もでたが、彼らを日本に送った満州政府が崩壊してからは、情報も途絶えてしまった。しかし、早まって積極的に革命を起こそうとしたため、逮捕され処刑された者もいれば、上海の有名な俳優になった者もいる！

中国人の学生たちと同じ家に住み、同時に高等師範学校で教えている時期のことだったが、クリスチャンの教師や学生が多数集まり、私の部屋で毎月祈りの会を開くようになっ

た。私が米国に出立してからのことになるが、その集会が財団法人化〔財団法人設立認可日は明治 36（1903）年 9 月 29 日〕されたキリスト教青年会〔Y. M. C. A.= Young Men’s Christian Association〕の高等師範学校に於ける組織の中核となった。この頃は仏教徒も学校や大学で同様な組織を作ったが、この最も保守的な学校の中に出来たキリスト教青年会は、まさに時代の変化を示唆する非常に重大な兆候だった。かかる新しい信仰が我が国の国民精神に介入するとの懸念を抱く輩が、未だ教育界では主流だったが、キリスト教は他人の個人的問題には干渉しないという節度は備えていた。しかしながら仲間の多くの者は、仮に嘉納校長が私の個人的友人でなかったとしたら、我々のこの祈りの集会も、その正当性が頭の固い愛国者によって問題にされたかも知れないと考えていた。

中国人学生の世話から解放されて、別の家を借りられることになったので、それを東京の聖パウロ教会〔明治 9（1876）年 6 月築地で創立〕関係の若者向けの宿泊所に変える光栄に浴した。 こちらは英国聖公会宣教協会所属の気高く熱心な英国紳士にして伝道師であるW.P.バンカム氏が通いで、彼らに聖書を講じてくれた。同時に高等師範学校の礼拝の会もこの新居で続けた。宿泊所は「弗蝋館（ふろうかん）」、つまり「蝋のない家」と名付けたが、これは「sincere〔誠実な〕」という言葉の語源からとったものだ〔sinは不＝弗、cereは蝋の意とされる〕。ところが、善意や努力を傾けたにもかかわらず、その住人の１人が、犯罪史上例を見ないほどの身の毛もよだつ事件に手を染めるのを防ぐことは出来なかった。

凶悪犯

その生徒は私が大阪を離れた時、まだ高等英学校の低学年だった。3 年後東京に出て来て、１年ほど弗蝋館に住んだ。一緒に生活しながら、官立の東京外国語学校ロシア語科で学んでいた。しかし、絶えず神経衰弱の症状を訴え、その結果授業もさぼるようになった。健康を取り戻すため「柔道」を、嘉納師範の講道館で稽古したいと希望したので、私が推薦してやって入門が許可された。自分が喜ばせたいと思う少数の人物に対しては非常に親切で思いやりもあったが、本質的には過度に利己的かつ軟弱であり、宿泊所の少年たちと円滑な付き合いをすることは出来なかった。そこで同じ市内の、以前からの知り合いであり、また、わざわざ遠方まで出かけてオオサンショウウオ収集の手伝いまでしていた、ある著名な植物学者の家に下宿することになった。ところが、近所のある少女に恋をしてしまったのだ。力の限りに求愛し、求婚し、最後には彼女の保護者であり著名な漢詩人である彼女の兄の反対を押し切って同棲した。ところで、この詩人はハンセン病であることでも知られていた。そこでこの若者は、愛する妻の体が兄の恐ろしい病気に蝕まれないよう、さらに、義兄の病も治してしまいたいとの思いを抱くようになった。ある日、彼は計画殺人の罪で逮捕された。当初、その犯行の目的は、正式な結婚への道を邪魔する唯一の障害である義兄を葬り去ることにあったと考えられた。ところが、証拠調べや尋問の過程で、色々ある非人間的残虐行為の中でも、ある少年を「柔道の技で」絞め殺し、その肉を切り刻んだ上、夜中に海上のボートで茹でて、その煮汁を実際のハンセン病患者や潜伏期の患者にふるまったことが判明したのだ。それが病気を治す方法だと信じたからだ。彼は長期に亘って監獄に収監されていた。大阪で嘗て個人指導したことがあったプライス主教が会いに行き、全てを告白し、受洗はしないにしても、神と良心に導かれて安らかに死を受け入れるよう説得した。しかし、他の極悪非道の罪をいくつか白状したものの、最後まで改悛しないままに終始した。

罪は宿命に非ず

この血も凍るような事件も、偏執狂が突然猛威を振るった事例でしかない！あるいはその若者は遺伝的にその病を引き継いだのだろうか？またあるいは出生後の教育や環境が責められるべきなのか？犯罪心理の問題と言えば、もう 1 つ気にかかっていることがある。私が嘉納師範の寄宿舎にいた時、監督すべき若者たちの中に、愛くるしい 10 歳の少年がいた。ところがどう考えても実際的には不必要にもかかわらず盗みをするのだ。父親は地方の有能な知事で、後に仕事上の功績で男爵になった人だった。その子は自宅にいるときは、欲しい物は何でも与えられていたが、ほとんど毎日、両親や兄弟から物を盗んでいた。赤の他人に混じって環境を変えても埒があかなかった。同室の男子生徒の文房具が無くなったので、この不良少年を私の部屋に引き取った。その結果は、数分でも部屋に 1 人で残すと、紙や筆のような物が必ずなくなっており、それらが彼の机の引き出しにしまわれているという有様だった。とうとう、あの高潔な父親が悲嘆と屈辱の涙を流しながら息子を引き取った。当の息子は天真爛漫な表情で「どうしても盗んでしまうんだ！」と言い訳を繰り返していた。もしこれが武士の時代だったら、とうの昔に、このいとしい犯人を切り捨てていただろうと、父親は私に話した。現在では、非行の子供や精神薄弱の子供に対しては隔離した施設で特別の教育をするが、犯罪や悲運を宿命とは見ず、更正出来るとする考え方は、日本では比較的新しい。そして注目されるのはこういった施設の大部分が、キリスト教徒の手になる実例に触発された日本人によって運営されていることだ。

社会改良家を目指す

英語を学んだ人は、当然のことながら、米国や英国の考え方や、やり方を、他の国のそれと較べて、贔屓目に見てしまう傾向がある。中等並びに高等教育の場で英語を教えることによって、日本の政治は、その他の大義名分も相俟って、より民主的概念を持つように急速に変化して行った。この状況を見て、思想界の指導者たちは、国家的な危険性を感じとり、ドイツの国家理論を日本流に変えて普及させたのである。その源となったのは帝国大学で、そこから新しい潮流が生み出されていった。仏教徒自身、女子の高等教育や禁酒運動のような西洋の例を模倣し始め、一方キリスト教徒は、当局の要求には可能な限り従い、「非愛国的」とのレッテルを貼られないよう心を砕いた。恐らく双方そうすることが日本にとって賢明なことだった。というのは明治 27（1894）年に第 1 回の条約改正が発効する迄は、何らかの重要問題で見解の相違があるなどと、贅沢なことは言っていられなかったからだ。現在のように、国際会議の場で我が国に対等な地位が与えられている場合には、自国民の公私に亘る利害に大きくかかわる問題については、国内の見解に相違があることを認めた上で、合意をすることが我が国にとって有益である。

チュートン族〔ドイツ民族〕が民族の一致団結について我々に教示してくれた内容が如何なるものであれ、次の事実は誰も否定出来ないだろう。すなわち、英米人は社会的進歩のあり方と個人の権利について、我々が採用し、適応すべき多くの事柄を示してくれたという事実である。日清戦争後の我々は自分たちが受けたのと同様の恩恵を、大陸の隣人たちに伝えるのは我々の責任だと一方的に考え、西洋の人道的行為を紹介しようと、以前に倍加して熱心になった。当時私が個人的に積極的な関心を寄せていたのは、学校での若い男女学生に対する教育は勿論、リデル女史のハンセン病患者救済事業、動物虐待防止運動、車中に於ける女性や老人への席の譲り方の啓蒙運動であった。

日本人とキリスト教精神

習字の授業で私が手を取って教えた多くの小学校の女生徒たちは、今やおばあさんになっている。勿論、17 年前に頼まれて教えた少女の大部分は母親になっている。以前から知り合いだった米国聖公会のジョン・マキム主教の要請で、東京の立教女学校を任されることになった。私には官立学校での経験があったので、キリスト教系の女学校を国の基準に合った形に組織替えすることが出来ると、恐らく主教は考えたのだろう。いずれにしても、追加の仕事としてその申し出を受け、午後の時間を女学校に充てることを約した**（補注）**。

私にとって都合の良いことに、ちょうどこの頃、前ケンブリッジ大学女子高等師範学校校長の E. P. ヒューズ嬢〔エリザベス・フィリップス・ヒューズ：女子高等教育のパイオニア。現在のヒューズ・ホール（大学院専門カレッジ）の前身である女子高等師範部の初代校長〕が日本の教育全体を視察するため来日中〔明治 34（1901）年 8 月 28 日来日〕だった。また、それに付随して、新しく設立された私立の日本女子大学、高等師範学校、教育関係の諸団体でも講演をしていた。そこである日、このウェールズ人の訪問者に、私が見ているミッションスクールを視察するよう頼んだのだ〔実際の参観は明治 35（1902）年 2 月 27 日〕。彼女の指摘は、遠慮会釈のないもので、カリキュラム、教師の陣容、教授法の欠点にまで及んだ。この専門家の発言に勇気付けられて、いくつかの改善を実行に移した。それは学校を可能な限り、女学生向けの中等教育機関として当局が求める水準に近づける観点から実施したもので、教師の一定割合を教員免許のある者にしたり、聖書の学習は授業とは切り離して行うことなどを取り決めた。現在では、女学生のミッションスクールはほとんど全て、国家の定めた基準に則っており、その結果、卒業すれば官立の高等教育機関に入る資格が得られる。これは男子系のミッションスクールでも同様である。当時、つまりおよそ 30 年前とは、大きく変わったものだ。米国で日本人花嫁について英語の小冊子〔1892 年米国で出版された田村直臣牧師の *The Japanese Bride*（『日本の花嫁』）〕を出版した日本人牧師が、自分の教会（長老派）から追い出されたこともあった。「海外で日本のシスターを中傷した」（キリスト教徒の観点から！）というのだ。日本精神とキリスト教に基づく教育との軋轢があったように、現在朝鮮でも同様な調整が図られている。

（補注）ジョン・マキム主教宛書簡

米国聖公会文書館所蔵『ジャパン・レコード』より（資料提供：鵜川馨氏）

立教女学校　東京

明治 33（1900）年 7 月 13 日

マキム主教　殿

謹啓

ここに、明治 32（1899）年 9 月からの立教女学校に関する事業報告を提出させて頂きます。

先ず初めに、私の在任は未だ 6 ヶ月にしか過ぎませんので、我々が学校のためになし得たことといえば、それは僅かばかりのことでしかありませんが、そのほとんど全てが、長きに亘って学校に関与して来られた校長の岩佐氏〔岩佐琢哉〕、幹事の小宮氏〔小宮珠子〕の有能かつ弛まざる尽力のお陰だと言うことを申し上げておかねばなりません。

（中略）

昨年の 12 月に、清水友輔校長は学校を去り、福建の中国人学校の校長になられました。また、当時は高等師範学校におりました本田増次郎が、現在は東京外国語学校に所属しておりますが、この学校に 1 週間に 13 時間宛て勤務するという条件で、1 月より校長に就任

致しました。
（中略）
東京　立教女学校校長
本田増次郎拝
（訳：長谷川勝政）

学校に 10 カ国の国民

私がキリスト教の仕事にかかわれたのは、とらえ様によっては、当時高等師範学校の校長だった現貴族院議員の伊沢修二氏〔教育者。唱歌の導入で知られる。東京音楽学校を創設〕のお陰だった。米国の大学〔ハーバード大学、ブリッジウォーター師範学校〕で教育を受けており、新生日本の師範教育と音楽教育の開拓者だった。高等師範教育の分野では、嘉納先生が年下のライバルに当たり、嘉納先生の個人的な友人は新しい校長の下では歓迎されなかった。それぞれの支持者間で醜い策略もあった。私は東京外国語学校に追いやられることになった〔明治 33（1900）年 4 月 18 日付で「任東京外国語学校教授」の発令があった。この時、佐伯好郎、熊本謙二郎も高等師範学校を去った〕が、9 カ国もの国民を同僚として知ることが出来るという利点が得られた。同僚には、英国人、米国人は無論、中国人、韓国人、ロシア人、フランス人、ドイツ人、スペイン人、イタリア人がいたのだ。10 分の休憩時間と昼食時間は、いわば毎日が国際会議だった。英語科の教務主任として外国語学校の経営を補佐したが、外国人の教授と親しくし、個人的なそして国民的なそれぞれの特徴を観察する機会を得たのだ。

伊沢校長は高等師範学校に長くはいなかったので、数年で戻ることになったが、外語校との関係は残しておいた。嘉納先生が現在も東京高等師範学校校長のポストにあるが、再度校長として戻ってくる以前に、短い期間ではあったが、いくつか人事異動があった。その 1 つは、ジョンズ・ホプキンズ大学〔正しくはコーネル大学〕出にして近代学派の草創期の植物学者である故矢田部良吉博士〔英学者、植物学者：ニューヨーク州イサカ所在のコーネル大学で植物学を学び帰国、東京大学教授、高等師範学校校長を歴任〕の校長就任である。彼の名は、世界に紹介された日本の花〔キレンゲショウマ〕にその名が冠せられており、そのラテン名〔キレンゲショウマ・パルマータ・ヤタベ〕によって不滅となっている。帝国大学の初代教授の 1 人であり、後に英語のコースを改変するため高等師範学校の校長となった。しかしその校長としての在任期間は短かった。なぜなら鎌倉での水泳中に、突然亡くなったからだ〔矢田部は明治 28（1895）年 4 月から高等師範学校の教授の職にあり、明治 31（1898）年 6 月からは校長となるが、翌年の 8 月 8 日、由比ヶ浜で水泳中溺死した〕。

素人評論家として修行

その後、伊沢氏は吃音矯正の分野でめざましい活躍をしている。また一国の枠を超えた興味を抱いている人物で、中国人の間に日本国内で作った教科書や本を普及させ、娘を中国人の紳士に嫁がせた。最近は隣国中国の言語障害を研究するため中国に渡った。

しかし、ここで私のコスモポリタンの経験に戻ることにする。明治 33（1900）年の夏、オックスフォードのワトキン氏と日光の仏教寺院で夏休みを過ごした。彼は 3 年間高等師範学校で英語を教えていた人物だ。狩野派の（「柔道」のではなく、日本画の！）老先生について水墨画を習っていた。ヘレン・ハイド嬢に会ったのは、この時この場所でだった。「浮世絵」、つまり色彩版画の才能豊かな独創的研究者として、米国では良く知られている人物

だ。東京で、彼女の仕事に適した版画家や摺り師を探す手伝いをしながら、職人たちの仕事振りや考え方を幾分は理解した。また、もう 1 人の米人女性、ジョセフィン・ハイド嬢が、日本の舞台やその俳優を調査するのを手助けしながら、自分も歌舞伎や脚本の歴史に親しむ機会を得た。「明治」の三大役者である団十郎〔市川団十郎（９代目)〕、菊五郎〔尾上菊五郎（５代目)〕、左団次〔市川左団次（初代)〕が当時はまだ存命中だったので、教育関係の友人の中でも芝居に詳しい者と一緒に、名だたる役者たちが舞台で演じるのを見るという醍醐味も味わった。こういった経験をしたり、英語を話したりするうちに、外国人の訪問客に芝居を見せて欲しいと頼まれるようになった。こういった場合には事前に、芝居の筋や見所を説明してやったものだ。ところが、亡くなった菊五郎はその独自の機知とユーモアで、劇場全体を笑いの渦に巻き込むので、外国の友人たちは大いに興味をそそられるのだが、その場で手短に通訳することは不可能だった。したがって、日本に来た大部分の西洋人日本研究家が、日本人の軽妙洒脱の世界を満喫できないのは至極当然と言わねばならない。

この年は、ボーア戦争〔南アフリカにあったオランダ系移民（ボーア人）が作ったオレンジ自由国とトランスヴァール共和国を英国が併合した侵略戦争。ボーア人のゲリラ戦により戦闘期間は 2 年 7 ヶ月（当初の予定は 6 週間）に及んだ〕と義和団事件で、日本は非常に重要な国際的経験をした。東洋と西洋の「悪魔たち」が、着々と自国の権利を侵害していることに憤りを感じた保守的な中国人の集団が、公使館地区とその外国人居住者を包囲し非常に危険な状態となり、居住者たちが飢える寸前にまで追いやられたのだ〔義和団事件（北清事変)。「扶清滅洋」を旗印に蜂起した義和団を中心とする民衆蜂起により、北京が包囲された〕。日光で一緒だった英国人や米国人の友人たちは、どうして日本がすぐに救出の軍隊を派遣しないのかいぶかった。日本政府が無関心のように見えたので、彼らの中には政府を非難する人もいた。勿論、直接政府にではなく、個人的に私に対してだったが。後に解ったことだが、英国の外務省は、もし資金不足が日本出遅れの原因であるなら、必要資金を融通すると申し出たという。英国は南アフリカで手一杯であったから、自国の軍隊の一部を割いて極東に送る余裕はなかった。しかし、この膠着状態で主導的な役割を日本が担うことを、快く思わないヨーロッパ列強も 1、2 あった。また一方、日本は義和団から西洋の侵略者と同じくらい憎まれていたので、隣人として最後まで中国の敏感な感情を尊重する立場をとったのだ。とうとう最後の時はやって来た。公使館はなんとしても救わねばならなかった。日本の軍隊は西洋の同志〔ロシア、ドイツ、オーストリア、イギリス、フランス、イタリア、米国〕と共に善戦したので、この軍隊派遣は日英同盟の成立〔明治 35（1902）年、英国はそれまでの「栄光ある孤立」を捨て、日本をパートナーに選んだ〕に大きな一歩を踏み出すのに貢献した。しかし、義和団事件の顛末に日英同盟や日露戦争がかかわっていたということは、当時の私には全く思いもよらなかった。それは英国正規軍再建の発端がボーア戦争の結果であったことに頭が回らなかったのと同様だ。その再興がなければ、ドイツとの現在の陸上戦は実施不可能だったことになる。

強制執行官の幽霊

私は迷信的ではない、と自分では思っている。ところが、物事というものは 1 度や 2 度ならず重なるもののようだ。特に悪いことは！弗蝋館という宿泊所として私が借りていた家は、ずっと空き家のままだった。というのは最後に住んでいた入居者の幽霊が井戸に出るという噂があったからだ。その井戸に身を投げたのは神官で、人気のある神社を任されていたが、副業で宝くじ会社の経営に手を染めた。この神聖にあらざる仕事を、神社の敬虔な信者を食い物にする意図をもって進めたわけではなかったが、どうやら人から預かっ

た金を投機に当てる誘惑に駆られたらしく、挙句の果ては全くの一文無しになってしまったのだ。現実から逃れ謝罪するために残された唯一の道は、自殺以外になかった。面白半分に、なあに柔道の技で幽霊を捕まえて見せ物小屋にでも売りつけてやるさ、と言いながら、この評判の芳しくない家を、私は意気揚々と借りたのだ。その上、金回りは良くないが勇敢な人物をその気にさせて入居させ、世間にその家が住めることを証明するため、家賃は引き下げられた。

ある日、幽霊は強制執行官の姿をして現れた！私自身は借金をしていなかったが、それでも実際に姿を見せたのだ。しかも生身の人間の姿までして。若い使いの者が、真っ青になり息を切らして学校までやって来て言うには、主人が不在だからという理由で如何に抗議しても、先生の持ち物全てに差し押さえの赤紙を貼っているという。私は招かれざる客のお出迎えをするため、急いで家に戻ったりはしなかった。それに、執行官を追い払う呪文があるはずもなかった。午後遅く戻ってみると、手伝いの婆やが教えてくれたのだが、侵入者たる執行官はどうやら人間的な同情心も持っていたようで、日用品はタンスの引き出しから出し、後で赤紙を張り直しておけばいいと示唆してくれたそうだ。私が紳士で、法律違反をするような人物ではないと明白に認めていたからだろう。このことで、当時東京の町で流行った哀れを誘うジョークの 1 つを今でも思い出す。ある富豪の小さな子供たちが「執行官と債務者」という遊びをしていたという。それは赤い小さな紙切れを、おもちゃの家具に貼ったり剥がしたりする遊びで、彼らの父親が度々本物の赤紙を貼られる経験したことがあったからだという。

借金をして善行

この不幸な富豪〔憲政の神様と呼ばれた尾崎行雄。若き日、政治資金のため生活が困窮した時期があった。『咢堂自伝』に「群来る債鬼を逐ひ払つて、漸く新年を迎へ」とある〕は政治家で、無論紳士である。しかし、市長〔東京市長〕、その後大臣〔第 1 次大隈内閣で文部大臣、第 2 次大隈内閣で司法大臣〕になるまで高利貸しに苦しめられた希な例としてよく知られていた。この富豪の場合は自業自得で災難に見舞われたものだが、私の場合はむしろ身代わりで犠牲になったのだ。大の親友が公益のためになる崇高なる仕事をしていた。彼の手助けが出来るとすれば、債権者にそれなりの対応をするしか無かった。親友がこの問題を切り抜けるのは確実だと信頼していたので、私の保証した額が幾らになるか記録もせず、借用証に次から次へと実印を押したのだ。とうとう、彼の債務は膨れ上がって、全給料を 50 年分充てても払い切れないほど大きくなり、彼が家族を養えるものは何も残らなくなった。結局私がその巨額な負債のおよそ半分を負うことになり、法の執行によって私の給料の 3 分の 2 は、債権者が差し押さえることになった。その残りがあれば私は飢えないですむという理屈なのだが、死を迎える迄この苦境から逃れることは出来ないことになる。しかし、その金は我が国のために使われたものだったから、債権申し立ては撤回されたり、返済期限が無期限とされるケースもあった。また、既に元本を超える利息を得ていた者は、それで返済金に充当するよう、説得させられた。さらに、差し迫った性質のものは、太っ腹な親族が処置してくれた。しかし、この上なく不愉快な問題の、この幸せな解決は徐々になされたものであったから、数年間というもの、このような経験の代償として、文字通り犠牲を払って支払いを続けたのだ。

家の外から始めた慈善

何はさておき、真っ先に宿泊所は他人の手に委ねねばならなかった。私のこの事例は、

青年たちの士気を盛り上げるどころの話しではなかった。生活費を節約するため旧友と同じ下宿に暮らしたが、債権者が把握出来ない収入を得るため、官立の学校以外でも以前にも増して懸命に働かねばならなかった。独立した生計を営むようになってからは、困窮した生徒を 1 度に少なくとも 1 人〔徳方信〕は、面倒を見ていた。公務員だったので、懐具合は決して良くはなかったのだが、公衆の目に晒され通しだったので、ありとあらゆる慈善事業に寄付を頼まれたのだった。ときには、自分の個人的興味もあり、慈善団体が行う催事を開く手伝いをしたり、頼まれて、社交界の夫人方がする様々な仕事の力添えをした。どちらも心血を注ぐ必要があることはもちろん、金銭的負担もかかるものだった。私がこんな些細なことを、国際的に重要な意味を持つものとして詳述するのには訳がある。というのは、外国人のなかには、日本がその経済力以上の借り入れをしているとして、あるいは、国民の寄付金額が少ないことを証拠に、公共心が欠如していると解釈して日本を非難する人がいるからだ。現代においては、貧しい国の場合、組織だった大規模な資本導入を図らなければ、豊かにはなれない。近隣の国を自立させるためには、豊かな国はより一生懸命働き、より多額の融資を貧しい隣国につぎ込まねばならないのだ。借り手国の人々が紳士的に振る舞う限りは、貸し手国としては、借り手国を破産に追いやるのは、自国の偉大さにそぐわないと考えるだろう。

低賃金と働き過ぎ

こういった状況下にあったので、言い訳になってしまうが、健康を壊さずに 1 人の人間がこなせる以上の仕事をしてしまった。東京での移動距離は、うんざりするほど遠かった。現在の市電が走り出す以前は特に甚だしかった。自転車に乗ることを覚えて、1 日に 2、3 校の間をなんとか走り回った。英語の学習誌に書いたり、勉強法や教授法に関し一流人が書いた随筆や講義に脚注を加えたりする仕事をした。アーサー・ヘルプス卿の『匆忙余禄』〔*Essays Written in the Intervals of Business*（『仕事の合間に書いた随筆』）：出版 1841 年。1858 年までに 7 版を重ねた当時のベストセラー〕**（補注 1）**と、世界的に評判の高かった『黒馬物語』**（補注 2）**の和訳を出版したのはこの頃だった。もっとも収入は微々たるものだった。また、レッキー〔ウイリアム・エドワード・ハート・ポール・レッキー：アイルランドの歴史家。トリニティ大学卒〕の『欧州道徳史』〔*History of European Morals from Augustus to Charlemagne*（『アウグストゥスからシャルルマーニュに至る欧州道徳史』）：出版 1869 年〕から女性の地位にかかる部分を和訳し、女性雑誌**（補注 3）**に連載した。しかし結局のところ、よく売れる小説や人気のある教科書を思いつかない限り、執筆の仕事は貪欲な出版社に儲けをしゃぶり取られるのが関の山だ。自分が仕事をしたのは、市民男女の善に資するためであり、名声や金のためではない、と考えて自ら満足するしかなかった。私の場合は、かなりのお人好しで無知だったと言っていい。なぜなら、学者の中には、同じ物を 4 回も使い回しする人たちもいるからだ。彼らは先ず、大学の通常の講義で使って俸給を稼ぐ。次には同じ内容を雑誌の記事に、さらには公開講座や夏期学校でも使う。そして最後には、その講演録は厳めしい表題を冠した書物になるといった具合だ。これを虚栄のためだけにする人物もいるが、ほとんどの場合は全く以って必要に迫られてするのだ。事実、我が国では、事業家と会社経営者を除いて、教授も教師も、否、全ての俸給生活者は、薄給かつ栄養不良、顔色も悪く神経過敏で、作り笑いや、やせ我慢をしているように見受けられる。

（補注 1）本田増次郎訳『処世要訓』東京　文武堂蔵版

明治 35（1902）年 7 月 10 日印刷　　明治 35（1902）年 7 月 13 日発行
正価金参拾銭

訳者　本田増次郎
発行者　東京市小石川区戸崎町四拾六番地　大橋省吾
発売元　東京市日本橋区本町三丁目　　博文館
印刷者　東京神田区美土代町貳丁目壱番地　島連太郎
印刷所　東京神田区美土代町貳丁目壱番地　三秀舎
アーサー・ヘルプス卿の”Essays Written in the Intervals of Business”（『匆忙余禄』）の全訳に、付録としてベーコンの論文 5 編を付したもの。

（補注 2）本田増次郎訳述『黒馬物語　一名 驪語』
明治 36（1903）年 9 月 12 日　印刷　　明治 36（1903）年 9 月 15 日　発行
定価金八拾銭

著作者　本田増次郎
発行者　東京市神田区南甲賀町八番地　　山縣操
発行所　電話本局三千二百四十六番
　　東京市神田区南甲賀町八番地　　内外出版協会
印刷者　東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　青木弘
印刷所　東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式会社秀英舎
初版本は薄緑色の布張りであり（表紙、背表紙、裏表紙を通じて、上部と下部に植物模様がある）、背表紙に金文字で驪語の文字がある。扉絵はカラー、緒言は全文が朱色の文字で印刷されている。（資料提供：勝浦吉雄氏）
　明治 29（1896）年に西華生が『女学草紙　なでしこ』に「名馬墨染」と題して連載（翌年『中学新誌』に再録）し、続いて明治 35（1902）年には藤井寅一が明昇堂より『黒美』として出版したが、何れも抄訳であり、本田の『黒馬物語』が最初の完訳である。

（補注 3）月刊女性誌『をんな』
　本田は、大日本女学会発行の掲題誌に明治 35（1902）年 11 月から 36（1903）年 11 月迄、「欧州女徳変遷史」と題して 12 回に亘り連載している。その第 1 回に次のような紹介文がある。
「左に掲ぐるは、英国の碩学レツキー氏の名著『欧州道徳史』中の『婦人の地位』と題せる一篇を、本田氏が訳述せられたるものに係る。欧州の婦人が如何なる変遷を経て今日の徳操を得たるかを窺ふべく、日本の現況に取ツて極めて有用の文字なれば、号を追うて本欄に掲ぐる事とはしつ。」（資料提供：丹沢栄一氏）

祝福された貧困と富

　日露戦争の勃発で解ったことは、富と貧困の国際的諸相だった。欧米から貧しい日本に大量の資金が流入したが、それは謙虚さと正義が我が国の貧困と不可分の関係にあると欧米が考えたからだろう。外債の調達に成功したある銀行家〔日本銀行副総裁の高橋是清〕は、日露戦争後華族に叙せられ、さらにその後、大蔵大臣となった。日露戦争もある時期を過ぎると、寛大な貸し手国も財布の紐を締め始めた。我が国が圧倒的勝利を収めてしまうと、我が国民の精神的バランスや世界の力のバランスが崩れることを、親切にも心配し

てくれたのだろうか。さもなくば日露両国が、人的にも金銭的にも消耗してしまうという兆候に気付いたのだろうか。いずれにしても、日本は可能な限り潔い態度で、ポーツマスの平和を受け入れた。しかしその時点では、やがて 10 年後に、嘗ての敵対者たち〔日清戦争後日本に対し三国干渉を行ったロシア、フランス、ドイツ〕との完全な和解を実現するに際して、日露戦争の真の扇動者〔中国〕が役立つことになるとは、全く予想だにしていなかった〔明治 38（1905）年の日露戦争から 10 年後の大正 4（1915）年、中国に対する日本の 21 か条の要求は、国際的協調を図るとの観点から、中国のみを犠牲にした形で決着した〕。いずれか 1 国が日本に条件を指図するといった立場にあったとしたら、あの傷〔日清戦争後の三国干渉で、日本がその要求を飲まざるを得なかったこと。これは日本国民の間で「臥薪嘗胆」と称され、その屈辱を晴らすことが国民的目標となった〕は、大義名分という共通の特効薬によって癒されることも永遠になかっただろう。国際的に暗躍する投資家や貿易業者は、組織的に人類の大量殺戮を企て、人類同士を永久の憎しみの関係に陥れかねないのだ。その意味で、彼らの肩には重い同義的責任がかかっていると思う。日清戦争後、銀行家や投資家の中には、爵位や他の叙勲を受けた者がいたが、これは明らかに、国民の注意を愛国から金儲けにそらせてしまった。また、敗戦国から取り立てた賠償金〔国家予算のおよそ 3 倍にのぼった〕によって、国民経済は活況を呈したが、続いて混乱にも陥った〔明治 33（1900）年 12 月に熊本の第 9 銀行が破綻したのをきっかけに、翌年にかけ金融恐慌が全国に広がった〕。この経験で政治家も少しは利口になっていたから、次の戦争〔日露戦争〕の後では、冒険的事業の出資者たる一般個人を特別扱いするのは不適切だと考えた。それにロシアからは賠償金が一銭も入らず、それを使って巨額の負債を返済することも、また産業や貿易を急拡大することも出来ないことになった。増税がなされ、貧困層の不満は高まり、そのため、性急な社会主義者のグループが無政府主義的不法行為を企てるまでになった〔明治 43（1910）年の大逆事件では、多くの社会主義者が逮捕され、幸徳秋水をはじめとして 12 名が処刑されたが、彼等は明治天皇の暗殺を企てたとされた〕。この緊張を和らげるため、皇室の後援を得て、大がかりな慈善組織〔恩賜財団済生会〕が立ち上げられた。戦時物資の供給で大儲けをしたと目されていた人物が、他の者を抜き、この立派な組織のために最高額の寄付をした。この人物〔大倉喜八郎〕は大正 4（1915）年、大正天皇の即位式の時、男爵の位を授けられたが、その理由は、一般に考えられていたように日本の戦争遂行に貢献したからではなく、人類の福祉向上に大きな関心を寄せたからだというのだった。

シルクハットと着物の出立ち

この戦争に際して、アメリカ合衆国からマッギー博士とその率いる熟練の看護婦集団が、また英国からは戦場で息子たちを亡くしたロバートソン〔正しくはリチャードソン：「日本に別れを告げて」参照〕夫人がボランティアの看護婦として来日した。東京の婦人たちは、小石川後楽園で、敬意を表して歓迎のレセプションを開いたが、私は男性委員として出席した。外国人のお客や友人が集まる場所に行く場合は、日本伝統の和服を着ることに私は決めていた。短足で蟹股の人物が、ぴったりとしたズボンをはいたのでは、外国人には見苦しい限りだろう。それに今回は屋外の社交的催しである。シルクハット〔トップハット〕には、やはりシルクの「着物」や「羽織」や「袴」が似合うだろう、と当然のように考えたし、今もそう思っている。こうして私は訳もわからず、その場に登場したのである。一方鍋島侯爵〔鍋島直大：佐賀藩主。特命全権イタリア公使、貴族院議員、宮中顧問官を歴

任。次女伊都子（いつこ）は梨本宮妃〕は正式なフロック・コートを身につけていたが、帽子は普通のダービーハット〔ボーラーハット〕での登場だった。侯爵は私のユニークな風体を見て、一層自己の手抜かりを意識されたようで、近づいて来て、こんな正式な場では何とも不釣り合いだから、2 人のかぶり物をこの場ですぐに交換しようと提案された。自分が間違っているとは必ずしも思わなかったが、侯爵の過ちに心から同情したのだ。恐らくこの私の同情は、元佐賀の大名である侯爵にとっては、返礼以上のものに感じられただろう。ともかく、午後の残り時間は、平民のシルクハットが偉大な華族の頭にちょこんと載せられ、一方では侯爵のビッグサイズのダービーハットが平民の私の小さな頭を深々と覆っていた。

女性の知的水準

この頃は、立教女学校の校長は辞めていたので、津田女史〔津田梅子：女子英学塾（津田塾大学）の創設者。岩倉使節団と共に渡米、日本最初の女子留学生の 1 人となる。帰国後華族女学校に奉職、その後再度米国のブリンマー大学へ留学、帰国後女子英学塾を設立〕の女子英学塾で教えていた。優秀な女子生徒なら、知的な面で男女差はないという発見をしたのはこの学校でのことだったが、これは大きな喜びだった。津田女史の生徒たちは入念に選抜されており、他の学校に較べ生徒数も少なかった。したがって、大部分の生徒が優秀であり、米国流教育の女性パイオニアである津田女史が、教育の仕事でその持ち味を十分に発揮することが出来たのだ。40 年以上前、大山公爵夫人〔旧姓（山川）捨松：津田梅子と共に渡米。ヴァッサー大学卒、帰国後陸軍卿大山巌と結婚。鹿鳴館の運営に参画、宮内省洋化顧問係り、女子英学塾同窓会会長〕も、瓜生男爵夫人〔旧姓（益田、その後永井）繁子：津田梅子と共に渡米。ヴァッサー大学卒、帰国後瓜生外吉と結婚。女子高等師範学校、東京音楽学校教授〕も、勉学のため海外に派遣された経験があったから、その結果として、女子英学塾に深い関心を寄せるところがあった。日露戦争で迎えた最初の夏のこと、大山夫人は、夫の元帥、つまり満州軍総司令官が、肥満の体で大陸の暑さに如何に耐えておられるのか、と尋ねられたことがある。大山夫人はその尋ねた奥方に「最近の私宛の手紙によりますと、主人は広い部屋の中央で肘掛け椅子に座ってうたた寝をしているそうで、時々目を覚まして作戦計画にうなずき承認するだけなので、困ってはいないとのことです」と答えた。前回の戦争〔日清戦争〕が川上大将〔川上操六：陸軍軍人。ドイツの軍政を模範とし、守勢作戦態勢の鎮台組織を攻勢作戦態勢の師団編成に改組し、日清戦争で完勝した〕を我が国のブレインにしたように、あの戦争〔日露戦争〕のブレインが故児玉侯〔児玉源太郎：満州軍総参謀長。203 高地陥落を指揮〕だったことは良く知られている。しかし、大山大将の人物の大きさと名声によってこそ、将軍や兵士の心を 1 つに纏めることが出来たのだと言えよう。

平和問題を学ぶ

日露戦争中は早稲田大学でも教えていたが、同僚に大本営と近い関係の者がおり、ほとんど毎日のように前線の内部情報を教えてもらった。しかし、その情報がなかったとしても、近代戦争の恐怖は新聞や出版物の報道で思い知らされた。毎週、親戚や親しい友の死亡や悲劇のニュースが届き、血のにじむような思いをさせられた。このことだけでも、私が意志強固な平和主義者になるのに十分だった。フィラデルフィアのクエーカー教徒（**補注 1**）で新渡戸〔新渡戸稲造〕夫人〔メアリー・パターソン・エルキントン〕の兄弟〔弟〕

であるジョセフ・エルキントン氏が、平和主義の声明を携えて、この時来日していた。この平和主義の主張は我が国民大多数にとっても、また私にとっても新鮮なものだったが、私の側ではいつでも受け入れるだけの体勢が既に出来上がっていた。その知識の源から直接学び、さらに可能なら、たとえ微力ではあっても、あらゆる国々との友好親善のため、あらゆる努力を傾けたいと、私は決心したのだ。加えて、働き過ぎのため、健康状態は次第に悪化していた。環境と生活を完全に変えることが健康回復への唯一のチャンスだとも思えたのである。私の毎月の収入を狙っている債権者たちも、わざわざ何千マイルも離れた外国にいる放浪者にまで手を伸ばすことはないだろう。そこで持ち物は全て処分することにし、衣類は大部分を他人にやり、蔵書の大半を津田女史の学校に預けた（補注 2）。したがって、私が自分の選んだ国で死んだとしても、日本では何もしなくていいようにしたわけだ。父なる国に戻れる希望はほとんど無かったし、もし、命長らえるなら、残りの日々は可能な限り人類全体の利益に貢献するために使おうと、心に誓ったのだ。日本の同胞に対して大きな貢献が出来ているわけでなかった。ただし国民や人種の如何を問わず全世界の人々に役立つことが、結局は一番日本人の為になるのだとの確信は抱いていた。この密かな決意は、エルキントン氏が同情して旅金の面倒を見てくれたことにも助けられた。こうした信念の下に、「子は親の存命中、遠くへ行ってはならない」という儒教の教えを、私は心置きなく破ったのだ。

（補注 1）クエーカー教徒

本田増次郎「英米雑俎(11)Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 8 月 15 日

東京にFriend女学校といふがあるのは此宗派に属するもので、彼等が自らFriends' Societyと名乗つてChurchと云はぬのは、Pastorといふ長者を置かずGodの前に平等の人間たるの主義を実行して居るので、meeting house（会堂と称へず）で男女左右に分れて席を混ぜず、男子は常にcoatの襟に折り返しなきを用ゐ、女子は一種特別の形のQuaker bonnetを被つて華かなhatは用ゐぬ。Quakerとは彼等が神の前に戦々競々たるの主義を外からnicknameにしたので、自らは友徒と名づけて戦慄者とは曰はぬ。又彼等は正直に兄弟相殺す事の人道に合はざるを信じ、大膽（だいたん）に宗教上から非戦論を唱へて、現下の大戦争〔第一次世界大戦〕にも信教の自由を許せる英国では、友徒の徴兵に応ぜぬ事を咎めぬ。新渡戸夫人の父は南北戦争（Civil War）に従軍を拒んで獄に投ぜられたといふ話を聞いた。

（補注 2）女子英学塾へ預けた書物のその後

大正 8(1919)年 4 月 27 日、本田はパリ講和会議に際して横浜から出航する。この前後の様子を『英語青年』第 41 巻第 6 号 大正 8(1919)年 6 月 15 日に寄稿している。それは「布哇よりの第一信」と題した一文であるが、その中に、次のような記述がある。

四月廿一日

（前略）

津田梅子女史の英学塾へ行つて自分の預けて置いた書物の中から入用なのを引取り、自宅から不用な書物一箱を送り、前のと合せて書棚とも塾へ寄附する事を取極めて来た。明治三十八年に海外へ出た時は健康が甚だ振はなかつたので、所持品は悉く贈与又は売却し、唯二重書棚と其内容だけは自分の死ぬるまで預けて置いて使用してもらふ事とした。爾来十四年今以つて死に損つて居るので、余り思ひ切りが悪いから今回は寄付行為を断行したのである。

（後略）

末っ子は甘やかされる

この話の場面を「父なる国」日本から外国に転じる前に、もう少しだけ述べさせていただきたい。ここで私は日本を「父なる国」と呼んだが、これはゲルマン民族を起源とする言葉〔英語〕の用法に従うなら「母なる国」と言うべきである。しかし、敢えてその用法には従わず、熟慮の上「父なる国」と呼んだ訳だ。なぜなら敬愛する母〔やゑ〕は、私の渡米する４年前に既に亡くなっていた。私の甥〔本田寿一〕は、日清戦争後台湾で戦い、後に明治天皇から勲章〔勲八等白色桐葉章〕をいただいたが、陸軍主計官〔陸軍近衛兵二等書記〕のまま東京で亡くなった。それは母が亡くなる数ヶ月前のことだった〔没年月日は寿一が明治 31(1898)年 10 月 22 日、やゑが明治 31(1898)年 12 月 13 日〕。火葬に付された甥の遺骨は骨壺に納められ、故郷に戻り、家のそばの墓地に手厚く葬られるまで、東京の寺院で故郷への帰りを待っていた。私は母の葬儀に間に合うよう、気もはやる思いで、西へ向かう列車に揺られていたが、甥も彼の母〔本田まさ〕、つまり私の一番上の姉に別れを告げるため、私の鞄のなかで同じように揺られていた。しばしば引用されることのある、不幸と悲哀を甲板に満載した船に言及する、あの中国の詩の一節が繰り返し脳裡に浮かんで来た。お棺の蓋には釘は打たれておらず、私が帰って来るのを皆待っていてくれた。あの懐かしい、慈愛深い母の顔を、涙にむせびながら眺め、震える手で触れてみる。母の思い出に最後の感謝を捧げるため、私が出来たことはただそれだけだった。クリスチャンの友人たちよ、許して欲しい。母の魂は私から未だ離れず、末っ子である最愛の息子に母の愛を惜しみなく与えたいと、切望しているように思えてならないのだ。母のことを思うと、自分の頭髪が駆け足で灰色に変わって来ていることもすっかり忘れて、悪戯盛りの少年時代のことを思い出すのが常だ。今でもはっきり覚えているが、2 番目の姉〔あさ〕と追いかけっこをしていて、彼女が庭にある枯れ木の上に逃げたことがある。その木の短く切った大枝は、家で飼っている牛を繋いでおくのに使われていた。堆肥用の草の束を積んで戻った時や、8 マイル〔13 キロ〕離れた市場に米俵を運んで行く前などにちょっと繋いでおくのだった。姉は一番上の大枝なら安心だと思ったのだろう。ところが私は面白半分に、庭箒で彼女にちょっかいを出した。彼女はやむを得ず逃げようと飛び降りた。この時「着物」の袖が大枝に引っかかり、袖全部が引きちぎれてしまったのだ。母は酷い目に会った姉を厳しく叱った。おそらく、姉が女性であることや年上であることをよくよく考えてのことだったのだろう。叱られずに済んだ私としては、このえこひいきが、ちょっと有り難かった。しかし、今知りたいと思うのは、欧米のお母さん方だったら、こんな場合どう対処されるだろうかということだ。

夫としての威厳

日本人の少年は、その一般的傾向として、自分たちの姉妹や他の少女たちに対し、人前で親切心を示すのを、未だに嫌がっているようだ。いやそれどころか、女性に対しては、うわべではむしろ荒っぽく振る舞うのが普通のようだ。それはおそらく、同輩から男らしくないと非難されるといけないからなのだ。しかし、母性愛や夫婦愛を経験することによって、次第に礼儀正しい男性になっていく。もっとも、より保守的な男性の場合は、西洋男性の親切な態度をあえて真似ようとはしない。私が常々言っていることは、婚約前の交際中や婚約期間中は盲目的に愛し合い、結婚してから互いの欠点に気付くといった場合も、主として義務感から結婚しその後に愛を知るようになった場合や、夫婦の愛情が不幸にし

て深まらず、互いの子への愛情をかすがいとして生きるような場合も、それらにさほどの違いは無いということだ。私の知っている海軍士官が、以下に述べる逸話のまさにその主人公だ。彼は結婚後間もないある日の晩、2 人で同僚の家を訪問した。田舎道のこととて帰りには提灯を借りて帰ることになったが、その海軍士官はなんとも頑固かつ厳格なことに、妻に提灯を持たせ自分の前を歩かせたのだ。これを見た同僚は、近代教育を受けた人物にしては不自然だと思ったという。しかし幻滅から覚めるのに、さほど時間はかからなかった。やがて 2 人は、自分たちが視界から外れたと見るや、縦 1 列の並び方を横 1 列に変え、腕を組んで歩いて行った。そして提灯は夫の力強い手に握り替えられていた。翌日の朝、出仕先でその観察眼鋭い同僚が、そんなに恥ずかしがらなくてもよかったのに、とからかった。すると、「人前では、夫としての威厳はきちんと保たねばなりません」との思慮深い答弁が返ってきた。妻に服従を強いた訳ではなく、ただ他人様の目を気にしただけのことですよと！

内政を担う女性たち

この頃は女性雑誌に大量の記事を書いたが、これは、教育という名に値するだけの教育をほとんど受けることのなかった母や姉妹たちを気の毒に思ったからであり、また印刷物がもたらす成果に勇気付けられたからでもあった。千葉の高等女学校で、英国の女流作家〔アミィ・ルフェーブル〕による子供向けの小説『かたみのボタン』**（補注 1）**のある章が、私の訳文で読まれた時のことだ。その日は担任が休みだったので、代わりの先生がクラスの生徒を前にして読んだそうだ。すると本当に不思議なことに、クラスの中で一番我が儘な少女が、その話を聞いた後、真面目に勉強し、出会う人にはことごとく親切にする完璧な天使に変わってしまったのだ。校長が調べてみると、その生徒はその物語に出てくる小さな英雄のようになろうとしていた。女性の美徳を扱った英語の書物の翻訳も、シリーズ物として月刊誌〔『をんな』明治 37（1904）年 2 月より同年 11 月まで全 10 回〕に連載したが、それは後に 1 冊の本**（補注 2）**になった。また、女性週刊誌に、印象や観察を記した随想を寄稿した。これらの記事の 1 つで私が書いたことは、男性たちが対外的問題で頭が一杯な時なのだから、日本の女性たちは国内問題に責任が持てるようにならなければならない、ということだった。これはロシアとの戦争前に書いたもので、女性の平和追求について言及したものだ。しかし、この私の示唆は、15 年前は誰一人として夢にも思わなかった緊急事態〔第一次世界大戦〕を前にして、いまや現在交戦中のヨーロッパで、大々的に実行に移されている。いずれにしても、女性たちが何時の日か自分たちが帝国政府高官の地位に就くという考えに、日本女子大学の女学生が、非常に好意的な反応を示してくれたことを、この記事を書いた時知った。

（補注 1）本田増次郎訳『こどもかたぎ　かたみのボタン』
明治 34（1901）年 12 月 15 日　印刷　　明治 34（1901）年 12 月 22 日　発行
定価金参拾銭

著　者　本田増次郎
発行者　東京市本郷区森川町一番地　　石川栄司
発行所　東京市本郷区森川町一番地　　育成会
印刷者　東京市牛込区市ヶ谷加賀町二丁目十二番地　佐久間衡治
印刷所　東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式会社秀英舎第一工場

「誌上広告」（本田増次郎『家庭の模範』育成会　明治 35（1902）年 12 月 10 日）

児女気質（こどもかたぎ）　かたみの釦（ぼたん）

全一冊美麗装丁
定価金弐拾銭
郵税金貳　銭
　一個のボタンは戦場の露と消えにし父が唯一のかたみ、此遺物の為めに語り此遺物の為めに争ふ可憐の小公子。慈愛深き母の教養と懇篤なる教師の指導は此小公子をして万軍も敵し難き自我と戦ふべき兵士たらしむ。是等壮快悲惨の事実と艶麗巧緻の文章とは読者をして巻の終わるを覚えざらしむ。これ本会〔育成会〕か善良なる家庭勇敢なる軍人并に教育家、宗教家の読物として江湖に推薦する所以なり。

　初版発行は明治 34（1901）年 12 月 22 日、明治 38（1905）年 9 月 5 日には再版された。英国の女流作家アミー・ルフェーブル（本名：ジャージー・アメリア・ルフェーブル）のキリスト教児童文学であり、主人公の少年テディーが、愛という旗を押し立てて、自我という敵と戦いながら信仰の道に入って行くという物語。

（補注 2）本田増次郎編『泰西女訓』
明治 38（1905）年 4 月 25 日　印刷　　明治 38（1905）年 4 月 28 日　発行
定価金四拾銭

著作者　本田増次郎
発行者　東京市本郷区駒込西片町十番地　山縣操
発行所　東京市本郷区駒込西片町十番地　内外出版協会
　　電話下谷二千四百五十三番
印刷者　同牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　青木弘
印刷所　同牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式会社秀英舎第一工場

なお、後に『婦人の修養』と改題して、同じ出版社で再版。

「小引」

修身倫理の教を説いて聴くを悦び読むを楽ましめんは素より至難の業に属す。我邦嚮（さき）に心学道話なるものあり、近者坪内博士が早稲田中学に新機軸を出せるの外、予の浅識寡聞未だ此方面に成功せしものあるを知らざるなり。

女子に修養処世の道を誨（おし）へて良薬を口に甘からしめたるもの、予は僅に之をハーデー氏の著『婦人の五才』に見る。乃ちその十章を抜き、訳述敷衍して前年『をんな』紙上に連載せしが、今又新に五章を加へて此書を作り、敢て世の婦人少女と女子教育家に薦めんとす。イー、ヂェー、ハーデー氏は英国の著者にして、外に『結婚して猶ほ幸福なるべき道』、『礼儀人を作る』、『結婚について』等の作あり、並に普く読者に歓迎せらる。説く所温雅、深切にして強ひて奇を求めず、しかも機警頓智を以て人心を牽（ひ）くの妙を得たり。教壇に立ちて青年男女に倫常を講ずるもの、少しく氏の体に倣（なら）はゞ、その感化に益する所多きを悟ら

ん。『婦人の五才』とは、曰く人を喜ばす、曰く美味を以て人を養ふ、曰く人に衣す、曰く人を清潔ならしむ、曰く人を教ふこれなり。蓋(けだ)しヂョン、ラスキンが婦人の職分悉く此五事に包含せるを説けるに基くなり。全編二十八章の中その十五を取れるに過ぎずと雖も、英国女訓の要は略ぼ此巻中に収め得たりと信ず。若干の好少女が之を読まんと冀(こいねが)ふに於て、予は原著者に全然感を同うするもの。
明治 38 年 3 月皇軍連に奉天、鉄嶺、興京を占領せる時
　　逗子養神亭にて　　本田増次郎しるす

鳩山夫人

私が早稲田大学で教えるようになったのは、日本で最も進歩的な女性の 1 人を通じてのことで、その経緯は次のようであった。鳩山春子夫人〔女子教育家。東京女学校、東京女子師範学校で学ぶ。共立女子職業学校（共立女子大学）を創設。鳩山和夫（法律家、政治家。美作国勝山藩士鳩山博房の 4 男。東京専門学校第 3 代校長）との結婚式の時、友人などを招待したが、これが結婚披露宴の嚆矢とされる〕は日本の新しい教育が生んだ有名人だったが、2 人の息子の教育に全身全霊を打ち込んでいた。現在 1 人〔兄の鳩山一郎〕は弁護士で国会議員となり、今 1 人〔弟の鳩山秀夫〕は東京帝国大学法科大学の今をときめく教授である。最初に夫人を知ったのは社交界でだったが、やがてご自宅に伺い息子さんたちや父上にもお会いするようになった。故鳩山博士はイェール大学の出身で東京大学〔現在の東京大学の名称は、東京大学、帝国大学、東京帝国大学、再度東京大学へと推移した。ここに言う東京大学は設立当初の東京大学である〕の初期の教授だった。私の生まれ故郷〔美作〕出身の一族であり、当時校長をしていた早稲田大学に採用してくれた。こうして私は、早稲田大学の創立者である現在首相の大隈侯と親しくなった。当時の鳩山夫人は夫を選挙の度に議会へ送り込む仕事に熱中していたが、後には息子さん〔一郎〕の選挙でも同様だった。私が夫人の精力的な選挙運動で喜んで一肌脱ぎ、この進歩党の党首に投票したのは、この家族ぐるみの友情に答えるためだった。その後、鳩山博士は早稲田大学との関係を絶ち、別の政党〔政友会〕に加わった。しかしこうなったからといって、個人としての、また早稲田の先哲としての鳩山氏に対する私の尊敬の念に変わりはなかった。社会事業、教育事業、知的、政治的活動における、この鳩山夫人のこの好事例は、日本女性の将来に期待を抱かせるに十分だった。

日本に別れを告げて

ここまで私の話しは全て記憶に頼って述べてきたが、ここからは、明治 23（1890）年以来毎日、2、3 行宛書いてきた日記を参照しなければならない。日記を参照するのは記憶違いを見つけるためであるが、特に固有名詞や日付を思い違いしているからだ。たとえば、明治 37（1904）年から 38（1905）年の戦争〔日露戦争〕の傷病兵を看護するため来日した英国のリチャードソン夫人を、間違ってロバートソン夫人〔「シルクハットと着物の出立ち」参照〕としてしまった。日記によれば、ロバートソン夫人は私が米国に向けて出発する 3 日前に、横浜まで見送りに行った人物だ。ここで訂正を入れておくのは、数年後ロンドンでこの夫人に会ったことを、後々触れることになるかも知れないからだ。翌日は大阪から来た人形浄瑠璃一座の公演を、歌舞伎座で観た。我が大和まほろばの見納めにという訳だ。そして、明治 38（1905）年 7 月 18 日午後 3 時、私は友人のエルキントン氏と共にホノルル

経由サンフランシスコ行きのパシフィック・メール会社の汽船「シベリア丸」の乗客となった。対馬海峡で、エルキントン氏と、あの忘れられない約束をしてほぼ 2 ヶ月が経っていた。

ところが、8 月 2 日にアメリカ大陸に上陸するまで、日記は 2 週間全部真っ白だ。決してひどい船酔いだった訳ではない。何年にも亘って神経をすり減らす仕事をした後では、どんなに優秀な船員でも「どうでもいいさ」、つまりレッセ・フェール〔自由放任〕の気分になるものだと、そうご理解願いたい。

少年には 2 種類の意味がある

この船旅で記憶に残っていることといえば、アメリカ合衆国に戻る神戸の貿易商〔B・グッゲンハイム〕**（補注）**の息子が、私のことを「ボーイ」と呼んだことだ！実際の年齢よりずっと若く見えたのだろう。しかし、明らかにその子は日本人といえば使用人しか知らなかったのだ。だからこそ、少ない語彙の中では、「ボーイ」〔男の使用人〕とか「アーマ」〔女の使用人〕とかいう言葉が「日本人」と同義語だったのだ。この米国人少年の両親〔ドイツ系ユダヤ人〕にからんで、アメリカ合衆国に戻るため乗り合わせた同胞の日本人から 1 つ新しい言葉を教えてもらった。米国在住の日本人居住者はユダヤ人〔英語で「ジュー」〕のことを、日本語を使って、よく「九一（くいち）」と呼ぶそうだ。それは、人種的偏見を意味する言葉を直接的に使って、侮辱してしまうことのないようにするためだ。「九一」とは「9+1」のことであり、答えの 10 は「じゅう」、その発音はユダヤ人とほとんど同じなのだ。如何に親切丁寧とはいっても、何とも骨の折れる婉曲な表現ではある！男女を問わずあの立派なユダヤ人に対し、キリスト教世界では広く、宗教的反感や社会的排斥が存在している。日本にそれらが無いのは幸いだ。そもそも、彼らはそのほとんどが来日していない。頭の切れる人も切れない人も、人口の多い極東で競争することが、割に合わないと考えているのだろう。ごく少数だが、混血のヘブライ人やその子供たちが、天皇陛下の臣民に混じっているのは確かである。しかし、彼等はほとんどお雇い外国人か、海外からやって来た立派な家柄の末裔たちであり、待遇も良く、他のユーラシア〔欧亜混血〕人と、一般的にいって区別されてはいない。

（補注）出航記録から判明した貿易商の名

The Japan Weekly Mail YOKOHAMA, July 22ND, 1905 Vol. XLIV（毎土曜日発行の週間英字新聞）（横浜開港資料館蔵）（この資料の存在は、西口忠氏のご教示により知った。過去 1 週間の主要船舶の入出港が記録されている）

DEPARTURES.
Siberia, American Steamer, 5,655, J. T. Smith, 18th June〔正しくは July。前後の船舶は全て July の記載〕,-San Francisco via Honolulu, Mails and General.－P. M. S. S. Co.
PASSENGERS.
DEPARTED.
Per America Steamer *Siberia*, for San Francisco via Honolulu:------Mr. Jos. Elkinton,------Miss Jane Goldthwaite,------Mr. B. Guggenheim, Mrs. J. Guggenheim, child and amah,------Mr. M. Honda,------Mr. K. Seko, Mrs. K. Seko------
（搭乗の人名については、自叙伝に登場する人物のみ抜き出した）

ズボンと「袴」

しかし、私にとって最初の西洋世界に関する驚くべき発見は、余談ながらその後日本の会社〔日本郵船会社〕に売却されることになった「シベリア丸」の船上で起こった。それは、ズボンという物は当然ダブダブで管状の物だと考えていたが、実は「プレス」と呼ばれる独特の工程によって、可能な限り平らに保たねばならないということの発見だった。おそらく、この私の思い込みは、ヨーロッパのコートの袖が「筒袖」、つまり「管状」の物と名付けられていたことからくる類推が原因だろう。これに対して、日本の着物の平らな袖は、「角袖」つまり「四角」の物と呼ばれる。ある日、3 回目の世界周遊で乗船していた日本人事業家が、「プレス」という言葉を使ったことに気付いたのだ。その日まで実に 15 年間、その単語さえ知らずに、私は「管状」のズボンや袖を身につけていたことになる。目から鱗とはこのことだ。もし私が、次に着る時にも折り目がきちんとついているように、都度たたまなければならない日本の「袴」のことを早い段階で思いついていたら、このぞくぞくするような大発見を経験出来なかったことになる。私はどちらかと言えば西洋かぶれの、「ハイカラ」組の 1 人としての栄誉を担っているが、嘗ての高等師範学校時代、同僚から私の教授用フロック・コートのボタンが擦り切れているのを、こんな見苦しいことはないと親切に教えてもらったことがある。擦り切れた袴から中の詰め物を出したまま、人前で「着物」を着ているようなものだと！もちろん、現代の「ハイカラ」世代は、外国のファッションを採用するにも、はるかにセンスがいい。しかし、彼らを批判する資格が私にはないが、曲がった柄のついた傘や杖を右手に持っているのは、些細なミスだがいただけない〔英国のマナーによれば左手に持つのが良いとされる〕。

人種一源論

ニューイングランドのゴールズウェイト婦人もその船で故郷に帰った。有名な生物学者である箕作佳吉（みつくりかきち）博士〔日本の近代動物学の創始者。御木本の真珠養殖に協力〕を東京に訪ねての帰りだった。箕作博士は 10 代に英国留学した菊池大麓男爵〔近代数学の創始者。第 6 代東京帝国大学総長、貴族院議員、文部大臣〕の弟で、婦人は博士のことを「佳吉」と呼んでいた。博士が米国への初期教育留学生派遣団の一員として赴いた時、親切に面倒を見てくれた人だ。当時コネティカット州ハートフォード郊外のファーミントンに住んでいた「マーク・トウェイン」〔本名はサミュエル・ランゴーン・クレメンス（マーク・トウェインは筆名。船員用語で水深二尋（ふたひろ）の意）：アメリカ国民文学の創始者。講演家としても名をなした〕も、博士を見知っていた（**補注**）。私はポーツマスでの平和条約が締結されてしばらく後、この老婦人やその親戚を訪ねた。エルキントン氏は、サンフランシスコまでは彼女の世話を焼いていたが、そこからは私と分かれて、カリフォルニアを訪ねた後、カナダ経由ペンシルヴェニアに戻った。カナダでは、ドゥクホバー〔ロシア系プロテスタントの一派、禁酒・禁煙・平和主義を標榜する。クエーカー教徒に近似〕たちのコロニーを訪ね、エルキントン氏も、連れのクエーカー教徒たちも大いに感銘を受けたとのことだ。したがって、この大陸横断の旅でニューヨーク州のオールバニまでは、私がゴールズウェイト婦人のお世話をする光栄に浴した。もっとも、することはほとんど何もなかったが。親しく付き合わせていただいた箕作博士、ゴールズウェイト婦人、それにしばしば近くで見かけた「マーク・トウェイン」も、私の米国滞在中に皆故人となった。

ところで、サンフランシスコに到着する前にハワイについて一言述べておかなければならない。気が付いたのは、ハワイ在留日本人の顔色が本土の日本人と較べて色黒だということだ。というよりはむしろ、あの茶色よりもっと色黒に見えたのだ。したがって日本人の肌の色を形容する色としては、むしろ黄色より茶色の方が相応しいと思われる。我が国の北方に住む人は色白だという事実、この事実と先程の観察結果とを比較考量してみると、次のような結論にならないか。つまり科学的に証明されてのことだが、皮膚の色の相違を特定人種排斥政策の論拠とするのは誤りだとする人種一源論の正しさを、これが証明することになりはしないかということだ。

（補注）マーク・トウェインのこと

本田増次郎「英米雑俎(11)Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 8 月 15 日

Mark Twain には劇場などで会つたが、今の第一高等学校の小島教授や故箕作博士などが少年学生として New England に居つた時の親切な小父さんであつた。彼が Bear and Fox Inn の掘つ建て旅館に居た時の humour が今に伝説となつて居る。The partition is so meagre that one can hear a man in the next room change his mind!と云つたやうな事だ。

日本式の宿屋に泊つて隣室のヒソ々々話しを聞くに慣れた我等には珍しくもない事ながら、言ひ回しは流石 humourist たるに恥ぢぬ。滑稽文学で生涯を貫いたとは云ふものゝ、主義道徳の人で他人の借金まで引受けて奮闘した事が、彼をして天下に重きをなさしめた要素である。晩年 Hudson River の上流に summer cottage を構えて居たのであるが、自分の New York 滞留中の一夏 thief にやられた。翌朝翁は早速屋前に notice を出して、「泥棒君に物申す。昨夜は尊来御苦労に存ずるが、折角 silver（銀製の食器）と思つてお持帰りの品は実は出先き用の安物。それでも宜しくば何度でも御取り下され。但し、安眠妨害は平に御免蒙りたいから、階下の戸棚の such and such place に備へ置きます。」梁上の君子もこれで訪問を打ち切つた。

自由貿易と平和

熱帯ハワイの明るく、強烈な色彩とは打って変わって、海から見たサンフランシスコの町の第一印象は、何とも変わったところに来てしまったということだった。石と煉瓦で出来た建物が整然と並んでおり、1 つの調和が生み出されている。日本人がこの風景に馴れるのには時間がかかった。そんな思いに耽っている間もなく、やがて通関手続きで拘束され、しばらくの間は、閉ざされた空気と、混雑の渦中（無論、大型汽船での生活と比較してのことだが）に置かれることになった。荷物を解きまたそれを詰め直す。詰問と返事のやりとりがなされるが、それは友好的なほほえみを伴うというよりは、むしろ無愛想なものだった。この経験だけで、自由貿易主義者となるに、ほとんど十分だった。英国に上陸する時はいつも、英国に来て良かったと思うとともに、検査は煙草と酒だけなのに、それさえなければもっといいのにと、願うくらいなのだから！ところが、税関を無事に通過して自国に戻るやいなや、われわれはこの問題を不問に付し、まるで一国の収入のためには保護政策や輸入関税の賦課が人類全体にとっての正義であるかのような物言いをする。金持ちで自由主義の米国人が輸入関税を廃止出来ず、また輸入関税が人口の多い産業諸国にたとえわずかであっても害があると主張するのであれば、米国の良き友人たちは、キリスト教と平和のメッセージの中から一体何を、西洋から東洋に持ち込んだと言えるのだろうか。

しかしながら、当時はまだカリフォルニアで日本人排斥の運動が起こっていなかった頃で、こういった不平不満もそこそこに、私は西洋のホテルで、旅仲間の日本人と一緒に大

きな涼しい部屋におさまり、夜は東京で知り合いだった米国人の家を訪問した。至る所に白い肌の人々がいること自体が、ただただ驚きだった。ここが自国ではなく、白人の国なのだということが、なかなか実感出来なかったのだ。

耳に蝉の声が

汽車の旅の 2 日目、午後中ずっと蝉の鳴き声が聞こえる気がした。その音を意識すればするほど、奇妙な感じだった。機関や車輪の音が正常な聴覚を妨げることはなかったし、また列車がスピードを上げて走っている場所はと言えば、広大な砂漠のようなものが続いているだけで、そこには昆虫が隠れるような木も見えなかった。翌日だったかその次の日だったか、医学学会からニューヨーク州へ戻る医師が私の寝台車両に乗ってきた。ニューイングランド人を絵に描いたような人で、すぐに日本について興味を示し、一緒のテーブルで食事や話をしようと誘ってくれた。彼の懇切丁寧な説明によれば、私の耳鳴りはロッキー山脈全体の海抜が高いため起こるもので、また唇が乾いたりひび割れたりするのは、砂漠にあるアルカリ性の砂が原因だということだった。明治 23（1890）年、富士山に登った時、頂上に行くに連れ、自分の皮膚も含めてあらゆる物が黄色く見えたが、結論として、どうやら私の場合、高く登ると急激な黄疸症状が出てくるようだ。しかし下山の時には、麓に到着する前に症状は完全に消えていた。

オグデン〔ソルトレークシティ北方 50 キロ〕では朝散歩をする時間があり、駅の側に「東京」という名前のレストランを見つけた。日本人の経営になるものか否かはともかく、こんな遠い所に日本を発見して、なにかしら愛しい気持ちがこみ上げてきた。もっともそれが愛国的感情なのか、国際的感情なのか定かではなかったが。ソルトレークを汽車で横切り、自分が突き進んでいる大陸が如何に広いかを実感し、大きな海原にまた出られたらどんなに安堵出来るだろうかと考えた。恐らく、巨大な大陸の内部に入り込むと、島国に住んでいる人間なら誰でも、似たような息苦しい感覚を持つだろう。

本物のヤンキーのように

8 月 8 日午後 6 時、アメリカ合衆国の一方の端にあるにもかかわらず、人類の巨大な中央広場と呼ばれる合衆国の大都会〔ニューヨーク〕、その真っ直中に、私は 1 人で立っていた。じゃまな荷物は全てデポー〔停車場〕（米国に上陸してから知った新しい言葉）に残して、現在三井物産ニューヨーク支店長の瀬古氏〔瀬古孝之助：その後取締役、監査役を歴任、昭和 11（1936）年退任〕に会うため、三井物産を訪ねた。瀬古氏は新婦を伴ってシベリア丸に乗っており、我々乗船客の仲間の 1 人だった。既に事務所にはいなかったが、自宅の住所は知らず、他の友人の住所も解らなかった。そこで、1 人で宿泊場所を確保せねばならない羽目に陥った。ブロードウェーで最初に行ったホテルは、残念ながら満杯だった。真夏にあれほど大きなホテルなのに、あれほど多くの逗留客がいるなんてあり得るだろうか、と思案に暮れながらホテルを後にした。通りを 20 分ばかり行き来しながら、別のホテルを探したが、突然冴えた考えが頭にひらめいた。というより、冴えない自分の風体に気が付いたのだ。旅のせいで服は土埃で汚れ、手には小さな鞄 1 つだけしか持っていないのだ。そこで今度は余り気取らないホテル〔セント・デニス〕のフロントに近づいて行って、つつましく、泊めてくださるなら前払いしますがと、切り出した。いいですよ。どうぞ！その温かい返事がどれほど嬉しかったことか。6 日間続いた旅から解放されてホテルの部屋で風呂に入りすっきりとはしたものの、夜着られるような乾いた衣類は持ち合わせていなかった。そこで巨大なバスタオルにくるまって眠った。こうして私は本物のヤンキーになっ

た。次の日の朝、朝食に降りる前に、電話の受話器が日本で使われている物と如何に違った造りになっているかを確認し、覚えておこうと受話器をいじくり回していた。すると、私がかけもしないのに、もしもし！もしもし！という声が耳をつんざいた。私はぶつぶつもぐもぐお詫びをして受話器を置いた。すると今度は通話の相手からの発信音が大きく、何度も、鳴り響いた。そんなわけで、御上りさんが階下の都会のお嬢様とお話しをしたくて、と私は言い逃れをするより他にしかたがなかった。

2 人のポーランド系米国人

動物虐待防止会本部や野良犬や野良猫を保護する施設、マンハッタン・ビーチやコニーアイランドの夏の人混み、「タマニー！タマニー！」と何度も繰り返す声が記憶から離れない「ファンタナ」という名のミュージカル・コメディ〔ガス・エドワーズ作曲、ビンセント・ブライアン作詞のヒット曲「タマニー」を核としたブロードウェー・ショー〕、デパートで買ったが少年用のサイズでも小さくしなければ着られない薄手のスーツ、そんなニューヨークの諸相を知るようになってから、ある夕べをセンチュリー・クラブで、故ザリンスキー少佐〔エドゥムンド・ルイス・グレー・ザリンスキー：大砲の開発で知られる〕の招待を受けて晩餐を共にした。彼はボストンのマサチューセッツ工科大学の人で、日露戦争勃発以前、来日したことのある人物だ。鳩山夫人が紹介してくれたお陰で、直ぐに親しくなれた。その席ではニューヨークの上流社会に属するエリートたちに会った。親愛なる少佐どのはポーランド人で私が尊敬する 2 番目の有名人だ。もう 1 人は、米国聖公会の故セレシェフスキー主教で、深い学識を感じさせる流麗な文体で聖書の中国語訳をした人物だ。

8 月の第 1 週には早くも米国の新聞界で日本を非難する動きが始まっていた。おそらくこの動きはロシアと日本の平和交渉の開始に先鞭を付けるものだった。ザリンスキー少佐は、ある影響力のある週刊誌の記事〔“Japanese Victories as a Menace to the World” by Dr. Albert S. Ashmead *New York Tribune* July 23,1905〕を示して、私に反論するよう示唆してくれた。その話題の記事はほとんど見向きもされなかったが、今でもかすかにその内容を記憶している。そこでは日本人が血に飢えた国民だということが断言されていた。なぜなら、日本人の赤い色は西洋の場合のように単に危険を意味しているのではなく、心臓に近い何かを指し示しているからだと。と同時に、西半球のドラゴンが持つ邪悪な性質は、言うなれば架空の龍をあれほど大事にする極東のアジア人のせいだと。そして私には理解出来ない理由をもって、日本人種は黒人に似た人種だと。

人慣れした蠅

ロードアイランド州のニューポートにはフォールリバー汽船の「ピューリタン」〔清教徒〕号に乗って行ったが、生まれて初めて、中国人が「臭虫」と、日本人が「南京虫」と呼んでいる、とにかく英語では絶対に表現したくないものを経験することになった。考えてもみて欲しい！遠来からのお客の為に、皮肉の意味を感じてもらえるように、わざわざそんな威厳のある名前を、すてきな客船に冠したのか！どこの国がこのやっかいな寄生虫の原産国なのかは知らないが、どうやら地上で最も清潔な場所に侵入して来たようだ。

日本人はそれを中国からもらったのだが、それは良いもの、悪いもの、どうでもいいものの全てをもらったのと同様だ。しかし、中国人が吐き気を催すような名前を付けたことから判断すると、我々の良き隣人である中国人は、将来、南京虫を身に付けなくなるのだろう。

こんな美しい水辺に、ペリー提督の墓はあり、多くの日本人が訪れている。そこで私は人慣れした蠅を見た気がした。私は英米の動物虐待防止会の本を読んでいたので、英米では動物が優しく扱われているのだから、虫でさえ人を恐れないのだろうと、勝手な先入観を抱いていたのだ。とあるレストランで、テーブルの上を2、3匹蠅がゆっくり歩いているのが目に入ったが、指で触っても逃げないのだ。そこで、私は米国人の小さな生き物を愛する気持ちとその驚くべき結果に、心から賛辞を贈った。次に同様な光景を目にした時、このことをウェイトレスに話さない訳にはいかなかった。ところが次の言葉で私は幻滅の谷底に突き落とされたのだ。「蠅取りの毒にやられたんですよ！」

ニューポートに 5 日間滞在し、Y.M.C.A.の会合と、セント・ジョージ教会での夕べの祈りが終わった後の集会でも講演をした。何と寛大な国なのか。見知らぬ人物に好き勝手に話をさせてくれるとは。しかも、こんな知的レベルの高い聴衆を啓蒙する資格が私にはないのに。

日本外交の翳り？

次には、ボストンへ行く途中、アスカム湖〔現在はスカム湖と呼ばれている〕にあるベーコン女史のディープヘヴン・キャンプ（補注 1）に立ち寄った。それはニューハンプシャー州にあり、そこで 2 週間彼女の客人となった。コネティカット州ニューヘヴン出身のアリス・メイベル・ベーコン女史〔ヴァージニア州ハンプトン師範農学校（黒人の為の農学校、現ハンプトン大学)、華族女学校、女子英学塾講師を歴任。黒人女性対象の看護学校ディクシー病院看護学校の創設でも知られる〕は、『日本の少女と女性たち』『明治日本の内側』『神々の国で』の作家であり、東京では華族女学校と津田女史の女子英学塾で長年に渡り教鞭をとった。彼女はニューイングランドの学生時代に大山侯爵夫人と親しかったので、社会的地位の高い日本人女性を知るという珍しい経験があり、当時は米国に戻っていたが、引き続き日本に対する興味を強く抱いていた。滞在の 2 日目、すなわち明治 38（1905）8 月 23 日には、その時同州の町、ポーツマスで開催中だった平和交渉での妥協案のことが、しきりに取り沙汰されていた。その 1 週間後、日本が妥協案〔日本がロシアに対する賠償金請求を取り下げる代わりに、樺太北部の割譲を受けるという日本側提出の案〕を放棄した〔日本が賠償金も樺太北部の取得もあきらめた〕という確報が入り、皆からは友情あふれる慰めの言葉をもらったが、その日にあった日食が我が国の栄光にかかる影に思えて仕方がなかった（補注 2)。

自由主義者であるベーコン女史は、南部の黒人の教育や福祉全般にも深い関心を持っており、ある日、私の滞在中、自ら設立したディクシー病院〔バージニア州ハンプトン所在〕のための慈善の催し〔ディクシー・ティー・パーティー〕を開いた。その催しには大勢、近隣に滞在中の夏の訪問客も招待されていた。森の中でお茶が出され、骨董品が売られ、即席占い師やアマチュア歌手も、この行事で収入を稼いでくれた。私も片棒を担いで、「柔道」の講義と実演をした。ネビル・フォードという名の米国人少年をアシスタントにして、1 時間半の間に 3 回実演をした。フォード君には落ち葉をマット代わりにして事前練習をさせておいた。この国際的芸当だけでも 27 ドルの収益が上がったが、これもひとえに米国人の富と善意のなせる技かと驚いたものだ。

新たな発見は黒人の音楽的才能についてだった。キャンプの台所仕事などをするため、南部から黒人の男女が来ていたが、日曜毎に歌を歌って聞かせてくれた。その歌声を聞いていると、彼らを一括りにして米国で「カラッド・ピープル」〔黒人：色の付いた人の意〕と呼ぶのはおかしいと感じた。それでは黄色や茶色は色ではないことになる！私に言わせれば、中国人や日本人は黄金人種、エチオピア人は鉄色人種ということになるだろうか。

だからといってコーカシアン人種が銀色人種であることを潔しとはしないだろうが。

（補注 1）ディープヘヴン・キャンプ

本田増次郎「英米雑俎(11)Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 8 月 15 日

山水双美の避暑地では New Hampshire 州の Asquam Lake へ行つた事がある。随分大きな湖水で周辺に数ヶ所も resorts があり villages もあるが、自分の遊んだのは Miss Bacon の経営にかゝる Deep Heaven Camp といふのであつた。嬢は多年華族女学校と津田梅子女史の英学塾とに教鞭を取り、又日本の婦人其の他に関する著書で名を成した人である。Bacon といふは Yale 大学の所在地 New Heaven 市の旧家で、一族に名士が少なくない。平民国のアメリカでも矢張り血統は重んぜられ、Washington や Lincoln の後裔遺跡は非常に尊ばれる。仏蘭西へ行つて Napoleon 崇拝の盛んなのに驚くと同様である。

Deep Heaven Camp はベイコン嬢の持ち物で、自ら主婦となつて congenial friends〔気心の知れた友人〕の数家族を accommodate〔収容〕し、兼ねて interest〔世話〕して居る南方黒人学校の男女に仕事をしつゝ避暑させるのである。此処は全く Onteora と趣を異にしたる free-and-easy life（無礼講）をやるので、先づ水際の林間に幾棟かの小屋があつて、其の中には living room と号して日中も夕方も人の集まる客間のやうな処があつて、其の二階にも若干の寝室がある。一軒は食堂兼 Kitchen でも一軒は business office 兼 Miss Bacon’s private rooms である。雨の降らぬ時は tent もなしに hammock で眠る人もあり、天幕生活を営むものもあり。朝は起きると水泳と洗面とを一緒にすます者あり、終日 sweater で済まして coat を衣る必要もなく、食卓には linoleum の table-cloth がかゝつて大鍋大皿から勝手に取つて来てたべる。野菜は大抵 Miss Bacon’s farm から馬車で取つて来る。其の他の食料品は定期配達してくれるといふ簡易生活である。近辺に立派な家を構えて居る人もあるが、此大 Camp は即ち一家の camping を少し拡大したものである。

内部の娯楽としてはweekly文学会があつて”Barque and Bight”〔小帆船と入江〕と名づけてある。これは犬のbark and biteに響かせて一面Miss Baconの犬好きと勝手にウナツたり跳(おど)つたりするとを現はし、又小さき入江を船で渡つた処の岩の上で開会するからである。夕食後bonfire〔焚き火〕を焚いて一週間中に投書筐(かご)に集つた詩文を朗読し、sweet cornを炙(あぶ)つてたべたりsingingをやつたりする。又Sunday eveningには黒人の唱歌が折々催されて、彼等特有の美音を聴く事が出来る。話し声でも黒人のは多くmusicalであるが、気分も音楽的に出来て居るらしい。自分の行つた 1905 年の夏はPortmouthの平和会議中で、其の結果を知つて両三日大に塞ぎ込んだのも茲であつた。しかしDixie（合衆国南方の事）黒人学校寄付のbazaarが催されて、自分にも柔道の店を出してはとsuggest〔示唆〕された時は、まだ戦勝の元気旺盛な事とて速に快諾した。林中で落葉の道場を用ゐて 15 歳の米人少年に二三日形式(forms)を教へて、扨(さて)当日となるとthirty-five cents entranceとかで切符を売らせ、二回lecture and demonstration（実地）をやつて甘ま々々二三十どるの働きをした。勿論来客は湖上各方面から招き集めたので、婦人でpalmistry（手相観）の真似をして十幾どる拵(こしら)へた人もあつた。

現在のディープヘヴン・キャンプは”Rockywold-Deephaven Camps”と呼ばれているが、

これは同キャンプを手伝っていた友人のマリー・アリス・アームストロングが隣地を購入し、自らもロッキーウォルド・キャンプを始め、一体で運営するようになったためである。

（補注 2）ポーツマス講和会議の報道
明治 38（1905）年 8 月 30 日、『ニューヨーク・タイムズ』の見出し
平和成る。日本、屈服
賠償金なし。ロシア、サハリン半分を獲得
〔日本は既にサハリン全島を占領していたので、逆にロシアへ割譲する形となる〕
双方が妥協
捕虜諸経費は実費精算される予定
涙にくれる小村侯爵
ミカドの降伏を思い、打ちひしがれて----休戦協定手配----条約案起草中
（訳：長谷川勝政）

本田は「其の結果を知つて両三日大に塞ぎ込んだ」（補注１参照）と書き残しているが、日本国内では騒擾事件まで起きた。賠償金の支払いが無く、既に占領している樺太全島が割譲されないことを知った国民の多くは、日本は戦争では勝ったが、交渉では負けたとの思いに捉えられた。しかし、これ以上の戦闘継続が不可能なことは、日本陸軍そのものが熟知していた。したがって日本政府にとって、戦争の終結が実現出来れば、それはポーツマス会議でも勝利したことに等しかった。

ペルシャの知り合いたち

ニューハンプシャー州のマンチェスターで 1 晩を過ごしたが、これは私の母親代わりであるアルドリッチ婦人の姉妹に当たるレーン夫人とそのご主人の家でだった。そして次はアメリカ合衆国の文化の中心地で、「世界の中心」ともいえるボストンに移り、数日間だったが滞在した。そこの大きな靴製造工場では、日本の労賃や工賃がはるかに安いので米国製品を日本に輸出しても儲からないという話だった。マサチューセッツ工科大学は、夏期休暇中だったのでこれといったこともなかったが、大いに興味が持てた。ある日の午後公園で休んでいると、熱心なクリスチャン・サイエンス〔信仰により医学的治療なしで病気が治癒するとするキリスト教の一派〕の信者が近寄ってきてエディ夫人〔同教の創始者メアリー・ベイカー・エディ〕の信仰について詳しく語ってくれた。ここボストンでも、Y.M.C.A.が光栄にも、「何でもいいから」会員に話すよう依頼してくれた上、親切にもハーバード大学を見学するため秘書まで付けてくれた。ケンブリッジでは、ペルシャ人の紳士に娘が嫁いだ名士の上流夫人の家を訪ねた。この国際結婚のカップルには、数年後またワシントンで再会するのだが、その時にはご主人はペルシャ公使館で代理大使をしていた。私がペルシャ人に会ったのは、このボストン滞在の時が２度目だった。25 年前の奈良で、米国聖公会派遣のドーマン夫妻と知り合ったのが最初だった。このドーマン氏の紹介で、後にニューヨークのコロンビア大学で、彼のいとこからトルコ語を学んだ。

ローズヴェルト大佐の姉

しかし、先走りして話し過ぎてはいけない。話を元に戻そう。このボストンからは、ゴールズウェイト婦人とその一族に会うため、コネティカット州のファーミントンに移動した。ここでもまた、視察に行った小学校で子供たちに話をする機会を得た。自分が持って

いる日本の物を全部見せてあげられて愉快だった。元大統領のローズヴェルト大佐〔セオドア・ローズヴェルト：第 26 代アメリカ合衆国大統領。米西戦争の英雄。棍棒外交を展開、日露講和の仲介に尽力〕の姉に当たるコウレス夫人〔A. バミー・コウレス〕が、そこに住んでいた。私は今でも、あの魅力的な村の地図を脳裡に描き出して、夫人の家を指し示すことが出来る。

それから、イェール大学のお膝元、ニューヘヴンを訪れた。鉄道の駅から、既に亡くなっていた友人であるストアラー婦人の家に直行したが、4 人の日本人学生が家の管理を続けていた。彼らは、遺言執行人が遺言の条項通りに手続きを終えるまでそこに留まっているのだった。親切に皆で墓に案内してくれた。枢密顧問官の岡部長織（ながもと）子爵〔外交官。ニューヘヴンのイェール大学ならびにケンブリッジ大学の留学経験がある〕以来この方、如何に多くの日本の若者がこの大学町の彼女の家で生活を共にしたことか！

正真正銘の礼儀作法

フィラデルフィアに行く前にニューヨークに戻り、そこから歴史に冠たるウエストポイントの陸軍士官学校を訪れた。私を驚かせるべく待ちかまえていたのは、「フリルテーション・ウォーク〔馴れ初めの道：士官学校生徒とデート相手専用の遊歩道〕という、何ともほほえましい名の小道で、それは大河ハドソンに面し、木々に覆われた美しい場所にあった。民主主義の国では、軍事訓練の厳しさにさえ、恋愛感情の味付けがなされて人間味を帯びるのかと思われた。しかし、アカデミーの責任者であるミルズ将軍〔ネルソン・アップルトン・ミルズ：ザリンスキー少佐の南北戦争時代の上官に当たる〕の礼儀正しさと、もてなしの心は、今でも私に強い印象を残している。ミルズ夫人から招待を受けた昼食を挟んで、自ら私を各部室に案内し、さらには学校のあらゆる施設を見せてくれた。如何に立派なザリンスキー少佐の有力な紹介があったとしても、日本であればミルズ将軍の地位にあるような人物が、見知らぬ一個人のために、たとえそれが可能だったとしても長時間を割き相手をするなどということはないことだ。平等と無骨を好む民主主義とこの美風を繋げて考えるのはかなり困難だ。しかも私の経験では、この美風は英国にも存在している。そこでこう考えてはどうだろうか。つまり、訪問自体が尊敬の証に他ならないから、それに答え丁重な歓迎をする為には、止むを得ない場合を除き、部下に任せるべきではないと考えるのだと。これに先立つ何年も昔、日本でのこと、僕は生徒たちからたくさん来る見舞い状や年賀状に返事は書かないよと、たまたま礼儀作法にやかましい友人に話したことがある。その時、君は年下の人に話しかけられても、忙しいという理由で返事をしないのかいと、やり込められた。

ロシア人と友達になる

いつまでも気前のいい人たちの厚意に甘えていることは出来ない。生活の糧を得るために彼らの中で働かねばならないのだ。友人のエルキントン氏をスポンサーとして米国で生活を始めるという考えで、私は兄弟愛の町〔フィラデルフィア〕を訪れた。それは 9 月も終わりの頃で、日本の諸事を題材にした講演で、自分の腕、いや自分の舌を試してみたかったのだ。8 ヶ月は、正統派のクエーカー教徒の家〔リッピンコット家〕に寄宿し、1 ヶ月はフィラデルフィア郊外にあるエルキントン氏の客人となった。多くのフレンド派の人々やその施設を観察しているうちに、私はその宗教上の教義、教育や慈善活動、フレンド派特有の国際的、平和主義的関心事にも親しむようになった。また、ワナメーカー氏〔ジョ

ン・ワナメーカー：デパートメントストアの先駆者〕の日曜学校や、そこで開かれていた全国日曜学校会議にも通い、注意深く観察した。ある日は、裕福なお年を召した婦人のクエーカー教徒に招かれて郊外の邸を訪れたが、そこで 3 人のシリア人に会った。この博愛主義の婦人は 25 カ国を下らない国籍の人たちの世話をしているということだった。そんな人物を目の当たりにしていると、排他的な愛国主義は罪に思えてくるし、世界中が真の同胞として生きることの出来る日の来ることを、待ち望まないではいられない。10 月 15 日、ポーツマス条約批准日の翌日、実に不思議なことに、私はドゥクホバー〔ロシアの黒海近くに定住していたコサックが教会の儀式を拒否、その結果生まれたプロテスタントの一派〕の若いロシア人と、フレンド派の集会が終わってから握手をした。東京時代に会ったことがあるロシア皇帝の臣民といえば、故ニコライ司教〔ニコライ・カサトキン：ロシア正教会宣教師。神田のニコライ堂を創建〕や外国語学校の教授たちといった、ほんの数人でしかなかったが、今でも、日本の真の友人として思い出す。しかし、あの不幸な戦争があった直後は、自分たちが如何なる国に暮らしていようが、ロシア人と友になることが、人類に対して犯した罪の償いをするようなものだと感じたものだ。いまやかつての敵対者は固い友情で結ばれているのだから、これからは負い目を持つ私の側に、身代わりの苦行が課されることは、もはやないだろう。

婦人参政権運動

この後、有名なブリンマー大学〔フィラデルフィア西方 18 キロ所在の名門女子大。明治 22（1889）年、津田梅子が 2 度目の留学をした大学〕を訪問し、学部長のトマス女史〔マーサ・ケアリ・トマス：チューリヒ大学で博士号を取得後、女性への本格的高等教育を施すことを目的とするブリンマー大学の創設に参画。初代学部長、後に学長。徹底したフェミニストとして知られた〕と昼食をご一緒させていただいた。話題は婦人参政権運動のことになったが、私は、トマス女史がゆるぎない婦人参政権論者だということを知らなかったので、私は次のように言った。日本に関する限り、女性が扇動的活動をしなければならなくなる前に、女性に帰属する権利ならなんでも、男性は与えるでしょう。しかし、現在のところは、男性が正しい行いを出来るようにする教育で手一杯ですと。これを聞いていた有能な彼女の秘書が、「男性から与えられる権利なんて、私ども女性は手にしたくない最たるものです。与えてもらうのではなく、戦って勝ち取らなければなりません！」日本女性の地位を上げることに関しては、私は今でも同感だが、この好戦的な態度については熟慮すべき点が多々あると思う。憲法上の権利を獲得する為に、我々は血を流してはいない。だから、四半世紀に亘る代議政治を経てもなお、いまだに官僚主義の残滓を大目に見ている状態だと言う批評家もいるし、ドイツを模範にした長年に亘る国家的訓練がなかったならば、中国の 18 省の統一より、300 もの小さな「大名」を統一することの方がはるかに困難だったろうと反論する批評家もいる。どちらの意見にしても一理はある。ヨーロッパの婦人や社会の場合は、求める物を戦い取るとは言っても、それは威嚇によってではなく、より高い共通の目的のため、男性や国家主義者と共同して獲得してきたのだろう。ブリンマー大学が、津田女史の友人たちの惜しみない支援をもとに、1 度に 1 人宛、日本人留学生を過去何年にも亘って教育してきたことは、今更言うまでもない。

ユダヤ人の理想主義

私はフィラデルフィア市の内外で、頼まれれば出かけていって、場所や時間を問わず話をした。最初の有料講演は、日本女性の社会生活をテーマに、女性会員のみで構成された

ニューセンチュリークラブで開いた。2 回目は、ペンシルヴェニア州の州都〔フィラデルフィア〕に近いニュージャージー州の町でのことだったが、私立の陸軍士官学校が開いた慈善集会の会衆を前に、幻燈を使って日本人の生活全般を説明した。どちらも、友人の推薦で実現したものだったが、日本円に換算すればなかなかのいい収入で、1 時間の講演で日本にいた時の俸給の半月分に当たる収入になった。エルキントン氏は、私に講演の仕事を自由にやらせる前に、スポンサーとして格別の気配りをして、無料講演でした私の発言を批評してくれた。たとえば、日本人が一般的に持つ西洋の女性の洋服に対する印象について述べた時、私の話のポイントが不明瞭なため、西洋人の女性の服装が体の線がわかってみだらだという趣旨を、話を聞いていた女性の中には理解出来なかった人もいたと、後になってから教えてくれた。またその頃のことだが、米国のような国際的で人種が雑多な国では特に、人種的感情を害するような話題に踏み込まないよう注意しなければならないということも学んだ。精神薄弱者の大規模な施設で昼食を食べていた時、中国人と日本人はどう違うのかと聞かれたので、中国人とユダヤ人の経済的資質の比較を話し始めた〔中国人は金儲けに長けていたので、東洋のユダヤ人と呼ばれていた〕ところ、招いてくれた婦人が「お隣のご婦人はユダヤ人の方ですよ！」と、気まずくならないよう、即座に注意してくれた。その後、私はユダヤ人の理想主義の事例**（補注）**を余りにも多く目にしたので、もはやユダヤ人に対するこれまでの偏見〔ユダヤ人は金儲けしか考えていないという偏見〕をそのままの形で受け入れることは出来なくなった。

（補注）ユダヤ人の理想主義の事例
本田増次郎「国民的、人種的偏見」『オリエンタル・レビュー』大正 1（1912）年 12 月号

（前略）
私が知る裕福なユダヤ人たちは、同じく私が知る最も自由主義的で洗練されたドイツ人、英国人、米国人たちと較べても決して引けをとらない。ユダヤの知識人たちは既に正統派のユダヤ教を信じておらず、またキリスト教も信仰していない。当然のように、倫理文化運動や万国人種会議〔明治 44(1911)年 7 月、人種差別撤廃を標榜して英国で開催〕といった非宗教的、国際主義の運動に共感を示している。
（後略）
（訳：長谷川勝政）

倫理文化運動

米国やヨーロッパ（ほとんどはドイツ）の倫理文化運動は、日本人学者の間でも注目されている。おそらく国の教育から宗教を排除するという我が国の考え方に似ているからだろう。ドイツ人の哲学者〔フィリックス・アドラー：ニューヨークに倫理文化協会を創設、倫理文化運動を推進した〕が万国倫理学雑誌に書いた随筆〔同誌 1890 年 10 月号に掲載されたアドラーの論文”The Freedom of Ethical Fellowship”か〕を、私は明治 24（1891）年という早い段階で、日本の雑誌向けに翻訳したことがあったので、この編集者と知り合えたのは大きな喜びだった。最初に会ったのは倫理文化協会のフィラデルフィア支部の事務所でのことだったが、後に自宅も訪問し晩餐を共にした。しかし、どういう訳かこの運動をつぶさに見聞きし、フィリックス・アドラー博士の学識あふれる講演を聴くにつけ、この運動に対する私の興味は次第に冷めていった。これはおそらく、私自身の宗教観からというより、このいわゆる倫理教育が依然として古い信仰を基礎に置いており、国際的性格を持ってはいるのだが、伝統的なユダヤ教やキリスト教を棄てた人々にのみ人気がある

という印象を持ったからだろう。私はエスペラント語〔ザメンホフが提唱した国際共通語〕についても同様な印象を抱いている。なるほどエスペラント語は小気味いいほどすっきりし、規則正しいし、またその主唱者たちは国際主義を掲げて運動を展開しているのだが、ヨーロッパ言語に専ら基盤を置き、他の言語のことを全く眼中に入れていない。西洋の言語を全く知らない、ましてやアルファベットすら知らない中国人や日本人にとって、エスペラント語は、英語やフランス語とほとんど同じように習得は困難だろうし、また、西洋で広く採用されるのでなければ、実用性の面で、この二つの言語より明らかに劣っている。れっきとした国際法でさえ、人道的でもなく道徳的にも正しいとは言えない少数だが力を持った人々の見解や感情を体現してしまっているのではないかと、危惧するのだ。

犬の名付け親になる

だが、我々日本人の流儀作法の中にも、国際親善に貢献しないものがあることは認めねばならない。フィラデルフィア郊外に住むある裕福なクエーカーの老婦人は、社交界シーズンになると毎月、近隣の日本人を皆自宅に呼んで晩餐を振る舞い、慈悲深いキリスト教精神を発揮していた。このある集まりでのこと、日本人女性と結婚し、東京に住んだこともある元ハワイの外交官の娘さんが招待されていた。（この物語をもし読まれたら、お嬢さんよ、許して欲しい。私はあなたを非難しているのではなく、我々の日本をしかっているのだから。）いつも通り、内輪で順番に聖書を読み、老婦人が祈りの言葉を述べた後、それに対して日系アメリカ人の娘が「こんなお仕着せがましいことがなければ、晩餐はもっと楽しいのに！」と、やさしい婦人の聞こえるところで、これ見よがしに日本語でつぶやいたのだ。このあてつけは純情なM婦人に通じないことに乗じたものだった。この不作法な悪癖は、キリスト教や米国の影響外のところで身につけたものに違いない。この 10 年間、その娘さんにしても母方の日本人にしても、個人としても集団としても、お行儀の悪さを発揮しているのではないかと思われる。

明治 38（1905）年 11 月 3 日は、私の日記は赤い字で書かれている。その日はペンシルヴェニアの一婦人の若いテリア犬に名前を付けてやって、天長節を祝ったからだ。彼女は日本を旅行したことがあって、雌の子犬にいかにも日本人らしい名前を付けて貰いたいと言っていた。そこで「きく」（菊）とするところを、親愛の情を込めて「きいちゃん」と変えて命名してあげたところ、とても喜んでくれた。

ボス政治と町の繁栄

フィラデルフィア市政の改革を目指す 70 人委員会〔明治 37（1904）年創立〕の秘書をしているC氏〔コープ氏〕によれば、市政の腐敗は考えられる最悪の状態だという。そして、こんな場合日本ではどう対処するのかとたずねられた。私は次のような例を挙げて返答した。

故星亨（ほしとおる）氏〔渾名は「押し通る」、強引な政治手法で知られた〕は嘗てワシントンで駐米公使をしていた。個人的な伝手もなく、社交界では余り目立たない存在だった。うわさでは、時間のほとんどを読書とタマニー協会〔民主党の政治団体。汚職と腐敗の代名詞となっていた〕の手法の研究に費やしていたという話だった。しかし日本に戻ると、政党〔憲政党〕の有名な党首になり、東京市政で辣腕を振るった。ところが東京市議会における星氏の影響力を、筆舌に尽し難いほど悪質だと政敵が非難するようになった。その結果、ある天気のいい日〔明治 34（1901）年 6 月 21 日〕、市参事会室でのこと、愛国的な剣術師範〔伊庭

想太郎〕が市会議長の脇腹を鋭い刀で深く刺し、この問題に決着をつけたのだ〔星は即死、伊庭は無期刑となり小菅刑務所で病死した〕。

もし政治改革がそれほど劇的に達成されるのなら結構なことだと、C氏は考えたようで、続けて、米国独立宣言の地〔フィラデルフィア〕を、如何に長年に亘り、如何なる不正行為を用いて、ボス政治が毀損してきたかを私に話して聞かせた。そして、最悪なのは、人々が自分たちの繁栄に満足しきっていて、公共のことに無関心になることだ。極めつけは、ボスが自分たちの流儀で金儲けするのは、彼らの勝手であり、正直な市民はそれなりの方法でもっと稼げばいいとさえ主張するのだと。どうやらこの友人の言う通りだ。なぜならその年に達成された改革は、数年も続かなかったからだ。日本でも富と腐敗の増加は何らかの相関関係にあると思える。

２人の大きな主教

友人が行う「柔道」の模範試合を手伝うため、ニューポートを再訪して講演した。そして、海軍訓練大学の 1,300 人と、セント・ジョージズ・スクールの少年たちの前で、それぞれ行われた柔道のデモンストレーションに加わった。翌日、セント・ジョージズ・スクールの校長〔ハンティントン校長〕が、最下級のクラスの一つが書いた「柔道」の行事に関するささやかな記事を見せてくれた。その中で、私はなんと「日本の大使」と呼ばれていたのだ！以前ニューポートに来たときに訪問したことのあるボストンのご婦人、ロジャース夫人宅と米国聖公会牧師宅で、晩餐をご馳走になったが、どちらの家にもイタリア人のボーイが雇われていた。日本で私が知っていたイタリア人といえば、紳士だけだった。偉大なローマ文明のお膝元から来た人からもてなしを受けるというのは、当然窮屈なものだった。サンフランシスコで最初に米国人のウエイターを見て感じたのも、ほぼ同様な印象だった。日本では私が目にした西洋人と言えば、学者、宣教師、それに事業家だけだったから、黒人と白人が同じ立場に立って従者として働いているのを見るのは、精神的なショックだった。

フィラデルフィアに戻る途中、ロードアイランド州の州都、プロビデンスに立ち寄り、故マクビッカー博士を訪ねた。米国で「最も小さな監督管区の最も大きな主教」で、主教の大きな掌の中では、私の小さな手は見栄えがしなかったが、主教はその寛大な心で、私と日本に深い関心を示してくれた。もう１人の大きな米人主教、フィリップ・ブルックス博士の方は、明治 24（1891）年、東京の教会でその説教を聞いたことがあったが、大変な早口で、当時は私の英語の知識が少なかったこともあり、時折しか理解出来なかった。

下心ある腐心

フィラデルフィアのH夫人はアイルランドの未亡人で、近くのローマン・カトリックの女子学校に関係していた。設備の整った学校を見せてくれ、さらに、非常に丁寧かつ行き届いた心遣いで接してくれた。そして、遠い国からやって来た講演家自らが、映像を使って無報酬で日本のことを話して下されば、少女たちは大いに感謝するでしょうと、折に触れ勧めることも怠らなかった。そこでとうとうある晩、少女たちを楽しませることになった。聴衆の多くは幼く、英語を話さない家系の出なのだから、易しい言葉を選ぶのがなかなか難しく骨の折れる講義だった。講義を終えると、1 人のギリシャ人の少女が涙をポロポロ流しているという。彼女は講演者も自分同様に同胞から何千マイルも離れた所にやって来て、孤独で寂しい思いをしているに違いないと同情して泣いていたのだ。少女の涙は私には値千金に感じられた。ところが、この記憶に残る日が過ぎてから、あの夫人がこの世

界に私が存在することを忘れてしまったかのように振る舞うのだ。思う存分脚光を浴びて、その後急にお払い箱になるのはこれが唯一の経験ではなかった。最初は民族か国民的な問題なのかとも考えた。しかしその後、自国を含む他の民族いずれでも、こういったことは起こるもので、私が導き出した結論は、これは主に個人の問題で、国家の問題が絡む場合は、政治経済情勢が原因になっているものだと。

和服

その年の初冬、ペンシルヴェニア大学病院のためにチャリティーバザーが開かれた。新渡戸夫人に紹介してもらったC夫人〔コンラッド夫人〕とその娘さんのB夫人は、私の「着物」と「袴」姿が、バザーの目玉になると考えた。それで３日間というもの、西洋に於ける和服の良い面、悪い面を考えることになった。明治４（1871）年、日本の関税自主権回復と治外法権撤廃交渉のため、米国およびヨーロッパに派遣された特命全権大使岩倉公爵〔岩倉具視：幕末、明治の政治家。王政復古に尽力〕が宮廷衣装でサンフランシスコに上陸したとき、和服で通す考えを完全にあきらめざるを得なかった。余りに多い見物客や、後ろ指をさす人々の注目度が異常に高いため、国家の威厳を示すどころの話ではなくなったのだ。

随行員の１人、故林伯爵〔林董（ただす）：当時は二等書記官〕は、立派な新調のスーツが公爵の英国到着時に間に合うよう、急遽ロンドンに派遣された。この時林伯爵と英国のテイラーが相談して作ったものが、今もある金色のレースが付いた宮廷用制服の第一号になったのだ。爾来、「着物」を着て西半球を旅行し、もみくちゃにされない日本人もいるにはいるが、いずれにしても私の経験では、日本より寒い気候やヨーロッパの建物の中でのことを考えると、着物は不便きわまりないものだと確信する。ぶかぶかの袖は、女性の手を取って座らせる時に邪魔になるし、食事中は汚れやすく、ドアのハンドルには引っかかって破れてしまう。「袴」の裾は靴で汚れて台無しになるし、「足袋」、つまり靴下だけでは、足が冷えすぎる。冬着は部屋の暖房を兼ねるように縫われているから、家の中では暑すぎるし、外ではその上に適当なものを羽織らなければ風邪を引く。日本の着物は美しい点もあるが、実際に着こなすよりは、身にまとって神妙に控えている方が似つかわしい。一方、くだけた夏着としては着物は簡素で涼しい。

スウェデンボルグ

フィラデルフィアからさほど遠くないブリンアシンに、スウェデンボルグ〔霊的能力に目覚めたエマニュエル・スウェデンボルグが提唱した神学を受け継ぐプロテスタントの一派〕の村がある。村営の学校や神学校で講演をするため、何度かその村を訪問した。その地名からウェールズとの関係が示唆される〔ブリンの付く地名がウェールズには多い〕が、多くの住人はご想像の通り皆スウェーデン人だ。スウェーデン人でないスウェデンボルグの人にH氏がいるが、彼はフィラデルフィアに事務所を持っていた。友人の紹介でH氏を知ったのだが、H氏の事務所と友人の事務所が同じビルの中で向かい合わせだった。好感の持てる老紳士で昼食後にいびきをかくので有名だった。太っており、親切で、食い道楽だったから、ドイツビールのジョッキを片手に、美味しいデラウエア・シャド〔川魚でニシンの一種〕を飲み食いする楽しみ方の手ほどきをしてくれたのだ！私が観察したところでは、村に住むアングロサクソンの人たちの資金で、スウェーデン人住民の知的活動が支えられているようだった。いずれにせよ、スウェーデン人たちに哲学的な質問を浴びせられ、仏教徒の思想を説明しようとする私の懸命の努力も、今にも挫折しそうになったほど

だった。日本がスウェデンボルグの種をまくのに適した土壌を持っており、日本では日本語に翻訳された彼らの本が出回っていると考えたようだった。日本人の少年を見つけるよう頼まれたが、これは明らかに育て上げて伝道者にする考えだった。私がより重要だと思うのは、可能な限り多くの子供をもうけて、まず信者の数を増やさなければいけないという彼等の考え方の方だ。日本に関心を抱いてくれたことには感謝したが、彼等が考えるように、ヨーロッパの神秘主義が仏教徒の心に根を下ろすことが出来るとはとても思えなかった。

がっかりさせられた菜食主義者

ペンシルヴェニア州では、ウェスト・チェスターでも、ヒックシット〔クエーカーから分離したプロテスタントの一派〕、つまりユニテリアン・クエーカーの友人が多数できた。牛乳加工工場を経営する裕福な工場主の家で会合が開かれた時講演したのが縁だった。その時出席していた衛生学者と弁護士が、新興国の代表としての私に多大な関心を寄せてくれ、その静かな町へ講演をしに何度か行き歓待を受けた。ヒックシットは正統派のフレンド〔クエーカー教徒〕と同じく知的進歩を重視するので、前者は彼らの神学によって、後者は反戦主義によって、彼らの言葉を借りれば「頭のいい」極東の人々を改宗させたいと願っていたのだ。親切な人々なのだが、私が意識的に反感を煽り、がっかりさせてしまった面々は、菜食主義者のグループだ。そのうちの 1 人は、私の話が終わると必ず立ち上がって、肉食をしない日本人を絶賛するのだ。おそらく要領が悪いのだろうが、どうしても正直に言わねばと思い、この痛風のお年寄りたちに、次のように言ってやった。確かに我々日本人は戦争に勝利した。しかし勝ったのは菜食主義だったからではなく、貧しい食事にもかかわらず勝ったのだ。肉を食べ過ぎている人は菜食主義の恩恵にあずかるかもしれないが、日本人はもう少し栄養のある物が食べられるのなら、もっと活動的で、役に立てるのだと。私はあの人達を本当に気の毒に思った。なにしろ、日本がロシアに勝利した彼等なりの理屈にぴったりの裏づけが得られたと思い込んでいたのだからだ。

人道主義の聖地

フィラデルフィアに滞在中の印象はといえば、ボストンがアメリカ合衆国の文化の中心地だとすれば、「兄弟愛の町」フィラデルフィアは、新大陸の精神的かつ人道主義の中心地だということだ。フィラデルフィアの人たちは、ニューヨーカーと較べればぐずで、シカゴの人たちに較べれば保守的なのかも知れない。しかし、彼らは従兄弟たる英国人と同じく故郷を愛する親切な人々なのだ。病気の時も、誕生日にしても、クリスマスでも、いや１年中毎日といってもいいが、家族の一員のように私を扱ってくれた。非行少年少女の学校、精神薄弱の若者のための施設、孤児院、感化院のような公共施設を数多く訪問出来たのも、彼らの好意のお陰である。ちなみにこうした施設では、兄弟愛により更正を図る時の一助として、最新の科学を用いている。フィラデルフィア市刑務所〔訪問日：明治 39（1906）年 3 月 2 日〕**（資料 4）**では、門衛が鼻孔に粉を押し込んでいるので、それが何なのかたずねたところ、親切に説明してくれ、生まれて初めて彼の指導で嗅ぎタバコを吸うことになった。どんなタバコも好きではないが、この人物が親切にしてくれたのがとても嬉しかった。鼻の中の粉は微量でもあり、口から出てくる黒い液体ほどには不愉快には感じなかった。刑務所の中で、官吏たちは皆、日本人の訪問者を喜ばせようと熱心で、土産にと言って写真まで撮ってくれた。無論、後々の身元確認用にという訳ではなかったが。また、別の刑務所では、無期服役囚の独房で、鳥かごで鳥を飼ったり、楽器を使わせたり、温室の

花を置かせたりしていた。20 年ほど前、官立東京盲唖学校校長の小西氏〔小西信八：東京師範学校中学師範科卒。ローマ字式点字を開発〕が西洋の視察から戻って来て、米国の慈善施設の収容者をうらやましがっていたのは無理もない。収容者の肉体的、精神的ニーズが、日本よりはるかに満たされていると感じたのだ。

アングロサクソンの誠実さ

私が見学したある孤児院は「大学」と呼ばれていたが、これは、自分たちの不幸な運命を在院者に一切連想させないようにとの、創設者の意向によるものだった。また、この施設のもう一つの特色は、高い塀の下部が数フィート〔約 3 メートル〕地下に埋められているという事実だ。創立者は、この塀は一定フィート高くしなければならないとの遺言を残したが、これは壁を埋めたことが市の規則に抵触しているため、遺言の条項をあたかも法律であるかのように見なして妥協を図ったという訳だ。フランスの批評家から学んだのだが、アングロサクソンは不誠実な行いを毛嫌いするという。そうであれば、これは困難な状況下に誠実さを示す良い例だと思う。日清戦争で片足を失った佐藤将軍〔佐藤鉄太郎:「赤城」航海長として参加した黄海海戦で被弾負傷〕は、また別の誠実さを表す例を話してくれた。それは、たとえ上官が秘密の情報を聞き出そうとして如何に自分を脅しても、絶対に沈黙は守る、ということであった。もし知らないと言えば、偽証罪で有罪になるし、もし秘密を漏らせば、その結果誰かに迷惑がかかるからだ。

誠実さということも、他の道徳的性質と同様に、個人的、人種的性格に支配されると同時に、社会的、政治的条件にも支配される。東洋であれ、西洋であれ、まっすぐな人はどんな結果が出ようがお構いなしで、虐げられた子供がするような、やむを得ずつく嘘にも往々にして同情が出来ず、それに腹を立ててしまうが、それも 1 つの罪であることには変わりはない。上からの圧迫で人は忍耐強くはなるが、卑屈なひねくれ者になる。一方、強固な意志の持ち主は、自己の力を乱用する余り、その影響力の下にある者に保身のためのうそをすかせてしますう。

米国における柔道

ある日本の友人を「柔道」教師として、カレッジか体育クラブなどに就職させようと、一生懸命やったことがあるが、この柔道人気はロシアと戦った日本人気ほどには長続きしなかった。ある鉄道関係の有力者が、弘道館の「柔道家」山下氏〔山下義韶（よしつぐ）〕**（補注）**の世話をしてくれており、ワシントンのローズヴェルト大統領に紹介してくれたが、そのおかげでワーズワース（上院議員）夫人なども、この師範から指導を受けることになった。一方、米国の体育クラブや他の施設で働くことを目的に、さらに指導者が送り込まれたが、米国人は新しいものに飛びつくのも早いが、満足出来ないと思えば、飽きるのも同様に早いという性格を持っている。そもそも、「柔道」の場合、小柄な大家が大きな生徒に訓練を施すには、長い期間が必要になる。柔道の奥義は、学ぶ者に、筋力に頼れば頼るほど、激しく投げられるのだということを納得させることにあるのだから。こういった訳で、ローズヴェルト大佐のような熱心な生徒の場合でも、日本人の生徒ほどには山下氏から学べなかったのではないかと思う。それは教える側が至らないからとか、背が低いからとかいうことではなく、大統領の体重が余りに重く、性急だったから、彼がずしんとマットに投げ飛ばされると、必然的にけがをしたからだ。さらに言えば、エネルギッシュな米国人は、

注意深く倹約を図るよりも、米国の資金と同じで、大量投資のほうを好む。したがって、レスラーやボクサーが柔道家に勝つと、もはや「敵の力に屈して征服する」のが柔道の奥義だと言ってみても始まらない。ヨーロッパの場合は「柔道」を取り上げるのは遅かったが、明らかに米国よりは柔道から多くのことを学んでいる。

（補注）山下義韶の思いで

本田増次郎「壊れた夢：ある日本人平和主義者の日記から：明治 38（1905）年～大正 12（1923）年」『ジャパン・アドバタイザー』大正 14（1925）年 2 月 8 日

ある寒い日の夜、風呂屋でのこと、私は友人であるもう 1 人の柔道仲間と一緒に、大きな木製の四角い湯船に浸かって体を暖めていた。湯場全体が厚い蒸気で満たされており、とくに湯船の中にいると 30 センチ離れたところの顔すら解らず、まさに目の前しか解らない状態だった。我々2 人は、別の柔道仲間のうわさ話を始めた。軽率極まりないことに、私はこの柔道仲間が彼の妹と自分の結婚をしきりに勧めていることを話題にしたあげく、「あんな狐顔の女と結婚なんてとても我慢出来ないよ！」と言ってしまったのだ。すると、蒸気の雲間から、一言も発せず静かに、あの上背のある話題の兄上の体がスックと立ち現れたのだ。この柔道家がローズヴェルト大統領とワーズワース上院議員にワシントンで受け身技の技術、すなわち柔道を教えた人物だ。それは日本の栄光がまだ米国で輝いていた頃のことだった。（訳：長谷川勝政）

プロの講演家として

しかしながら、ポーツマスの和平後、日米両国間で懸案が幾つか発生したお陰で、日本に対する一般市民の関心は、米国において衰えることはなかった。強い反日感情のない地域ではどこでも、かえって日本側の主張に熱心に耳を傾けてくれ、日本に対しても公平だった。講演そのものが好きだったし、日本を題材にして講演家として生活費が稼げるのも有り難かった。しかし、他の商売と同じく宣伝は必要で、私の講演の中身を褒めちぎる推薦文だらけのチラシで、あちこちの事務所を通じて幅広く宣伝してもらわねばならなかった。民主主義の国の紳士なら自己宣伝を恥じることはないし、日本人の中にもこうしたことをする人もいる。しかし、私は自己宣伝までする気にはなれなかった。どうやら私の頑固な気性に宣伝はそぐわなかったのだろう。結局、講演のお膳立てをしてくれたのは全て友人たちで、それなりの謝礼も併せて、私は感謝しながら受け取った。しかし、講演者が長年に亘る経験を積んでいるならともかく、付き合い上のコネだけでは、得られる収入はたかだか知れていた。そこで、ニューヨークで海外生活の２年目を過ごすことを視野に入れ、日本人や米国人の友人のつてを使って、あえてニューヨークの社交界に入り込むことことにした。当時のニューヨーク総領事、現在のスウェーデン大使である内田氏〔内田定槌（さだつち）：外交官。36 歳でニューヨーク総領事に就任、トルコ特命全権大使など、赴任国は 9 ヶ国に及ぶ〕とザリンスキー少佐が主なつてだった。ニューヨークでの最初の講演はブルックリンのバーナード・クラブで行ったが、米西戦争前、スペイン大使だった故ウッドフォード将軍〔スチュアート・L・ウッドフォード〕の臨席を賜り、将軍に司会の労をとって頂いた。後にハドソン・フルトン委員会〔ハドソン川発見 300 周年と汽船航行 100 周年の記念事業を明治 42（1909）年に行った〕の代表として来日されたが、それは我が国が祝賀行事に参加したことに対する答礼のためだった。次に講演したのは女子大学クラブでのことだった。内田氏は如何にも米国的な賛辞を駆使して、私を学識ある米国婦人たちに紹介して

くれた。

火山性気質

サンフランシスコの地震災害〔明治 39（1906）年 4 月のカリフォルニア大地震、M8.3、死者約 700 名〕に、米国人は精神的なショックを受けた。当然、最も火山の多い国からやって来た人物として、多くの鋭い質問を浴びせかけられたが、即答出来るわけもなかった。帝国大学の大森教授〔大森房吉：明治、大正期に於ける我が国地震学の泰斗、大森式地震計に名を残す〕を含む専門の科学者たちが東京から視察に来て、後に次のように述べたと報道された。つまり、米国人の被災者はこの種の経験が初めてだったことから、その時のことをほとんど説明出来ない。ところが日本人住民の場合は冷静沈着で、どの方向へ地震が揺れ、どの方向へ物が倒れ始めたか観察していたと。この一見冷静な態度は、地質学的に安全な国に住んでいる人々を驚かせた。いや、危険極まりない状態にあって、そんな落ち着きを見せる人種と戦ったら惨めな敗北を喫すると、率直に予想する心配性の人さえいたほどだ。私の方は、正反対で、緊急事態に常に備えておく必要のない米国の友人たちに、賛辞を送りたい気持ちだった。何しろ、日本人はもともと感情に流されやすいのに、地震に備えるよう訓練させられた結果、平静を装っているにすぎないからだ。内心にくすぶる怒りの火山を愛想笑いで覆い隠せば、やがてその怒りが抹殺されてしまうこともあるだろう。しかし、意図的な感情の抑圧が極端にまで進むと、もっとも崇高な美徳の萌芽さえも摘まれてしまう可能性がある。封建制度下の敵対する藩どうし、あるいは現代の外交に於いて妥協し難い互いの主張がある場合には、最終的に決裂するまで、こういった欺瞞的な態度をとることも国際的道徳律からいって許されるだろうし、互いが自制することによって戦争の勃発を未然に防ごうとする場合も、必ずしも欺くということにはならないだろう。しかし、個人の場合と同様、親密な国家間の場合には、それらの国家の文明が進んでおり野蛮でない限り、真意や本音を腹を割って話した方が、難問の解決はスムーズかつ確実に図れるだろう。

国家の威信と恩義

アングロサクソンは遠慮しない民族だから、日本は何かに付け全てが小さいと言って、同情してくれることがある。そこで、冷やかし半分に、それは認めるが１つだけ重要な例外があると答えてやる。その例外とは、我が同胞が持つ 1 つの性質であって、それは、誇大癖のある米国人が言い立てるどんなに立派な性質にも負けないものだと。そしてそれは日本人が持つ自尊心なのだと。しかし、この国民的自尊心や面子は十分に育っているわけではないから、一方で、博愛的寛大さとは、それを受ける側に国家的な恥をかかせる権利だと考えたり、また他方で、卑屈な態度をとり、あたかも慈善は富める国が行う義務行為だとしたりしてそれを要求することになる。講演会では何度かリデル女史のハンセン病救済の高貴な活動について述べ、津田女史の学校支援の会合に出かけてその優れた実践ぶりを証言し、米国聖公会の人々の理解を深めるため奔走する大阪キリスト教婦人矯風会の林歌子女史〔日本キリスト教婦人矯風会第 5 代会頭。孤児救済、廃娼運動、婦人参政権の実現に尽力した社会運動家。「大阪のジェーン・アダムス」、「募金の天才」ともいわれた。元立教女学校教師〕の通訳や支援活動をしたのも、全てはこの交錯した感情をもってしてのことだった。こうした私の活動は、日本がキリスト教世界に如何に負うているかを認識することでもあったが、そうしながらもその間私が気付いていたのは、「危険極まりない」アジア野郎を排除せよと扇動する人々の間で、日本は恩知らずだという非難の声が次第に高

まって行ったことだ。このような状況下にあっては、おそらく最善の策は、人種的問題を政治的に乱用する行為を全面的に無視することだ。それこそが国際親善に至る最短距離と言えよう。

一方に偏った外交

国家間の外交関係は、その対応にいくら注意してもし過ぎることはない。育ちが悪く礼儀作法に慣れていない人物や、経験の浅い若い役人が、誠心誠意尽くしても、第三国の人の感情を損ねてしまうというミスを犯すことがある。私の個人的経験からこの例を挙げてみよう。リデル女史が米国人の賛同を得ようと、ニューヨークに行ったことがある。それは熊本にある彼女のハンセン病患者の為の病院に、米国人の患者が数人いたのが主な理由だった。ところが、日本大使館員に対して彼女の言動について警告を発した人物がいた。もし反日分子があの恐ろしい病の日本での患者数を知ったら、彼等はより大胆に反日を煽って来るだろうと。この結果、この英国人の博愛主義者〔リデル女史〕が登場した時、ワシントンの日本人たちは、彼女は選ばれた人類の友人たちに対し、適切かつ信頼のおける訴えをしているのだという事実を認めるのが当然であるのに、まるで日本を裏切ってやって来た者であるかのごとく、冷たく背を向けたのだ。まさに無分別、不親切極まりない話だ。こうなってくると、心情的に、また義務として、自国の婦人が米国に滞在する間、あらゆる庇護を与えようとする英国大使を前にして、米国の外交官たちが当惑するのも無理は無かった。これは米国の反日運動に気を使い過ぎて一方に偏った外交になった訳だが、現在の世界大戦〔第 1 次世界大戦〕によって文明国同士の相互依存関係がクローズアップされる中で、より洗練された外交が急速に台頭して来ている。いや、そうなると願いたいものだ

陸軍武官と海軍武官

外交が話題になっている間に、海外駐在の陸軍武官ならびに海軍武官についての私の所見をお聞き願いたい。彼らは、いにしえの王侯たちの華麗なる使節の随員、今に言い換えれば、近代国家の企てに寄与する変装したスパイといえるかも知れない。しかし、彼らが賢明かつ度量の広い外交官による効率的統制下に置かれていない場合、自国を裏切ると見せかけて言い寄って来る輩から、いわゆる「戦略的秘密」を騙されて買わされる、ということがしばしば起こる。アメリカ合衆国ほどの大国でさえ、嘗て開戦の「準備万端」を整えてしまったことがある。それは、将来敵となりそうな国、ないしは仮想敵国の軍備や国防の状況を、かかる情報に踊らされて見誤ったからだ。仮に武官制度が放擲され、全ての友好国がその防衛費を、ちょうど米国の政党が選挙費用を公開しているように公にするならば、不要な疑惑とそれに伴う摩擦は、大幅に取り除かれることになるだろう。結局、近年は、新聞の力が強大であるから、国家的秘密を一般に知られないように保つことは不可能だ。こんな世界中に情報が筒抜けになっている状況下で密かに戦争を準備する国があるとすれば、その国は全世界を征服する権利を持つ国となるか、全世界から総好かんを食らう運命にあるのか、そのいずれかであろう。

複製のブラーニー石

明治 39（1906）年 4 月 30 日、初めてニュージャージー州アトランティックシティ（補注）を訪れた。そこはスフェヘニンヘン〔オランダハーグ近郊の北海沿いの保養地〕を米国流

に大きくしたようなところで、日本の友人の紹介で近藤佐重郎氏一家〔夫人はもと子。旧姓山田。明治 25（1892）年フェリス和英女学校本科卒。卒業後同校の教職を勤めた。長女は直枝〕と知り合いになった。ボードウォーク〔板張りの遊歩道や桟橋がある観光地〕で事業を成功させており、まるで帰化市民であるかのように同地の福祉にも係わっていた。彼の親切な助言と援助があったからこそ、この年の夏をその海沿いのリゾート地で過ごすことに決めたのだ。南仏の保養地から戻ってきていたジョセフ・エルキントン夫妻からの、ペンシルヴェニア州ポコノ山〔フィラデルフィアから 130 キロ〕で 1 ヶ月を過ごさないかという心温まる誘いを断ってのことだった。そして 10 日後にまた、私は近藤氏の客人となった。これは近藤氏が所属するペンシルヴェニア教会の 2 日間のチャリティーバザーを手助けするためだった。この催しでは各々の家がそれぞれ別々の国を代表する形式をとっていた。近藤氏の部屋は日本の骨董品や工芸品で一杯になっており、私の役目は「着物」と「袴」の装束で訪問客に説明をすることだった。2 日目には、空き時間を使って、アメリカ、フランスそしてアイルランドの展示を見に出かけた。アイルランドの展示場では複製のブラーニー石に数セントでキスをした〔アイルランド南部のブラーニー城内にある石でこれにキスするとお世辞が上手くなるという〕。また私が故フルベッキ博士〔グイド・フリドリン・フルベッキ（バーベック）：日本に来た最初の米人宣教師の 1 人、明治学院、東京帝国大学設立に関与。およそ 8 年間明治新政府顧問を務めた〕の 2 人の姪に会ったのはアトランティックシティへのこの 2 回目の訪問の時だった。故フルベッキ博士は明治維新前、長崎で大隈侯爵に英語を教えた人物だ〔大隈重信はフルベッキから新約聖書とアメリカ合衆国憲法を原典で叩き込まれた〕。この先駆的宣教師が流麗な日本語を話すのを聴いたが、それはズをジュと発音する長崎なまりだった。

（補注）アトランティックシティ

本田増次郎「英米雑俎（10）Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 8 月 1 日

英語には避暑避寒に対する熟語はないやうで、holiday resort, health resort, watering place, Spa などの語を多く聞く。最後のは Belgium の鉱泉の地名から出たものであるが、地質学上の旧国たる英米には、火山や地震や温泉が日本のやうに日常生活に密着して居ない。Watering place といふ詞は英国で多く用ゐるが、何でも世界第一を誇る米国は Atlantic City の海水浴場を持つて居る

New York, Philadelphia, Pittsburgh, Baltimore, Washington 等の大市から一時間乃至三四時間で達せられる New Jersey 州の海岸で、大西洋を隔てゝSpain and Portugal と相対して居る所に、二三十万人を包容する此夏場がある。申すまでもなく Philadelphia は合衆国独立の発祥地で、東海散史〔正しくは士〕の「佳人之奇遇」で普ねく日本人に知られ、Pittsburgh は Carnegie 翁の製鉄業と Heinz 老の 57 Varieties of Pickles 製造とで著はれ、Baltimore は新渡戸博士等の学んだ Johns Hopkins 大学で有名な所だ。序でながら N. J. の本家たる英国の Jersey 島は乳牛と毛糸製品に其の名を與へて居る。我が皇室でも Jersey cows をお飼ゐのやうに見かける。米国には英蘇愛〔英国、スコットランド（蘇格蘭）、アイルランド（愛蘭土）〕は素より欧州大陸の地名までを取つて、それに New を冠するか又は Athens や Cairo まで reproduce して居る。

扨(さて)Atlantic Cityは海水浴場として型をHollandのScheveningenに取り、草茫々たる浅洲に建てられた市街である。The Hagueの近辺にあるのはシエーヴニンヘンといふやうに発音するものらしいが、多くの英米人は之をスケーヴニンゲンと称へ、在欧の日本人は戯(たわむ)れに

「スケベイ人間」とも云つて居る。然るに米国の模写の方は非常にlarge scaleなもので、平素永住の市民は五万内外で、それが多い時は三十万以上に達する。五万の人は悉くEaster holidayや夏の客をあてに生活して居ると云ひたい程で、健康のため永住して居る者は極少数であらう。海に面した片側町は悉(ことごと)く売店、飲食店、旅館で、其の奥に海岸線と平行のmain avenue and tram lineがあり、其の又裏通り（山の手と云ひたいが山は皆無で沼地の中を汽車が走る）は労働や給仕をする黒人が占領して居る。

先づ海に沿ふて湾曲せるBoard walk（板道）がfrom end to end三四マイルもあらう。其の中央部は水際から何十間か隔たつて居るが、両端はshallow waterにかけたlong bridgeになつて居る。Board walkの広い所は市街の大道に等しく、海の側には鉄柵があつて沙上一二間の高さから人の落ちぬやうにし、高く水上を蜒々(えんえん)する二三間幅の処になると両側にrailingがある。又所々にpavilionが板道と同じ高さで沙上の楼閣（と云つてもroof とfloorばかり）を突き出し、其処へ幾十のrocking chairsやbenchesや普通の椅子が備へてあつて、無料で海や人や新聞をながめつゝ涼まれる。此設備は市街の側にある附近の更衣所や旅館が広告かたがた出して居るのだが、大様(おおよう)な国柄の事とて誰が何時間用ゐやうと勝手次第である。別に又Piersといふがあつて、半町から一町以上もBoard walkに直角をなして海中に突き出してある。其の中のHeinz Pierは全然広告用で前に述べた各種漬物の見本を陳列し、味をきかせたり、幻燈説明をしたりする建物が二棟あつて、其の中で読書、休息は素より手紙を書く用紙や文房具まで自由に使はれる。自分が「肉弾」の英訳をしたのは此処の一室であつた。

又建物の外部日の当たらぬ処に椅子を並べて、涼を納(い)れたり、porpoise（イルカ）の水面に跳ねるを眺めたり帆走船の徂来を賞する事も出来る。

外のPierは多く若干の入場料を取つて、音楽や観せものや遊戯の方法を提供する。Kinemaやdancingや寄席らしいentertainmentもかゝる。しかし一旦入場したら夕方の人拂ひまで幾時間涼んで居てもよし、も一度銭を払つて又晩の娯楽を貪る事も出来る。町より一間位高いBoard walkの陸側は又別世界で、各国各人種の顔と物産とが軒を並べて陳列されて居る。勿論日本人の店も幾軒かある中に、近藤佐重郎氏は尤も実著な紳士で又成功者であり、土地の米人間にも信用が篤いさうである。又食ひつめの書生などでcookやwaiterをするやうな邦人が、summer resortsで球ころがしの店など出して居るのもある。米人の学生にも夏の間労働して学資に足す所謂苦学生もある。彼等は旅館でwaiterをするか、左なくば金持ちに雇はれてBoard walkの上でrolling chairを押すのである。板道の上では一切の乗車を許さぬので、老人病者は素より淑女も紳士もchairsに乗つてゾロ々々と運動や見物をする。藤（cane）でarm-chairを一人乗又二人乗に拵(こし)らへ、日蔽ひも付けられるやうにして猫足やうの車を付けて押すのである。夕方にでもなると幾千のchairsが左右に途を別けて徐行する。其の押し手は通例黒人であるが、自用chairを持つて行つて下女や学僕に毎日やらせる人もあるのだ。左側通行は英国だけで、欧米の大陸国では右側を常規として居る。

中産以下の者は、一週間位の避暑で帰つて、隣の者に見せびらかしたいと見え、朝から晩まで沙上にごろ々々して Sun-burnt になる事を勉めて居る。若い女などは bathing suit and stockings に意気な所を見せて居る。年取つた人は暇にまかせて売店をあさり Christmas presents を早く安く買つて置く。乗り合ひの yacht で黒人の音楽を聴きつゝ海風に浴する人も少なからぬ。唯山水の配合宜しきを得たる風景に慣れた日本人は、後に山

のないので非常に者足らぬ感じがする。米国人は一般に人文に重きを置くと云ふものか、大西洋上に懸つた明鏡やそれから生ずる金波に背を向けて、人の往き来や売店の方に向いてるのが甚だ多い。但し Board walk に沿ふた店では一切 alcoholic drinks を売らせず、又市中でも street walkers（魔性の女）の出没を厳禁してあるのは誇るべき事であらう。

春休み（Easter holiday）に春衣を着飾つた男女の大群が、此板道の上を練つてあるく parade も有名なもので、見られたい人を見に行く人も沢山ある。

外交官の妻たち

アメリカ合衆国の政治都市ワシントンを私が初めて訪れたのは 5 月 3 日だったが、訪問のそもそもの目的は、新任の大使である故青木子爵〔初代駐米大使青木周蔵。明治 39（1906）年 1 月着任。プロシアに医学の修得を目的に留学するが、途中で外交に転向、貴族の娘エリザベートと結婚した。外務大臣を 2 度務め、不平等条約の改正や憲法制定に尽力した〕に会うためだった。大使はドイツで学んでおりドイツ人の夫人と結婚していた。彼は多くの自国人たちに傲慢で尊大な人物だと誤解されており、外務省で下級の官吏から指示が出た場合などは謙虚に受けるなどもっての外で、逆に外交とは何か一席ぶつのだという噂が流れていた。いずれにせよベルリンやロンドンでの場合のようにワシントンではうまく行かず、東京の本省は日米条約にかこつけて彼を呼び戻してしまった〔帰任発令は明治 41（1908）年 1 月。対米移民問題交渉に越権行為があったとされた〕。青木大使夫人のドイツ人的倹約の流儀が邪魔をして、夫人がワシントンの社交界では受け入れられないことを恐れたからだ。したがって、日本の若手外交官が外国人妻と結婚するのを躊躇するようになったのもむべなるかなで、たとえ外国人妻がそれぞれの国では受け入れられても、他の国ではダメ人間の烙印を押される可能性が高いからだ。一方、日本人外交官の日本人妻の場合は、外国の批評家に比較的受けが良かった。

このワシントン訪問では当時大使館参事官だった日置氏〔日置益（えき）：生粋の駐在外交官。北京公使の時、加藤高明外相の訓令に基づき対華 21 ヶ条の要求を提出〕にも会った。最近は北京公使を務めている。「柔道」を共に学んでいた頃以来の再会だった。また日露戦争当時ワシントンの社交界では「ハニー」という渾名で通っていた埴原氏〔埴原正直（はにはらまさなお）：外交官。駐米大使時代、第 1 次大戦後の悪化した日米外交懸案の解決に努力するが、排日移民法成立の責を負って辞任〕にも会った。現在はサンフランシスコの総領事だ。筋金入りの親日家で、横浜のアメリカ総領事の妹であるシドモア嬢〔エリザ・ルハマ・シドモア：ジャーナリスト、紀行作家。熱烈な親日家で米国の排日政策が強まる中、白人世界の人種差別を批判した。ワシントン市ポトマック河畔に桜の苗木を寄贈したことでも知られる〕の家では、ジャーナリストのウイリアム・E･カーティス氏や日本時代から知り合いのカーティス夫人やその令嬢と夕食を共にした。

無意識の模倣

しかし私が訪ねた中で最も旧知の間柄の人物といえば、それはランマン夫人〔アデライン・ランマン〕であった。彼女はご主人〔チャールズ・ランマン〕と共に、1870 年代初頭に米国留学した日本人少女たちに付き添った〔これは本田の記憶違い。アメリカ号の船旅に付き添ったのはデロング夫妻。ランマン夫妻は米国に於ける世話係であり、最終的に津田梅子のホスト・ファミリーとなった〕。その少女たちでは大山公爵夫人、瓜生男爵夫人、

そして津田女史がよく知られている。この老婦人は自分が世話をした女性の友人に会えることを大変喜んでくれた。なぜなら私は津田女史の紹介状を持参していたからだ。このインタビューでは、かねがね気になりながら未解決であった興味深い疑問点が氷解したが、それは津田女史の話し方の特徴が、元を正せば、子供の頃にあれほど長く慣れ親しんだこのアメリカ婦人に突き当たるということだ。このことで私が思い当たるのは、華族女学校の生徒たちが尊敬して止まない校長、下田女史〔下田歌子：教育家。華族女学校、実践女子大学を創設。女子教育に生涯を捧げる。若き日、柔道の稽古を嘉納治五郎から直接受けたことがある。明治 30 年代に流行した髪型「おすべらかし」（額の髪を前の方に張り出させる髪型）を始めたことでも知られる〕独特の礼儀作法を、無意識のうちに真似してしまっていることだ。

山下義韶氏（既述したように、私の「柔道」時代の親友で、ローズヴェルト大佐〔山下が柔道を教えた時には既に大統領の職にあった〕に柔道を教えた人物）の下宿では松方侯爵〔松方正義：政治家。日本の財政制度を確立し、2 度に亘って首相を務めた〕の末の息子に会った。当時アナポリスの学生だったが、その後アメリカで亡くなった。山下夫妻は日本に帰る直前で、私がワシントンに着いた頃は最後の稽古として当代の大人物〔ローズヴェルト大統領〕に活法〔蘇生術〕を伝授し終わったところだった。

『肉弾』の英訳

フィラデルフィアからの永遠の別れを前にして、第 30 回慈善と矯正に関する合同国民会議に出席したが、その会合の 1 つではクリーブランド前大統領〔グローバー・クリーブランド：第 24 代アメリカ合衆国大統領〕が議長役で話をするのが聞けて満足だった。コヴァナント〔聖約〕教会で日本の宗教事情について講演をした時には、このことを報道したフィラデルフィア紙は、私を男爵に仕立て上げてまで、褒め称えてくれた。また黒人の閨秀詩人ハーパー女史〔フランシス・エレン・ワトキンス・ハーパー：詩人、社会運動家。3 歳の時母に死なれ、叔父のワトキンス牧師に育てられる。詩集「フォレスト・リーブス」が大ヒット、奴隷制廃止運動にも尽力〕とそのご令嬢に会ったのもこの頃だった。

エルキントン氏の親切な母上からいただいた餞別でトランクを買い、それに夏物全部を詰め込んで、5 月 21 日、アトランティックシティへ発送した。タバコ屋の裏手に一部屋を借り、食事は下宿屋でとることにした。『肉弾』の翻訳（**資料 5**）をするため「一時的に」滞在することにしたのだ。朝の涼しい時間帯をハインツ・ピアという店で翻訳をした。この店はピッツバーグで作った「57」種類のピクルスを宣伝するために設けられた出店だった。

故アルバート・ケイス・スマイリー氏

当時のフィラデルフィアが米国の平和運動にたずさわる宗教家たちの聖地であったとすれば、そのフィラデルフィアの宗教家の紹介で、知性の中心地であるボストンからやって来た多くの代表的な平和運動家と知り合えたことになる。私はまたとない好機に恵まれたのだ。いや、実際、私は国籍の異なるおよそ 2 百人の男女たちの真っ直中にいたのであって、ニューヨーク州モホンク湖〔空の湖の意。ニューヨークから 140 キロ〕で、例年行われる万国仲裁会議において、私を含め全員が、平和という崇高な目的に専心していたのだ。5 月 29 日、私はそこに到着し、この卓越した一団の人々と共に、アルバート・ケイス・スマイリー夫妻の夏の宿〔現在のモホンク山の家（**補注**）〕に 3 日間お世話になった。若き日

フレンド派（クエーカー教徒）の教師であったスマイリー氏は、ある夏、山深い人里離れた美しい湖のほとりに釣小屋を見つけた〔正確には、最初に発見したのは双子の兄弟であるアルフレッド・ホームズ・スマイリーの方である〕。この小屋が現在の広大な森を持ったおしゃれなリゾートの元になったのだ。一軒の住居も、一台の車もこの場所の静寂さを破ることは許されなかった。私がそこをはじめて訪ねた 20 年以上前から、この高名な我等が主人は国際的仲裁とアメリカ・インディアンの教育向上のための会議を、純粋なフレンド派信者らしく、自らの費用負担で、年 2 回、各 3 日間開催してきたのだ。そしてまたしても、純粋なフレンド派信者らしく、この繁盛中のホテルではアルコール飲料とトランプゲームは御法度だった。もっとも私室では何が起ころうが、干渉されることはなかった。したがって、酒好きな輩が棄てた空瓶で小道は舗装されたといわれている。とにかく、私にとってその場所と仲間たちは、最も「平和な」国における最も「平和な」場所と人々に感じられた。

（補注）モホンク山の家

Home Page“Mohonk Mountain House”（ホームページ「モホンク山の家」）
http://www.mohonk.com/history/history.cfm　2006.1.11

歴史

アルフレッド・ホームズ・スマイリーは、1869 年、現在のモホンク湖と同じ情景を見た。それはピクニックでシャワンガンクを訪れた時のことだった。アルフレッドとその双子の兄弟であるアルバートは、目を見張るような美しい自然の景観を満喫できる平和な保養地を心に描いた。アルバートがジョン・F・ストークスから地所を買い、兄弟 2 人で 10 室に過ぎなかった小さな宿を、とうとう、500 人も泊まれるゆったりとした宿泊施設のある今の大邸宅に変えてしまった。
（訳：長谷川勝政）

WIKIPEDIA　Mohonk Mountain House（「モホンク山の家」）
http://en.wikipedia.org/wiki/Mohonk_Mountain_House　2006.1.11

有名人の来訪とモホンクでの重要な会議の開催

来訪者には、ジョン・ロックフェラー、アンドリュー・カーネギー、セオドア・ローズベルト、ウイリアム・タフトなど枚挙に暇がない。

1883 年から 1916 年にかけては、アルバート・スマイリーがスポンンサーとなり、アメリカ・インディアンの生活水準向上のための会議が開かれたが、上院下院の委員会、インディアン問題対策局の担当官をはじめとして、教育家、博愛主義者、インディアンの指導者が集まり政策を話し合った。また万国仲裁会議もサポートしたが、これは 1859 年から 1916 年にかけて開かれ、後のハーグ常設仲裁裁判所の創設に寄与するところ大であった。
（訳及び要約：長谷川勝政）

「如才ない外交」

その年の会議の議長は嘗ての国務長官ジョン・ワトソン・フォスター閣下〔政治家（共和党）。メキシコ、ロシア、スペインの公使、国務長官を歴任。明治 27（1894）年来日〕で、下関での伊藤博文と李鴻章〔中国、清末期の政治家。日清戦争後、失脚したが、その後も政界に勢力を有し、義和団事件の処理などに当たった〕との間で行われた平和交渉での北京政府側の顧問だった人物だ。軍備をテーマとする会合で手短に意見を述べるよう依頼があり、事前に議長に引き合わされ、ある日の午後森の中で娘さん同席でインタビューを受

けることになった。その目的は、会議に際して私を紹介するにあたり、私の前歴を何がしか知ることだったが、彼の日本と中国に関する質問には多少神経質にならざるを得なかった。なぜならその質問がベテラン外交官の中国への個人的興味からきたものであることは解っていたが、米国の一部の新聞が、日本が中国や米国に戦争を仕掛ける意図を持っているのではないかと疑っていた時期に当っていたからだ。したがって、私の短い演説では、侵略的な西欧側が、武装解除や軍備制限によって中国の政治的独立性を保証するのであれば、日本も喜んで同じようにするだろうと明確に言って遣った。前トルコ公使でその後、商・労働長官になったオスカー・ソロモン・ストラウス大使〔米国最初のキャリア外交官：クリーブランドからタフトまで 4 代の大統領に仕えた。セオドア・ルーズベルトの棍棒外交を支持〕は、ご親切にも私のこの見解を「如才ない外交」と解してくれた。しかし私に言わせれば、日本の政治的独立は別にしても、少なくとも日本の経済的独立は、今日に至るまで、主として中国の独立如何にかかっているのだ。聴衆のご婦人の中には、「啓発的」という表現でこの会合を性格付け、私を心から祝福してくださった方もいた。

この演説の後、私はこの会議の教育委員に選出された。その日の午後はパーティーに参加した後、ミネワスカ湖〔モホンク湖のあるニュー･パルツより 11 キロ〕へ長距離ドライブに出かけた。そこはダニエル・スマイリー夫妻が夏の宿〔クリフ・ハウス：収容人員 225 名、昭和 53（1978）年焼失〕を経営しており、モホンクと同様に繁昌していた。このスマイリー氏はアルバートの腹違いの兄弟にあたり、アルバートの悲しい死の後、これら 2 つの会議の運営を自ら引き受けた。私がアウトルック誌のライマン・アボット博士〔組合教会派の牧師、編集者。イラストレイテッド・クリスチャン・ウイークリー、クリスチャン・ユニオン、アウトルックなどを編集、通算 52 年間に亘り社会問題に健筆をふるった〕と知り合いになったのもこの会議の期間中だった。

「美人地帯」

前出の私がインタビューを受けたフォスター博士の外交に関する著作はその後、興味深く読ませてもらっているが、博士の日本と日本人に関する見解の公平さには心を打たれている。会合の 1 つはボルチモアのジェームス・ギボンズ枢機卿〔南北戦争で従軍牧師をつとめ、後に大司教、さらに枢機卿となる。ワシントン・カトリック大の創立に尽力、第 1 次世界大戦時には全国カトリック戦時委員会を組織して奉仕活動を行った〕の祈りをもって始まったが、彼が着ていた法衣のお陰で、ある美しい鳥の名の起源が、辞書で調べるまでもなく明らかになった。そしてその 1 年後、その鳥〔カーディナル（枢機卿）・バード。通称レッド・バード〕に私は出会ったのだ。ボルチモアは、ジョンズ・ホプキンズ大学で優れた日本人が幾人か学んだことがあり、日本にもよく知られている。モホンク湖に行く数日前、不意にアトランティックシティの私の所に電話連絡が入った。元気はつらつの林女史〔林歌子は明治 38（1905）渡米、翌年にかけ矯風事業の視察と募金活動をおこなった〕がキリスト教婦人矯風会〔W.C.T.U.＝Woman’s Christian Temperance Union〕の仕事に関心を持つ教会関係者の集まりで、映像を交えた日本に関する講演を準備してくれたのだ。なんの事前連絡もなしに彼女から講演会の要請が来たので、実際にその講演場所に向う時には、どこかで汽車が動かなかったり乗り遅れたりはしないかと、道中ずっと不安だった。

次の日、ボルチモアを去るに当って、新渡戸博士〔新渡戸稲造：教育者、農学者。札幌農学校卒業後、ジョンズ・ホプキンズ大学大学院で学ぶ。太平洋の掛け橋として生涯をかけて国際的相互理解を深める運動に尽力。「武士道」は夙に有名〕と親しい友人であった故矢田部教授の 2 人の「母校」〔矢田部はジョンズ・ホプキンズ大学は出ておらず、本田の記憶違い〕を見ておいた。故矢田部教授は東京大学の初代理学部長で植物学の大家であった。

ただし、この物語で既に述べたように、私の知っているのは高等師範学校の英語科主任としての矢田部氏である。短気な人だったが、あたかもそれを償うかのように後悔するのも同じくらい早く、正直そのものの人だった。そんな矢田部教授を思い出しながら街を歩いていると、奇妙なことにボルチモアの街角で見つけた女性の姿が際立って魅力的に私の心に映じた。そしてアトランティックシティに戻るとすぐ、私は自分がちょうどアメリカの美人地帯の境界線上にいたということを知った〔サザン・ベル（南部美人）の北限がボルチモアである意〕。

日本食

米国に上陸して以来 10 ヶ月間というもの全く日本食の無い状態だったので、近藤家で週に 1、2 度いただく日本食の御飯や魚や漬物は本当に嬉しかった。ニューヨーク、ロンドン、その他日本人が多数住んでいる都市では、日本クラブか日本食レストラン、またはその両方が揃っていたし、そういった場所では主だった官吏は勿論、一般人でも日本人旅行者を「日本式」でもてなしていた。しかし、フィラデルフィアでは日本の食物には出会わなかったし、味覚が戻るまでは日本食が無くても寂しいとも思わなかった。これは正座の場合とはまったく違っていた。日本を離れて数ヶ月経った頃、ある晩ベッドの上で正座しようとしたところ、足が攣ってしまった。したがって帰国することになって必要に迫られるまでは、こんな習慣を取り戻そうとは考えないことにした。多くの日本人は、澱粉性の食物を大量に食べることから胃拡張になっており、母国の質素な食生活の嗜好から、永遠にとまではいわないが、何年経っても脱却できないようだ。私のような日本人「柔道家」が一度の食事で食べるパンの量は、下宿の女主人にヒステリーの発作を起こさせるほどだった。こういった輩はしばしば中華の店に行くとほっとする。そういった店は代表的な料理の名にちなんでチャプスイ〔中華丼〕食堂として知られているが、そこに行けばたっぷりのご飯を食べ醤油を使うことが出来る。もっとも脂っこい料理ではあるが。中華料理を贔屓にするヨーロッパ系アメリカ人も多いが、それは安上がりに胃袋を満たすためだ。アメリカ人は充分な量を期待して高い代金を支払うとよく言われるが、日本料理の場合には、たとえそうしても、そもそも肉食の人が満足出来るはずもないのだ。

戦争による「自惚れ屋」

初代海軍軍医総監の高木兼寛男爵は、若き日、ロンドンのセント・トーマス病院医学校で学んだが、明治 39（1906）年 6 月のある日、当時フィラデルフィア・カレッジ〔正しくはペンシルヴェニア大学〕に留学中の三男〔舜三〕と共に、アトランティックシティを訪れていた〔兼寛は明治 39 年 1 月から 7 月にかけ欧米旅行をしている〕。明治 15（1882）年に東京の松岡医院を薦めてくれたのは高木男爵だった。男爵の主任助手になっていた人物〔杉本良斎〕が国元の吉岡医院での先輩に当り、彼をその時から知っていたからだ。この男爵の好意にお返しが出来たのは 15 年経つか経たないかの頃で、二男〔兼二〕が英国に医学を学びに行くことになり、高木男爵が高等師範学校に推薦状を取りに来られた時だった。その推薦状というのは、高等師範学校附属中学校でご令息が所定の課程を修了したことを英語で証明するものだった。ボードウォークで思いがけなく私を見つけると、高木舜三氏〔この後大学を卒業し帰国、三井物産に入社しニューヨークに赴任するが現地にて客死〕は海岸沿いのリゾートを「2 人で」見物中だったにもかかわらず、喜んで父上を私に委ねて、この海岸沿いの景勝地を見物させてくれた。男爵は欧州訪問を終えて帰国する途中だった

が、3 時間の会話でとりわけ話題になったのは、男爵が共に大西洋を渡って来た日本人貿易商たちが、西洋人たちの日本人に対する関心の低さに落胆していた、ということだった。日露戦争直後には、かなり多くの日本人が、商用にせよ遊びにせよ世界中を旅して回っており、自分が何ほどの人物でもなく、また欧州言語のただ 1 つも話せないくせに、ロシア以外ならどこでもちやほやされて当然だと、愚かにも思いこんでいた。未だにこの日本で、大和魂が個人的にも、国際的にも奇跡を引き起こすと考えている「自惚れ屋」が散見されるのは困ったものだ。

教育委員会のために講演

友人の内田定槌総領事の要請でアトランティックシティを離れ、再度ニューヨークを訪問した。これは仕事でのことで、ライプチッヒャー博士〔ニューヨークの学校を夜間や日曜に解放し、スラム地区を中心とした社会教育に尽力〕を訪ねたのだ。彼はニューヨーク市の教育委員会における公開講座の最高責任者となっており、既にモホンク湖で面識があった。内田氏が日本に関する私の講演を彼に薦めてくれたのだ。私は教育委員会の講演者に任命され、その資格でニューヨーク中の諸施設で、日本と日本人について 2 年越しで話をすることになった。しかし、教育委員会としての講演はその年の冬から始まる予定で、そのドルの収入だけで生活することも出来たが、たとえ立派な稼ぎだったとしても、この私の置かれた国際的利点に甘んじてしまってはならないとも考えていた。当時はちょうど中国に味方してロシアと日本を非難するのが、一般のアメリカ人の間で流行っていた時期に当っていたので、なおさらのことだった〔日本がアメリカ人ハリマンからの長春、旅順間の鉄道に関する共同経営の申し出を、日露協商を楯に拒絶したため、米国内で日本批判が強まった〕。私の旧友、沢柳氏〔沢柳政太郎：教育者。東北大学初代学長、成城小学校の創立者。京都帝国大学総長の時、7 人の教授を罷免し問題となり辞職、これが世に言う沢柳（京大）事件である〕は現在貴族院議員であるが、文部次官への発令を受け、英国から日本へ帰る途中で、たまたまニューヨークに滞在していた。ロンドン大学で日本の教育について講義をするために英国へ渡っていたが、不意に本国召還となり、菊池大麓男爵が代講することになった。アトランティックシティとフィラデルフィアを案内しながら、沢柳氏に自分の置かれた状況を説明し、アメリカとヨーロッパで日本のために自分が出来る仕事はないか、この機会を使って頼んでおいた。

政府給費海外留学生となる

数ヶ月後、文部省から 2 年間の政府給費海外留学生に選任するという通知を受けた（**補注**）。それは明治 40（1907）年 4 月 1 日をスタートとするものだった。日本を離れる前にはかかるポストは当然不適任だと思っていた。なぜなら健康診断で落されると確信していたからだ。ところが健康面での指定条件としては、本人の健康状態に問題がないという海外在住者の証明があればよく、他には片道の旅費を負担すればいいということだった。そしてちょうどその頃、私は興味本位であったが、なんと西洋人の花嫁を紹介してくれる結婚仲介業者に、申し込みをしたのだった！ニューヨーク「ワールド」〔ジョセフ・ピュリッツァーが主宰した雑誌。ハーストのニューヨーク・ジャーナルと並んで、大衆迎合の記事で名を成した〕には夥しい数の広告が載っているが、その中の一つの広告が目にとまったのだ。そもそも結婚を商売にするというその仕事の中身自体が私にはどうしても理解できなかった。そこで、日本人であること、かくかくしかじかの年齢、学歴、容貌、資産が無い

こと、転居可能なことなどを明記して、シカゴのその会社に手紙を書いた。さっそく返事があって、タイプ打ちの長い手紙には、若い女性の小さな写真と、大喜びの会員からの手紙を引用した印刷物が同封されていた。あなたにぴったりの方がたくさんいます。お示しした写真はそのほんの一例です。5 ドル入金次第で若い女性との出会いをすぐにセットします、とこんな具合だった！とにかく、私は未だに日本の結婚斡旋業の手口には疎いが、日本のことわざで言えば、灯台下暗しの格好の事例だった。

（補注）『朝日新聞』等に載った留学生任命の記事

明治 40（1907）年 4 月 2 日
『朝日新聞』
〇海外留学生任命
文部大臣は左の両氏に海外留学生を命じたり。三十九年度派遣留学生は之にて締切となり、其総員五十一人、之れに従来の派遣者を合すれば卅九年度末現在の留学生総員は七十九人となる。
東京高等師範学校教授　　佐々木吉三郎
教育学及教授法研究の為め満二箇年間独国へ留学を命ず
東京高等師範学校教授　　本田増次郎
英語研究の為め満二箇年間米国及英国へ留学を命ず

以下『読売新聞』
〇海外留学生の任命
文部大臣は昨日左の両氏に海外留学生を命じたり。三十九年度派遣留学生は之にて締切となり、其総員五十一人、之れに従来の派遣者を合する時は昨三十一日即ち三十九年度末現在の留学生総員は七十九人となるなり。
東京高等師範学校教授　　佐々木吉三郎
教育学及教授法研究の為満二箇年間独国へ留学を命ず
東京高等師範学校教授　　本田増次郎
英語研究の為め満二箇年間米国及英国へ留学を命ず

田園生活の魅力

嘗て日本で暮らしたことがあり、私の有料講演を最初にセットしてくれたコンラッド夫妻から、その年〔明治 39（1906）年〕の初夏 1 ヶ月を招待するからという親切な申し出を受けた。そこで 2 週間だけニュージャージー州クロスウイックス〔フィラデルフィア北東 20 キロ〕にある田舎の邸宅でお世話になることにした。しかしこの邸を訪問するのはこれで 3 度目だったが、「木を見て森を見ず」の逆の格言、「森を見て木を見ず」の真実が、この体験から実感出来たのだった。アメリカで、その風景の魅力は幾ばくかは見知っている積もりだったが、これまで田園地帯を訪れたのは多かれ少なかれ急ぎ足だったので、この村で見る殆ど全ての草木が私に新たな関心を引き起こしてくれた。満開のシャクナゲ、ジャコウネズミ、亀、池で密やかに咲いている日本の蓮、コンラッド家で飼っている大きなロシアン・ウルフハウンド〔狼狩用の猟犬〕、乳牛の乳絞り、干草作り、そしてハチミツ抽出の様子------これら全てが始めて見るか、あるいは新たな状況下で見るものばかりだった。ある日の午後、局地的な激しい雹の嵐があった後、ゴルフ・コースの芝生に深いくぼみがたくさん出来ているのに気がついた。様々な鳥たちが庭の木々ではさえずっており、低木には鳥の巣も散見された。米国では大人も子供も余りに優しいのか、他の事で余りに

忙しいのか、とにかく鳥たちを苦しめるようなことはしないのだと合点した。恐らく暖かい日本では、この愛らしい生き物が人間の居住地の近くに住めないようにする役目の一端を蛇が担っているのだろう。

危険なカクテル

アトランティックシティで、暑中休暇中のある女優に 3 週間、日本語会話のレッスンをした。自国では、英語を日本人の学生に、そして日本語を中国人や西洋人に教えたことがあったから、語学の授業自体は私にとって目新しいことではなかったが、極めてユニークな新しい経験をすることになった。私のこの教え子は際立った俳優としての才能がある訳でもなく、また、浮ついた男性を近づけないようにするための用心棒役のご主人が付いていない訳でもなかった。一番印象に残ったことは、彼女の耳が日本語のリズムをすばやく捉えることであった、もっともこれは舞台に立つ人なら当然のことだ。それと見せてくれた舞台用の鬘が日本のものと大きく異なっていたことだ。日本の昔ながらの鬘は上演の都度、なんとも重く、硬く、準備に骨が折れるのは困ったものだ。夫の W 氏がある日カクテルを作り 1 杯おごってくれたことがある。それはアメリカ滞在の 1 年目で、アルコールご法度の世界に住んでいたので、この強い酒がマティニーだったのか、マンハッタンだったのか定かではない。その後ニューヨークでストレート・ウイスキーの一気飲みを、しかも「チェーサー」〔強い酒の後に続けて飲む水やビール〕付きで伝授してくれた紳士は、これもまた舞台関係者、すなわち演劇批評家だった。またその後、やはりニューヨークで舞台関係者のパーティーに出席したのだが、全員が泥酔状態で、かつ午前様になってしまい、一体どうやって家にたどりついたのかも判らない。なにも私はこういったカクテルが悪いと言っているのではない。この出来事の教訓はと言えば、飲みつけないカクテルは危険だということだ。

トルコ語

8 月の初め、ペルシャ〔トルコ帝国〕に国会が設立されたというニュースが米国にも届いた。これは明治 38（1905）年に国民が国会設置を要求したことの結果だった。この国民運動は日露戦争の勃発と同時に起こったものだが、人道主義者の友人たちの間では、全般的に衰退した東方の再生に繋がるものとしてどこでも好評だった。私に言わせれば、もし日本がこの来るべきアジアの再生に力を貸すことになるとすれば、日本は先ずトルコと友人となるべきだ。これは英国とドイツの影響力を排除し、これに日本が取って代わるためということではなく、西洋人には理解出来ないことも同じアジア人種のわれわれなら理解可能かもしれないからだ。明治 40（1907）年、コロンビア大学のヨハナン教授〔アブラハム・ヨハナン：言語学者。イラク北西部ウルミの生まれ、長年にわたりコロンビア大学で中東の諸言語を指導、米国聖公会司祭〕についてトルコ語を学び始めたのは、１つにはこの考えに基づいたものであったし、また日本語とトルコ語の共通点を探したいということからだった。トルコ語の勉強はロンドンに移った翌年も、ロンドン大学のアントン・ティエン教授について続けた。ヨハナン教授はペルシャ人の教会関係者で、横浜の米国聖公会のアイ・ドーマン氏はヨハナン夫人の従兄弟に当る。チャン教授はシナイ山生まれのユダヤ人で、クリミア戦争の時イギリス軍の通訳をしていた。私がロンドン大学で会った頃はロンドン北部の教会の責任者だった。将来、日本がトルコと正式に条約を結べる時は果たして

来るだろうか！

植物虐待

果てしない大西洋の海原にかかる月は、えもいわれぬほど美しく、何時までも飽きもせず愛でていたほどだった。もっとも、12 世紀前、中国にいながらあの想像力豊かな詩を詠んだ日本人学者〔阿倍仲麻呂〕のように、太平洋を隔てて正反対の位置にいる自分の視線が自国の人々の視線と、あの天体で交わっているのだといった風には、私にはとても想像出来ないが〔唐土（もろこし）にて月を見てよみける「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」という阿倍仲麻呂の歌から、中国と日本からの二つの視線が読み取れる〕。気が付けば、この雄大な風景に感動するアメリカ人はほとんどいないのである。というのは、海沿いのパビリオンの椅子に座っている人々は、月が映える海の方とは正反対のボードウォークの方に向きを変えて、夜、何時間も並んで、そこを行き交う人の波を眺めているのだから。しかし、これは趣味の問題であって道徳の問題ではないから一向に構わない。ところが、次の問題はアメリカ文明の最大の欠陥、言い換えれば自然に対する甚だしい不当行為だと私は思う。それは、森林地帯において見られる電線を取り付けるため生木にくぎを打ちつける行為と、生長する木の幹に鉄条網を食い込ませる行為のことである。このことをしばしばアメリカ人の友人に訴えてはみたのだが、動物に対するようには、植物に対しては同情してくれない。もちろん人間は矛盾だらけの生き物である。物言えぬ動物に同情的な人々でも、殺してその肉を食べることを、必要だからと言う理由で正当化する。また「草や木への憐れみ」を信じる人々が、魚、鳥、小さな四足動物を貪り食う。生き物は人間によって消化されることによって、より高次の性質を持つことになるというブッダの教えによって良心の呵責は弱められるのだ。植物が苦痛や喜びを感じるとする日本人の感性は、呪いの対象である人物の藁人形を釘で神聖な木に打ちつける古い迷信に一部は起因しているに違いない。しかし、木や森を神々に捧げるという考え方のお蔭で、緑が守られ雨量の調節がなされ、さらには人々の心の中で物質世界の精神化が図られるという成果が得られるのだ。

ヤコブ・ヘンリー・シフ氏

アトランティクシティではカーネギー図書館を常時利用した。海岸で 4 ヶ月近くを過ごしてから、明治 39（1906）年 10 月、ニューヨークに行き、それから 1 年半後英国へ出航するまでそこに滞在した。ニューヨークでは各国の国民性や風習について、既に読み知っていたものを最新の状態にすることが出来た。ロンドンにおける社会教育の最善の形態が夜間学校であるとすれば、ニューヨークの講演はそれにエンターテインメントの要素が加わっているという強みがある。というのは、ほとんどの講演が幻燈を使用しており、主題も広範囲な知識をカバーしたものとなっているからだ。その冬は、その教育委員会用の講義以外にも、コロンビア大学で日本の風俗習慣の歴史について 3 回の講義を、またバーナード・カレッジ〔コロンビア大学系の女子大〕では日本の女性や婦人たちをテーマに講義を持った。この講演の依頼は回り回ったルートでもたらされた。有名な銀行家のヤコブ・ヘンリー・シフ〔テキサスへのユダヤ人入植を組織。日露戦争に際し日本国債の引受けに功績があった〕は、日露戦争後、日本を訪れ明治天皇から勲章を授与されたことがある。受賞したのは戦争中の資金調達への貢献が理由だった。高等師範学校校長の嘉納氏は、東京でこのシフ氏に会ったことがあり、この銀行家に書状を送り私を推薦してくれたのだ。さ

らにこのシフ氏の紹介状を携え、私はコロンビア大学のニコラス・M・バトラー学長のもとを訪れた。そして、ほんの５分の面談で私のための手配が全て完了した。数年後、日本協会の晩餐会でシフ氏とご一緒する機会を得たが、その時、満州鉄道の国際化に嘗ての交戦国〔日本とロシア〕が揃って反対していることに不快感を表明された。シフ氏は人種差別を理由にモスクワ政府を毛嫌いしていたので、私も個人的にではあるが、共感を覚えた。

オランダのジン

ニューヨークでのこと、短期間であったが、オランダ人の男やもめであるＤ氏と同部屋に住んだことがある。母親と小さな娘を、新しい家に落ち着かせる迄のことだった。もう 1 人の事業家と共同で、田舎に醸造所を、町に事務所を持っていた。数日間だったが、彼が敗血症〔血液の中に細菌が入り全身に炎症を起こす病〕で重篤になった時、私が看病してやったが、後にこのお礼として母上から香水をいただいたことがあった。チャールズ・エバンス・ヒューズ閣下〔後の米国最高裁判所長官〕がニューヨーク州知事になった選挙の日の夜、Ｄ氏たちの好意でホテルの部屋から、華やいだ通りを眺めることが出来た。こういった場合には、米国の習慣で、知らない人を羽箒でくすぐるのだが、これは対立者たちのいらだった気持ちを和らげる上で効果的だと感じた。共和党、民主党、いずれの候補者にも中立な無関心派の日本人でも、若い女性から一端の人間として扱われると、やはり気持ちが良いものだ。またＤ氏は醸造所にも連れて行ってくれたが、そこで、独特のオランダの飲み物であるオランダ・ジンに、ジュニパー・ベリー〔ネズの実〕で香り付けをする工程を学んだ。ダニエル一家は、クリスマスにはすてきなタイピンも贈ってくれ、様々なヨーロッパのソーセージを食べさせてくれた。ティルシーという小さい娘にドイツ語を教えるため女性家庭教師を雇っていたが、うわさでは、この人がＤ氏の二番目の奥さんになりたいと言っているようだった。2 年後には、Ｄ氏の叔母さん一家にロンドンで会った。

故フェノロサ教授

その年〔明治 39（1906）年〕、ニューヨーク総領事代理〔永井松三：外交官〕の主催した天長節のパーティーには、多くの有名人が出席していたが、一宮〔旧姓河原（かわはら）〕操子（そうこ）夫人という人に会った。現横浜正金銀行ニューヨーク支店長〔一宮鈴太郎〕夫人だ。彼女は日露戦争当時、たまたまモンゴルで現地の王族一家の家庭教師をしていたため、結果的に祖国への情報提供の役割を密かに果たすことになった〔正確には、入蒙当初からロシア工作支援の密命を受けていた〕。その功績により後に明治天皇から勲章を受けたのだ。東京の友人であるアーネスト・フランシスコ・フェノロサ教授〔岡倉天心と共に東京美術学校設立に努力。帰米後、日本美術の欧米紹介に貢献〕夫妻も出席していた。それから数年を経てのことだが、日本人の教え子たちが教授の遺灰をロンドンの墓地から琵琶湖にある寺院の墓地に移したときのことだ。私は米国の新聞に、故人が如何に日本美術の海外紹介に功績があり、また常々、如何にその美しい場所で最後の眠りにつきたいと語っていたかを書いて送った。しかし、驚いたことに、フェノロサ夫人から苦情が入った。それは、愛する夫の霊に英国では十分な敬意が払われていないといった誤った印象を一般に与えてしまう、というクレームだった。言語を使う際には、とくに借用語の場合、どんなに注意してもしすぎることはないと、この一件で私は思い知らされた。我々日本人としては、フェノロサ氏が西洋の芸術が単純化という東洋の理想に向かって飛躍的に進歩するのを見届けるほど長

生きして欲しかったと願うばかりだ。もっとも、日本の芸術の方は、逆にリアリズムに向かい、細部へのこだわりを増しているので、同時にそのことは残念に思われるだろう。

アルフレッド・モーズリー郷士（ごうし）

所用でニューヨーク市の教育委員会に出かけた時、ロンドンから来たアルフレッド・モーズリー氏〔セシル・ローズと共に南アフリカでダイヤモンドを採掘、巨万の富を築く。篤志家としても知られ、南アフリカにプリンセス・クリスチャン・ホスピタルを創設〕に紹介された。それは12月3日であったが、数百人の英国人教師と共に、アメリカ合衆国とカナダの学校を訪問するため、その時米国に滞在していた。我々が話したのはほんの数分間だったが、最後に自邸の住所を教え、英国に来た時は寄るようにと招待してくれたのだ。そして年明け早々のある時、永井総領事代理、現外務省私設秘書官が、ロンドンの「タイムズ」の切り抜き**（補注）**を送って寄こした。それはモーズリー氏が米国で書きロンドンに送った手紙〔正確には、ロンドンに戻ってから、『タイムズ』宛てに書いた書簡〕で、その中で私のことを褒めちぎってくれていた。この偶然の出会いが、後にモーズリー氏の日本の貿易政策に関する提案に繋がった。それは、日本は英国の企業と競争して英国貿易商の怒りをかうのではなく、ドイツ製品より安い物を供給して、むしろ英国や大英帝国との貿易を増加させるべきだというものだった。この考えは大隈侯爵に提示され、侯爵はモーズリー氏に来日し産業の現状を調査するよう依頼した。そしてその依頼をモーズリー氏が受けるところまで行ったのだ。ところが現実には、この計画が実行される以前に世界大戦〔第 1 次〕が勃発し、この両巨頭が思い描いた以上に大量の日英間の貿易取引が行われるに至った。この英国人博愛主義者〔モーズリー氏〕は、現在、ボーア戦争の時と同じく、英国北部で自ら立ち上げた病院の経営に係わっている。彼がセント・ジョン・オブ・エルサレム騎士団勲爵位の称号を授かったのは、このボーア戦争での功績〔プリンセス・クリスチャン病院の創設〕によるものだ。明治 35（1902）年、米国に提出されたモーズリー産業委員会報告が日本語に翻訳されてから既に久しい。

（補注）モーズリー氏からの手紙

”MR. MOSELY’S RECENT VISIT IN THE UNITED STATES.” *The Times* 明治40（1907）年2月2日

モーズリー氏による最近のアメリカ合衆国訪問
タイムズ編集長殿
拝啓　私は最近アメリカ合衆国とカナダを訪問し帰国したところです。現在、英国の先生方が公立学校の制度を視察中ですが、その到着前の下準備をするため行っていた訳です。この分野で何が行われ、またこれらの国々で如何なる進歩が見られるのか、それらを理解しようとされる方々にとっては、私の手紙は興味深いのではないかと考えます。
（中略）
英国以外の国々の指導者たちも、私と同じく、アメリカ合衆国の教育制度を研究することによって、多くのことを学ぶことが出来ると考えています。したがって、米国の学校を視察するため、常に多くの訪問者があります。とりわけ、私が見るところでは、インドからの視察団の面々は、総てを学んでやろうという意気込みと、インドが教育後進国のままであってはならないとの確信に満ちています。しかし、ここ数年間で会った人物の中で最も際だった人物はといえば、東京高等師範学校の本田増次郎氏です。氏は米国の教育法を

研究するため、日本政府によって派遣されたのですが、この紳士との数分の会話で、英国人が往々にして抱きがちな、日本人は本当に真面目かつ知的なのかという疑問を、一気に氷解させてくれたのです。おそらく氏から学んだ最も興味深いことは、中国の近代化に寄せる氏の確信の強さでしょう。中国は急速に近代化を図っており、西洋の諸制度を採用したなら、近い将来、必ず手強い相手になるに違いないという考えです。しかも彼はこの点を確信し切っているのです。

（中略）

世界の諸国民は次第に豊かになって行くのでしょう。しかし、富には責任が伴います。その責任を誠実に果たすことのない物質的進歩などない方がましなのです。

敬具

アルフレッド・モーズリー

1 月 18 日　E. C.　エリープレイス　ユニオン銀行ビル

（訳：長谷川勝政）

なお、アルフレッド・モーズリーについては桜井彦一郎が『欧州見物』丁未出版社 1909 で触れているので、下記に引用しておく。

終に予が英国にて会見したる多くの紳士の中、認めて以て英国紳士の典型なりと思へる一人物、即ちアルフレツド、モーズリー氏を紹介せん。氏は赤手（せきしゅ）〔すで〕、南亜に赴きて、英傑セシル、ローヅ等と共に奮闘的生活を送り、金剛石（ダイヤモンド）坑を開いて、巨万の富を致したる自助的人物である。今や齢未だ六十に達せずと雖も、足の悪きがために、致富の事務から退いたが、猶ほ無為徒手で富貴を楽しむ人では無い。氏は英国の教育法が、余りに実務に疎いのを嘆じて、子息二人は米国ハーヴアード大学に送つてゐる。但し四人の令嬢は家庭教師を雇うて純英国風に教育してゐる。而して米国教育法の大に鑑とすべきものあるを思ひ、先年既に二回の教育視察員を米国に送つて、其第一回の報告書は、我国文部省にて翻訳した。又た実業視察員を米国に送つたこともある。今年春は那翁（なおう）〔ナポレオン〕最後の孤島セント、ヘレナの土民に殖産興業の途を授けんが為に渡航し、又此秋に再航する筈である。昨年秋には加奈陀及び米国合衆国から、凡そ千人の男女教師が、モーズリー教育視察員となりて英国に渡来したが、氏は熱心視察の便を備へ、又た毎度曜日午後には、此等視察員を交る交る、ハツドレー、グリーンの自宅に招待して、茶菓の饗応をなし、夫人、令嬢等で庭園に案内したり、音楽を奏したりなどして、接待に勉めるのであつた。予も本田、上谷両氏と共に、かかる土曜日の数時間を同氏邸に愉快に送つた。視察員は見受けたところ、孰れも、小中学の教師らしく、彼等はモーズリー氏の尽力により、太西洋の往復船賃廿五弗の大割引額で、英国に来りて、学校、製造所、古蹟などの視察をなし、又た序に欧州大陸にも遊ぶことが出来て、其見聞を広くすることを得るのを大いに徳としてゐる。モーズリー氏は亦た日英の同盟をして実効あらすむるに就いて、多年の持説がある。同盟とは政治上の同盟のみでは実力が無い、必ずや実業上の同盟にまで及ぼさねばならぬ。日英は実業同盟を結び。日本は英国特長の製造品を模倣せず、独乙、仏国などの製造品を製造して、英国市場へ輸入する、英国は之れを販売するに勉めるといふ風にせねばならぬとの説で、其目的に近づく為には、日本から有力なる実業視察員を英国に派遣するを可とす、氏は如何やうにも斡旋の労に任じやうと云ふのである。予が倫敦を去るに臨みて、氏をユニオン、バンクの事務所に訪問した時にも、亦た此説を唱へ、日本へ帰つたら、先輩友人の間に此説の吹聴をしてくれよとの事であつた。

米国の薩摩

3、4 回目になるが、ニューヨークで、フランス語とドイツ語の勉強を再開し、これはロンドンでも続けた。最初に覚えたドイツ語は、自分ではマスター出来たと思っていたのだが、明治 23（1890）年に腸チフスに罹って回復してみると、完全に記憶から消えていた。外交官の言語〔フランス語〕も習得しようと努力したが、栄冠に輝くことはなかった。何年か前、パリっ子のタクシー運転手に私のフランス語を試してみたが、行き先の住所を一文字ずつ書くまでは全く埒があかなかった。イーストサイドの小学校で、移民の子供たちが英語を覚える早さは、驚くべきものだったが、外国語を学ぶ大抵の学生より若いし、また学校の内外で英語を話す子供たちに囲まれているのだから、こういった市民の卵はただただがむしゃらに英語を学ぶだけだ。英語こそ、米国に流入する全ての要素をアメリカ化してしまう、最も強力な武器だと断じていい。日本語の言葉でさえ、フロリダで取り入れられているのに気付いた。というのは、フロリダ州から来た婦人に、フロリダにあるサツマという地理上の名の由来について聞かれたからだ。薩摩地方特有のみかんがフロリダの地に植えられ、そこはサツマ高地と名付けられたのだ。アメリカ・インディアンと日本人の人種的類似性を主張する人もいるが、タコマは「高山」、つまり「高い山」が起源だという。そこの海岸で座礁した昔の日本人水夫が、そびえ立つ峰、レーニア山を見て、タコマと言い換えたのに違いないと、彼らは主張している。

ペリー提督の遠縁

以前東京に住んでいたペリー嬢たちは、当時コネティカット州ハートフォードに住んでいたが、彼女たちの紹介で、明治 40（1907）年初め、ニューヨークで既に結婚していた兄弟たちと知り合いになった。一番上の兄は、故ウイリアム・A・ペリー氏で、ヤコブ・ヘンリー・シフ氏同様、影響力のある銀行家で、米国での戦費調達債の発行で日本に貢献した人物だ。ペリー一族は、この上なく親切で、ウイリアム・A・ペリー氏の夫人は、社交界のリーダーでもあり、様々な分野の有名人と知り合うきっかけを作ってくれた。とりわけロバート・E・エリー夫妻を紹介してくれたのもペリー夫人だった。エリー氏は社会教育家であり、日本でも広く読まれている政治経済学者のリチャード・T・エリー博士の縁続きに当る。またエリー夫人はオランダ人の元舞台女優で、その世界では有名だった。ジョンストン・フォーブス・ロバートソン卿〔英国の舞台俳優で、当代最高のハムレット役者と評された。アメリカ初演は「お気にめすまま」。気品あふれる容姿と美声の持ち主だったという〕が、「三階の哲人」〔The Passing of the Third Floor Back〕の公演でニューヨークに来ていた時、夫妻は歓迎の昼食会をシティ・クラブで開いたが、私も同席し卿に会うことが出来た。このエリー氏は市民フォーラムの責任者の地位にあり、菊池大麓男爵の日本の教育に関する講演を実現してくれた。それはカーネギー・ホールの大観衆を前に行なわれた〔男爵の声は演説向きというわけではなかったが、その英語はキングス・イングリッシュで、ホールの隅々にまで聞えたという〕。しかし、ここで話をウイリアム・A・ペリー夫人に戻そう。彼女は金子堅太郎子爵〔官僚：ハーバード大学卒の人脈を利用し、米国における戦時工作に従事、日露戦争の陰の立役者と言われる。日本法律学校（日本大学の前身）初代校長、貴族院議員、農商務大臣、司法大臣を歴任〕の偉大さを固く信じていた。日露戦争当時子爵がアメリカで話し

た或ることについて、私が敢えて反駁したことがあったが、やさしい心根の彼女は、自国での私の立場を慮って、ばかなことを言わないようにと注意してくれた。

呼吸装置

また彼女は間接的ではあったが、私の悪化した健康を驚異的に取り戻す手助けをしてくれた。米国での最初の冬は手元にさほど重い仕事も無く健康に害はほとんど無かった。ところが、2 回目の冬は非常に厳しく、加えて講演の準備が大変で、明治 40（1907）年の 3 月には絶望的な状態に陥っていた。ある医者に数週間は診てもらったが、得られた結果だけで患者が判断することが許されるなら、米国の科学が信用できなくなる程の代物だった。そこでペリー夫人にもっと良い医者はないか相談してみた。早速、以前ペリー家で晩餐を共にしたことのある W・ベンジャミン・ウッド医師を推薦してくれた。彼は私に奇跡を起こしてくれた。頑固だった熱も下がり、食欲も数日で回復し始めた。しかも何の薬も一切使わずに効果を見たのだった。その治療方法は私が経験したところ一風変わったもので、その後、同様の方法がドイツでも用いられていると聞いた。大人１人が十分入れる大きさのガラスケースの中に座ると、上部から中の空気がポンプで少し抜き取られる。それから、インドゴム製の管を通して外部の空気を深く胸に吸い込むように言われるが、この管を医師が外から開け閉めする。この呼吸運動は 1 回数分しか行われなかったが、血液の循環を高め、頭痛を取る即効性があるようだった。およそ 6 ヶ月間これを毎日繰り返したが、後半の 3 ヶ月はキャッツキル山脈にあるオンテオラ峰〔ニューヨーク北方、ウッドストックから８キロ〕**（補注）**で過ごした〔宿泊したのはフォックス・アンド・ベア・イン、正面にマーク・トウェイン一家が嘗て住んでいたコテージがあった〕。このお蔭で私の健康はここ数年では一番良い状態になった。ウッド医師はこの治療を全て日本に対する好意から私のためにやってくれたのだ。金持ちたちは休暇を過ごすのにおおわらわだったが、病気をこのように治してもらうには、定めし大金の治療費を叩くことになるのだろう。

（補注）オンテオラ峰

本田増次郎「英米雑俎（10）Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正５（1916）年８月１日

New York 近辺の mountain resorts と云へば Catskill が尤も広く日本に知られて居る。これは Irving〔ワシントン・アーヴィング：米国の作家。代表作、『スケッチブック』の Rip van Winkle の話からである。自分は一夏をキヤツツキル連峰中の Onteora に過して、現に米国浦島〔「リップ・ヴァン・ウィンクル」は『スケッチブック』所収の作品。キャッツキル山地の猟師が山中で老人に出会い、一緒に酒を飲む内に眠ってしまい、目を覚ますと 20 年が経ち世の中が変わっていたという話〕の本人が住んで居つたといふ村へ、その野外劇を見に行つた事がある。友人四五人と四頭立ての大馬車で over ten miles を走つて、向ふへ着いたのが夜の九時過ぎで、Onteora へ帰つたのは午前三時頃であつた。

先づ松山の平らな処を clear して急設 benches の観席をしつらへ、伐り残したる松樹の枝々から電燈がさがつて居る。Stage（舞台）はダラ々々上りの slope で同じく枯葉を打ち敷いたまゝである。無事に且つ面白く演劇も進行して、van Winkle が Sneider! Sneider! と愛犬を呼ぶ処になるとワン先生中々出て来ぬ。日本の芝居と違つて本物の動物を使ふので、先生無断で運動にでも出たか十五分も舞台に穴をあけた。

Catskill mountains の避暑地は非常に数が多く、到る所に refinement〔上品さ〕の欠けて居る。Jewish marchants が横行するので、New York gentlemen の一団が Onteora club

を組織し、其の会員ならでは地面を買ひ cottages を建てられず、又 Bear and Fox inn といふ如何にも山奥らしい宿屋があつて、会員又は其の友人だけを泊らす事になつて居る。かくて非常な millionaires が来て交際社会に恐慌を起させる事もなく、vulgar な人間が来て仙境を俗化する事も出来ぬやうになつて居る。彼の Mark Twaine なども元と此 club の会員で、幾多知名の文士書家楽人俳優などが Bear and Fox の掘つ立小屋に起臥したのである。

本田増次郎「英米雑俎（11）Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 8 月 15 日

Onteora Club　欠点と云へば湖水のない事であるが、其の外には golf rink も Tennis court もあるし、motor or carriage drive も mountain climbing も自由であり、musicals や lectures や library もある。しかし一里ほど下ると Tannersville といふ村が町に変ずる程 Jews が来て居る。それで race prejudice の強い人は、地名を Tanners*vile*〔vile は卑しむべきの意〕とモヂつて居る。

国際的健康法

日本に戻ってみると、同様な発明を日本人もしており、実際に使用されていることを知った。それは「静座法」、言いかえれば「静かに座る方法」とでも言うべきもので、深呼吸と「禅」僧が行う精神集中のようなものとを結びつけたものだった。まず出来る限りゆっくり息を吐き、肺を空にするよう指導される。そうすることによって、努力することなく吸気が大量に一気に入って来ることになる。しかもこの肺を空にする行為は、正座してするのが最も効果的で、ゆっくりと腹腔を最大限までふくらませて終わる。こういった呼吸方法から自己催眠の効果が得られ、一時的な精神活動の停止と、深い眠りとよく似た完全な休息が与えられるのだ。ウッド医師の装置を使うとめまいに襲われることもあるが、患者に対し常に言葉をかけてくれるので、心も体も楽になる。私の症状は次のような理論が当てはまるという。野心的な日本人は、これは日本人に共通することだが、日露戦争中とその後も個人的にも国民全体としても、所与の肉体的、精神的能力以上に完璧を期そうとしている。そのため神経衰弱にかかる。しかもこれは文明社会に共通なものだという。どうやら彼の見解は正しいようだ。現在のヨーロッパの紛争を見てみても、最終的には狂気そのものに陥る神経衰弱以外の何物でもない。ウッド夫妻は日本美術の優れた愛好家であり、選りすぐりの浮世絵と刀の鍔を収集していた。

日本式のお見合い

地球の西半分でも「日本式」のお見合いがまったくないわけではない。私はそんなお見合いに多少係わった。いつも仲人をやっていたという訳ではないのだが、この場合たまたま個人的にその妙齢のお嬢さんを知っていたので、その人を相手にと勧められていた私の友人が、そのお嬢さんのことで知っていることは全て教えて欲しいと頼まれたのだ。彼はニューヨークにおり、彼女は日本に住んでいる。しかも 2 人はまだ 1 度も会ったことが無い。しかし、これ以上の良縁は無いと私にも思われた。ところが、この友人の話によれば、国許の老母が、相手が如何に良い人だという話しを聞かされても、息子が会ったことも無い女性と結婚することに強く反対しているということだった。------そうして、話は立ち消えになった。その後しばらくして彼は休暇で東京を訪れ、この一件に以前係わった私たちがまったく知らないうちに、その本人を花嫁としてニューヨークに連れ帰って来たのだ。終わり良ければ全て良しではあるのだが、ただその途中で、甲乙つけがたい花嫁候補を巡

って胸が引き裂かれる思いもしたようだ。もし彼が米国の乙女に恋していたなら、不躾にとやかく言う人はいないだろう、お国柄に雲泥の差があっても、文化の進んだ国同士の男女が互いに惹かれるのは実に魅力的なことだからだ。ところが、貧しいアイルランド人やハンガリー人の女性と結婚する海外在住の日本人の場合は別だ。彼女たちは夫の金が尽きるやいなや夫を捨ててしまうのだから。このような不愉快な目に会わないようにするため、アメリカ大陸の太平洋岸で、思いやり深い人々が写真によるお見合いの制度を発明したのだろう。

磨かれていない宝石

アイルランド人の移民は米国に上陸し、電車の運転手や警察官になるやいなや、礼儀を失ってしまうとよく言われるが、これは行きずりの者でも観察すれば解る。黒人の場合はポーターやウエイターになり、白い歯を見せながらニヤリと笑い、「あいよ」と言ってチップを受取る。しかし、そんな無礼さにも純粋なところ、つまり未だ磨かれていない宝石のような美しさがある。それが肩苦しいエチケットに辟易している人にとっては、一服の清涼剤のように感じられるのだ。嘗て田舎の駅で汽車に乗り、バッグを手に持ったまま座れる席はないか探しながら、立っていたことがある。しばらくすると、私のふくらはぎを何かが軽く触る。しかし、外のことにかまけてそのことをまったく気にも留めなかった。ところが、それはさらに激しくなって来る。そこで私は振り返った。すると親切そうな顔の村人が、混み合った客車の空席を私に指し示してくれているのだった。１つだけだが英国風の紳士気取りの哀れな物まねに堕してしまっていると思われた例がある。それはニューヨークの人気のある教会での出来事だが、若い牧師が、私のはじめての訪問を「不躾に」終わらせてしまったことだ。彼は私のことを社交界のご婦人から聞き、自邸での晩餐に招待してくれた。しかも会うことについては、事前に時間と場所を明確に定めてのことだった。書斎に通された時には、速記者に手紙を口述筆記させているところで、15 分程待たされたあげく、敬うべき牧師様は私の側に座り、2、3 の個人的な質問をし、日本の紳士にずっと会いたかったという話をした。そして最後に一言、「ご訪問に感謝します。それではごきげんよう！」と。おそらくその夜は余りに疲れていて、私のみならず誰に対しても丁重には対応出来なかったのだろう。この後しばらくして、この牧師は司教になった。ということは、この人は余ほどご立派な人だったに違いない。

握手、それともお辞儀？

ロードアイランド州ニューポートで会ったもう 1 人の牧師、後にその母上にフィラデルフィアで私は会うことになるのだが、この牧師は、その後ローマの聖公会の教会を任された。彼の法王に対する激しい無礼な振る舞いは、米国に外電で知らされ、新聞紙上でも議論の的になった。世論の支持が得られるかどうかはいざ知らず、この友人は信条の点から、プロテスタント系と自由主義系の教会に依怙贔屓をした。説教の時、ローマ法王庁のことを「川（テヴェレ川）向こうのテイラー氏！」〔バチカン市国はローマの中心街から見ると川向こうに当る〕と呼んだのだ。「テイラー」とはもちろん威厳有る当時のローマ法王のラテン名であるジョセフ・サルトをけなして英語風に言い換えたものだ。この礼儀の問題というのは、次のような場合には困った状況になる。すなわち、海外にいる日本人が自国のお偉方と、アメリカ人やヨーロッパ人と一緒に対面した時だ。明治 40（1907）年 5 月 15 日、ニューヨークの日本協会で故子爵青木周蔵大使並びに伯爵黒木陸軍大将〔黒木為槙（ためとも）：日露

戦争当時の軍司令官〕と男爵伊集院海軍大将〔伊集院五郎：英国海軍大学卒〕を迎えてレセプションが開催された。この高貴な 3 人と側近たちが 1 列に並び、出席者全員と握手をするのだ。私は他の人たちがやるようにやったが、礼儀にもとるのではないかという気持ちがない訳ではなかった。一般的言えば「米国ではアメリカ人のやるようにやれ」であるが、ロシアと最初に陸上戦をした英雄は、初めて会う日本人と握手するのを拒否するだけの勇気は無かったようだ。私は電話で話す時、話しの相手が誰であれ、帽子を取らなければ話せないタイプの方だが、礼儀に関するその他の点では決してうるさい方ではない。

プロポーズの仕方

日露戦争の傑出した英雄たちが話題となっている内に、仁川〔チェムルポ〕沖でロシアの軍艦「ワリャーグ」と「コレーツ」を撃沈した男爵瓜生大将〔瓜生外吉：海軍軍人。アナポリス海軍兵学校卒、日清、日露戦争で勲功。海軍大将、貴族院議員〕が如何にして華麗なプロポーズの仕方を教えられたか、ここで学んでおこう。恐らく彼がアナポリスの海軍兵学校に学んでいた時のことと思われるが、当時ヴァッサー・カレッジに留学中だった大山公爵夫人と瓜生男爵夫人に会うため、ポキプシー〔池の端にある葦の小屋の意。ニューヨーク州ハドソン川東岸の町〕を訪れた。その時、彼らは友人の私立学校経営者、ピットマン家の人たちと連れ立って、ピクニックに出かけたのだ。数年前ニューヨークでの集まりでピットマン嬢たちから聞いた話だが、若き日の瓜生将校はその場で即座に益田〔正確には永井。益田は永井家の養女となる前の姓〕繁子嬢を将来の妻にする決心をしたという。とはいうものの、この厄介な仕事を片付けるのに相応しい方法が解らない。そこで若いアメリカ人のこのお嬢さん方が、瓜生氏に頼まれて求婚のリハーサル指導をしたそうだ。こうして、この加賀「侍」はハンカチを岩の上に広げ、ひざまずくことになった。このレッスンが話題の日本人女性の前でなされたのか、また、恋のとりこになった瓜生将校が秘めた決意を実際に打ち明けたのか、それは教えてもらえなかったが、とにかく現在の瓜生男爵夫人は当時の益田嬢である。この物語を私は大将本人に東京で話したことがあるが、小声で笑うだけで例の一件を肯定も否定もされなかった。おそらく言葉には出来ないほど、神聖なものだったのだろう。

動物の収容施設

モホンク湖万国仲裁会議の秘書から手紙が届き、黒木為禎（ためとも）海軍大将にその年の会合への出席を依頼する旨が書いてあった。黒木大将はこの問題について、現外務省政治局長の小池サンフランシスコ総領事〔小池張造：外交官。初代サンフランシスコ総領事〕を通じて問い合わせを受けていた。しかし、著名な軍人である黒木大将自身が戦争をなくすための実際的方法を日本の利益を代表して証言するなどということは、事前案内の参加予定者の顔ぶれから判断しても許されることではなかった。私はその会議に再度出席をするため、モホンク湖へ向かう途中、一晩だけハドソン川西岸の町キングストン〔ニューヨーク州〕に立ち寄った。そして「アウトルック誌」のライマン・アボット博士の姉妹であるアボット嬢の家で昼食をご馳走になった。アボット家の人たちは前述した日本の女性たち〔山川捨松、永井繁子、津田梅子〕のことに興味を抱いてくれたし、現在に至るまで大の親日家だ。個人的な意見としてだったが、このベテランのジャーナリスト〔ライマン・アボット〕は嘗て私に、米国、英国、そして日本が太平洋の平和に何らかの形で責任を持つことが望まれると語ったことがある。その年の春、たまたま熊本のハンセン病病院〔回春病院〕の

リデル女史が米国に来ており、この調停会議にも参加していた。この会議期間中は、平和以外の目的で会議のメンバーにアピールすることは出来ないのだが、最後の会合後も残っていた人達の中に、彼女は自身の仕事に共鳴してくれる多くの友人を得た。ニューヨークでは 2 人でバイダウィー〔少し待って〕という施設を見学した。この施設は、野良犬や野良猫を数日間留め置き、持ち主がなく、また引取り手もないことを確認した上で安楽死させるために設けられたもので、動物虐待防止会〔S. P. C. A. =Society for the Prevention of Cruelty to Animals〕が運営していた。なんと哀れな動物たちだ！金網の内側から手や足でそれを引っかく哀れな姿は、実に身につまされた。なんとしても人間と一緒にいたい、愛撫して欲しいと、必死に頼んでいるように思えてしかたがなかった。

非凡な女性たち

明治 40（1907）年に知り合いとなった友人、知人の中で私が関心を抱いた人物は、ケンタッキー州ルイスビルのエレン・チャーチル・センプル女史だ。人文地理学というドイツの新しい科学の権威であり、私は彼女に深い感銘を受けた。ヴァッサー・カレッジ時代大山公爵夫人とクラスメートで、その後ライプチヒ〔ドイツ〕で学んだ〔フレデリック・ラッチェル門下〕人だ。私に会って以来、独自の観点から極東を研究するため日本に滞在している。もう 1 人、私の感心を惹いた人物はスミス・カレッジのベレンソン女史だ。当時東京女子師範学校教授だったアメリカ留学中の井口（いのくち）阿くり嬢〔我が国女子体育界の先達。スウェーデン体操を導入〕に体育学を教えた人だ。彼女の多才な会話能力の源は、ロシア人という人種的な要素、そしてイタリア美術の批評家である博学な兄上の声望にあることは間違いない。兄のバーンハード・ベレンソンは、今の戦争〔第一次世界大戦〕でよく耳にするロシアのビリニュス〔現在のリトアニア〕の生まれで、アメリカ市民となり、現在はオックスフォードとフィレンチェの間を行き来しながら生活している。ベルリン歌劇場並びにニューヨークのメトロポリタン歌劇場の専属であるジェラルディン・ファラー嬢に会ったのは、モッシャー嬢の家でのことだった。モッシャー嬢は、ファラー嬢がフランスとドイツに音楽留学する以前、彼女に音楽を教えていた人だ。この時は歌手のスコッティ氏〔アントニオ・スコッティ：バリトン歌手〕にも紹介された。イタリアの偉大な歌手エンリコ・カルーソー〔テノール歌手〕よりも品格の点で優っているともっぱらの評判だった。私には彼らの舞台を批評出来る能力はないが、確かにスコッティの声は一段と洗練され、共感を覚えさせるものだった。

「蝶々夫人」

嘗てファラー嬢（**補注**）から日本人としての観点から「蝶々夫人」〔ジャコモ・プッチーニ作曲の歌劇。第２幕第１場で蝶々夫人が歌うアリア「ある晴れた日に」は特に有名〕を批評するよう頼まれたので、ある日の夜、メトロポリタン歌劇場を訪問して改善したほうが良い点を 30 以上書きとめた。指摘した点は彼女の歌唱に係わるものは一切なかったが、多くの提案が直ちに採用された。今でも覚えているのは、お蝶さんの侍女が「黒足袋」、つまり黒い靴下を履いていた点だ。このことで思い出されるのは、日本で外国人に雇われた女性料理人が、石炭の煙と粉で汚れるため、普通女性が履く白足袋をどうしても履こうとしなかったことだ。ヒロインがアメリカ人の夫の帰りを心から歓迎するため、髪を梳いて

もらう場面では、スタンド・ミラーも、膝の上の子供も、櫛を持って立つ後ろの侍女も不恰好で混乱の極みだったので、三者の位置関係をこちらの指示する順番でだんだん高く配置してみてはどうかと提案しておいた。誇張は芸術の真髄ではある。しかし、舞台上で外国人が再現するアイデアや方法は、本国人にとっては、しばしばばかげたものに見える。我々日本人なら、「蝶々夫人」や「みかど」〔アーサー・サリバン作曲、ウイリアム・ ギルバート作詞による英国製喜歌劇。ティティプという架空の日本の町を舞台に繰り広げられるハッピーエンドの恋の物語。最後に 2 組の結婚が成立する。「宮さん、宮さん、お馬の前で・・・」で始まる「風流トコトンヤレ節」が使用されている〕に、色彩の調和や優雅な動きや見えの仕草を求める代わりに、音楽をこそ楽しむべきである。ロンドンの劇場で「ミカド」を聴いた時、私の周囲の英国人観衆たちはみな、日本人である私の手放しの賛同を求めているかのように、1 人だけの同盟者〔当時英国と日本は日英同盟を結んでいた〕である私の顔を覗き込んでいた。

（補注）ファラー嬢と三浦環（たまき） 女史

本田増次郎「新旧両女界の婦人（2)」『読売新聞』大正 8（1919）年 8 月 25 日

米国に於ける三浦環女史
預言者は故郷にて尊ばれずと申しますが、環女史をして其の天才を発揮せしめ名声を揚げしめたものは、米国の人に依って人の美点を捨てざる宏量（こうりょう）〔度量が広い〕によって成されたと思ひます。此の道徳的空気は在留邦人までを感化し、長く彼の地の淑女紳士と交際した方々は人の空（そら）探しを事とする癖が全く無くなって居ます。随（したが）って環女史に対しても、日本の名誉を海外に高めた婦人として感謝誇負（こふ）〔誇る〕の念を持って居らるる同性が多いやうです。私が唯一回女史の声誉（せいよ）を聴いたのは、初めて上野の音楽学校で「オルフオイス」〔グルックの歌劇「オルフェウスとエウリディーチェ」明治 36(1903)年 7 月 23 日、東京音楽学校に於いてピアノの伴奏で訳詞上演された。日本人のみによるオペラ上演の嚆矢とされる〕を試唱された時でしたが、其の後 8 年の海外在留中女史の毀誉褒貶（きよほうへん）を澤山（たくさん）日本の新聞紙で読みました。今回一週間紐育に滞在中旧交の日本婦人がたに、尋ねて見ると、環女史の芸術は異常な発展をしたさうで、少なくも「蝶々夫人」を伊語で唱演するに於ては、先輩の米人ファラー嬢を圧するの高評を受けて居らるるさうです。
　此の歌劇場の主人公が日本婦人であるのと、女史が舞踊の素養を持って一種の芸風を示さるることで、此の曲は女史に依って最も自然に最も美しく演出せらるるものと衆評が定まったのでせう。通常オペラの唱歌者は男女とも声のみに注意を集中して、芸は下手なものですが、環女史は女性には珍しい舞台度胸があって、舞台で靴が滑って転んでも少しも周章（あわて）て絶句などせず、転ぶのが筋の中にあるかの如く、悠然と起き上がって落ち着いて美声を出さるるさうです。贔屓の米倉氏は女史の芸を評して、筋を演出（アクト）するのでなくて筋の中に生きるのだ、と申したさうです。語学にも天才を持って居られると見え、新曲を伊語で二週間位ゐに全部暗記されるさうです。三浦医学士は目下エール大学で特殊の研究を続

け博士論文の材料を積んで居られるさうですが、「蝶々夫人」の初幕で夫人が米人ピンカトンと接吻する処は遠慮して観たり聴いたりしないさうです。舞台上のキッスといふ事は欧米劇界の問題で、真の夫婦たる男優女優の外は実際の接吻を避け、顔を少し斜めにして遠方の聴衆観客にそれを見せるだけになって居ます。それでも三浦学士は日本人ですから自分の愛妻が他の男と接吻の真似をして居るのを見ると心地が好くはないのでせう。

紐育第一の歌劇場「メトロポリタン」座に蟠居〔場所を占めて勢力を持つ〕せるファラー嬢は近来少し声も評判も落ちたさうです。元来独逸で修行しカイゼルに引き立てられた人ですから、今度の大戦争〔第１次世界大戦〕が幾分か嬢の名誉に祟つたかも知れません。私は 10 年程前に嬢の懇請を受けて、其の「蝶々夫人」の演出を細評した事があります。嬢は環女史の同座に出る事を承諾せぬさうですが、女史の声量ではあんな広い歌劇場に出ぬ方が安全でせう。

ハンガリー人の生活を一瞥

ニューヨークのハンガリー料理店「リトル・ハンガリー」の訪問は、私の人生において特筆すべき経験の 1 つに数えておかなければならない。この有名な店の常連たちは、フン族〔北匈奴の後裔で低い身長、幅広の顔、細い目、扁平な鼻といった身体的な特徴を持つ〕の直系の子孫で、それなるがゆえに血筋も気性も東洋人であるといった主張の真偽はともかく、私があたかも凱旋した英雄であるかのように酒やタバコで歓待してくれた。あるほろ酔いのご夫人などは私を自分から離そうとせず、お別れの握手を延ばし延ばしにする。とうとう呆れたご主人が困った私のために割って入ってくれたほどだった。長い首のワイン・ボトルがラックから逆さに吊り下げられており、栓を上に押しあげるとグラスに中身が注がれる。初対面の見知らぬ者同士が浮かれて大騒ぎし、時にはテーブルの上に立ってハンガリーの曲に合わせて歌う。瓢箪に入った「酒」、紙のお面〔目かつら：目の部分に穴を開け、目から頭にかけてを覆うお面。江戸期花見時には目かつら売りが登場した〕、それに戯れ唄、これらがつきものの日本の昔ながらのお花見に、あれやこれや全てのことが面白いほど良く似ていた。その後ヨーロッパで平和会議に出席した時、ハンガリー人が日本人に対し特別の興味と親近感を持っていることに気が付いた。ヨーロッパの政治世界に於いてハンガリー人が不平等に扱われていることがその原因であるとすれば、現在の戦争〔第一次世界大戦〕の結果として、人種的敵対関係が最終的に消滅する方向に進むことを望むばかりだ。とにかく、米国での 2 回目〔正しくは 3 回目〕の冬は、私の周囲は「メリー・ウィドウ」〔1905 年 12 月 30 日、テアター・アン・デア・ヴィーン（ウイーン）で初演されたフランツ・レハール作曲の喜歌劇。オーストリア国内は無論、ドイツ、続いて英国でも大好評を博し、1907 年暮れ、ニューヨークに上陸した。『ニューヨーク・タイムズ』は 1907 年 10 月 20 日の日曜版で、"The Merry Widow" Due in New York To-morrow（「メリー・ウィドウ」明日ニューヨークにお目見え）との見出しで特集記事を組んだ〕の明るい旋律で満ち溢れていた。

ドイツ人医師が最高とは限らない

日本では、古代中国の医療は先ずオランダ医学に取って代わられ、ドイツ医学がそれに続いた。ただし高木兼寛男爵が英国の外科を導入した海軍だけは例外だった。したがって、ほとんどの日本人は米英の医療や外科技術にさほど重きを置かなかった。もっとも歯科医

術ではアメリカ合衆国が最高だと誰もが認めていた。というのは暖房の利き過ぎた部屋で恐ろしく冷たいものを飲んだり食べたりするため、アメリカ人の歯は世界最悪の状態にあると考えていたからだ。しかし、私の場合、ウッド医師から治療を受けた経験があったので、米国という国の医療水準を尊敬していた。さあ後は一人のアメリカ人外科医にご登場願って、専門技術を駆使して私を改造してもらうだけだ。こうして私はニューヨークの総合病院に 2 週間入院した。それは 10 年前、東京で手術を受けたことがある古傷〔明治 29（1896）年、東京の田代病院に入院し、痔の手術を受けた〕を治すためだったが、有名なその分野の手術のエキスパートであるジョージ・M・タトル医師が見事に私の長患いの原因を取り除いてくれた。彼が指でちょっと触るだけで治癒力が伝わって来るように感じられた。しかも、とてもおだやかな学者肌の人物だった。手術室への搬送前に麻酔注射をされるので、精神的ショックも多いに和らげられるし、一方で、米国の気候も部屋の温度調整も、日本における通常の場合よりもはるかに優れていた。ニューヨークでもロンドンでも人々は湿った空気にいつも不満を述べたてているが、日本の湿気と較べたら、病後の患者に対する悪影響もはるかに少なく、健康な者にとっては一寸した刺激くらいでしかない。ドイツ人教授ならより深遠な理論で医学生を驚嘆させるかも知れないが、患者にとっては、アングロサクソンの医療も負けず劣らず快適なのである。

ボストンの名士たち

明治 41（1908）年 5 月の終わりに英国へ出航することに決めたので、その前に（補注１）学校を視察し友人に別れを告げるため、ボストン、ハートフォード、フィラデルフィア、アトランティックシティを訪問した。ボストンでは時間をかけて、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、ボストン美術館、英語高校〔黒人学生の英語教育を目的とした学校〕を巡った。また多くの有名人を訪ねたり、招待されたりしたが、中でも、セジウィック教授、トゥルーブラッド博士、ミード夫妻、ホートン氏、モース教授〔アメリカの動物学者。腕足類研究のため来日、翌年東京大学に招かれ生物学・動物学を教える。ダーウィンの進化論を紹介し、日本生物学会設立に尽力した。大森貝塚の発見者〕（補注 2）、ローウェル教授、それにロングフェロー氏〔アメリカの詩人。ボードイン大学・ハーヴァード大学教授〕が記憶に残っている。一般にはテクと呼ばれている有名なマサチューセッツ工科大学のセジウィック教授は、生物学者の故箕作佳吉博士の学友だった人だ。箕作博士は菊池大麓男爵の弟に当る。トゥルーブラッド博士、ミード夫妻は、モホンクで出会ったことのある平和活動家だ。ホートン氏は『肉弾』の翻訳書を出版してくれた。そしてモース教授はセーラム市〔ボストン近郊〕のピーボディー博物館の館長であり、ボストン博物館〔現在のボストン美術館〕では日本陶器の管理を担当している。モース博士は明治 10（1877）年から 13（1880）年まで東京大学で動物学の教授の地位にあった人だが、大森で貝塚を発見し新しい進化論を喧伝した。そのため、日本のキリスト教宣教師たちを驚かせることになった。ローウェル博士は明治 39（1906）年に『火星とその運河』を書いた天文学者だが、最近亡くなられた。30 年前の東京で、麹町にあった出雲神社の隣に住んでいた彼の家の前を、私はよく通ったものだ。おそらく『極東の魂』を準備していたのだろう。奇妙なことに出雲大社東京分祠は数年前、この敷地を裕福な三井家の人に売却し一等地ではない他の場所へ移転したが、その取引ではきっと大もうけしたのだろう！ウイリアム・P・プレブル・ローウェル氏は建築家だが、偉大な詩人〔ロングフェロー〕の甥に当る。

（補注 1）その前に

本田はこの英国出航前、その年の 1 月 25 日に亡くなったウィーダの『フランダースの犬』

の原書を、東京の山縣悌三郎に送っている。この書は同年の 11 月、山縣の内外出版協会より高田善一（柿軒）訳（本邦初訳）で出版され、これにより本田は『フランダースの犬』の日本紹介に関し労をとった最初の人物となった。同訳書の「はしがき」に続けて、下記の通り本田の書簡が紹介されている。

本田増次郎氏の書簡（原書に添へて山縣悌三郎氏に贈られたるもの）

数ヶ月前ウイダ貧窶（ひんく）〔貧しくみすぼらしい〕の中に伊国に客死せり。英国政府が彼女に与えたる年金の大部は、そが愛養せる犬猫の食料に費ししと云ふ。其の死するや病床に侍して哀別の誠を致せるもの寔（まこと）に一忠婢と幾頭の犬猫のみなりき。

『フランダースの犬』と題せる一編はウイダが傑作の一として人口に膾炙せり。優に日本君子国人の感興を牽くに足るべし。

千九百〇八年　　米国ニユー、ヨークに於て、

（補注 2）エドワード・シルヴェスター・モース

本田増次郎「英米雑俎（12）Denationalized or Internationalized」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 9 月 1 日

美術の方面では故人の Professor Fenollosa が、同じく故人となつた岡倉覚三氏と共に東洋美術を研究した縁故から、日本支那の珍什が多く米国に入つて居る。岡倉氏は Boston Museum of Fine Arts の Oriental Department の curator として其の晩年を壮にした。同博物館には日本陶器の研究者として世界に名を馳せた Dr. E. S. Morse が、陶器部主任として老いて益々壮なる意気を示して居る。1838 年に生まれ 1877 に動物学教授として帝国大学に来た人で、大隈侯と同年のやうだが健脚の点では侯も及ばずで、我々壮者がついて歩けぬ程である。Salem（セイラム）市に住んで其の Peabody Museum の director を兼ねて居るが、茲にも日支の陶器がウント並べてある。自分は其の中にどうも Holland 製らしいのを発見して、これは間違ひでないかと得意げに指摘した処が、お老爺さんヒヤカス事夥しく、日本人たらん者が長崎で維新前に蘭製から思ひついて創められた何々焼を知らぬかと来た。実に気軽な面白い人で、又貝塚や進化論で日本学界の恩人である。

猟犬ボルシャック

ボストン滞在の 1 週間に、ハートフォードを訪問したが、これは我々日本人の母代わりであるペリー婦人の葬儀に出席するための悲しい訪問だった。妹さんが引き続き世話をしてくれており、同じ家に日本人の秋山楽嬢と一緒に住んでいた。そして次の旅も、故ジョン・ピアポント・モーガン〔ハートフォードで生まれ、ハートフォードに眠る。当時を代表する銀行家の 1 人〕の生まれ故郷ハートフォードで、これはニューヨークから行ったもので、大学〔トリニティ・カレッジ〕のクラブで講演をした。この講演はハートフォードの親友、フランク・B・ウィリアムズ氏〔日本の童話を一緒に英訳した間柄〕が準備してくれたものだ。ペリー婦人の紹介で、ハートフォードの J・B・マクック医師を、またマクック医師を通じて父上でトリニティ・カレッジの J・J・マクック教授や一族の人たちを知った。漢口〔中華人民共和国ウーハン近郊〕のルート主教はマクック教授の義理の息子に当る。教授が紹介してくれたので、ロンドンで開催された聖公会世界大会に中国からやって来たこの主教にランベス宮〔カンタベリー大主教座〕で会えたのだ。5 月の中旬には、フィ

ラデルフィアとアトランティックシティに行ったが、2 都市の途中に当るニュージャージー州クロスウィックスのコンラッド・ベーカー家で 1 晩を過ごした。ボルシャックが数ヶ月前に死んでおり悲嘆にくれた。このハンサムな白のウルフ・ハウンドとは、よく一緒に草地を散歩したものだ。ご主人のコンラッド夫妻も既に亡くなられた。

水野幸吉総領事

アメリカを発つことに決めたので、モホンク湖の万国仲裁会議への第 3 回目になるはずの参加は受ける訳にはいかなかった。親愛なるスマイリー氏は私の英国滞在を祝福してくれ、ワシントンの日本大使である高平男爵〔高平小五郎：外交官。特命全権公使として駐在中、ポーツマス講和会議で訪米した小村全権を補佐した。枢密院顧問官〕を日本代表として出席するよう説得出来ないか私に依頼してきた。個人的には大使を存じ上げなかったが、すぐに書簡を書き、スマイリー氏の招待状を同封した。しかし、大使館の秘書官がこの時期はどうしても大使はワシントンを離れられない旨の詫び状を送ってよこした。故青木子爵は外務省の指示を実行しなかったという理由でワシントンから召還されたと聞いているが、後任の高平男爵はアメリカ合衆国の日本人の間では当時人気がなかった。人々が抱く主な不満は、大使は耳が遠く、聞き違いで人の感情を害する点にあった。一方、当時新任だったニューヨーク総領事の故水野幸吉氏は正真証明のヤンキー気質で、アメリカ人、日本人双方の心を即座に掴んだ。この新しい地位に就任するに先だって、水野氏は当時の外務省次官、珍田捨己（ちんだすてみ）子爵〔外交官。侍従長、枢密顧問官〕に指導を願い出た。すると、このアメリカで教育を受けた〔インディアナ州所在のアズベリー大学〕経験豊かな外交官は、君なら助言を一切聞かず上手く振る舞えるだろうと言ったと伝えられている。

カナダから「池」（補注）を渡る

明治 41（1908）年 5 月 27 日の夜汽車でニューヨークを発った。翌日早朝、カナダ国境で税関の検査があったので、これが国を越えての旅行であったことを今更ながら意識した。南に位置する米国では 1 ヶ月以上前に終わってしまったタンポポや林檎の花が咲く原野を、列車はスピードを上げて走り、やがてセント・ローレンス川の雄大な光景が目に入ってくると、私はモントリオールのさわやかな空気の真只中にいた。その夜コルシカ丸に乗船するまで、およそ 10 時間が残されていたので、軽く観光をしてから、シャン・ドゥ・マール公園のベンチに腰をかけて、疲れた足を休め、ついでに散歩の人から何か聞き出せないかと目論んでいた。ところが私のフランス語は余りにも語彙が少なく、彼等の話すフランス語は「方言」が激しいときている。30 分話をしても 2、3 の文章しか理解出来なかった。乗船してから出来た最初の友は、私にとって正に神の助けだった。ケベックの史跡、遠く霞むニューファンドランド島、トリー島〔アイルランド北西、11 キロの沖合所在〕、それに海峡〔ノース海峡〕を通る時にはスコットランドやアイルランドの海岸を、さらにはマン島も教えてくれた。北方の海域独特の匂いは、流氷のせいだと教えてくれたのもこの人だった。そして電信室を親切に案内してくれた上、電信で私の到着をリヴァプールの友人に報せてくれた。船上で楽しんだエール〔英国のビール〕やカドバリーのチョコレート、それに高級船員室で飲んだアフタヌーンティーは、以前から書物で多いに読み思いを馳せてきた英国を本格的に味わう先触れとなった。船は霧の出る区域では四六時中霧笛を鳴らし、

漁船と衝突しないように停船を繰り返しながら進んだが、英国人クルーの腕前に全幅の信頼を置いていたので、まったく不安は感じなかった〔英国船タイタニック号の海難事故が起こったのは、この 4 年後に当たる〕。

（補注）「池」
原文は the “Pond”：「大西洋」を意味する英国式戯言

マシュー・アーノルドの甥

リヴァプールに 6 月 6 日に上陸し、5 日間、グレート・クロスビー〔リヴァプール郊外〕のクロッパー家〔『ハンナ・リデル』を著したジュリア・ボイド元英国大使夫人出身の家系〕のお世話になった。クロッパー嬢は熊本でリデル女史の病院事業を数年間手伝った人だ。また彼女の亡くなった叔父〔ロンドン大学の 1 カレッジであるユニバーシティ・カレッジのウイリアムソン教授〕は、明治元年の明治維新以前、伊藤博文公爵の英国における教育に係わった人物として我が国では知られている。古代民族の集落跡や 13 世紀の教会の光景が、先ずは英国の歴史を印象付けてくれた。しかしドック、聖ジョージズ・ホール、美術館〔ウォーカー美術館〕、博物館〔リヴァプール博物館〕、公営レストランは、商業の世界的中心地としての重要性と較べ、さほど強い印象は受けなかった。おそらくアメリカという現代的進歩と贅沢の中にいたので感覚が鈍ってしまっていたのだろう。ニューヨークからやって来たての頃は、暖房し過ぎの部屋と冷え切った水が恋しかったものだ。グレート・クロスビーを去るに当って、ウッド夫人とも知り合いになった。熱心な伝道者でロンドンとリヴァプールで日本人の若者に福音を伝えていたが、数年後に来日した。数ヶ月後ご主人にも会ったが、貧民への布教で有名な牧師でスラム地区の人たちと接触するため、裸足で歩いていたそうだ。かかる名声や彼がマシュー・アーノルド〔詩人、批評家：オックスフォード大学教授、女王直属の視学官（学校調査官）を 35 年に亘って務める〕の甥であることを考えあわせ、英国的人物が持つ力量というものを見せつけられた気がした。

英国人、全てが金持ちとは限らず

ロンドン行きの列車は、まことにスムーズかつスピーディーに走り、私はユーストン駅に降り立った。それは 6 月 11 日のことで、仏英博覧会の会場「ホワイト・シティ」至近の下宿にすぐに納まった。1 マイル〔1.6 キロ〕以上も、見知らぬ若者が私の乗った辻馬車の後をついて来て、自主的に荷物を部屋まで運んでくれる。この予期せぬ好意に驚いて、どのように御礼をしていいものか判らなかったが、下宿の女主人〔ウォルトン夫人〕がこの若者が示してくれた国を超えた兄弟愛の真意がチップにあることを明かしてくれた。その日の午後、近くの芝生にあるベンチに腰をかけ陽光を浴びていると、1 人の労働者が近寄ってきて何も聞きもしないのに様々の情報を教えてくれる。今度こそ、よもやチップは要らないだろうと考え、立ち上がって別れを告げようとしたところ、この人物は、どれほど長時間食事をしていないか、如何に時世が悪いかなど「際限なく」訴え始めた。私が心からの同情を込めて、恐る恐る 1 シリングを差し出すと、このやりとりも直ぐに幕引きとなり、安堵した次第だった。後でこのことを英国人の友に話すと、皆、私が気前が良過ぎると言う。おそらくアメリカ人の観光客も、外国人の苦力（クーリー）や無宿者のあしらい方を知らないので、同様の過ちを犯すだろう。しかし、私の過ちの場合は財布の大きさというよりは、立派な

同盟国の人たちを助けることが出来るという道義的満足感からきたものだった。14 ヶ月に亘る英国滞在の最初の 2 週間は、待ち望んだ憧れのロンドン観光でそのほとんどを費やした。最初に行った劇場は「ヒズ・マジェスティーズ」〔現在のハー・マジェスティーズ〕、そこではエレン・テリー〔女優〕とハーバート・ビヤボム・ツリー卿〔劇場のオーナー兼男優〕の「ウィンザーの陽気な女房」〔原作ウィリアム・シェークスピア〕を、次はハイマーケット劇場〔現在のシアター・ロイヤル・ハイマーケット〕で、ジョージ・バーナード・ショー〔当時オスカー・ワイルドと並び称されたアイルランド人の劇作家〕の新しい戯曲「成婚」〔3 組の男女の結婚に至るまでを描いたもの〕を見た。

アレキサンドラ王妃に「万歳」を

もし、このロンドン観光を終えるとすぐ、世界聖公会主教会議〔通称「ランベス会議」。この会議が第 1 回大会（1867 年）以来ほぼ 10 年毎にロンドンのランベス宮で開催されたことからこの名がある。1978 からは開催地がカンタベリーに変更された〕に関連したあらゆる歓迎会を楽しみ始めたと言ったら、正真正銘の強欲者と思われるかもしれない。しかし、それでもやはり極東からやって来た、日本人、英国人、アメリカ人の多くの旧友に会えたことは確かだ。会議の場では言うに及ばず、歓迎委員会のメンバーである、ケンダル〔湖水地方の町〕のメアリー・W・クロッパー嬢主宰のパーティーでも同様だった。また、この歓迎委員会が、シェフィールドの司祭と当時クロイドン〔ロンドン南方〕の牧師館にいたバロウ氏のところへも招待してくれたお陰で、6 月 25 日のマールボロ・ハウス〔セント・ジェームス宮殿近くの宮殿、現在は英連邦事務局〕での皇太子〔後のジョージ 5 世〕並びに皇太子妃〔メアリー〕主催のガーデン・パーティーに、また 27 日には、私にとっては「ホームグラウンド」とも言うべきランベス宮へも行けることが確実になった。マールボロ・ハウスのパーティーでは、故エドワード国王〔エドワード 7 世：在位 1901－1910 年〕並びにアレキサンドラ王妃〔1844－1925〕が出席されていたが、植民地およびミッションの宣教師や他の海外の伝道者たちは、パーティー会場から退席されるお二人に力強い喝采を送った。最愛なる両陛下に挨拶を申し上げる機会などこれを置いて他にあるはずも無いのだから、私は数人の日本人の代表と共に建物入口の階段下に立ち、皆と一緒に心から「万歳！」を唱和した。するとアレキサンドラ王妃は階段の踊り場で振り向き、微笑んで会釈し、恭しく答礼をされた。テムズ河畔の絶妙な構成を見せるあのすばらしい庭園〔ランベス宮〕では、カンタベリー大司教とダビドソン夫人主催のレセプションが開かれたが、そこでスコットランドのバグパイプ吹きたちを見た。

英国の若者へアメリカ式教育を

グレート・クロスビーのクロッパー嬢の親戚である牧師のプロイビン氏はナショナル・ギャラリーの逸品の数々を私に紹介してくれた。氏自身が美術を学んでおり、その時彼から教えられたことが、その後訪れた時に大きな助けになった。サウス・ウェールズのヒューズ女史は、嘗て日本に教育視察で来たことがあるが、私を仏英博覧会（**補注**）に案内してくれた。博覧会ではアイルランドのモデル村が大変興味深かった。安井哲子嬢〔東京女子大学の創設に係わる。東京女子大学初代学監、第 2 代校長〕は現在東京女子高等師範学校で教えているが、当時はヒューズ女史から全般的な指導を受けながら英国で学んでおり〔第 2 回目の英国留学〕、ホワイト・シティへ行ったのは、この 3 人連れ立ってのことだっ

た。アルフレッド・モーズリー氏の邸を最初に訪問したのは、5 月 28 日〔正しくは 6 月 28 日〕で〔桜井彦一郎、日本郵船の上谷(かみや)續の二人も同行〕、場所はロンドン北方数マイルにあるハードレイ・ウッドだった。嘗てはジェームズ 2 世の狩り場だったところで、家も敷地も王室から賃借していた。ご夫妻に 4 人の娘さん、2 人の息子さんが加わり、終日楽しく時を過ごした。邸を失礼したのは、庭から集めてきた花々で飾られた食卓で晩餐を頂いてからだった。モーズリー氏は熱烈な英国臣民ではあったが、2 人の息子はアメリカ〔ハーバード大学〕に留学させていた。帝国の建設に邁進中のセシル・ローズ〔英国の企業家、政治家。南アフリカにおけるダイヤモンド並びに金の採掘で巨万の富を築く。ケープ植民地首相〕を支援した時、米国で教育を受けた技術者連中の効率のよさを良く理解していたからだ。

（補注）仏英博覧会

開催期間は明治 41（1908）年 4 月 27 日から 10 月 31 日。ホワイト・シティにある 140 エーカー（56 ヘクタール）の敷地におよそ 800 メートルに亘る運河が掘られ、カヌーが浮かべられた。120 の展示場、20 にのぼるヒンズー様式の白亜の展示館が威容を誇り、英国は海洋をテーマに、フランスは高級婦人服や宝飾品の出展に力を入れて、それぞれ衆目を集めた。入場者は 800 万人にのぼった。企画演出はイムレ・キラルフィ。

明治 41（1908）年 7 月 18 日『タイムズ』娯楽欄

仏英博覧会　1908 年
午前 10 時開場　午後 11 時 15 分閉場　入場料　1 シリング
ロンドンにおける過去最大規模の博覧会
40 エーカー規模のパビリオン

審美眼を満たす芸術作品の宮殿
すばらしい服飾品の展示
豪華絢爛たる宝石の展示
動く機械

正面玄関からウッドレーンまでにある 8 つのクリスタル・ホールをお見逃しなく
終日に亘る 5 つの軍楽隊によるすばらしいコンサート
数限りない新しいアトラクション

フリップ・フラップ	見晴らしの好い鉄道
スパイラル	アイルランド村
ステレオマトス	トボーガン
セイロン村	パセ・シネマトグラフ
セネガル村	オールド・ロンドン他

インド・アリーナ　本日午後　3 時、5 時、8 時 30 分アトラクション開催
G・ ハスゲンベックによる我がインド帝国の壮大なスペクタクル
毎晩　百万個の電灯による比類無きイルミネーションあり
（訳：長谷川勝政）（下線を引いたものが自叙伝中で触れられているアトラクション）

この 2 年後、この同じ場所で日英同盟改定を祝して、同じくキラルフィの企画案を基に

日英博覧会が開催された。

ウェールズが抱える問題

東京の大隈伯邸で会ったことのあるノース・ウェールズ、ランディナムの国会議員デイヴィト・デーヴィス氏〔石炭業で財を成し、鉄道敷設などの社会事業でウェールズの発展に寄与〕を通して、下院が老齢者年金法を審議している時に、英国の議事堂を初めて訪問した。傍聴席からだったので、討議の内容はよくは解らなかったが、審議が静粛に威厳をもって行われる一方、それとは対照的に議員が型にはまらない態度で臨んでいることに感銘を受けた。この 2 日後の 7 月 3 日、デーヴィス氏と私は汽車でシュルーズベリー〔ハート・オブ・イングランド西部、セバン川河畔の工業都市〕の邸まで、蒼い三日月を眺めながら 40 マイル〔65 キロ〕のドライブを楽しんだ。デーヴィス氏はフォックスハウンド、オッターハウンドそれにビーグル犬を何匹も飼っており、翌日は朝からサウス・ウェールズへ狩りに連れて行ってくれた。午後には戻ったが、途中でバーミンガムに水道水を供給している貯水池をいくつか車で巡った。気づけばウェールズでは至る所で食用のシダである「ワラビ」が繁茂しているが、英国では羊も食べないと言う。もし英国人が、アジアの同盟国人〔日本人〕がするように、それを台所で使うのを厭いさえしなければ、英国人の科学を以てすれば、将来この草から良質の澱粉を製造出来るだろう。日本では「ワラビ」の糊は「掛け物」を表装するのに最適と考えられている。広大な土地を持つデーヴィス氏は長老派〔カルヴァン派を起源とするプロテスタントの一派〕の信徒で、それ故禁酒法賛成論者でもある。この訪問のお陰で、私はウェールズ問題の政治的、宗教的側面が理解出来るようになった。日曜には村の教会での礼拝の後、多くのジョーンズさん、多くのデーヴィスさんに、この名士の日本の友人として紹介された。ウェールズ英語のフランス風アクセントは、将来韓国人が話すようになると思われる「日本語」を連想させた〔この前年 7 月、日本は韓国と第 3 次日韓協約を締結し、実質的な統治権を握っていた〕。

大隈侯の著作、ロンドンにお目見え

ウェールズに数日間滞在し、ロンドンに戻ってみると、『肉弾』の著者〔桜井忠温〕の兄である桜井彦一郎氏〔鴎村：明治学院卒、女子英学塾の設立に参画。英学新報、英文新誌の編集長を歴任、新渡戸稲造の『武士道』の邦訳、『リンコーン物語』などでも知られる。後に実業界に転じた〕がベルリンからロンドンに来ていた〔桜井のロンドン到着は 7 月 5 日。翌日より本田の勧めでウオルトン夫人の家に 1 ヶ月強同宿〕。大隈侯の編纂になる『開国五十年史』を英国で出版するのを見届ける為だった **（補注）**〔実際の出版は翌年の明治 42（1909）年〕。当時日本大使館の参事官であった陸奥伯爵〔陸奥広吉〕と当時日本銀行にいた柳谷氏〔柳谷卯三郎〕が出版社との仕事を主に担当しており、ロンドン日本協会〔副会長〕のマーカス・B・ヒュイッシュ氏〔『アートジャーナル』誌編集長で日本美術品の収集家〕が、翻訳稿の徹底的見直しと全面的な書き直しを進めていた。私はこの出版に関しては、日本語、中国語、英語での出版の発起人の 1 人でもあったので日本語の原文にそって訳文全体に目を通し、訂正するよう頼まれた。英訳者の力量不足や、外国人編集者が日本語を読めない為、どうしても誤りが入り込むからだ。さらにまた、寄稿家たちは個人的な経験に基づきそれぞれのテーマを執筆してはいるのだが、こぞって徳川体制とペリー提督から稿を起こしている為、ヒュイッシュ氏の仕事は一層困難を極めた。日本人の寄稿家た

ちは、事実の科学的扱いと文学的扱いとの区別が全く解っていない。日本在住の外国人が日本人の挨拶は紋切り型で必ず「こんにちは」とそれに続く弁解で始める、と面白半分に言うのもむべなるかである。

（補注）大隈重信宛本田増次郎書状

明治 38（1905）年 9 月 20 日付け下記書状から、この桜井の渡英が本田の進言から実現したことが知られる。

謹啓時下益々御清栄之御事と奉大謹白　賀候
小生七月十八日横浜出発八月八日ニューヨーク着一週間処々見物之後ニューイングランド諸州ニ旅行或ハ海辺ニ或ハ山中ニ静養仕候後ボストンニ一週間滞留「ハーバード」大学にも二回ほど遊び更ニ「エール」大学所在地〔コネティカット州ニューヘヴン〕をも訪れて本月十四日再びニューヨークに入り目下同市に淹（えん）留中に□□□。当国の気候大ニ小生の健康に適し候やうにて大分元気回復仕候間　此上ハ冬季の用心さへ致さバ何等心配無之かと奉存候　開国五十年の事業ハ既ニ大ニ御進捗之事と奉察候　当地をはじめ処々に知名の士女と義を結び居る候間　もし相当の御用も候ハバ御用聞も成度多少御役に立ち候事も候由と奉存候　リデル女史の美挙を皇后宮陛下〔昭憲皇后：明治天皇后〕の御聴きに達し候事につき田中、香川両子爵〔田中光顕：宮内大臣。後伯爵、香川敬三：皇太后宮太夫。後伯爵〕への御紹介書をいただき候処　田中子へハリデル氏同道出発前共伺ひ候へども拝顔を得ず只御紹介書を差出し置候　香川子への分ハ丁度葉山行啓中にて用ひ候事不相叶只々当地より在東京の友人に送りて小生に代り伺はせ候事と致し候　今年十一月にて正式開院〔明治 28（1895）年 11 月 12 日〕の満十一年にも相成　尚又日英同盟拡張〔日英同盟改定の調印は明治 38（1905）年 8 月 12 日（一般への公表は 9 月 27 日）〕の折にも候間　何にか同氏の事業に対し御下賜又ハせめて令詞にても賜はり候やうと切望仕居候　相当の機会も被下御力添へ奉願候　尚又癩病院資金補助の同想会を尊邸にて開き候事を御許可被下リデル氏も不一方相喜び居候次第に候間　櫻井鴎村にでも御下命都合よく運び候やニ是亦御心添へ伏して奉願候　リデル氏ハ毎年十一二月の頃一ヶ月程滞京の筈に候故同人も直接御願ひ可申万よろしく御引まわし奉悃（こん）願候　小生旅行の順序を変じ候為め未ダ予定のフィラデルフィアに入らず今月末か十月上旬同地に参りエルキントン氏に再会の考に候　露国皇帝ハ万国平和会議開会を再び唱導致され候由　小生ハ世界人道の上より、社会主義の上より、将（また）ハ宗教哲学の上より世界平和戦闘滅絶の理想を少々心がけ研究仕度と存居候　右ハ願用かたがた近状申上度尊体御自愛奉祈候　　恐々

再拝

九月二十日

本田増次郎

大隈伯爵閣下
（下線部が『開国五十年史』に触れた記述）

髭のジョーク

ロンドンを離れての次の旅はサウス・ウェールズ、カーディフ近郊のバリーだった。ここではヒューズ女史と弁護士である彼女の兄弟のお世話になった。インドとアイルランド

からケンブリッジ時代の教え子が 2 人来ており、この教養高い 3 人のご婦人方のご指導のもと、ウェールズ独立運動の教育現場や言語に関する局面を熟知することが出来た。ある小学校では子供たちが私のためにウェールズ国家を歌ってくれたので、お返しに日本語でちょっと面白可笑しく話をしてやった。カーディフへは 2 度行ったが、1 回は「観光」で、もう 1 回は当時開催されていた万国衛生会議〔第 24 回〕とその企画展を見るためだった。帝国海軍の梶浦軍医〔梶浦捨松〕がその会議に参加していた。またこの 2 回目の時は、石炭採掘業者の勉強会で講演したので、サウス・ウェールズの労働状況も知ることが出来た。

政府の教育担当官であった隈本有尚（くまもとゆうしょう）氏〔大正 3（1914）年、『天文による運勢予想術』（日本初の西洋占星術テキスト）により星考学（占星術）を日本に紹介〕が英国訪問中であったが、その間バリーのヒューズ家の客人となっており、時々星占いをして客人を楽しませていた。ヒューズ氏は弁護士だが、彼独特のユーモアの才があって、隈本氏の髭は左に何本、右に何本とそれぞれ数えることが出来ると言う。そして続いて、日本では菊の花の種類毎にすてきな名前を付ける習慣があると聞いたことがあるとの話しに及んだので、私は日本の友人隈本氏の顔を立てて、自分は 1 度ならず茎〔髭にかけて茎という言葉を使った〕を生やそうとしたことがある。しかも隈本氏よりずっと少ない本数だったが、それでも親しいご婦人方の反対は大変なものだったよ、と言ってやった！〔ご婦人方の反対を押し切って隈本氏があれだけ髭（疎らではあるのだが）を伸ばしているのだから大したものだと〕

湖水地方の田園風景

ヨーロッパ並びに米国に経済援助を要請する使命を帯びて阪谷男爵〔阪谷芳郎：大蔵官僚の草分け。第 4 代東京市長〕が、ロンドンに明治 41（1908）年 6 月到着したので、新任の大使、小村伯爵（当時）〔小村寿太郎：外交官。外相として日英同盟、日露戦争の外交交渉で手腕を発揮。韓国併合、条約改正でも貢献〕と合わせて 2 人を紹介するレセプションがホテル・セシル〔現在のシェル・メックス・ハウス（英国シェル石油の拠点）。ストランド・ストリート所在。当時は客室数 800 を持つ 1886 年創業の欧州最大規模のホテルで、欧米のビジネス客に愛用されていた〕で開かれ出席した〔小村のロンドンへの着任は既に 2 年前の明治 39（1906）年 8 月であり、実際のところは、小村が阪谷を紹介するレセプションだったと思われる〕。そしてその足で〔7 月 18 日〕ケズィック〔湖水地方の中心地にある古い鉱山町〕へ向かい、かの有名なケズィック・コンベンション〔明治 8（1875）年以来開催されているキリスト教伝道の集会〕**（補注 1）**に参加し、大勢の日本人クリスチャンや極東の宣教師たちに会った。ある日〔21 日〕は、妖精のように美しい湖水地方**（補注 2）**を通ってアンブルサイドまで行き、リデル女史の知人であるジョーンズ夫人のお世話になった。涼しくなった夕方の美しい庭で、普段はタバコを吸わないのだが、ご婦人方の要請で虫除けのため一服した〔リデルもこの時滞在しており、旧交をあたためた〕。翌朝はウィンダミア湖とライ教会を見て、午後はケズィックに戻ったが、これは翌日、説教師キャンベル・モーガン博士の説得力溢れる話〔演題：ペテロ伝の批評〕を聞くためだった。ロンドンへ戻る途中ではケンダルに立ち寄りメリー・W・クロッパー嬢の家を訪問し、そこの女子高校の文化祭で簡単に挨拶をした。タスマニア総督とストリックランド女史が主賓で、学生たちがフランス語の演劇を見せてくれた。翌朝はクロッパー製紙工場を見た後、クロッパー嬢の母上を訪問、午後の列車でロンドンに向かった。列車ではケズィック・コンベンションから帰る途上のポルトガル人に会った。食堂車では、当時カーリスル〔湖水地方北方〕の司教だったヘンリー・ウェア夫妻が親切に話し掛けて来てくれ、ご夫妻がロンドン

に滞在する時に合わせて、数ヶ月後昼食に招待してくれた。行きずりの日本人に堅苦しい挨拶も抜きにして、あれほどの好意を示してくれたのは、英国のエチケットが変わったというより、日英同盟〔明治35(1902)年1月締結〕のお蔭だと私は感じた。

（補注1）ケズィック・コンベンション

本田増次郎「英米雑俎（11）Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正5（1916）年8月15日

Keswick（ケジツク）はSouthey〔ロバート・サウジー：英国の桂冠詩人〕の葬られて居るmarket townで同名の湖上にあり、Keswick Conventionといふ宗教夏期学校で尤も有名である。全体英人の国教はChurch of England（米国ではEpiscopal Church）といふて、CatholicとProtestantとの間のやうなものであるが、doctrine（教義）に於てもrituals（儀式）に於ても至つて広汎で、一方はritualistsといふ極端、他方はevangelicalといふ福音主義の極端に分れて居る。又Protestantsの中でもMethodistsなどの中には日蓮宗のやうに感情に訴へる人が少なくない。Salvationists（救世軍）の如きは無学貧賤の人を救はうといふのであるから、理性は第二として感情を動かすを主とする事になり易い、ケジツク大会は結局福音主義感情家の主として集まるもので、牧師、外国から帰休中の宣教師、同志の信徒が何千と来会して、説教祈祷で信仰を熾(さか)んにするのである。而して一般夏期学校と同じく、此大会も肉体の休養を兼ねる事勿論であるが、我等山水狂の日本人には、かゝかる場所の宗教運動はチト熱気が過ぎて、花下長刀を佩(お)ぶる人を観るの感がある。しかし外見からdignifiedなstoicに見ゆる英人中に、あれ程涙を流し声を震はす男女が沢山あるかと思へば、Religionの力亦大なる哉と云はざるを得ぬ。

（補注2）湖水地方

本田増次郎「英米雑俎(11)Mountain and Seaside Resorts」『ジャパン・タイムズ学生号』大正5（1916）年8月15日

Lake-countryといふはEnglandの北方から南へ向けて一聯(いちれん)の湖水のある所で、風光明媚誠にLake Poetsと称せらる一群の詩人を出した筈だと首肯された。観光馬車に乗つて山へ上ると鏡のやうな水面に迎へられる。次の峠へ着くと又同様といふ風で、Coleridge〔サミュエル・コールリッジ：詩人。ワーズワースと親しく共著『抒情民謡集』がある〕，Southey, Wordsworth〔ウイリアム・ワーズワース：サウジーを継ぐ桂冠詩人〕などの古蹟を尋ねつゝ行くのである。

マーク・トウェインの娘

ある日、ニューヨークで知り合った友人2人と共に、フリート・ストリートにある「チェシャ・チーズ」〔17世紀よりあるパブ・レストランYe Olde Cheshire Cheese〕へ行った。そこは米国からやって来た旅人の溜まり場となっているところだ。有名なステーキと腎臓入りのパイに、またそこでしばしば時を過ごしたジョンソン博士〔サミュエル・ジョンソン：辞書編纂者〕やゴールドスミス〔オリバー・ゴールドスミス：アイルランド出身の作家〕、そしてボスウェル〔ジェームス・ボスウェル：ジョンソン博士の伝記作家、弁護士〕に敬意を表するため行ったのだが、偉大な辞書編纂者が使っていたとされる椅子も置いて

あった。この数日後、俳優慈善会のバザー〔王立植物園（キュー・ガーデン）で開かれた俳優による孤児救済金募金の集い〕で、先ほどと同じ友人たちがクレメンス嬢〔クララ・クレメンス〕を紹介してくれた。彼女はマーク・トウェイン〔マーク・トウェインの本名はサミュエル・ランゴーン・クレメンス〕の娘さんだが、大西洋を隔てた両側〔米英〕で歌手として有名になっていた。その後ロシア人の音楽家〔ピアニストのオシップ・ガブリロヴィッチ〕と結婚した。クレメンス嬢の父は日本びいきの人だが、最初はこの結婚を認めようとはしなかった。またロシア青年の方も深く愛してはいたが、彼女の音楽的才能がプロとしての水準にまで到達していないと考え、プロを諦めない限り結婚はしないということだった。しかし、アメリカ人の自由主義もロシア人の独裁主義も、愛という全能の感情が命ずるところにおいては、何の障害にもならないことが明らかとなった。バザーでは皆一様に、スターを一目見、握手し、話しを聞きたいと一生懸命なようだ。そんな状態だから、舞台俳優が孤児を助けるというチャリティー本来の目的を考えることの出来る人などいる訳がない。日本人の場合でも、女性の場合は特に、舞台を離れたところで俳優に会いたがっている人は多いので、同じような販売や出し物で、慈善金が集まるかもしれない。

万国平和協会大会

小村大使〔小村寿太郎〕は東京で外務大臣に就任するため、明治 41（1908）8 月 27 日〔正しくは 7 月 27 日（8 月 27 日は小村の東京における外務大臣任官の日付)〕にロンドンを発った。ちょうどその日、カクストン・ホール〔ウエストミンスターにある公会堂〕で第 5 回〔正しくは第 17 回〕万国平和協会大会〔会期は 7 月 27 日から 8 月 1 日〕が始まった。

その大会に日本の大日本平和協会は姉崎〔姉崎正治（まさはる）：東京帝国大学教授、宗教学者〕、黒板〔黒板勝美：東京帝国大学教授、国史学の泰斗。エスペラント学者〕の両教授、それに私を代表に送った。トーマス卿とバークレイ女史が最初の代表歓迎のレセプションを開いてくれたが、夜の 2 回目のレセプションは、コートニー卿夫妻を迎えての会であった。そこでオーストリア人の一紳士が流暢な日本語で話しかけてきたが、聞けば長崎の生まれだという。その人はシーボルト男爵 **(補注)**、日本を西洋に紹介したあの有名な人物〔フランツ・フォン・シーボルト：ドイツ人医師。長崎の鳴滝塾で医学を教授するが、シーボルト事件で国外追放となる。日本の海外への紹介に尽力〕の息子その人だった。翌日はクイーンズ・ホールでの全体会議だったが、ロイド・ジョージ氏〔デイヴィット・ロイド・ジョージ：ウェールズ出身の政治家、当時の大蔵大臣、後に首相〕とシュッツナー男爵夫人〔ベルサ・フォン・シュッツナー：平和活動家、ノーベル平和賞受賞者：この会議では「ヨーロッパは 1 つ」を強く訴えた〕が平和主義について話をした。この時、多数の過激な婦人参政権論者がロイド・ジョージ氏を攻撃し、その情景は確かに平和なものではなかった。しかし、ウェールズ出身の政治家〔ロイド・ジョージ〕が気転を利かせる様子や、「あいつをつまみ出せ！」という表現の用い方のつぼを知ることが出来たのは収穫だった。数日後、著名な画家にして平和主義者であるフェリックス・モッシュエルズ夫妻主宰の昼食会で、例のオーストリア人の男爵夫人〔ベルサ・フォン・シュッツナー〕に会ったので、互いの自書、『肉弾』と『武器を捨てよ』〔1896 年にシュッツナーが書いた反戦小説。27 カ国語に翻訳された〕にサインを入れて交換しあった。平和大会の参加者たちは、ある時はウインザー城〔ロンドン西方 50 キロ〕を訪れ、またある時はロイヤル・リベラル・クラブのビジター会員となった。政府主催の晩餐会はホテル・セシルで開かれ、主催者を代表してアスキス氏〔ハーバート・アスキス：政治家。当時の英国首相〕とルイス・ハーコート氏がスピーチをした。トルコ、エジプト、ハンガリーの代表の話が、世界政治を悲観的に見ており、また同

じ東洋人としての親近感もあり、特に印象に残った。

（補注）アレキサンデル・シーボルト

フランツ・シーボルトの長男。英国公使館通訳として来日、1870 年から 87 年まで日本政府に奉職し日本外交にも貢献した。日本初の女医として知られる「オランダお稲」（楠本イネ）とは異母兄弟の関係に当たる。

ロンドンでマグロの「刺身」

海老名弾正牧師〔キリスト教思想家：熊本バンドの 1 人。日本組合基督教会牧師、同志社総長〕が、その夏ロンドンに来ていたので、チェルシーのカーライルの家〔現存：トーマス・カーライルは「チェルシーの聖人」と呼ばれていた〕やキングスレィ教会、また、ホイッスラー〔ジェームス・ホイッスラー：テムズ川の連作で知られる画家〕の旧居を見たり、「グッド・インテント」という多種類の中国茶や紅茶を飲ませる一風変わった店で一緒にお茶を飲んだりした〔桜井彦一郎も同行。カーライルの家では「絵葉書を買ひ、三人連名にて、日本のカーライリースたる新渡戸博士、内村鑑三氏等に送つた」（桜井彦一郎『欧州見物』）〕。ちょうど横浜から戻っていたセール氏と長話をしたが、極東滞在の英国人ビジネスマンが日本に悪感情を抱いているのは、日本が同盟国の金を同国との競争のために使っていると考えているからだと知り、ことの深刻さが良く理解出来た。仏英博覧会への 2 度目の訪問は、ファイソン〔フィリップ・ケンボール・ファイソン。日本聖公会初代北海道教区主教〕、プライス両主教とその家族と運良く一緒だった。2 人とも日本にいた経験がある。皆でフリップ・フラップ〔巨大なアームの両端に人が乗る電話ボックスがついており、一方が上がれば、他方が下がる仕掛けの乗り物〕に挑戦した。それは一気に空中高く舞い上がったかと思うと、急に止まってしまった。------装置のギアが外れたとでもいうのか!「冥土」との電話連絡は途絶えなかったが、15 分ほど案内係りに励まされ続け、その後やっと乗り物が動き始めた。2 人の主教と共に天国により一層近づけるとは、ほんの一握りの人しか経験出来ない、まさに特権といえよう。根岸夫妻の家でいただく「日本風」の料理は、ロンドン生活における楽しみの 1 つだった。英国の首都にある日本郵船会社の根岸廉次郎氏〔ロンドン支店副支配人。明治 44（1911）年より支店長。後取締役。越後長岡の豪傑河井継之助の甥に当たる〕は、長年に亘り人を楽しませるのに長けた人だった。またイタリア人街でマグロを見つけたことを自慢にしていた。日本人の美食家なら、「刺身」（生の魚料理）無しでは、幸せを感じられる訳がないのだ。根岸氏が英国のことを「我が国」と呼ぶので、皆冷やかしたものだが、それ故、誤解して親英派だと非難する人もいた〔「根岸君の我英国と云へば、評判なものだ」（桜井彦一郎『欧州見物』）。帰国後、出席したある結婚式で、英国を我が国と発言し、右翼の大物ともめた逸話が残されている〕。しかし、根岸氏の表現がよって来るところは、日本やドイツの基準でしか英国のことを判断出来ない我々を暗に批判している点にあるのだ。

既に触れたように、私が講演した地域は、英国、ウェールズ、アイルランドをカバーしており、平和、労働、教育、教会といった関係の会合に於いてだった。こういった種類の仕事で最初に行ったのは、リンカーンだったが、ここでは有名なリンカーン大聖堂参事会員のクロウフット夫妻の客となり、大学の講堂で話をした。そこからラグビーに近いゴルソに回り、数日間バートン一家のお世話になった。一家は冬の間、ロンドンに住んでいたので、しばしばロンドンで会うことがあった。一家と親しくなったきっかけは、娘さんの 1 人にケズィックで出会ったことだった。ある日の午後はタターシャルの古城〔15 世紀築、赤レンガ造の城〕に連れて行ってくれ、帰りには風車の中を見学させてくれた。お陰で内

部構造が理解でき満足だった。また別の晩は、クロウフット家に戻ったが、そこで会った人の中ではウィックハム主席司祭夫人が印象的だった。わざわざリンカーンまで、日本からの訪問者である私に敬意を表して会いに来てくれたのだ。ウィックハム夫人はあの老大人グラドストン〔84 歳で英国首相の地位にあったことで知られる。小英国主義に基づき平和外交を主導、アイルランド問題の解決に注力〕の長女だった。彼女の顔の中にその面影を見たように感じた。またジョン・ブライト〔政治家：穀物法廃止運動をコブデンとともに主導〕の娘さんには、ロンドンの平和大会で出会った。この大聖堂の町では、ニューポート・アーチ、それに地下に埋まったローマ時代の柱を見ることが出来た。

ヨークとコルチェスター

会合で講演するためリンカーンからリーズへ回り、3 日間ブラムレイ〔リーズ市内〕のE・ラッセル・ウォン博士夫妻の客人となった。リーズを拠点に夫人がヨークまで連れて行ってくれた。そこでは親日家の人たちとお茶を飲み、ヨーク大聖堂や古い城壁〔旧市街〕を見学した。リーズ自体では毛織物の工場を 2 ヶ所訪問したが、その 1 つは、日露戦争の時日本軍に物資を供給してくれたところだった。また、この工業の中心地の郊外では、アスキス氏が若き日に教育を受けたモラビア兄弟会〔現在のチェコ共和国を起源とするプロテスタントの一派〕の学校を見た。ヨークへの 2 回目の訪問はロンドンの平和大会で会ったウエストロープ氏のロウンツリー・ココア工場だったが、自ら工場中を案内し、社会的、教育的特徴を説明してくた。工場長のロウンツリー氏や会社の主だった面々とはオフィスで昼食をともにした。8 世紀前の中世冒険商人組合の歴史的建築物〔ギルド・ホール〕、また「シャンブルズ」〔中世の風情が残る石畳の通り〕が非常に興味深かった。ヨークに続いてはマーケット・ウエイトン〔ヨーク東方 30 キロの小さな市場町〕に行って、H・P・ソーントン牧師の信者たちに話をした。妹さんは既に日本で亡くなられていたが、東京のセント・ヒルダ・ミッション〔エドワード・ビッカーステス主教による英国婦人の伝道集団〕に数年間いたことがある。ソーントン氏の英国の骨董に関する知識は相当なもので、近くのノルマンやサクソンの古い教会を訪ねた時は、その知識があったおかげで理解も良く出来、かつ楽しめた。次の講演は日本人の観点からの平和がテーマだったが、富豪の友人、S・F・ハーナード氏の庭園に集まったコルチェスター〔ロンドン北東 88 キロ〕の平和主義者たちを前にして行った。この講演は横浜のバンティング氏〔ナーサリー（苗木）会社経営者〕の妹であるバンティング嬢が準備してくれたものだった。彼女には平和大会で知り合いになったのだ。コルチェスターの市長が司会をされたが、ある人の良い老人は国境を越えて友好の実を結ぶべく、あらん限りの誠意を示して私を喜ばせてくれた。ハーナード氏はそつのないもてなしで対応してくれ、バンティング嬢の一家は古い教会や城、それに博物館を案内してくれた。

聖餐式の行列

9 月 5 日、シェパーズブッシュからカノンベリータワーに近いカノンベリー〔カッスルベルグ嬢の下宿〕に引っ越した。カノンベリータワーは 1762 年にオリバー・ゴールドスミスが部屋を借りていたところだ。その直後のある日の午後、ウエストミンスター大聖堂近くに聖餐式の行列を見に出かけた。これほどみすぼらしい身なりの群衆を嘗てまたこの後も英国の首都で見たことはない。教会のお偉方が通り過ぎる度に、集まった人々は「神のご加護を！」とロンドン訛りで繰り返すのだ。この情景は悲しかった。なぜなら、これほど多くの貧しく、教育も受けていない男女が聖職者を崇めているのだ。彼等の多くが知性で

も洗練度でも、どう見ても優れているとは思われなかった。おそらく苦境に喘いでいるが故に見た目がみすぼらしいだけで、カトリックや他の派の不信心者よりは信仰心の面では勝っているのだろう。しかし、イースト・エンド〔ロンドン塔近くの貧民街〕で見た光景とこの経験から解ったことは、永い歴史を刻んだ文明の持つ対称的な情景の存在だった。すなわち富と貧困、洗練と粗野が、そこに際だった形で晒されているのだった。如何なる形にせよ社会主義が至るところで急速な支持を得て来ていることが、ごく自然なことだと思われた。ロイド・ジョージ氏も最初は政敵からまったく信用されていなかったが、労働者階級への影響力を通じて現在の高い人気を得ている。とにかく、通りから見えるようなところで酒を飲む女たち、草の上で退屈そうに横になったり雪のなかで眠りこけたりする失業者たち、そして正業に就こうとする意志も方法も持たないように見える若者たちを目の当たりにすると、まるで自分の兄弟姉妹が悲惨な状態に陥っているような錯覚に襲われるのだ。

万国徳育会議

明治 41（1908）年 9 月末に向けて、万国徳育会議が初めてロンドンで開催された。現在東北帝国大学総長の北条氏〔北条時敬（ときゆき）：教育者。広島高等師範学校校長、第 2 代東北帝国大学総長。ボーイスカウトの日本紹介、西田幾多郎の恩師としても知られる〕が日本政府を代表して会議に出席しており、私もオブザーバーで参加した。英国当局はかかる会合に賛意を表したかもしれないが、全キリスト教国の国民感情からすれば、道徳と宗教を切り離して論ずるだけの準備が出来ていないのは明らかだった。北条氏の原稿は代理人によって読まれた。それは日本の学校における倫理教育のシステムを説明したものだったが、西洋人の聴衆に対しては、あたかも日本国民は全体として精神性を好まずかつ求めもしないと述べているような印象を与えることが危惧された。そこで、やはりこの会議に参加していたヒューズ女史に助言を求めた上で、我が国の教育は国家的宗教に基づいているのであって、表面的な観察では解らないだろうが、超自然的あるいは超人間的要素〔モラル〕を欠いている訳ではないと、機会を見て会議の当事者に言っておいた。倫理文化運動の場合ように、この万国徳育会議はおそらく如何なる宗教も信じない人たちによって始められたのだろう。もしそうでなければ、世界中の先生方一般がもっと興味を抱けたはずだ。国際的人道主義的倫理体系が学校の授業や教会の説教で吹聴されるかどうかにかかわらず、それが一定の宗派や国や人種から生まれる偏見に取って代わらなければならない時代が来たように思われる。個人的には、1 年の間に教える回数を増やしたからといって、道徳的性格が形づくられるものではないとは思うが。

ウェールズ語における「2 つ続きのエル」の発音

菜食主義のユースタス・マイルズ・レストラン〔婦人参政権論者が集まったことで知られる〕は満足とはほど遠いものだった。料理は見栄えがして、味も良かったが、次の食事時間がこないうちに空腹になった。獣の肉を食べ過ぎるほど食べている輩には、軽い食事も慰めになるのだろうが、日本人は国民全体として、もっと十分に栄養を、心身ともに摂取すべきだ。したがってイズリントンの農産物品評会より、カレドニアンの家畜市場の方がはるかに興味深かった。10 月半ばにはウェールズのアバリストウイスへ行き、神学校とウェールズ大学のカレッジで講演をしたが、これは神学校のプライス校長から招かれたものだった。城跡や海岸を見た上で、ウェールズ語の文法書を買い、ウェールズ語によくで

てくる2つ続きのエル〔英語の“l”を無声音で発声する。日本語表記は通例「ス」〕を必死に発音しようとしたことが、今でもはっきりと思い出される。プライス夫人は子供たちにフランス語とドイツ語を学ばせるために、スイス人の家庭教師を雇っていた。3日間の滞在の後、アバリストウイスを後にしサウス・ウェールズのバリーに向かった。労働者教育協会の会合で講演するためだった。

ヘンリー・フォーセット夫人

南ウェールズへの 2 回目の訪問中、バリー、アバティラリー、ポンティプリーズ、ポート・タルボット、カム・エイボン、カーディフ、アバデアの労働者教育協会で講演をする一方、これらの地域の女性クラブ、教師の会合、学校の集まりでも講演をした。しかし、この講演旅行で最も記憶に残った出来事は炭坑の訪問だった。炭坑の内部事情を知るにつけ、ウェールズ人が炭坑から学んだことを静かに熟考する高い知性を備えた人たちであることが明らかになった。講演で私に投げかけられた鋭い質問には驚かされたものだ。カーディフのタウンホール〔現在はシティ・ホール〕、5 世紀に建てられた教会、ラントゥイット・メイジャーの興味深い古い街並み、素晴らしい家具がしつらえられたハム・コート、骨董で有名な聖ドナット城、これらの情景から受けた印象は、英国の文化に染まる以前のウェールズが、スコットランドやアイルランドと同様に、独自の文化を持っていたということだ。ビュート侯爵の壮大なカーディフ城、有名なランダフ大聖堂も、非常に素晴らしかった。それらを見た後、カーディフの婦人参政権運動の会合に参加し、ヘンリー・フォーセット夫人〔ミリセント〕に会った。彼女は演説を終えてから、日本の婦人たちもこういった運動をしているのかと私に尋ねてきた。否の答えを受けて、私がかかる運動の火付け役になってはどうかと提案してきたが〔ミリセントが婦人参政権運動に入ったのは、ジョン・スチュアート・ミルの講演を聴いたことが契機となった〕、適切な教育のみが、男女を問わず、我が国民の社会的、政治的水準を自然な形で引き上げることが出来るのだと、断言しておいた。彼女の『政治経済』〔*Political Economy for Beginners*：25 年間で 10 版を重ねたベストセラー〕を若き日に読み、20 回近くも教えてきた者としては、博学の自由党政治家〔ヘンリー・フォーセット：ケンブリッジ大学の政治経済学教授。後に国会議員に転じたが、逓信大臣の時、世界で初めて郵便小包制度と郵便貯金制度を制度化した〕の未亡人と握手を出来たのは光栄の極みだった。

西洋カリンとおせっかいな人

10 月の終わり近くロンドンに戻り、クロイドンでの英国聖公会福音宣布協会〔S. P. G. =The Society for the Propagation of the Gospel：現在のU. S. P. G. 〕年次総会で発表を終えてから、11 月のはじめにウエストゲート・オン・シー〔ドーバー北方 20 キロ〕に行き、女学校連合の会合やその他の集まりで講演をしたが、当時ロンドンにいたビカステス主教夫人の紹介で、スターティン夫人に会った。彼女は以前、東京にいた時、故ビカステス主教〔英国聖公会日本主教。米国聖公会主教ウイリアムズと協力し日本聖公会を組織〕のシスターを務めていた人だ。その年は天長節（11 月 3 日）をロンドンの日本大使館で祝った。特命全権大使に新任された加藤男爵〔加藤高明・政治家、外交官。岩崎弥太郎の娘婿。日英同盟締結の立て役者として日英親善に尽力、普通選挙法成立に貢献〕は留守中だったので〔発令は明治 41（1908）年 9 月だったが、実際の着任は明治 42（1909）年 2 月であり、この時点ではロンドンに到着していなかった〕参事官の山座円次郎〔外交官。小村

寿太郎外相の下で、日英同盟、日露交渉、日露戦争などにかかわった。妻女は賤香（対露強硬論で知られた神鞭知常（こうむらともつね）の長女)〕夫妻が訪問客の対応全般をしていた。次の日は平和集会で話すためにブリストルに行き、2 日間を過ごした。そこではフレンド派の病弱なW・W・ヒューズ氏と 2 人の息子と 2 人の娘の一家がもてなしてくれた。生まれて初めて庭で西洋カリンの木〔a medlar（メドラー）tree〕を見た。私は聖書の「おせっかいな人」〔meddler（メドラー)〕の英語の語呂合わせから、西洋カリンを小石川後楽園にある西洋ハナズオウ〔the Judas tree（ユダの木)〕とずっと結びつけて考えていた〔ユダがキリストを裏切るというおせっかいをしたことからの連想〕。エイボンの有名な吊り橋〔クリフトン・サスペンション・ブリッジ〕と峡谷、カボット・タワー〔ブランドン・ヒル所在〕、クリフトン・カレッジ、その他の学校、フランク・ベンソン氏プロデュースによる「夏の夜の夢」〔ウィリアム・シェークスピアの戯曲〕、ダウンにおけるホッケーの試合、アートギャラリー、フィッシャー氏の美術学校がこの楽しい訪問の主な名所だった。

日本人のための２つの教訓

ロンドン市長のパレードが 11 月 9 日〔この日、新市長ジョージ・トラスコット卿の就任式が行われた。マンション・ハウスから王立裁判所までお披露目の行進をするのが恒例となっている〕開催されたので、ストランド通りにあるレストランの上階の部屋から、この素晴らしいパレードを眺めた。私より背の高いロンドン子たちは親切にも前の席を私に譲ってくれた。この後、当日のこと、海外での布教活動に興味を持つ 700 人を前にした会合の話者の 1 人として、ノッティンガム〔英国中央部〕に向かったが、その会合はサウスウェル〔ロビンフッドの伝説を生んだシャーウッドの森の近くにあり、大会堂（ミンスター）で知られる〕の大司教が主催したものだった。以前ナタール〔南アフリカ〕に赴任していたバインズ大司教とその夫人の客としてもてなされたのだ。夫妻と 2 人の小さい娘たちと一緒に城〔ノッティンガ城〕を見てから、翌日はブラックバーンに行った。そこでは東京のウエッブ氏と北海道のパインズ嬢に会った。次のマンチェスターで、訪問したのは、名門の公立中等学校、女子高等学校、それにフィールダー・スクールだった。お世話になったのはマンチェスター大学のロナルド・モンタグ・バロウズ教授夫妻で、その弟であるシェフィールドの司教の紹介だった。ここでどうしてもこの旅行で起こった 2 つの出来事に触れておかなければならない。1 つはセント・パンクラス駅〔ロンドン〕で急いでノッティンガム行きの切符を買おうとしていて、私がポケット・ダイアリーを落としてしまったことだ。ところが、ノッティンガムからこのことを連絡しようとしたやさき、この落とし物は発見され保管されている旨の通知がバインズ家に届いたのだ。駅員たちは、私が改札を通った時から、行き先を把握してくれていて、数ペンスの手数料だけで戻してくれたのだ。一国の官吏たるもの、かかる賞賛に値する例にはならうべきだ。もう１つの出来事も同様なものであったが、これはつらい経験だった。マンチェスターの公立中等学校でのことだが、そこの教師が自分で編んだ教科書の古い日本語訳を見せてくれ、ご要望があれば如何なる言葉に翻訳して出版しても構わないという。確かに法的には問題はないかもしれない。しかし全ての国に共通な道徳的決まりがあるということは肝に命じておくべきだろう。

ヨークの大司教

ハル〔英国北部ハンバー川沿いの港湾都市〕という名は、愛国心を持つ日本人なら記憶に深く刻み込まれているはずだ。なぜならロシア人たちが、酒に酔ったのか神経過敏に陥ったのか、ハル港所属の漁船団に発砲したからだ（補注）。11 月 16 日、クーパー夫妻の客人としてその町に滞在した。クーパー夫人は嘗ての函館のファイソン（主教）夫人の姉妹に当たる。会合では、中国華北のスコット主教と 40 年以上に亘りビルマにいたマークス博士に会った。古いビルやドック、ウィルバーフォースの家〔現在のウィルバーフォース・ハウス博物館〕を案内してもらい、翌日はロンドンに戻った。次の旅行はイプスウィッチ〔オーウェル川に臨む港湾都市〕で、大聖堂〔タワー・チャーチ〕参事会員のピゴット夫妻の邸で 1 晩お世話になった。ピゴット夫人はよく気のつく思いやりのある人で、彼女が私にしてくれた以上の心遣いを我が子に示せる日本人の母親はいないだろうと思わせるほどだった。樹林公園〔クライストチャーチ・パーク内〕、スパロー・ハウス〔壁面に白の漆喰装飾を施した中世の町家〕、それに町の農業施設は、そこを訪れて見るべき十分な価値があるものだった。イプスウィッチからロンドンに戻ると、ピープルズ・パレス〔正式名称はアレキサンドラ・パレス〕で一言話すよう依頼があった。その集会にはおよそ 3,000 人もの聴衆が集まっており、後にヨークの大司教になったステプニー主祭が主催者で、私の短い声明文に続けて賞賛の言葉を述べるというものだった。彼が持つ陽気な性格、強い意志、手短に訴える力、これこそ彼をしてリーダーシップが必要とされる責任ある高い地位に昇らしめた要因だと思う。

（補注）ドッガー・バンク事件

明治 37（1904）年 10 月 21 日のドッガー・バンク事件を指す。日露戦争下、日本へ向かう途上にあったロシアのバルチック艦隊が、デンマーク沖合の漁場ドッガー・バンクで操業中であったハルを母港とする英国のトロール船団を、日本の水雷艇と誤認して砲撃を加えた事件。1 隻が沈没させられ 2 名が死亡した。尾崎行雄東京市長が弔電を打って哀悼の意を表するなど、日本国内でも大きな話題となった。また国際的にもロシアの蛮行として批判が続出、最終的にはロシアが英国に賠償金を支払うことで決着した。

英国の資金と日本の企業

友人のアルフレッド・モーズリー氏が、一定数の日本人にアフリカから持ってきたダイヤモンドの原石をカットして磨くという仕事を訓練してやらせたらどうかという提言をしてくれた。現在はベルギーの職人が独占しているが、日本人の手先の器用さと低賃金を武器にすれば、日本船による保険料込みの極東への輸送費を賄って余りあるだろうというのがその根拠だった。この問題はロンドンの日本総領事経由で、当時欧州を訪問中だった政府の通商産業部長に提案された。しかし、この素晴らしい提案も実行不可能ということが判明した。職工は未熟練の何年か貴重なダイヤモンドの原石を駄目にするばかりか、経験を積んだとたん、より高賃金の雇い主のところへ走る渡り職人となってしまうので、仕事そのものを相当の期間保障しなければならないということだった。こういった貿易と労働の独占は、日本の法律からしても、如何なる国の労働者であれ認めるべきものではないが、結局この提案は不成立とならざるを得なかった。この事件があってから、モーズリー氏は今度は、英国の資金を日本の企業に投資することによって、政治上の同盟と同様、親密な関係を日本企業と築き、両者共同で大英帝国のテリトリーからドイツ製品を駆逐するという構想を考え始めた。仮に、日本の輸送力と労働力が英国のそれと合体すれば、手前勝手な考えではあるが、ドイツに対抗することも可能な計画になるという訳だ。ドイツの対抗

意識の激化や戦後の欧州各国の財政政策が、欧米における日本製品の現状をより不利な地位に陥れるとしても、それを１つの鞭と捉えたほうが良いだろう。それは甘やかされた子供が折檻されてさまざまな機会を一層善用するようになるのと同じことだ。

ダラム聖堂と城

11 月 21 日、複数の会合で話すため、グリムスビー〔ハンバー川河口の水産都市〕を訪れた。朝のことだが、ほとんど１マイル〔1.6 キロ〕近くも続く巨大な漁業用の浮き桟橋を見て回った日もあった。我が日本橋のビリングスゲート〔ロンドンの魚市場。東京の魚市場が築地に移転したのは関東大震災後、それまでは日本橋にあった〕に特有な臭気もなく非常に綺麗に保たれていた。他にも魚の加工施設や製氷工場も見た。また、水産業を勉強している國司（くにし）という人〔國司浩助（こうすけ）：英国からトロール漁法を導入、水産加工などの技術開発にもかかわり、日本の水産業の礎を築いた〕に会ったのは、この有名な水産都市でのことだった。2 日間お世話になったモハンズ夫妻の 3 人の子供たちに心を残しながら、グリムスビーを後にし、次はダラムに行った。大聖堂参事会員のノーリング夫妻の客となったのだが、このダラムという大聖堂のある町の名には以前から親近感を抱いていた。なぜなら、大阪の知人トゥリストラム嬢の博識の父が、嘗て日本にも来たことがあるが、このダラムの大聖堂参事会員であったので、その名に親しんでいたからだ。日本からの訪問者に会うため昼食を食べに来ていた 10 人の紳士たちの中で、主席司祭のキッチン氏は知性の質が普通の英国人とはどこか違っていて印象に残った。「紳士録」を調べてみると、むべなるかな、ウェールズ人の学者だった。堂守のフリーマン氏はすばらしいダラム聖堂を見せるため、つきっ切りで案内してくれた。見学が終わってからのことだったが、感動的な合唱「聖パウロ」〔フェリックス・メンデルスゾーンのオラトリオ。聖書の文言をちりばめ、キリストの生涯を語る演奏時間 2 時間を超える大作〕も聞こえてきた。タウンホールの会合では、大阪桃山のローリングス夫妻〔夫のG. W. ローリングス（明治 33（1900）年 12 月来日）は、高等英学校に奉職中だった。この本田と会った時はちょうど帰英しダラム大学で学んでいた時期に当たる。後、高等英学校の第 6 代校長となる〕と再会を果たし嬉しかった。2 日目はノーリング夫人がダラム城を案内してくれ、その後はノーリング参事会員と 2 人で散歩をし、「マーミオン」〔アイルランドの詩人ウォルター・スコットの叙事詩〕からの一節を名に冠した橋を渡った。午後は、トゥリストラム嬢の 2 人の妹とローリングス夫妻が私と日本について語り合うため集まってくれた。ノーリング夫人にサンドウィッチと喉飴を頂いて、11 月 27 日の夜、ロンドンに戻った。

アイレスベリーの家鴨とディケンズ生誕の地

「日本は如何なる経路を通してキリスト教を受容するのか」というのが、当時私が『イースト・アンド・ウエスト』〔*East and West* (a monthly magazine of letter, New York) と思われるが、未見〕に寄稿した記事のテーマだ。その要旨は、国際的な正義と寛容を愛する概念から幾ばくか後退した日本人の愛国心、国家本位の姿勢、それに人種的偏見がキリスト教への回心を阻んでいる障害に他ならないということだ。名目上はそうでなくとも、少なくとも精神的な意味においては障害となっていることは間違いない。世界大戦〔第 1 次世界大戦〕の最終的結果として、本来キリスト教の持つ自由が、国家の影響力から解き放たれ、回復して行くのだろうか。11 月 30 日、ウォータールー駅から汽車に乗って、ポー

ツマスに到着した。招待してくれた大聖堂参事会員のウィルソン氏と共に、現在のヨークの大司教が嘗て住んでいたことのあるポートシーの牧師館に立ち寄った後、夜、そこのタウンホールで 1,000 人の良き聴衆を前に講演を行った。この講演に先立つ当日の午後には、市立大学と図書館を訪問した。次の日は、学校や諸機関に加えて、たいそう礼儀正しいガイドのスコット氏とディケンズ〔チャールズ・ディケンズ：19 世紀を代表する英国の国民的作家〕の生家を見学したが、これは私の記憶に深く刻み込まれた。その日の夜、ロンドンに戻り、セント・ポール大聖堂にある聖堂参事会長の邸宅で、会長とグレゴリー嬢と夕食を共にした後、大聖堂でブラームスのレクイエム〔ドイツ・レクイエム（鎮魂歌）：死者と残された者たちを慰める壮大な合唱曲。演奏時間は 1 時間を超える〕の実に感動的な演奏を聴いた。12 月 3 日は家鴨のロンドンへの供給地として有名なアイレスベリー〔ロンドン北西 60 キロ〕の会合で話をした。1 晩フィップス氏の家に泊まったが、翌日は小学校、中等学校、有名な印刷所〔ロンドンに本社がある Hazell, Watson, and Viney, Ltd.の印刷所〕を見せてもらった。フィップス氏はモーティマー・メンペス氏〔画家ホイッスラーの弟子〕と個人的に親しく、日本に興味を抱くようになったのは日本が芸術的に優れていたからだそうだ。メンペス氏はロンドンで日本を題材にした絵の個展を開いたことがあり、日本に関する挿し絵入りの本も出版している。その晩はケンブリッジのクィーンズ・カレッジの知的な雰囲気の中で眠った。それは多くのフェローやチューターたちと独特の作法で夕食をとり、学部生の会合で話をした後でのことだった。

1 等車が皆危険という訳ではない

ロンドンの日本協会で論文を発表するよう頼まれたが、日本人の友人たちは物議を醸すようなテーマは避けるように忠告してくれた。そこで大英博物館正面のルザッグ書店に古書を探しに行った。多岐に亘る言語の本が山のように積み上げられていたが、その中から、幸運にも蔵書票、というより東京のウイリアム・ジョージ・アストン〔英国公使館付き通訳。25 年間に亘り英国公使館・領事館に勤務した。日本語、神道を中心とした日本文化の研究者としても知られる〕という名が日本語で書かれた蔵書印が押してある『紅毛雑話』という本を見つけた。アストン氏は日本語や日本文学に関する著作を書いた人だ。封建時代の日本がオランダを情報源に世界に関し如何なる知識を学んだかをテーマにしたこの論文については、本稿でも後に触れる積もりだ。さて、12 月 7 日にブライトン〔イギリス海峡沿いの海浜都市〕で話すことになったので、汽車の切符を準備したのだが、間違って 1 等車を買ってしまった。そこで頭をよぎったのは、1 人ならず英国人の友人たちから、1 人旅の男がコンパートメントで見知らぬ 1 人旅の婦人と一緒になったときは危険だと言うのを聞いていたことだ **(補注)**。そのことを思い出して、不安に身震いした。しかし、私の場合には、運よく 2 人の婦人に加えて親切な紳士も一緒だった。お陰で固苦しい挨拶もなく、すぐに親しい会話が始まった。ブライトンでは美術学校や術科学校やその他の学校も見学したが、印象的だったのは招待者の大聖堂参事会員であるピーシー氏の小さい娘さんと「お化けごっこ」をして遊んだことと、それに海辺のリゾート地にある有名な水族館を見学したことだ。この 2 つは今でもはっきりと瞼に浮かんでくる。次の旅は再度ブリストルだった。しかし今度は平和に関する会合ではなく、海外伝道者の会合での講演だった。料理学校、中等学校、大聖堂〔ブリストル大聖堂〕、レッドクリフ教会〔聖メアリー・レッドクリフ教会。エリザベス 1 世が英国で最も美しく魅力的だと語ったと伝えられる〕、弾丸工場〔ウイリアム・ワット経営のタワー付きの新鋭工場〕、そして煙草工場を見学した。この訪問の 2 日目は、ロブソン副主教夫妻と共に過ごしたが、息子の F・E・ロブソン氏はイートンの

先生〔フランス語〕で、後にこの歴史に残る学校を案内してくれることになる。クィーン・エリザベス・スクールを見学し、以前お世話になったヒューズ氏を訪ね食事に共にした。

（補注）コンパートメントの恐怖

本田増次郎「英米雑俎(4)Rights Versus Duty」『ジャパン・タイムズ学生号』大正 5（1916）年 5 月 1 日

英国では女を弱者として保護し、男女相争ふ場合には成るべく女の申分を立てる法律上の慣例がある。随つて此権利を濫用する婦人が出て来る。英国の紳士は一再ならず自分に警告して、婦人が一人乗つて居る汽車室を避けよと教へた。英国の汽車は compartments 即ち小室に分れて居るので、魔性の女が往々陣取つて男子を其蜘網に捉へんとする。頭髪や衣服をすり乱して station guard に唯今此男が私を insult したと訴へるのである。男は全然無罪でも反証なき限り女に花をもたせるし、又裁判問題となれば自分の名が新聞紙などに出るから、止むを得ず悪人に金をやつて私談にするさうである。反証の好例は紳士が今しもくゆらして居た cigar を指して、此通り灰が一インチも崩れずに留つて居るではありませぬか、なる程それでは此女は太い奴だ！しかし、自分は英国で幾回か婦人と二人で一室を占領した事はあつたが、女が後から入つたせいか兎も角女難に遭ひそこなつた。

国家的威信の要諦

12 月 20 日、嘗て日本の学校で幅広く読まれていた『英国人の歴史』〔*A Short History of the English People*〕の著者故ジョン・リチャード・グリーンの未亡人とロンドンで昼食を共にした後、ランカスターへ向かった。旧知の間柄であったバロウ夫妻の快適な住まいでクエーカー教徒らしい楽しいもてなしを受け、同地の組合会館で、またモアコンベ〔ランカスター近郊の海岸沿いの保養地〕でも、様々な会衆に平和について講演をした。この訪問の 2 日目と最終日には、3 つの学校と城〔ランカスター城〕の地下牢を巡った。私が「ヘンリー5 世」〔ウィリアム・シェークスピアの戯曲〕でルイス・ウオラー**（補注 1）**を、「三階の哲人」**（補注 2）**でフォーブス・ロバートソン卿夫妻〔妻のガートルードも舞台女優で 2 人で舞台に立った〕を見たのはこの年の冬のことだった。フォーブス・ロバートソン卿については、この後ニューヨークでも同じ演目で 2 人に再会した。またロンドンにあるダンカンテラス〔イズリントン所在〕のセント・ジョンズ・カトリック教会で行われるクリスマスイブの深夜のミサにも行き、有名な洗足式を見た。この頃良く行ったのは、ウエストミンスター寺院にあるセント・マーガレット礼拝堂だった。というのは、ヘンソン大聖堂参事会員の説教が、その思想においても表現においても極めて自分に訴えかけてくるからだったが、正統派を任ずる英国人の友人たちは、私のこのやり方を快くは思わなかった。おそらく、英国や米国の旅行者が儀式や賛美歌がすばらしいからと言う理由だけで東京のロシア正教会に行こうとするのを、プロテスタントの宣教師が止めるようなものだろう。私は度量の広い人物と思われているが、明治 41（1908）年の終わりに向けてイズリントンで開かれた商業的な「ワールド・フェアー」には、関与するのを断った。ある日、見に行ってみると、日本人や使節の人々が日本の衣装を身にまとい、果敢にも和室の運営に従事していたが、それは文明の遅れた民族や種族の中に混じってのショーに過ぎなかった。私も強情なところがあって、時には憤慨してしまうこともある。ある日のことだが、ロンドンの街を歩いていると、1 人の中国人使節が、私のことを自国人と間違えて、英国式マナーに反して自己紹介もせず、中国語で話しかけてきた。おそらくその時の私は機嫌が悪かったのだろう。いずれにせよ、私の理不尽な行いをこの罪なき友人に謝らねばならない。

（補注 1）ルイス・ウオラー
「ヘンリー5 世」のヘンリーを当たり役とした舞台俳優

（補注 2）「三階の哲人」
ジェローム・クラプカ・ジェローム作。1 人の旅人がロンドンの下宿屋に泊まり、その感化を受けて不良の男女が善に返るという物語（於けるセント・ジェームス劇場）
本田は「三階の哲人」と題した一文を大正 7（1918）年 9 月 12 日付の『時事新報』に寄せているが、当時帝劇で上演されていた「白隠和尚」を話題にした後で「さて問題の「三階裏」は、大分「白隠和尚」と行き方を異にして、主人公は下宿屋の一番安い部屋に居るフロツク、コートの貧乏学者、同宿の売淫婦や高利貸などが段々彼に薫化されて善心に立返ると云ふ様な筋であつたと記憶する」と書き記している。

海外での広報活動

カノンベリースクウェアーの下宿人たちは、スイス、ドイツ、デンマーク、ベルギー、スウェーデンといった国籍の人たちであったが、こぞってイタリアン・レストランで開かれる大晦日の晩餐会に繰り出した。そしてその後、フラスカティ〔オックスフォード・ストリートの当時人気のあった高級フレンチレストラン〕に回り、大勢の浮かれ騒ぐ善男善女と共に明治 42（1909）年の新年を迎えた。元日の午後はセント・ポール聖歌隊の少年たちによるキャロルの合唱を主席司祭の邸で聴いた。明治 42（1909）年 1 月 4 日はロンドンで人生最悪のスモッグを経験した。それは真っ黄色で、濃厚で、喉が痛むほどだった。しかし、鉄道の駅や地下鉄の出口での、男たちによる燈火を持っての案内と、美しい女性たちとぶつかりそうになった時の心地よい驚きは、容易にぬぐい去ることの出来ない印象となって残った。ロンドンの霧の中では、女性は全て美しい詩的な生き物になるのだ。およそ 1 週間後文部省から小切手が送られてきた。この年の 3 月 31 日で私の海外での 2 年間の奨学金支給期限が切れるので、その帰国費用を送ってよこしたものだ。私はそれを東京に送り返すと共に、滞在の延長は自己負担とするので英国での滞在期間を今しばらく延長するよう当局に要請した。これはなにも官立の教育機関で教えるのを回避したいということではなく、日本で国際広報の支援組織が出来上がり次第、ロンドンかニューヨークで、広報担当として、日本とその事情を正確に伝える仕事に携わりたいと思ったからだ。ニューヨークでは高峰譲吉博士〔化学者。アドレナリン、タカジアスターゼの発明者。ニューヨークに日本協会を創設するなど日米親善に功績があった〕が米国での必要性を、ロンドンでは日本郵船の根岸錬次郎氏が英国での必要性を、それぞれその立場から訴えた。一方、故伊藤公も故小村侯も、ともに同様の活動の必要性を考えていた。ついに明治 42（1909）年の夏、東洋通報社開設のため（補注）、頭本元貞（ずもともとさだ）氏〔伊藤博文秘書を経験した後、伊藤や福沢諭吉の後援を得て、日本人による初めての日刊英字新聞ジャパン・タイムズを創刊。後にソウル・プレス、オリエンタル・レビュー、ジャパン・タイムズ学生号などの経営も手掛けた〕がニューヨークに到着した。私もフランスとドイツでの旅行を大至急済ませこの仕事に合流した。文部省も我々の海外での努力が重要であるとの観点から、私を教授職にとどめ置く権利を自発的に放棄してくれた。ちょうど英国やフランスが東京で行っているように、かかる国際的広報活動は現在も必要であると確信している。ドイツのように事を起こした後で、外交ルートやその他の手段で体裁をつくろうといったやり方ではなく、事実を不快感を与えない形でありのまま提示し、出来ることならより説得力をもって、誤

解や対立を未然に防いでおくというやり方で。

（補注）東洋通報社

１、設立趣旨

THE ORIENTAL REVIEW Vol.2-No.1 November, 1911

東洋通報社〔オリエンタル・レビューの発行機関〕は明治 42（1909）年 8 月、東京と横浜の主だった財界人〔渋沢栄一、森村市左衛門等が組織した日米情報会〕の支援によって設立された。その目的はアメリカ合衆国その他に、日本と極東全般の情報、特にその地域の金融、経済の情報を広めることにある。かかる知識を普及させることによって、東と西の国々が親密な関係を築き、その結果として友情と親善とを飛躍的に増進することができると希望し、また信ずるからである。
（訳：長谷川勝政）

ただし、上記の設立趣旨は表向きのことで、実際は設立から運営までのすべてを外務省が統括する、いわば政府の一広報機関であった。明治 42（1909）年 5 月 6 日付けで小村寿太郎外務大臣が頭本元貞に宛てた設立の心得を記した機密文書（外務省機密送第 17 号：アジア歴史資料センター『紐育ニ東洋通報社設置一件第一巻』資料提供：西口忠氏）には、「貴下ハ通報社ノ業務ヲ表面上純然タル営業ノ形式ト為シ政府トノ関係ハ厳ニ之ヲ秘密ト成シ置カルベシ」との文言が記されている。

２、当時の副編集長馬場恒吾の回想

馬場恒吾『自伝点描』東西文明社　昭和 27（1952）年（資料提供：丹沢栄一氏）

紐育ではオリエンタル・レビューという百ページばかりの英文雑誌を出していた。頭本氏は一年ばかりして日本に帰ってジャパン・タイムスを経営されることになった。そのあとは元高等師範の教授だった本田増次郎氏が雑誌を主宰する事になったが、氏は体が悪くてハーフホードの病院住みをされた。雑誌の方は元紐育の「ジャアナル・オブ・コンマアス」社長ジョン・フォード氏の親戚であるチャプマン〔Lucian Thorp Chapman〕という新聞記者が手伝って呉れたが、これはわれわれの英文を直すとか校正を見るということであった。

エドウィン・アーノルド卿と令夫人

その年早く、アルフレッド・モーズリー夫人の家で、デボンシャー海岸〔デボン州の海岸。英国のリヴィエラとも呼ばれる風光明媚なリゾート地〕で採れたアマノリを初めて味わった。それは日本の「浅草海苔」とよく似ていたが、バターと酢を添えて出された。大多数の外国人は英国の海に生える食用の海草の存在を知らないし、生の牡蠣を食べる方法など考えてもみない。日本人が熱を通していない魚、つまり「刺身」の切り身に舌鼓を打つのを見て驚くほどなのだから。1 月 26 日にはラムフォードに行き、女学校で日本の教育をテーマに講演をした。またそこでは、伊香保温泉で何年も前に会ったことのある横浜のバート氏の友人たちに出会った。このバート氏は「芝居上手な」紳士で、旅館のテーブルにおいてなされる故エドウィン・アーノルド卿〔詩人、ジャーナリスト〕と日本人の「芸者」衆との会話のやりとりを巧みに真似してみせ、皆を喜ばせたものだ。芸者衆は英国詩人たるアーノルド卿がこの景勝地を吟ずるのを解せずに、心許ない半分つぶやくような英語で、そして小首を傾ける独特な身振りをしながら、ただただ「私には解らない」と繰り

返すばかりなのだ。奇遇ではあるが、この頃、根岸夫人の家でこのレディー・タマ・アーノルドを見かけた。レディー・タマは『アジアの光』〔仏陀を主題とする叙事詩〕並びに『世界の光』〔キリストを主題する叙事詩〕の著者〔エドウィン・アーノルド〕の未亡人で日本人だ。しかし、バート氏から教わった内容は彼女には告げなかった。講演のため次にロンドンを離れて行った先は、ヘイスティングズとセント・レオナーズ〔いずれもドーヴァー海峡を望む保養地〕だった。招待者のバグシャウ博士はプロムナード〔海岸の遊歩道〕、街の波止場、それにイースト・ヒルを案内してくれた。有名な洞窟〔セント・クレメント〕と城趾〔ヘィスティングズ〕へは1人で行った。日本協会での論文発表は2月10日に実現した（補注）（資料6）。日本を代表して山座参事官がカフェ・ベリー〔高級フランス料理店〕の晩餐に招待し、日本協会の英国官吏たちに紹介をしてくれた。大蔵省の水町氏〔水町袈裟六：大蔵官僚。後に日本銀行総裁〕、阪田総領事〔阪田重次郎〕、それに 2 人の日本大使館員も同席していた。私の論文はオランダを除くヨーロッパの全ての国に配信された。我々日本人が、米国が無理やり鎖国の扉を開かせる以前に、ヨーロッパの物事に関する考え方をオランダ人から学んでいたということがテーマだった。しかし、寛大なる英国人聴衆は、彼等が気性の激しい人種で侵略的貿易商人であるというくだりを、最も気に入ってくれたようだった。

（補注）論文発表の記録
この論文は明治42（1909）年2月10日、午後8時30分より開始されたロンドン日本協会第108回例会で発表された。論題は「天明 7（1787）年、江戸にて出版の森島中良編纂による『紅毛雑話』」である。*TRANSACTIONS AND PROCEEDINGS OF THE JAPAN SOCIETY, LONDON* Vol. VIII 1907, 1908, 1909（資料提供：モモコ・ウィリアムズ氏）に収録されており、英国人聴衆が最も気に入ったとされる部分は下記の通り。

アンゲリヤは大西洋に浮かぶ大きな島で50°から60°に広がっている。その原住民は勇猛かつ知的で、海戦の技に長け、諸芸にも熟達している〔森島の原文は「其土人剽悍〔すばしこく、あらあらしい〕にして智あり。水戦を善し、諸の技芸に長ぜり」となっている〕。その国のロンドンと呼ばれる場所では、天下一の技量をもって時計や懐中時計が生産されており、他国の追随を許さない。日本にもたらされた「*根付*」時計はすべてここで造られたものだ。ロンドンの通りを描いたオランダの絵画を見たことがあるが、看板が軒先からつり下げられ、店には商品が飾られ、日本の町屋とよく似た光景を見せている。（訳：長谷川勝政）

ロシア文学の日本人権威

阪田総領事が2月11日、紀元節の日、ランガム・ホテル〔現在のランガム・ヒルトン・ホテル：マーク・トウェインも宿泊したことのある1865年オープンの老舗ホテル。リージェント・ストリート所在〕でレセプションを開いた。それは我が国初代の神武天皇が正式に即位した日を祝う為であったが、まさにその日ロンドンに到着した新任の大使加藤高明子爵夫妻を、英国人と日本人の社交界に紹介する目的も兼ねていた。そのおよそ5週間後、日本協会もホテル・メトロポールで日本の大使夫妻との座談会を開催した。2 月のある日、

当時日本郵船にいた上谷〔上谷續〕氏と共に、アルフレッド・モーズリー夫人と 2 人の娘をアルバート・ドックに案内した。それは定期船の「平野丸」を見せるためだったが、その船は数年後、偶然だが私をインド洋経由日本に運ぶことになった〔大正 2（1913）年の帰国時のことを指す〕。その年の 4 月には、クリュー卿と縁続きと言われていたバイントン嬢と母上を、また 2 人で同じ場所に連れていった。それは日本郵船の別の汽船「賀茂丸」を見せるためだった。船上では東京外国語学校の嘗ての同僚である長谷川「二葉亭」氏〔二葉亭四迷（本名長谷川辰之助）：小説家、翻訳家。ツルゲーネフの紹介者。坪内逍遙の影響で文学者となるが、ロシア政策に興味を生涯抱き続けた。朝日新聞社ロシア特派員として、サンクトペテルブルグに赴任、結核にかかり帰路船中にて死去〕に巡り会えた。ロシア文学をロシア語から直接翻訳して日本人読者に紹介したのは彼が初めてだろう。彼はロシア滞在中に病状がかなり悪化しており、生きて故国の土を踏むためには即刻船便で帰るしかない状態だった。しかし、この著名な文学者もスエズ運河通過後まもなく亡くなった**（補注）**。2 月 16 日、正式に議会を開催するため、ウエストミンスター〔国会議事堂の正式名称はThe Palace of Westminster〕に向かう英国女王陛下の行列を目撃した。通りは大混雑で、背の低い者がいい眺めを確保するなど出来る訳もなかった。しかし、ホワイトチャペル〔正式にはホワイト・ホール。当時はチャペル・ロイヤルとして使われていた〕を見上げてみると、窓際に英国国旗と日本国旗が掲げられているのが目に入った。そこには日本の海軍士官が多数来ており、私はさっそくその場にいる士官たちに自己紹介したが、皆よろこんで良い席を譲ってくれた。しかも知らない人たちばかりではなかった。本田親民大佐〔当時は中佐〕は、20 年以上前、すなわち講道館時代から旧知の間柄であった。

（補注）「賀茂丸」における面談の様子

本田増次郎「倫敦で見た長谷川二葉亭君」『読売新聞』大正 10（1921）年 5 月 11 日

私が初めて彼と相知ったのは明治卅三年の事で、文芸の人としてでもなく政治外交に志す人としてでもなく、東京外語校の露語教授長谷川辰之助君としてであった。尤も私は当時同校の幹事と云ふやうな名義で俗務にも関係して居たから、露人教師の聘用問題などのことで君の家を訪ふて余談もやったが、格別記憶に留まって居ることもない。

忘れもせぬは十三年前の四月九日彼が終焉の場所となった加〔『日本郵船株式会社百年史』1988 によれば「賀」〕茂丸の船室を訪ふた事で、其の朝日本郵船倫敦支店の上谷續君から二葉亭君の病状を聞いたのであった。上谷君は今は大阪商船の東洋課長であるが、英仏独の書物を愛読する文芸趣味の人で、兼て二葉亭の述作に親しんで居たのだ。医者たちは一日も早く本国へ還れと欧羅巴で云ったさうだが、シベリヤ鉄道の旅行には迚も堪えられまいと云ふので、印度洋廻りにしたのだと上谷君が話した。

日本が大好きで日本の公債を澤山買込んだりした一英国夫人と其の娘さんに上谷君が加茂丸を見せると云ふので、三人の一行に加はって私はフェンチャーチ街から汽車でドックへ行った。上谷君は遠慮して二葉亭君の船室に入らなんだと記憶する。停泊中の船内は至ってヒッソリした者であったが、横臥して居た君は起き上がって私の方へ向いて、呼吸は苦しげであったが快活に談した。私は二年間医者の稽古をした事だの、肺炎カタルに罹って全治した経験だのを話し、彼は不治とは知りつつも海気のお蔭で今一度祖国の土を踏み

得ることを果敢なくも望んで居た。勿論あんな好きな煙草を全く止めて居たが、喫煙の為めに黒くなった彼の歯は、彼の脱俗的風格と共に、私の死ぬるまで忘られぬものの中に残るであらう。

英国最初の女性市長

当時暇な時は、英国のチェスをやって大いに楽しんだものが、チェスは習得するのも、普通の相手に勝つのも造作ないことが解った。なぜなら、日本の「将棋」に似ているし、歩の種類も動かし方も将棋ほど複雑ではないからだ。「チェス」という単語がペルシャ語の「将軍」を意味する言葉から出ているとすれば、語源学者が信じているように、古代の中国人が同じ起源のものから「将棋」を作り出した可能性が高い。というのは将棋の 1 字目である「将」という字は「将軍」を意味しているからだ。3 月の最初の週〔正確には第 2 週〕、既に触れたように、イートンで数日間〔3 月 8 日から 10 日〕を過ごした。授業中の教室、伝統の懲罰用の鞭と椅子、幻燈を使った歴史の授業、様々なゲームやスポーツ、校内店舗、中庭での点呼の様子などを見学し、最後は、ある高名な貴族の年若い息子が待ちかまえている部屋で、一緒にハイティー〔夕方の軽食〕を頂いた。1、2 年後、この興味深い訪問の報告を書き、東京で日本語により出版した〔『イートン学校及其校風』明治 43（1910）年 4 月、内外出版協会〕。この後すぐ、もう一つ別の有名校を訪問したが、これはハイ・ワイコンベ〔ロンドン北西 45 キロ〕にあるワイコンベ・アビー・スクールだった。この学校の校長であるドーブ嬢は、英連邦で最初の女性市長になった人物だった。フランス語の教室では少女たちが、発声器官の位置と動きを見るために、丸くて小さな鏡を使っているのに気付いた。自分以外に男性がいないところで、百人の女性教師や少女たちと昼食を共に食べ午後のお茶を喫したのは、人生において特異な経験だった。その 2 週間後にはドーブ教授の生徒たちに、日本をテーマに講義を持った。ロンドンに戻る道すがら、バックス・カウンティ病院を見学したが、時代の先端を行く手術室の完成度の高さには驚かされた。ある晩、バイントン夫人の「我が家」では、その客人たちに日本協会で私が発表した論文を再読するよう頼まれた。そしてそこで、アーサー・フィッツジェラルド・キンナード卿〔第 11 代キンナード卿：イートン、ケンブリッジ大学卒。スポーツ万能で、とくにラグビーで活躍。YWCA やラグビー協会の会長を長年に亘りつとめた〕夫妻と知己になった。私のロンドン滞在中、常にクリスチャンらしい友情を示してくれた。このスコットランド人の貴族は銀行家で日露戦争の時には戦争を資金面で支えてくれたのだ。日本の財界人にも知り合いがあった。

ロンドンでは受難劇は禁止

3 月 30 日、キンナード男爵からもらった入館証を携帯して上院を訪れたが、予期せぬことに、議会のすぐ外で胸を打つ光景を目撃することになった。それは婦人参政権運動家が力ずくで首相に談判するため下院を急襲したところだった。大通りでは雪が溶けており、この勇敢な女性たちの服や髪は、警官の乗った馬の蹄が蹴上げるはねで泥だらけだった。当時の婦人参政権運動家の作戦は、逮捕され、収監されることで、ハンガーストライキを打ち、世間の同情を買うということだと言われていた。一方警察側では、挑発したり、口やかましく罵ったりはするが、逮捕はしなかった。馬の後部を上手く使って、入口の階段に突進する輩を寄せ付けないのだ。恒例のオックスフォード、ケンブリッジ対抗レガッタが、その年は、日本の休日〔神武天皇祭（崩御日）〕でもある 4 月 3 日に開催された。ハン

マースミス橋から眺めていたのだが、レースそのものより印象的だったのは、土手で何時間も一緒に待つ観衆の素直な辛抱強さだった。ブツブツも言わず、物音一つたてず、静かにパイプをくゆらせ、時折「懐中の小瓶」を口に持っていくだけなのである。絶好の瞬間が続くのはほんの数分だけなのに、その到来を待つのである。オーバーアマガウ〔ドイツ、バイエルン地方の小村〕で上演される前回の受難劇〔明治 33（1900）年。10 年ごとに行われる〕は見ることが出来なかったので、ロンドンでその模倣劇でも見ることが出来ないか機会を伺っていたが、今回の公演は広く喧伝されていることもあり、とにかく切符売り場に行ってみた。ところがチェンバレン卿〔ジョゼフ・チェンバレン：英国の政治家。バルフォア内閣等歴代の内閣で閣僚をつとめる。ノーベル平和賞受賞〕が英国におけるかかる上演をどうしても許可しないのだと言われた。あの有名な受難劇が次にバイエルンで開かれる時、一体私はどこにいるのだろうか。イースターの数日間の休日は、クロイドンのバロウズ家に泊まり、そこからロンドンへ戻るついでに、クリスタル・パレス〔総ガラス張りの博覧会施設〕に立ち寄ったが、そこで働く男や女たちが、ハーモニカの音楽に合わせて皆で踊っているのを見た。「我が家」ロンドンではメンペス嬢の家に招かれたが、これは彼女の父が造った「日本家屋」を見に来るようにということだった。部屋中に日本の珍品、装飾品、服飾品が所狭しと並べられており、住み心地の良い家というよりは、むしろ芸術家のアトリエといった風だった。

ロンドンのドイツ人婦人参政権論者

明治 42（1909）年 4 月、陸軍中佐モリエール〔ガイ・デュ・モリエール〕による「英国人の家庭」〔ウインダムズ劇場、1 月 27 日初演。英国人が誇りにしている家庭平和の夢が、敵の砲撃によって破られ、最後は英国軍の奮戦で国を防衛するという筋立ての戯曲〕のロンドン初演を見た。ちょうどその頃は、軍事的衝突を避けようとする政治的努力の真っ最中ではあったが、一般的にドイツの侵略は避けられないという強い底流があったように思う。ロンドンで出席した婦人参政権反対の会合でさえ、観衆の中でもとりわけドイツの婦人参政権運動家が、英国人の仲間に比して激しいヤジを飛ばしていた。アイルランドへ行った時も、「独自ルール」を主張するカトリックたちが、独立の議会を復興し、独立の軍隊を維持することを強く主張するのを聞いたが、不倶戴天の敵に英国を売るほど英国に忠誠心を示さないアイルランド人がいるなど、とても信じられなかった。4 月 21 日、汽船「ウースター」に乗船してホーリーヘッド〔アングルシー島の港町。ここからダブリンへの直行便が出る〕から出航し、ダブリンとベルファストで楽しい 10 日間弱を過ごして、エデンデリー〔ダブリンの西 50 キロの市場町〕経由キングスタウンからロンドンに戻った。アイルランドの首都〔ダブリン〕では R・S・ロングワース・デイムズ夫妻が寛大なもてなしをしてくれた。講演した場所はというと、クライスト・チャーチ大聖堂の参事会会場、そのクリプト〔地下聖堂〕では、マリー・ルイーズ・クリスチャン皇女〔ビクトリア女王の孫娘〕に紹介された。そして、アレキサンドラ大学〔女子大学〕やハイバーニアン聖書協会の朝食会でも講演をした。ウエリントン卿の生家、城〔ダブリン城〕、古い議会堂〔レンスター議事堂〕はダブリンで最も印象的な場所だった。しかしダブリンでは、通りの名前が依然として英語とアイルランド語で併記されており、またカトリックと英国国教会の影響が拮抗している状態というのは、国家の統一に馴れた者にとっては、無論心地よいとはいえなかった。

ダブリンとベルファスト

ベルファストではアメリカの都市にいるような錯覚を覚えた。至るところでビルが取り壊され、また新たに建てられている。そして人々はこれが本当のビジネスだと言わんばかりに、甲斐甲斐しく働いている。その人口の多くがスコットランド人のプロテスタントであるということが、その理由だろう。これほどの至近距離でも日本人にはウェールズ人と英国人との区別すら解らないのだが、いずれにせよ、これだけ多くの作家や有名人が英国の片隅であるエメラルド・アイル〔アイルランドの別称〕から輩出したというのは驚くべきことだ。ベルファストではロビンソン聖堂参事会長の世話になった。ある日クイーンズ・カレッジを案内してくれたが、そこでは我が W・J・アストン氏の学友であるハミルトン副学長に紹介された。工科大学、ヨーク・ストリートのリンネル工場はウースター〔北アイルランドの地方名〕の起業家精神を如実に示していた。帰途はダブリン経由、はるばるエデンデリーまで汽車で行ったが、デイムズ夫妻が同行してくれ、親戚のキャプテン・デイムズに紹介された。そして 7 マイル〔12 キロ〕離れたグリーンヒルにある魅力的なデイムズ邸までドライブをした。その日の夕食後、琥珀のパイプをプレゼントされ、ウイスキー・ソーダを傾けながらの葉巻タバコの吸い方を教えてもらった。この土産は今でも大切にしてはいるが、タバコの吸い方は結局マスター出来なかった。このことを、この親愛なる友に告白しなければならない。デイムズ邸の近所では典型的なアイルランド農民の家を見たが、天下周知のこの国の貧困はその歴史によるところが大きいという話しだった。ロンドンに戻った日は 4 月 30 日だったが、オランダのウィルフェルミナ女王に皇女が生まれた日であり、特に記憶に残っている。

私の分身、ロンドンに残る

英国人は率直な発言をすることで有名だが、通常は注意深いので、社会的また国際的関係において不用意な発言をして他人の感情を傷つけるようなことはしない。ところが、私のロンドン滞在中、このルールには例外のあることが見事に証明された。帝国海軍の本田大佐〔当時は中佐〕がある法律家の邸に世話になっていた時で、喫煙室での我々の会話が『肉弾』に転じた。そしてこの主人が「あの英語は本当にひどいものだ！」と発言したのだ。私はこの意見を別に何とも思わなかった。なぜなら英語の水準からすれば自分の翻訳が文学的資質に欠けていることは理解していたからだ。ところがこの日本の友人は即座に、そんな翻訳をしたのは一体誰なんだ、とのたまわったのだ。おそらくそれが両者に親切な解決策だったのだろう。しかし、この正直な紳士に罰の悪い思いをさせたのは間違いなかった。こんな時はどうするのが最善なのだろうか。また、英国製品を「メイド・イン・ジャーマニー」と区別出来るのは、英国人が適度な報酬を得て行う注意深い仕事によるものだが、1 つだけ、安物のサービスに頼ったため悲惨な結末になった例がある。歯の中の 1 本が詰め物をしなければならなくなり、その準備のために明らかに必要以上に大きな穴が開けられていた。不思議に痛みのない 2 週間が過ぎると、奥歯が 2 つに割れてしまった。こうなってはもはや、痛みに苦悶しながら取り除くしか方法はなかった。唯一の救いは自分の肉体の一部が、どこかは知らないが尊敬して止まない国の土に、紛うことなく埋められたという満足感が得られたことだった。

聖霊降臨祭翌日のテムズ河畔につどう人々

ロンドンの 5 月は日本の桜の季節である４月に似ている。長い冬が開け、心身ともにリフレッシュするため、どうしても戸外に出たい気分になる。先ず、三井物産のテニスクラブの人たちに合流し、ウエスト・エンド・レーン・コートでテニスをしたが、どちらかと言えば、屋外での紅茶を味わう方に身が入ってしまった。また、ダービーの日には、有名なレースや馬券買いの様子を見にエプソムに出かけた。両陛下並びにプリンス・オブ・ウェールズ〔皇太子：後のジョージ 5 世〕も臨席されていた。その場では女性参政権運動家が王室の馬が走るコースに飛び込んで死亡するという悲劇があった。その月に見た第 3 番目の興味深い光景は、オリンピア〔現在のアールズ・コート・オリンピア博覧会センター。1920 年にはボーイスカウトの第１回ジャンボリーが開かれた場所としても知られる〕での軍事競技だった〔1880 年イズリントンで始まったが、次第に規模を拡大し、1906 年からはオリンピアに場所を移していた〕。馬に乗ってのレスリング、アラブのテント張り、スウェーデン式教練が最も面白かった。テムズ川では 2 度に亘りボート漕ぎに挑戦した。その 2 回目は聖霊降臨祭〔キリストが復活して 50 日後、すなわち第 7 日曜日に聖霊が降臨したことを記念する日〕の翌日に当たっており、川面や川縁につどう陽気な人々や、川面や河岸で男女が戯れる光景は、ロマンティックで一幅の英国田園風景を見るようだった。梨本宮ご夫妻〔守正（もりまさ）・伊都子（いつこ）〕に敬意を表して開かれた園遊会〔6 月 9 日、ロンドン日本協会主催〕では、多くの興味深い日本人、英国人の知人に会った。お二人は 6 月初旬、欧州から英国に回って来られていた〔守正のフランス陸軍留学終了に合わせ、伊都子が渡欧し、王室外交を展開した。伊都子はスペイン、イタリア、オーストリア・ロシア、ドイツ、フランスを歴訪して英国に入った〕。チャーチ・ページェントの行列〔歴史的名場面を見せるイベント〕は京都の祇園祭りを思い起こさせた。これは外国から海に囲まれた我が国にやって来た人々を惹き付ける数少ない歴史絵巻の 1 つだ。日本は今でも、自国のいにしえの時代風俗を展覧しても、それだけの価値があると誇っていいだろう。しかし一方で、マダム・タッソーの名を不滅とした蝋人形〔当時は東郷平八郎大将、乃木希典大将の人形もあった〕と較べると、日本は 3 月の祭りで使う、おもちゃの「雛人形」しか持ち合わせていない。

カンタベリーとローマ街道

広報活動の立ち上げに従事するため、7 月の終わりまでにニューヨークに戻るよう要請があったので、大西洋の東側を離れる前に、出来るだけ多くの収穫を得ておかなければならなかった。ハーロウ〔ロンドン北西郊外〕では、有名な学校〔ハーロウ：イートンと並び有名なパブリックスクール〕に行ったばかりでなく、元横浜にいたことのあるチャールズ・V・セール夫妻の家を訪れ、造営中の日本庭園を見た。庭師をはじめ、石も木も、その大部分を極東からはるばる取り寄せていた。ダービー〔ノッティンガム西方 25 キロ〕では大聴衆を前に講演をした。そこでは中国のバニスター助祭長に会った。ハスルメア〔ロンドン南西 90 キロ〕の庭園で開かれた会合ではロバート・ハンター卿〔ナショナル・トラストの創設者〕の娘のハンター嬢に会った。ハンター卿は日本のサンスクリット学者でケンブリッジ大学の教授である高楠順次郎（たかくす）氏〔河口慧海（えかい）と並ぶ仏教学者〕を知っていた。ホーシャム〔ロンドン南方 80 キロ〕に論文を読むため行った時は、シェリー〔ロマン派の詩人〕の家の絵葉書を記念品にした。お別れに、イプスウィッチの大聖堂参事会員であるピゴット夫妻を訪ねた後、ソールズベリー侯爵の大邸宅であるハットフィールド・ハウス〔ロンドン北方 40 キロのハットフィールドにある。エリザベス 1 世が子供時代を過ごしたことで知

られる。本田は床次竹二郎に同道して参観した〕に行った。エリザベス朝時代に造られた物が残されており、非常に感銘を受けた。ボストンのウオルター・B・ハーディー夫妻はロンドンに住んでいることが多く、その友情と親切は特に身にしみた。京都にある同志社の故新島襄（じょう）博士〔宗教家、教育者。同志社英学校（後の同志社大学）を創設〕が、鎖国の時代に米国に密航し世話になったのが叔父のハーディー氏だったという、日本との間接的な関係がその感を深くした要因だった。数日間をカンタベリーで過ごし、粋を尽くした建築群や文学的思い出〔チョーサーの『カンタベリー物語』が本田の念頭にある〕は言うに及ばず、ローマ街道がそこに造られた時代に思いを馳せた。また、上海のクーパー教授と知己になったのも、そこでのことだった。

ヨーロッパ大陸に向かう

ロンドンに戻るとロンドン市長公邸〔マンション・ハウス：この邸の中にあるエジプト・ホールで多くの歴史的行事が行われた〕で、市長の司会で私が論文を読み上げた。この壁の内側で多くの重要な行事が行われたことを思うと、その時の情景が脳裏に浮かぶようだった。再訪したブライトンからの帰り、車中で朝鮮のウィアー博士に会い、極東問題について長時間に亘り話をした。7 月 5 日は夜、船でニューヘヴン〔ブライトンの東にある港町〕を発ち、翌朝早くディエップ経由パリに到着した。帝国海軍の波多野中佐〔波多野貞夫。フランス駐在〕とクック社〔旅行代理店「トーマス・クック・アンド・サン社」、当時英国からヨーロッパ諸国への団体旅行を取り扱っていた〕の社員たちが、ルーブル美術館、オペラ座、ベルサイユ宮殿を含むフランスの首都の主だった場所を 3 日間で見られるよう取りはからってくれた。一行が昼食をとったのはベルサイユにあるホテル・ドゥ・フランス、普仏戦争の時ビスマルクが滞在したところだ。ベルリンへは夜行列車で行ったが、天気に恵まれた朝、ケルンやライン川の景色を眺め、夜、ドイツ皇帝の都ベルリンの新開地であるアイゼナハ通りの個人宅に泊まった。車中では、いわば過去の世界からやって来たような人物を偶然目撃した。それは年老いたユダヤ人で、額に奇妙なお守りのようなものをしっかりと付けて、うす気味悪く祈りを捧げていた。中にはあざける人もいて、この老人も悪態をつき返しているようだった。相も変わらずの人種や宗教の反目である。驚かされたのは、女性たちが車中で話すドイツ語が、多分ある特定の地方のものだろうが、思ったよりも柔らかで、心地よく聞こえたということだ。田舎の人たちは洗練は欠いているにしても、高慢な衒学をろうする民族にも、侵略的な帝国主義者の民族にも、一切見えなかった。

ニューヨークに先立って、ベルリンへ

帝国海軍の雨宮軍医〔雨宮量七郎。ドイツ駐在〕と東京外国語学校の田代教授〔田代光雄〕が、私の滞在期間が短かったにもかかわらず、ベルリン滞在を有益で楽しいものにしてくれた。5 日間、娯楽や教養にかかわる代表的な場所を親しく見て回った。それは植物園〔郊外ダーレム所在〕、国立美術館〔現在の旧ナショナル・ギャラリー〕、宮殿〔シャルロッテンブルク〕、フリードリッヒ博物館〔現在のボーデ博物館〕、ハレンゼー〔氷河湖〕、クロイツベルク〔トルコ人街〕、民族博物館〔現在のダーレム美術館〕、ドーム〔ドイツ大聖堂〕、カフェ・バウアーとカフェ・ビクトリア〔共に第２次世界大戦前、ウンター・デン・リンデン（「菩提樹の下」の意）にあった当時流行のカフェ〕、それにマウゾレウム〔皇族

の霊廟〕だ。米国ではフィラデルフィアの人は動きが鈍いとニューヨーカーがからかうのをよく聞いたが、そのフィラデルフィアの人でさえ、英国人のその好みの余りに保守的な点には異存がないだろう。しかし、ベルリンでは当時の進歩的な米国でも知られていない新機軸を 2 つ目の当たりにした。それは、コインを料金差し入れ口に入れると、それに反応して中央の給湯設備からパイプを通してお湯が出てくる仕組みと、もう 1 つはスケートをして音楽が楽しめる「アイス・パレス」というものだ。アイス・パレスでは、氷を張った広々としたステージの周囲と 2 階で、夏の夜にも涼しい空気を吸いながら、ワインを飲んだり食べたりすることが出来るのだ。私の見る限り、ドイツは都市計画やその他の近代的な改良の面では、他の国に勝っていると思う。しかし美術の分野では、ベルリンは巨匠の作品がほとんどなく、ロンドンやパリで展示されている本物を見た後では、そんな模倣作品に感心出来るはずもなかった。7 月 14 日、再度フランスの首都に入ったが、革命記念日〔パリ祭〕で、陽気な大勢の人々が田舎からパリに押し寄せて来ていた。日中、ノートルダム寺院、パンテオンなどを見学し、夜はパリジャンがこの記念すべき休日を如何に楽しむのか見るために、ムーランルージュに出かけた。通りには大勢の人々が出て踊っていたが、酔っぱらったり、騒動を起こしたりするような光景はまったく見られなかった。一方ベルリンでは、酔っぱらいや騒動は普通の日でもよく目にする光景だった。

戦闘態勢にあるフランスと英国

パリの日本大使館付き武官に、ナポレオン・ボナパルト配下たるフランス男児は泥酔する勇気さえ失ってしまったのかと、話を向けてみたが、その武官の答えは、永く文明に浴した結果、適度に酒を飲んで人生を楽しむ秘訣を知り尽くしているから、泥酔などしないのだという答えだった。同じ日、こうも言った。閲兵式において、最高指揮官がフランス共和国大統領に敬礼中、誤って落馬してしまった。もしこんな不祥事が日本で起こったら、「腹切りだ」という怒りの要求が大衆から起こるだろう。ところが、人の世の出来事をより広い視野で判断する国民の場合、肩をすくめるだけで、それを不問に付すのだと。この日本の武官は他のフランス駐在武官と同じく、戦いの条件が同じであれば、フランス軍はドイツ皇帝軍を打ち破るが、フランス軍はアルサス、ロレーヌ奪回だけのために、資金や人命を無駄使いすることは決してないだろうという見解だった。7 月 15 日、ロンドンに戻り、9 日後「モーリタニア号」〔1915 年ドイツの無制限潜水艦作戦の犠牲となったルシタニア号の姉妹船〕で出航する前、短艇による遊覧航海に参加する栄に浴した。これはウィンザーから回ってきた両殿下〔久邇宮邦彦（くにのみやくによし）・梨本宮守正〕が主催するパーティーだった。現在政友会に属する床次（とこなみ）竹次郎氏〔政治家：帝国議会議員、枢密顧問官〕、加藤寛治（ひろはる）海軍大将〔駐英国海軍付武官〕も加わっていた。ハーディー氏のスネッティシャム〔ノフォーク州〕にある田舎家を訪問する目的だったが、そこでハーディー夫妻はサンドリンガム・ハウス〔英王室メンバーがクリスマスから翌年の 2 月までを過ごすのが恒例となっている〕を親切に案内してくれた。そして私の英国滞在の最後は、「北野丸」〔日本郵船の客船。大正 11（1922）年、日本講演に向かうアインシュタインがこの船上でノーベル賞受賞の報せを受けたことでも知られる〕でのクルーズで打ち上げとなった。これはティルベリーからサウスエンドまでの行程で英国艦隊の堂々たる隊列を見るもので、主賓は殿下たち、加藤大使、それに（故）山座参事官で、日本郵船会社のロンドン支店が主催したものだった。

国際政治評論家

7 月 29 日の夜半ニューヨーク港に到着、翌朝早くに上陸し高峰譲吉博士や友人たちから米国への帰還についての歓迎を受けた。当日、この著名な博士は私に敬意を表して、日本クラブで晩餐をご馳走してくれた。教職についてから 30 年、私は国際政治評論家として新しい人生を歩み始めた。それは東洋と西洋全般の相互理解、とりわけ日米の良き相互理解を増進する仕事であった。大正元（1912）年の終わりまで、私はニューヨークでこの仕事に携わった。米国の新聞や雑誌に手記や記事を送り、英字誌を発行し、様々な会合で日本問題や中国問題を論じた。この「啓蒙活動」の展開は、西欧諸国間に於けると同様、太平洋を隔てた両国に於いて、何年にも亘って行われてきたものであるが、寛大なアメリカの友人たちは我々のこの努力を高く評価してくれ、またヨーロッパ、エジプト、インドを初めとして世界中から反響があり投書も寄せられた。また、アメリカ合衆国国民の真の精神や理想をとらえようとすると、政党の方針や対立する利害関係者が存在するため、往々にして外国人には焦点がぼやけて写るのだが、我々にはそれを直接知る機会が与えられたので、喜びは一層確かなものとなった。こういった大変結構な恩恵に預かれた一方、幾らかは不愉快なことにも直面せざるを得なかった。もっとも、それは最終的には解消する取るに足りない不快感でしかなかったが。この不快感というのは、外国にいるジャーナリストが置かれる独特の状況に伴うものであり、海外にいて母国に関する誤解や誤報を正し公平を図ろうとした場合に、必要な国内情報が十分には掌握し切れておらず、かつ両国の友好関係に役に立つと母国の「出資者」が考えていることを、自分が代弁すべきだという義務感を持つ時に生じるものだ。

国家的見方と国際的見方

一例を述べよう。身分の高い人々の殺害を企てたとされる社会主義者の死刑執行〔具体的には幸徳事件（大逆事件）を指している。この事件で天皇暗殺を企てたとして、幸徳秋水以下 12 名が死刑となった〕に関して、アメリカ人の心理を私ほどにも理解していない人々の意向は無視し、自分の責任で意見を述べたとしよう。それでもその時私が出来ることといえば、死刑を執行された人々に哀悼の意を表するのが関の山である。あえて当時の日本政府がとった措置を擁護し、その結果、死刑囚に同情を寄せる外国人ジャーナリストや日本人の厳しい批判（この批判には必ずしも十分な根拠が無い訳ではない）に身を晒すことは避けていただろう。もう 1 つ例を挙げれば十分だろう。『ノース・アメリカン・レビュー』に、米国、中国、それに日本の外交政策について、比較研究を載せたことがある（補注）。その中で、日本と中国の問題に関するローズヴェルト式対処法は、発作的に強気と弱気が入り交じる不安定なものだと、おこがましくも喝破したのだ。私のこの発言は決して国際的な礼儀作法から逸脱してはいない。しかも、類まれな前大統領の度量の広さには全幅の信頼をおいての発言であるし、米国国民にしても、外国人から自分たちがどう見られているか解って、感情を損なうよりはむしろそれを楽しんだはずのものなのである。しかし、何千マイルも離れた所でこの論文を読んだ日本人は次のように結論づけた。すなわち、日本はローズヴェルト大佐に借りがある。ポーツマスでの平和交渉をはじめ、他でも色々と世話になった。将来彼がまたワシントンで国政の指揮をとることになるかもしれない。それに何といっても大国の国民に崇拝されている人物である。だから、彼や彼の行動を非難

するのは日本人としては賢明ではないし、恩知らずのそしりを免れないと。そんな訳で、ばかげた発言は二度と繰り返すなという抗議を、東京から文書で受けることになった。しかし私は、今日に至るまで自分が馬鹿なことをしたとは思っていない。

（補注）「デラックスな外交」
『ノース・アメリカン・レビュー』1910 年 11 月号に「デラックスな外交」（“DIPLOMACY DE LUXE”）と題して掲載された。ローズヴェルトを評した部分は当該論文の冒頭の部分に当たり、それは下記の通りである。

ある日本の国際法学者が、ローズヴェルト大佐を「偉大だが戦争好きな危険人物」であると評した。そのため米国の報道機関で、好意的であるか否かは別として、元大統領と教授の国、日本の双方をコメントする機会が増えたのは確かだ。この「棍棒外交」の提唱者の人気は世界的なものであるから、たとえ彼を非難する場合も、その不思議な特質に対する一種の賛辞となってしまう程だ。無論、寺尾博士〔寺尾亨：帝国大学教授、国際法学者。対露強硬論を唱えた 7 博士の 1 人〕だけがローズヴェルト大佐の個性を批判した唯一の日本人教授ではない。東京帝国大学の哲学教授である井上博士〔井上哲次郎：帝国大学教授、哲学者。外山正一、矢田部良吉と共に「新体詩抄」を出したことでも知られる〕も、日本の人道教育会において、大統領が狩りをしにアフリカへ出かけたことを非難した。確かに、この獰猛なアメリカ人によって虐殺された動物の立場からすれば、ローズヴェルト大佐は「危険で戦争好き」どころの騒ぎでは済まされないだろう。必要からでもなく、また実用的科学的目的からでもなく、第一義的にいえば単に娯楽のために殺すという、そして哀れな犠牲者の角と蹄を自慢の戦利品にするという、このやり方が、一体、世界平和の実力ある調停者にして西洋文明世界で最も定評ある人物のなすべき価値ある仕業といえようか？

大佐の友人や敵対者が、過去にどう語り、また将来どう評しようが、ローズヴェルト大佐が、米国が持つ大望、可能性、嗜好、要求を体現した典型的な米国人だということは誰も否定出来ない。そうした典型的な米国人として、加えて国際的な政治家として、特定産業の声高の利益代弁者や猛獣狩りのハンターの場合と較べた場合、彼の発言と行動が我々日本人に与える影響はより直接的なのである。それが日本と極東の福祉に関係する以上、彼の外交の特質を考量するのは、我々の権利であり特権でもあるのだ。

学校問題〔サンフランシスコ教育委員会が日本人等のアジア人学童の公立校からの排除を決定したこと〕と労働問題〔急増した日本人移民に対する排斥運動が起こったこと〕によって、アメリカ合衆国と日本との伝統的な友好関係が危機に瀕すると、ローズヴェルト大統領は、カリフォルニアの人々に対し条約義務を遵守するように迫った。反抗している州を連邦政府の意志に従わせるために、必要とあれば武力にも訴えるという姿勢をとって見せたのだ。州の独立性という古い主義を支持する人々にしてみれば、彼等の最高指導者が危険で戦争好きな人物に思えたに違いない。一方日本にとっては、この筋金入りのダニエル〔イスラエルの民がバビロン捕囚となった時、激しい迫害にも負けずヤハウェイの信仰を失わなかった意志の強い貴族〕の再来はどんなに感謝してもしきれるものではなかった。ところがこの不幸な状況がより悪化してからのことだったが、彼は日本の移民問題を協議する席で、他国の人物に対し、日本が武装侵略をする懸念もあり得るとの本心を表明したのだ。また、既に大統領を辞めてからのことだったが、アフリカに出発する直前、米国も州政府も国籍や人種の如何を問わず労働者を排除する統治権を持っており、したがって、その権利を遂行するための武力は持つべきである、と世界に向けて発言したのだ。こうなると、日本はローズヴェルト氏が、本当に平和と友情に厚い人物かどうか疑い始めた。しかし、彼が終始目指していたのは、より強力な中央集権、より強大な軍事力であって、

他国から見ても、そこに真の政治的手腕を認めるだけなのだ。しかし、正義を行使する名目であれ、防衛の名目であれ、その目的遂行の対象に選定された国にしてみれば、このサーカス的外交を幾ばくか批判的に見ない訳にはいかない。

「たとえこの精力絶倫の元大統領が戦争好きだとしても、それは軍人としての情熱の中に、無責任な学生気分が混ざっているだけだ」という意見もあれば、「人々が愛するのは、平和をもたらすローズヴェルとではなく、武人としてのローズヴェルトだ」という批評家もいる。そうであるなら、この米国代表の、言い換えるなら米国の外交政策の特長は、場当たり的に敵意や軍人的厳しさが出現するという点にある、と言っても良いのではないか？さらに言えば、場当たり的に度量が狭く無配慮な政策を採用するということは、広い度量によるリベラルで利他的な態度によって弱小国に生まれた好ましい感情をも破壊してしまう傾向にあるといってもよい。日本を動かしている外交------すなわち必要に迫られた外交と対比して考えるなら、この米国独特の外交スタイルを、他に良い表現がないので、「デラックスな外交」と名付けてみた。勿論、自国の利益はさほど危険にさらさず、他国民の喜怒哀楽を自己の自由意志で操れる国は羨ましい限りではある。しかし同時に、「相互依存」でなく、真の意味で「独立独行」出来る米国のような国家が、多数存在していないことには感謝すべきだろう。（訳：長谷川勝政）

経済平和会議

ニューヨークからスイスのベルンへの旅は、カーネギー万国平和財団〔政治部と経済部からなる〕の経済部による最初の会議に出席する日本代表の手助けをするためだった。そして、ドイツ、フランス、英国への 2 回目の訪問は、同時にベルギー、オランダ、スコットランドの観光も含んでいたが、これら全てが、私を国際人に仕立て上げる上で大きな手助けとなった。この会議にはロシアと中国が代表を送り込まなかったが、ここでは明かす必要はないが、ある理由で代表団の派遣を要請されなかったのだ。将来、世界大戦〔第 1 次世界大戦〕の平和会議が開かれるとすれば〔本田のこの文章が掲載されたのは大正 6（1917）年 2 月 24 日であり、休戦までおよそ 1 年 8 ヶ月を残している〕、あらゆる文明国が参加し、人類の運命を導くより開明的な方法で、恒久的な平和の礎が築かれることが望まれる。奇妙だったのは、平和について話をするためにスイスの首都に来たにもかかわらず、初会合前日の晩に開かれた歓迎会の席上で、ドイツやオーストリアの学者ならいざ知らず、イタリアの政治学者と経済学者が平和財団の運営方針に警鐘を鳴らしたことだった。財団が無条件に戦争を非難する前提の下で会議を運営するのなら、われわれはここに留まる積もりはないと言い放ったのだ。この奇妙な態度はイタリア人の一般的性格と必ずしも相容れない訳ではないが、ほんの数週間後、つまり明治 44（1911）年 9 月にイタリアとトルコの間で戦端〔トリポリ戦争〕が開かれたことで、その理由が明らかになった。また、このヨーロッパの旅で次のような問題が心に浮かんできた。それはヨーロッパのラテン連合〔フランス、ベルギー、スイス、イタリア〕の将来と、中立的立場にある小国の将来である。ラテン連合は、その国土がイギリスとドイツの影響下にある上、その内の一国〔イタリア〕は三国同盟〔日独伊三国同盟ではなく、ドイツ、オーストリア、イタリア間で結ばれた同盟〕に加盟し、また他の一国〔フランス〕はドイツ皇帝に対抗している。中立の小国はと言えば、これら大国の真っ直中にあり、戦争を避けようと如何に努力しても、その力には限界がある。

革命に苦しむ中国

大正元（1912）年 12 月、水泡に帰した平和会議がロンドンで開催された。それは第 1 次バルカン戦争を集結させるのが目的だったが〔12 月 16 日より開催。当初バルカン諸国とトルコの主張は真っ向から対立するが、翌年 1 月 22 日トルコ議会が譲歩を決定、急遽妥結機運となる。ところがその翌日トルコ内でクーデターが勃発、和平交渉は頓挫した〕、その会議に私はオブザーバーとして個人の資格で参加した。一東洋人として個人的に興味を持っていたトルコの扱いがどうなるのか見ておきたかったからである。ところが、トルコ人とも、またバルカン半島のトルコに敵対する側の人々とも知己になるにつけ、またトルコ人がバルカン諸国から阻害された真の原因が英国の支援にある〔ロシアがバルカン半島に居住するスラブ民族の独立を支援したのに対し、トルコはイギリスの援助を受けてこれに対抗し、独立を妨げた。そのためトルコがバルカン諸国から疎まれたことを指す〕ということを知るにつけ、前々から心に抱いていた、日本がイスラム教徒と親密になり、トルコが西洋人から着せられた汚名〔「腐敗した、崩壊しつつある、老衰した、金のないトルコ」というのが当時の西洋諸国が抱くトルコのイメージだった〕を晴らす手助けをするという考えも一気に風に吹き飛んでしまった。この 3 回目の英国訪問〔この時ロンドンで、ストックホルム・オリンピックからの帰路にあった嘉納治五郎と共にハーバート・トゥリー主演の「ドレーク」を観劇している〕を終え、インド洋経由で日本に戻ったが、このルートに沿う地域で英国の影響力が確立されているのを見、我が国の島国という地理的好条件が現在の我が国の存立を可能にしているという事実を今更ながら実感した。それから数週間東京で休息をとって、再び中国本土、満州、朝鮮の旅に出た。たまたま第二革命勃発前の上海と北京に行った訳だ。幸運にも前外務大臣の加藤子爵の一行と一緒だったこともあり**（補注）**、中国の反政府勢力のキャンプで多くの興味深い人物〔袁世凱、孫文など〕に出会い、時事問題について喧喧諤諤たる議論がなされるのを耳にし、また多くの名所旧跡も訪ねた。しかし、このある日本人コスモポリタンの物語も相当長く続いたので、寛大な読者にあってもそろそろ退屈されたことだろう。明治 42（1909）年 8 月以降の私の経験についてはまた別の機会に、新しいタイトルの下に述べなければなるまい。

（補注）加藤高明との交流

加藤高明伯伝編纂委員会編『加藤高明（上巻）』原書房 昭和 45（1970）年
第 12 編第 1 章（5）再び支那視察へ（内政不干渉主義の思想発表）

伯の支那視察は、毫(わずか)も消暇の企てゞは無く、其所(そのところ)には政治・外交上の理由があり、而してその影響に至つては、予期以上、遙に重大であつた。大正二年四月二十五日に東京を立つて、六月七日に帰京した月余の支那旅行は、其結果を数年の後まで伝へるのであつた。

対支問題の解決！之が、当時の伯の外交的宿願の殆んど全部を占領して居た真相は、後に日支交渉篇が審(つまび)らかに語る。又、グレイ外相との諒解、桂公への勧告、牧野伯への引継の次第も、其篇で明かとなる。実に、日本が当面して居る内・外両政策上の最大問題は、対支問題の解決に外ならないとは、伯の確信して疑はなかつた所である。伯の同志会入党の条件の一つが、『日支懸案の解決』を同党政策の第一の看板に掲げ、党の名を賭して、之が解決を期する点に在つたのは云ふ迄も無い。

伯は、自分の抱負と、また一の責任からも、支那の実状を一見する必要を感じた。明治四十四年十月の革命は、支那の政情を一変し、伯の十二年前の知識（三十二年の漫遊）は、完全に過去のものと化して了つたからである。

（注）------明治四十五年一月、革命派の首領孫文が臨時大総統に就任し、二月には、袁世凱氏が仮政府を組織して大総統に就任した。南北は、戦争と妥協とを繰返し、大正二

年四月、共和政府は議院制を布いたが事実効なく、而して孫・袁の対抗は愈々明白となり、此間、列国の承認問題、並びに二億五千万円の五国借款問題が絡まつて、政情は乱麻の混迷を呈した。

伯が上海に着いたのは四月三十一日であつた。それから、九江・南京・漢口・長沙を経由して、五月十七日に北京に至り、滞留一週間の後、山東省に向かひ、済南・青島を視察し、再び上海に戻つた。『この間、伯に対する諸所の歓迎は非常なもので、袁世凱の如きは、特別列車を仕立てゝ出迎へ、北京に着くと直ちに自邸に招待し、午餐会を開いて応待した程である』と、随行者の本田増次郎氏は語つてゐる。また北京滞在中は、袁世凱氏以外、時の各国務員に面接懇談し、上海では、南方の重鎮たる孫文、黄興等の諸氏と、おのおの二回までも会見を繰返した。而して是等の会見の主題が、日支懸案の解決にあつた事は言う迄もなかつた。

「片々録」『英語青年』第 54 巻第 11 号 大正 15（1926）年 3 月 1 日

●加藤首相と本田増次郎氏

本田増次郎氏は今より十余年前加藤高明伯と共に支那旅行をしたこともあつて、英学者と政治家は可なり親しく交際して居たやうである。政治家が大命を拝して内閣を組織した頃、英学者の方は病みて奈良別府と転々して居た。英学者が東京の親友の邸で逝いてから二月ばかりして一月廿八日一代の宰相も脆くも逝去してしまつた。茲に本田氏の親友白藤丈太郎氏の厚意により、加藤伯が本田氏に寄せた書簡をこゝに紹介する。

拝啓　御清栄奉賀候過日は御懇書被下難有拝誦仕候、殊に China To-day より御写取り御送被下候論文面白く一読御厚意之段奉多謝候、支那の事も種々急速の変化にて孫黄〔孫文と黄興〕の悲運〔革命が成就しない内に両名とも病死した〕同情に堪へざる、其今日の結果に終わるべきは初より殆んど疑ひなかりし事を企てたるは如何にも無謀なりし如くなるも、又己むを得ざる事情に迫られたる次第に可有之乎と被存候

小生四五日中大磯別荘へ行き当分休養の積に候、自然彼地方御通過のこともあらば御一遊有之度別荘は停車場の程近き処にあり、同所にて御聞合被下ば直ちに御分り申候　先者乍延引拝答御礼迄如此候　　草々頓首

八月一日　　加藤高明

本田先生

おわりに

こうして“The Story of a Japanese Cosmopolite”（「ある日本人コスモポリタンの物語」）は終わりを告げる。しかし、この自叙伝の最後には「明治 42（1909）年 8 月以降の私の経験についてはまた別の機会に、新しいタイトルの下に述べなければなるまい」との記述があり、当然この続編が *The Herald of Asia*（『ヘラルド・オブ・エイシア』）にあってしかるべきである。

ところが、「明治 42（1909）年 8 月以降の私の経験」は、その後の *The Herald of Asia* を幾ら探しても、見当たらないのである。大正 8（1919）のパリ講和会議への長期出張、帰国後から始めた東京外国語学校への再出講、大正 11（1922）年からの宮内省への関与などの公務が続いたからであろうか、関東大震災で *The Herald of Asia* が一旦廃刊となるまで、

ここで予告された新しいタイトルでの記述は、存在しない。

もっとも、本田が亡くなる年である大正 14(1925)年 1 月 11 日から、*The Japan Advertizer*（『ジャパン・アドバタイザー』）に連載が開始された“MY SHATTERED DREAMS: From A Japanese Pacifist's Dairy 1905-1923”（「壊れた夢：ある日本人平和主義者の日記から、明治 38（1905)年～大正 12(1923)年」）という表題の本田の記事がある。明らかにこれは“The Story of a Japanese Cosmopolite”の続編として書かれたものだ。以下は、その第 1 回、大正 14（1925）年 1 月 11 日に掲載された記事の序に当たる部分の和訳である。

壊れた夢

ある日本人平和主義者の日記から

明治 38（1905）年～大正 12（1923）年

本田増次郎

ジャパン・アドバタイザー殿

アメリカ合衆国のニューハンプシャー州ポーツマスでの日露平和条約の調印〔明治 38（1905）年 9 月 5 日〕と、東京・横浜地方での大震災の発生〔大正 12（1923）年 9 月 1 日の関東大震災〕との間には、18 年の歳月の流れがある。18 年前、我が国は、ようやく先進国の仲間入りを果たしたと言われ、そして 18 年後、この悲惨な出来事による日本の物質的損失は非常に大きく、国富の観点から見ると、日本は 20 年以上前、つまり中国の義和団事件の時代〔明治 33（1900）年頃〕まで逆戻りしてしまったと言われている。1866 年〔1 月 15 日〕に生を受けてからこの方、とくに茲許の 18 年間は、自分や自国のためばかりではなく、人類同胞のために、意識的に、直接的に、そして実践的に生きるよう心がけてきた。平和主義者として、遅れ馳せながら反戦運動に全身全霊を以て投じたが、この運動は、日露戦争後、米国や欧州でそのエネルギーを倍加させ、活発となったものだ。ところが、この 18 年のうちに、新たに平和主義者となった私の熱意も、次第に冷めて行かざるを得なかった。それはこの 18 年間、西洋や東洋で私が目撃し、耳にし、遭遇した事柄がそうさせたのである。しかし、だからといって、世界平和、国際連盟、国際仲裁裁判所、全世界的軍縮、国単位での軍備の撤廃などの将来について、私が絶望していることは意味しない。さらにまた、表面的に見えるほど、先進各国が、一層利己的な国となり、軍備の増強に躍起になっているとも思わない。こういった私の経験は、確かに幻滅の連続であり、突然荒々しく揺り動かされてむりやり目を覚まさせられた時のような心持ちだが、それは旧式になった秩序が、人類にとってより望ましい新秩序、------そうであることを私は切に希望する------に変わるための移行過程であることを示している。近代ヨーロッパが 300 年で経験したことを半世紀でやり遂げねばならなかった我が同胞である日本人に対し、この私の経験を語ることは、意義あることだと考える。（訳：長谷川勝政）

こういった書き出しで、「壊れた夢」は始まる。そして記述は本田の米国への到着から始まって、日記と題したごとく、日付順に話は展開されていく。大陸横断鉄道での耳鳴りのことや、ベーコン女史のディープヘヴン・キャンプのことなど、「ある日本人コスモポリタンの物語」で既に採り上げられた事柄が、時系列で述べられていく。もちろん、それが予定通り、大正 12（1923）年まで記述し終われば、それこそ、自叙伝の続編として全てが完結したはずである。しかし、またここでも、自叙伝は途絶えてしまう。いや、それどころか、前回の“The Story of a Japanese Cosmopolite”が扱った最後の時期、すなわち、英国への渡航や、オリエンタル・レビュー参画のための米国へ再上陸した時までも話は進ま

ない。
　大正 14（1925）年 1 月 11 日に始まった連載は、1 週間おきに、第 2 章、第 3 章・・・・と表示されながら第 10 章まで、中断もなく順調に続いていった。ところが、第 10 章が掲載された大正 14（1925）年 3 月 15 日のあとは、2 週間がポッカリと空く。そして、ようやく 3 月 29 日に掲載された一編も、本来、第 11 章と書かれるべき表題すらなく、それは何の結語も、説明もなく、リトル・ハンガリーの記述を以て突然にして終了するのである。その後本田が亡くなる 11 月 25 日まで、「壊れた夢」は跡形もなく、*The Japan Advertizer* の紙面に姿を現わさない。

　大正 12（1923）年 9 月 1 日の関東大震災以降、本田の健康状態は急速に悪化した。地震後、家財一式を処分して帝国ホテルで暮らす本田であったが、結局その年の暮れには体調を崩し、福渡以来の親友である医師内野倉明の邸で加療することになる。外出もままならない状態で越年、ようやく大正 13（1924）年 3 月になって静養のため大磯の別荘に向かう。そして夏には姪の本田駒子に付き添いを頼み、山陰旅行を皮切りに瀬戸内海や奈良で静養の日々を過ごし、別府で越年する。「壊れた夢」の連載記事を書いたのは、この別府で越年していた時期に当たる。そして別府滞在中の大正 14（1925）年 3 月には、本田は高熱により一時生死の境さえ彷徨うのである。前述した連載の中断は、この時の高熱が理由だったと思われる。そんな健康状態にあったのだから、かかる記事が 11 回も掲載されたことの方が、むしろ奇跡なのである。連載など、もともと無理な話だった。

　大正 14（1925）年 11 月 25 日、内野倉邸で本田増次郎が息を引き取ると、長年に亘って本田が寄稿を続けていた英語雑誌『英語青年』は、翌年 2 月 1 日および 15 日発行の 2 号を本田の追悼号に充てた。多くの関係者がその誌上で本田の思い出を語っているが、その中から本田の親友の一人であり、*The Soul Press*（『ソウル・プレス』）、*The Herald of Asia* 主筆を歴任した山縣五十雄が、“A Tribute to Late Dr. Honda”（故本田博士への献辞）と題して追悼記事を書いている。数ある追悼記事の中で、これほど本田の本質を突いた文章は他にない。それをここに掲載して結びとしたい。

A Tribute to Late Dr. Honda

山縣五十雄

　本田増次郎君永眠の報に接して、私は大なる personal loss を感じ、悲哀の情切なると共に、故人在世中友人として為さねばならぬことを怠つたことを後悔して、未だに心を痛めて居る。本田君は久しい間健康勝れず、断えず薬餌に親しんで居られたが、急に病勢が進むやうなこともなかつたので、今度も全快とは至らぬ迄も、やがて軽快に赴かれることと思ひ、一方に於て非常に多忙でもあつた為め、妻を見舞に出したが、私自身は油断して慰問を怠つた。これが為めに君の永眠前の数月間一度も会わなかった。誠に残念であり、故人に対して済まなかつたと後悔の念に耐へぬ。
　せめての心やりに私は故人永眠の翌日追悼の一文（**資料 7**）を書いて、Japan Times に出した。下に掲ぐるはそれである。

ジャパン・タイムズ・アンド・メール
大正 14（1925）年 11 月 27 日
日本は偉大な学者を失う

愛すべき真の日本人の死に
哀悼の意を表する

山縣五十雄
ジャパン・タイムズ殿

本田増次郎博士という著名な作家にして優れた学者、また真の侍にして心からの慈善家である人物が、11 月 25 日朝方、小石川の内野倉明医師の私邸で亡くなった。

本田博士は長い間健康状態が優れなかったが、重い症状の病気に罹っていたわけではなかったから、友人たちも、少なくとも、もう数年以上生きられるだろうと考えていた。そのため、死を知った友人たちのショックは大きく、その逝去による悲しみも倍加した。

故人は 60 年前、岡山県の片田舎に生を受けた。

たたき上げの人

若き日には殆ど公的な教育を受けたことがなかったが、大志を抱いた若者であり、人並みはずれた才能にも恵まれ、独習により 20 歳前にして充分な知識を蓄えていた。その後上京し、嘉納教授の有名な「柔道」の学校に入り、そこで数年を過ごした。その間、柔道の受け身技の達人になると共に、教育も終えた。特に英学者として抜きん出ていたので、その後大阪の高等英学校で教職に就くことになった。そして数年後、東京高等師範学校の英語科教授に任命され、数年に亘る奉職を経て、文部省から英語並びに英文学研究のため、英国へ留学することを命じられた。明治 41（1908）年、帰国するや〔実際は帰国せず、明治 42（1909）年、英国より直接ニューヨークに赴任〕、有名なジャーナリストであり評論家である頭本元貞氏に、彼がニューヨークに設立した東洋通報社で、その仕事を手伝うよう依頼される。本田教授はこの招聘を受け、同社が発行する月刊誌、オリエンタル・レビューの編集長となる。1、2 年後、頭本氏が日本に戻ると、通報社の長としてその仕事を引き継ぎ、日本とその諸事情を米国に啓蒙する活動に力を発揮するところ大であった。

多作な作家

本田博士は明治 45（1912）年頃〔正確には大正 2（1913）年〕帰国すると、東京外国語学校の教授に任命されるが、数年でその職を辞す〔実際は、帰国後はジャパン・タイムズに入社する。東京外国語学校再出講はパリ講和会議より帰国後の大正 8（1919）年〕。その後は主に外国並びに国内の雑誌に寄稿した。数冊の著作があり、ニューヨークで出版された桜井忠温中尉の有名な旅順包攻防戦の物語、『肉弾』の翻訳者でもある。

以上が本田教授の略歴である。これではまだ彼の人となりを説明し切れていない。30 年来の友人として、本田氏評をさせていただきたい。先ずもって、彼は実直な侍である。洗練された趣味を持ち、デリケートな感覚の持ち主であった。

自然の愛好家

並はずれた勇気と断固とした意志を持ってはいたが、一方で愛と優しさに溢れていた。貧者を助ける心構えが常に出来ており、裕福ではなかったが、目的にかなうだけの価値ある嘆願がなされたときは、一瞬たりとも迷わず財布を空にした。自然を大切にしたが、特に動物を愛した。東京にある動物虐待防止会の推進者の 1 人であり、動物に対する若い人たちの愛情を育てる目的で、奉仕の仕事として『黒馬物語』を翻訳出版した。

また本田博士は、友人の間で最も信頼が置け、かつ面倒見のいい人物だった。いつでも進んで助けてくれたが、そのためには、多くの場合自分の利益を犠牲にした。当然、友人も多かった。事実、彼を愛し、信頼し、出来ることならなんでも喜んでする類の親友や好感を抱く友人を、本田氏ほど多く持つ幸せな人は少ない。本田氏が静かに息を引き取ったのは、内野倉医師の私邸だったが、彼こそこの友人たちの代表例である。内野倉医師は、本田氏の安寧と幸福に資することなら何でもしてくれたのであり、2 人は生涯に亘り兄弟の

ようなものだった。

独身を通す

作家としても、本田博士は当代におけるトップクラスの人物だ。美しい英語を使い、彼の記事は、新しい情報、目を見張るような独特の見解、上品なユーモアに溢れており、好みのやかましい読者連をいつも大いに楽しませた。また一級の講演家でもあり、決して雄弁とは言えなかったが、そのユーモアには脱帽したものだ。米国滞在中には講演家として大成功を収めた。

本田博士は独身を通した。若き日ロマンティックな恋愛があったが、彼が愛した女性が若くして亡くなり、彼の心に癒しがたい傷が残った。それが生涯を通じて独身だった理由だ。2 人の間には 1 人子供があった。それが今高名な劇作家の山本有三氏の夫人となっている。

本田博士は高潔さを重んじ、不純なものは全て忌み嫌った。彼の人生は全て、雪のように白く清潔だった。その心、行動、言葉、全てが清潔だった。この親友がいなくなって、私は寂しくなった。(訳：長谷川勝政)

此の文は帝国ホテルの reading room で、Times の編輯〆切迄に間に合はす為め大急ぎで記憶をたよりに書いたものであつて、恐らく dates 其他に誤謬があるべく、且つ故人について言ひたい事を充分に述べてない。今こゝに二三を補遺したいと思ふ。

本田君のやうに心のやさしい、情の厚い人を私は他に知らぬ。加藤高明子の支那漫遊に同行しての帰途、君は京城に立寄り、私の宅に数日滞在された。其頃でも君の健康は余り勝れて居なかつたから、私は養生の為め釣魚を勧めた。然るに君は動物に対する愛情深く、私が釣魚を楽しむのに反対して、私の勧告を容れられなかつた。そこで私は私の釣魚は魚を獲るのが目的でない。一竿の風月に俗事を忘れて、世塵に遠ざかるのが趣意である事を述べ、且つ私は釣魚の術に拙であつて、めつたに魚を獲らぬから動物虐待に当らないと述べたところ、君は然らば自分も試みようと首肯された。

私は本田君を釣党に入れる事に成功したと心中triumphを感じて居たところ、分袂後二三日して、釜山から手紙が来た。それには“君の勧告に従つて釜山で釣を試みた、成る程海上に出て綸(いと)を垂れて居る気分は悪くない、然し魚があまりに沢山釣れるので困つた。釣りは思ひ止まる”との意味が書いてあつた。魚がとれるからとの理由で釣を止めた人は恐らく本田君一人であらう。如何に君のfeelingがtenderであつたかは此逸話で分かるであらう。

君は交際、殊に culture のある外国の紳士貴婦人との交際に長けて居られた。それは君自身が culture のある true gentleman であつたからである。前の英国大使 Greene 氏〔ウイリアム・カニンガム・グリーン卿〕如きは最も君を親愛した foreign friends の一人で、*London Times* の社長 Lord Northcliffe〔本名アルフレッド・ハームスワース、英国の新聞王〕も亦君を敬愛した。君は談話に巧に、humour に富み、珍らしい facts に豊かであつた。其 talks は多くの人を惹きつけ、茶話会晩餐会等に於て君はいつも中心であつた。

本田君のやうに博識な人は多くない。文学美術は元より殆どすべての事にわたつて、君の知つて居られない事は殆どないといつてもよい程に君は物知りであつた。国士であり、学者であり、gifted writer であつた君が外務省の嘱託として、又は宮内省の御用掛として我国の為めに貢献した功は世にはよく現はれては居ないが頗る大なるものがある。君の永眠は国家にとり大なる損失である。

(『英語青年』大正 15 年 2 月 1 日 HONDA NUMBER 第 54 巻第 9 号)

最後になるが、本田増次郎の自叙伝を紹介する機会を与えて下さった桃山学院資料室の

西口忠氏と、『オリエンタル・レビュー』を初めとする膨大な資料を図書館や古書店でディテクトし、それを惜しみなく提供し、さらには訳案にも丹念に目を通して下さった丹沢栄一氏に、そして一々お名前をあげることは出来ないが、調査・照会の過程でお世話になった多くの方々に、この場を借りてお礼申し上げる。これらの方々の協力と励ましがなければ、この訳稿はかかる形での完成を見なかったはずである。

（完）

（訳者長谷川勝政氏は本田増次郎の兄竹四郎の曾孫にあたる）

（資料 1） 自叙伝発見の端緒となった記事（部分）（国会図書館蔵）
右欄中程に”Human Bullets”Translated の文字が見える。

12 THE HERALD OF ASIA September 30, 1916

STORY OF A JAPANESE COSMOPOLITE

AS TOLD BY HIMSELF

IMITATION BLARNEY STONE

ON April 30, 1906, I paid my first visit to Atlantic City, N. J., the Scheveningen on the typical American scale, and made the acquaintance of Mr. Sajuro Kondo and family through a Japanese friend's introduction. He is doing a successful business on the board-walk there and identifies himself with the welfare of the place, as if he was a naturalized citizen. Through his kind suggestion and assistance I decided to spend the summer of that year at that seaside resort, declining the hospitable invitation of Mr. and Mrs. Joseph Elkinton to spend a month at Mount Pocono, Pennsylvania, after their return from a health sojourn in the south of France. Ten days later I was the Kondos' guest once more to help in a two-days' bazaar for charity funds of the Presbyterian Church to which they belonged. Various nations were represented in this affair at different Berlin and London, and the Tokyo authorities recalled him in connection with an Americo-Japanese agreement. It is feared that the German thrift of Viscountess Aoki failed to make her at all popular in Washington society. It is natural, therefore, that our young diplomats are discouraged from marrying foreign women, for, if even the latter be acceptable in their native countries, they are, as a rule, sure to make sorry figures among other nationalities, while Japanese wives of Japanese officials enjoy more leniency on the part of foreign critics.

In this visit to Washington I saw Mr. E. Hioki, Embassy councillor then, and Japanese Minister to Peking recently, whom I had not seen since our *Judo* days together. I also met Mr. M. Hanihara, who had the pet-name "Hanny" among the club men of Washington during the Russo-Japanese

At Mr. Yamashita's lodging (Mr. Yamashita is a *Judo* chum of mine who taught Colonel Roosevelt, as already mentioned) I met Marquis Matsukata's youngest son, who was a naval student at Annapolis and since died in America. Mr. and Mrs. Yamashita were on the eve of returning to Japan, after giving a final lesson in the art of resuscitation to his great pupil on the day of my arrival at Washington.

"Human Bullets" Translated

Before leaving Philadelphia for good, I attended several meetings of the thirtieth associated National Conference on Charity and Correction, at one of which I had the gratification of hearing ex-President Cleveland in the chair. When I spoke in the Church of the Covenant about the religious conditions of my country, a Philadelphia paper was flattering enough to create me a baron in its report of the incident! It was about this time that I met a talented negro poetess, Mrs. Harper, and her daughter.

（資料 2） ヘーア主教（写真提供：本田穣氏）
ヘーア主教（Bishop William Hobart Hare、アメリカのダコタ・インディアンへの布教活動で知られる）は本田に言わせれば″a truly statesmanlike missionary″（真に政治家らしい伝道師）で、本田はおよそ 4 ヶ月間、短い期間ではあったが主教の秘書兼通訳といて働いた。この時のエピソードを本田が書き残している。

「ヘーア主教は憤慨し、またその憤慨を表す術を心得た性格の人物であった。東京で、蒸し暑い長い1 日をくたくたで過ごした日の夜遅く、主教がそろそろ床に着こうかとしていた時、日本人の若い伝道師が会いたいと言ってきた。その伝道師はテーブルの上に日本地図を広げて、熱心に、善意で、適度に気も利かせて、米国聖公会がどこに人員を配置すべきか、如何に場所や人の選択を過っているかを指摘した。ヘーア主教は 45 分間、この招かれざる説教を一言もコメントせず我慢して聞いていた。それから、その若い伝道師に対し、伝道師は主教に説教するのが仕事ではない、また主教は助言が必要だと判断すれば適切な人物を正式に来させると、直裁に言い渡した。勿論これは夜中の訪問者を仰天させ、かつ動揺させた。米国聖公会を代表するこの有能な主教が、日本に来てからというもの日本人クリスチャンに会う毎に、日本に於ける伝道の仕事や伝道師に関して率直に印象や希望を言ってくれと望んでいるのを実際に目にしていたからなおさらのことだった。もし米国聖公会が極東の人々に対し特にアピールする点があるとすれば、それはその歴史の持つ品格と教会の明確化された方針である。それは主教の人柄に体現されている。厳格な規律の遵守こそ、それが俗事であれ、信仰であれ、伝道師を成功に導くに最も大切な資質である。」（本田増次郎「伝道における政治家魂」『オリエンタル・レビュー』第 2 巻第 6 号　明治 45（1912）年 4 月）（訳：長谷川勝政）

前列右から 4 人目が本田増次郎

（資料 3） 高等英学校生徒（写真提供：本田穣氏）

古きよき思ひ出　明治三十年卒業
猪飼　正雄
（前略）
本田先生には學課（英語・倫理）の外に柔法を教つた。剛情であつた爲でもあらうが人よりは特に激しく教へられたらしい。先生には先生の御生涯を通して可愛がられた事を感謝して居る。
（後略）
（同窓会報附名簿『桃山学院百年史』より）

（資料 4）フィラデルフィア監獄で撮影した写真（写真提供：本田穣氏）

裏書き

明治 39（1906）年 3 月 2 日　米国フィラデルフィア府監獄を参観した時、獄中にて官吏の好意で撮影してもらったもの

40 才の本田。ワイシャツの襟はシングルカラー。友人たちは皆ダブルカラー（現在の普通の襟）であったが、本田は 1 人だけ、質素なシングルカラーで通したという。

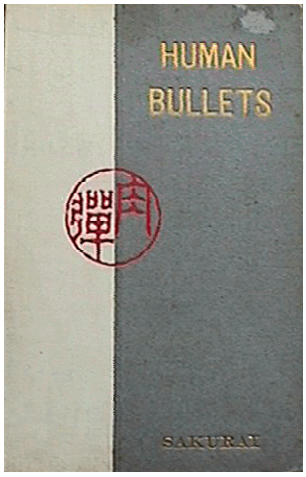
（資料５）本田は、日露戦争の激戦地となった旅順攻防戦に従軍した桜井忠温（ただよし）中尉の書いた当時のベストセラー『肉弾』の英訳を手がけ、明治 40（1907）年 10 月、ボストン・ニューヨークのHoughton Mifflin Companyより出版した（編集Alice Mabel Bacon、日本国内においては丁未（ていび）出版社より出版）。大隈重信が紹介文を書いているが、これは著者の桜井忠温の兄桜井彦一郎（女子英学塾設立メンバーの一人）と大隈が友人であった縁から。

１、米国版『英文肉弾』
”HUMAN BULLETS” A SOLDIER’S STORY OF PORT ARTHUR
BY TADAYOSHI SAKURAI　LIEUTENANT I. J. A.
WITH AN INTRODUCTION BY COUNT OKUMA
TRANSLATED BY MASUJIRO HONDA
EDITED BY ALICE MABEL BACON
BOSTON AND NEW YORK HOUGHTON MIFFLIN COMPANY
The Riverside Press Cambridge
COPYRIGHT 1907 BY HOUGHTON, MIFFLIN AND COMPANY ALL RIGHTS RESERVED
Published October 1907

表紙には菊の紋章が押し型で刻印されている。

２、国内版『英文肉弾』
”HUMAN BULLETS” （NIKU-DAN） A SOLDIER’S STORY OF PORT ARTHUR
BY TADAYOSHI SAKURAI　Infantry Lieutenant of the Japanese Army
WITH AN INTRODUCTION BY COUNT OKUMA

TRANSLATED FROM THE JAPANESE
BY MASUJIRO HONDA　AND　ALICE M. BACON
明治 40(1907)年 11 月 17 日　印刷
明治 40(1907)年 11 月 20 日　発行
英文肉弾金壱円



著　者　東京市牛込区河田町九番地　桜井忠温
訳　者　在米国　本田増次郎
発行人　東京市麹町区平河町四丁目十三番地　土屋泰次郎
印刷人　東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　青木弘
印刷所　東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式会社秀英舎第一工場
発行所　東京市麹町区五番町十六番地　丁未出版
発売元　東京市麹町区五番町十六番地　英文新誌社

縮刷『肉弾』丁未出版社　大正 11（1922）年 2 月 11 日　230 版に掲載された『英文肉弾』の誌上広告（資料提供：丹沢栄一氏）

ミス、ベーコン　本田増次郎共訳〔第十三版〕
英文肉弾　定価壱円五拾銭　　郵送料　八銭
四六判二百六十二頁上製・口絵コロタイプ・写真版三葉石版

明治三十七八年戦役の後、外国人が多勢日本に来て、日本人の精神を研究した、が其の折、日本の国民性を最も明白に書き現はしたものは、「肉弾」であることが判つて、欧米で此の書が大切にせられたのである、同じ英訳の中にも日本版、英国版、米国版があり、独逸仏、蘭西、伊太利、露西亜、それぞれの国語に翻訳せられて、各国人に読まれたのである、そして本書は、その日本版である。

発行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七
丁未出版社

なお、『肉弾』の原書は 28 章よりなるが、第 1 章は天皇や皇国崇拝の思想が色濃く出ているためか、英訳では割愛されている。したがって、原書と訳書の章番号は 1 章宛ずれる形となった。

本田が訳した『英文肉弾』は、明治 33（1900）年、新渡戸稲造がフィラデルフィアのリーズ・アンド・ビドゥル社から出版した”Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought”（『武士道』）と並んで、日本人の心を海外に紹介した作品として、現在も読み継がれている。

（資料 6）『紅毛雑話』講演録（部分）（ロンドン、日本協会蔵）
From Transactions and Proceedings of the Japan Society, London. Volume Ⅷ
1907, 1908, 1909　230 頁

"KŌMŌ ZATSUWA," OR "THE RED-HAIR MISCELLANY."

COMPILED BY

CHŪRYŌ MORISHIMA, AND PUBLISHED IN 1787, YEDO.

By M. HONDA,

Recently Professor Government Training College, Tōkyō.

THIS book, to quote the Author's preface, is a collection of random notes of strange tales which his brother obtained from the red-haired [1] foreigners of Nagasaki, where he, by permission of the authorities, used to visit their lodgings in order to inspect the Materia Medica, and to ask questions about Dutch books through interpreters, and also of what the author himself heard in the gatherings of men interested in European learning. It consists of five small volumes, comprising sixty-seven chapters and covering a great variety of subjects. The present paper, however, proposes simply to give an idea of what sort of

松村耕輔氏のご紹介により、ロンドン在住のモモコ・ウイリアムズ氏に調査をお願いし、本稿を入手することが出来た。

(資料 7) 山縣五十雄による『ジャパン・タイムズ』追悼記事
（第 5 面の中央部分）（国会図書館蔵）（Masujiro を Mausjiro とした誤植がある）

THE JAPAN TIMES & MAIL, FRIDAY, NOVEMBER 27 1925

President Grant Attached by Bank, Is Strange Report

Equipped by a warrant from the Yokohama district court, the Hongkong Shanghai Banking Corporation attached the American Shipping Board steamer President Grant this morning now in the Yokohama harbor says the afternoon issue of the Chugai Shogyo. Simultaneously with this the banking institution started a suit in the district court against the United States Shipping Board to recover ¥520,500 for damage sustained by the bank in connection with the failure of Takata and Company, continues this sensational report.

Nagoya Schools to Build Houses for Foreign Teachers

NAGOYA, November. 25—Plans have been almost completed for the building of two foreign style houses for foreign teachers by each of the two government schools of higher

Japan Loses Great Scholar and Charming True Nipponese in Sad Death of Mausjiro Honda

By ISOH YAMAGATA
For The Japan Times

A prominent writer, a good scholar, a true samurai and a sincere worker for humanity has passed away in the person of Dr. Masujiro Honda, who breathed his last on the night of November 25 at the home of Dr. Akira Uchinokura in Koishikawa.

Dr. Honda has long been in delicate health, but as he was not suffering from any disease of a serious nature, his friends had hoped that he would live on, at least for some years more. It was therefore with a shock that they learned of his death, and their grief over his demise is all the greater

The deceased was born in an out-of-the-way village in the Prefecture

fine humor, always gave great delight to select readers. He was also a first-class lecturer, and, though never eloquent, his humour was irresistible and while in America he scored some great success as lecturer.

Dr. Honda never married. In his young days, he had a romantic love affair. The young lady he loved died early and left in his heart an incurable wound, which kept him a bachelor all through his life. Between them they had a child, who is now the wife of Mr. Yuzo Yamamoto, the well-known play-wright.

Dr. Honda had a passion for cleanliness and detested anything unclean with the hatred of a fanatic. His whole life was as white and clean as snow; his mind, his conduct, his language his everything was clean. My life is lonelier now that this dear friend of mine is no more.

World Girding Loins For New Terrible Fray

Over Six Million Men in Standing Armies of 59 Countries Armament Race Now in Air

GENEVA, November 19—(By Mail) —Official figures obtained from the League of Nations show that there are 6,066,144 men in the standing armies of 59 nations. This means that seven years after the end of the slaughter there are more men prepared and preparing for war than in 1914.

The race for air supremacy has taken the place of the pre-war competition in other styles of armament. This form of international rivalry was the chief cause of the real war and it has been actively revived in a more sinister form than before. Great Britain has just prepared an air budget of $77,565,000 designed to contest France's domination of the air; and the mounting public interest in air defense on the part of the American people will unquestionably stimulate France and Britain to

訳者が勝浦吉雄氏より頂いた書簡の中に「先生〔本田増次郎〕は明治 30 年代から大正にかけてオーラルな面で日本の第一人者（ライティングでは先生の友人でもありました山縣五十雄氏）でした」とある。オーラルの第一人者本田の死は、こうして日本に於ける英文の第一人者によって追悼された。

《当初掲載》　『桃山学院年史紀要』　第 23 号（2004. 3. 31）、第 24 号（2005. 3. 31）、第 25 号（2006. 3. 31）
発行　学校法人桃山学院　　編集　桃山学院資料室

なお、発表後判明した錯誤や誤植は改め、割注や注についても一部追加した部分があることをお断りしておく。